

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（233）

一般県道黒石串良線（二子塚工区）地方特定道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ふ た ご づ か
二子塚 B 遺跡
(曾於郡大崎町)

2025 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遠景 1 北西側から南東側を撮影 本遺跡から志布志湾を望む



遠景 2 南側から北側を撮影 本遺跡から霧島山を望む

序 文

この報告書は、一般県道黒石串良線（二子塚工区）地方特定道路整備に伴って、令和4年度から令和6年度にかけて実施した二子塚B遺跡の発掘調査の記録です。当遺跡では、縄文時代早期から近代にかけての遺構・遺物が検出されました。

縄文時代早期では、竪穴建物跡が1軒、集石が12基など、多様な遺構が検出されました。竪穴建物跡は北端の区で検出され、当該地に縄文時代早期の生活根拠地があったことがうかがえます。最南端の区では、早期後葉の埋設土器が1基検出されたことが特筆されます。

縄文時代後・晩期から弥生時代では、調査区の北側で竪穴建物跡が2軒検出されました。竪穴建物跡埋土内の一括資料をはじめ、縄文時代後期後葉の中岳Ⅱ式土器の多様な遺物は、当該期の土器研究に新たな資料となることが期待されます。

古墳時代では、竪穴建物跡が3軒検出されました。竪穴建物跡の埋土内の一括資料には、宮崎平野の文化的影響がうかがえ、当該期の南九州の文化的関係性を探る上で、貴重な資料となると考えられます。

その他、調査区全域で古道5条が検出されました。いずれも埋土が深く、幾重にも硬化面を伴うなど、時代を超えて利用された可能性を示しています。

本報告書が当時の遺跡周辺の生活環境や社会活動を知ることのできる資料として、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財保護に関する理解を広め、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力をいただいた土木部道路建設課（大隅地域振興局建設部土木建築課）、大崎町教育委員会ほか、各関係機関並びに発掘調査に御協力いただいた地域の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和7年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 村 和 美

報告書抄録

ふりがな	ふたごづか いせき									
書名	二子塚B遺跡									
副書名	一般県道黒石串良線（二子塚工区）地方特定道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書									
シリーズ番号	第233集									
編集者名	廣 栄次 中野智也									
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター									
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821									
発行年月日	2025年3月									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）		発掘 起因	
		市町村	遺跡 番号							
ふたごづか いせき 二子塚B遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 おおさきちよう 大崎町 もちどめ のがた 持留・野方	46468	468-4	31° 27' 51"	130° 56' 59"	試掘調査 ① 2020. 1.25 ② 2019.11.24 ③ 2021. 7. 7 本調査 ① 2022.10.17～2023. 2.22 ② 2023.11. 1～2024. 2.22 ③ 2024. 5. 8～2024. 6.26	① 20.7（表面積） ② 4.03（表面積） ③ 20.46（表面積） ① 2,260（延べ面積） 1,020（表面積） ② 1,115（延べ面積） 875（表面積） ③ 800（延べ面積） 400（表面積）	一般県道黒石串良線（二子塚工区） 地方特定道路整備に伴う記録保存調査		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物			特記 事項	
二子塚B遺跡	散布地	旧石器時代	—			細石刃核				
		縄文時代 早期	堅穴建物跡1軒 集石12基 土坑13基 ピット68基 遺物集中1か所 埋設土器1基			前平式土器、加栗山式土器、吉田式土器、石坂式土器、辻タイプ、下剥峰式土器、押型文土器（手向山式土器）、平椀式土器、塞ノ神A式土器、塞ノ神B式土器、苦浜式土器、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、砥石、軽石製品				
		縄文時代 後・晩期	堅穴建物跡2軒 土坑5基 ピット43基 遺物集中4か所			中岳Ⅱ式土器、入佐式土器、石鏃、石匙、石錐、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、砥石、軽石製品				
		弥生時代	—			刻目突帯文土器、組織痕土器、山ノ口Ⅱ式土器				
		古墳時代	堅穴建物跡3軒 土坑11基 ピット122基			中津野式土器、東原式土器、辻堂原式土器、石皿・台石、円盤状土製品、特殊土製品、刀子				
		時期不明・ 近世	古道5条			刀子、古銭、陶磁器				
遺跡の概要	<p>二子塚B遺跡は、大崎町持留・野方に所在する。谷間に囲まれた標高約160mの立小野台地上に位置する。台地東側500mの谷間の低地部には持留川が流れている。</p> <p>旧石器時代、縄文時代早期、縄文時代後期から弥生時代、古墳時代、近世・近代等の遺構や遺物が発見された。</p> <p>旧石器時代では、遺構及び包含層遺物は検出されなかった。しかし、古道（時期不明）の埋土内から細石刃核が1点出土した。</p> <p>縄文時代では、縄文時代早期に堅穴建物跡が1軒、集石が12基、落とし穴と思われる土坑2基を含む土坑が13基、ピットが68基、遺物集中が1か所、埋設土器1基が検出された。遺物では、前平式土器から苦浜式土器までの複数の型式の土器が出土した。縄文時代後期から弥生時代では、堅穴建物跡が2軒、落とし穴と思われる土坑1基を含む土坑が5基、ピットが43基、遺物集中が4か所など検出された。遺物では、中岳Ⅱ式土器を中心に、量は少ないが、弥生時代の刻目突帯文土器や山ノ口Ⅱ式土器が出土した。縄文時代早期や後期から弥生時代では、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、砥石、軽石製品などが出土した。</p> <p>古墳時代では、堅穴建物跡が3軒、土坑が11基、ピットが122基検出された。遺物では、中津野式土器、東原式土器、辻堂原式土器、円盤状土製品などが出土した。</p> <p>現道に並行する古道が4条（他に脇道1条）検出された。いずれも硬化面を有する。埋土内にはいろいろな時期の遺物が含まれ、初源の形成時期は特定できなかったが、下限は大正時代頃と考えられ、旧道の可能性をもつ。</p>									



第1図 二子塚B遺跡位置図

例

- 1 本書は、一般県道黒石串良線（二子塚工区）地方特定道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 二子塚B遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町持留・野方字二子塚に所在する。
- 3 二子塚B遺跡の発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課（大隅地域振興局建設局土木建築課）から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋蔵文化財センター」）が担当した。
- 4 二子塚B遺跡の整理作業は、令和5・6年度に埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 本書のレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 6 本書の方位は、座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 7 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、実測図・土層断面図作成は、調査担当者及び（株）パスコ（R4）、（株）九州文化財研究所（R5・6）が行い、調査担当者が監修した。空中写真の撮影は、（株）ふじた（R4）及び（有）スカイサーベイ九州（R4）が行った。

凡

- 1 遺構配置図及び遺物出土状況図は、1グリッド（1マス）が10m×10mの大きさである。なお、各図中に示してある。
- 2 遺構種ごとに略記号を付して調査を行った。遺物の注記や実測原図、写真、科学分析結果の表などに記載されている遺構の略記号を以下に示す。
SI：竪穴建物跡 SS：集石
SJ：埋設土器 SK：土坑
SP：柱穴／ピット SD：溝状遺構
SU：遺物集中 SX：性格不明遺構
- 3 遺構番号は、調査時に付されたものから、報告書掲載番号順に付け替えた。遺構を時代別・種類別に分け、北側から南側の順に番号を付した。
- 4 遺構の縮尺は、次を基本とした。
集石 1/20、竪穴建物跡 1/40、土坑 1/20、ピット 1/20、溝状遺構 1/80～1/200である。ただし、ページ内に収まらない遺構に関しては、縮尺を縮めて掲載してある。
- 5 遺物の縮尺は、次を基本とした。
土器・土製品 1/3、石器・金属製品 1/1～1/3
各図中にスケール（縮尺）バーを示した。
- 6 掲載する遺物番号は、遺構内出土遺物及び包含層内遺物すべて、通し番号であり、本文、挿図、

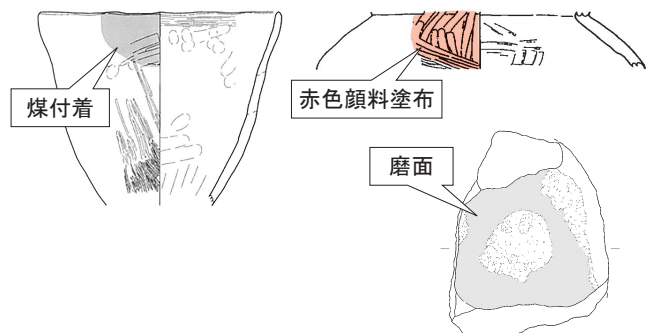
言

- 8 出土土器及び石器など一部の実測・トレース・拓本は、廣栄次が整理作業員の協力を得て行った。上述を除く出土石器の一部の実測・トレースについては、（株）九州文化財研究所（R5）及び（株）イビソク（R6）に委託し、指示及び確認・修正依頼などは廣が行った。
- 9 金属製品の保存処理は、当センターで行った。
- 10 本報告に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定、炭素・窒素同位体比分析、炭化種実、樹種同定を（株）パレオ・ラボ（令和6年2月及び10月納品）に委託した。
- 11 遺構図・遺構配置図・遺物出土状況図の作成及びトレース執筆は、整理作業員の協力を得て、廣栄次・中野智也が担当し、編集は廣が行った。執筆担当は以下のとおりである。
第1・2章 中野智也 第3～6章 廣栄次
- 12 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記で用いた遺跡記号は、「二子b」である。

例

表及び図版の番号は一致する。

- 7 使用した土色は『新版 標準土色帳』（2013農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。字数の関係上、「Hue」は省略して記してある。
- 8 遺物（土器）の胎土内には石英・長石・角閃石・輝石・砂粒が全て含まれるため、遺物観察表では省略し、雲母のみ掲載した。
- 9 遺構の範囲が調査区外に及ぶものは、遺構の大きさを示す文章中の「最終的なプランは、188cm×94cm（調査区外に切られる）で～」のように計測できた範囲での数値を示す。
- 10 遺物の図面中の網伏せが記す内容は次に示す。各遺物の図面上に記すこととする。



本文目次

巻頭図版	1 調査の概要……………17
序文	2 遺構……………17
報告書抄録	第2節 縄文時代後期から弥生時代の調査……………41
二子塚B遺跡位置図	1 調査の概要……………41
例言	2 遺構……………41
凡例	3 遺物……………57
本文目次・挿図目次・表目次・図版目次	(1) 遺物の分類……………57
第1章 発掘調査の経過	(2) 土器……………58
第1節 調査に至るまでの経緯……………1	(3) 石器……………61
1 事業照会……………1	第3節 古墳時代の調査……………66
2 試掘調査……………1	1 調査の概要……………66
第2節 本調査……………1	2 遺構……………66
1 本調査の概要……………1	3 遺物……………79
2 発掘調査の体制……………2	第4節 時期不明遺構の調査……………81
3 本調査の経過……………2	1 調査の概要……………81
第3節 整理作業・報告書作成……………3	2 遺構……………81
1 整理作業の概要……………3	3 遺物……………81
2 整理作業・報告書作成体制……………3	第5章 自然科学分析……………89
3 整理作業の経過……………3	第1節 自然科学分析の概要……………89
第2章 遺跡の位置と環境……………4	第2節 自然科学分析の方法と結果及び考察……………89
第1節 地理的環境……………4	1 放射性炭素年代測定……………89
第2節 歴史的環境……………4	2 炭素・窒素安定同位体比分析……………89
第3章 調査の方法と層序……………9	3 炭化種実……………90
第1節 調査の方法……………9	4 樹種同定……………91
1 発掘調査の方法……………9	第6章 総括……………95
2 遺構の認定と調査方法……………10	1 旧石器時代……………95
3 整理作業・報告書作成作業の方法……………10	2 縄文時代早期……………95
4 出土遺物の分類……………10	3 縄文時代後・晩期から弥生時代……………96
第2節 層序……………11	4 古墳時代……………97
第4章 調査の成果……………17	5 時期不明遺構（古道）……………98
第1節 縄文時代早期の調査……………17	写真図版……………99

挿図目次

第1図 二子塚B遺跡位置図	第17図 土坑1・2・3・4号……………28
第2図 周辺遺跡図……………7	第18図 土坑5・6・7・8・9・10号……………29
第3図 グリッド配置図・試掘調査トレンチ・年度別調査範囲……………8	第19図 土坑11・12・13号・遺物集中1号……………30
第4図 土層断面図1……………12	第20図 遺物集中内遺物・ピット269・15号・埋設土器1号……………31
第5図 土層断面図2……………13	第21図 縄文時代早期土器1～8類……………34
第6図 土層断面図3……………14	第22図 縄文時代早期土器8～9類……………35
第7図 土層断面図4……………15	第23図 縄文時代早期土器9～10類……………36
第8図 土層断面図5……………16	第24図 旧石器・縄文時代早期石器（1）……………37
第9図 縄文時代早期遺構配置図・遺物出土状況図（1・2区）……………18	第25図 縄文時代早期石器（2）……………38
第10図 縄文時代早期遺構配置図・遺物出土状況図（3・4区）……………19	第26図 縄文時代早期石器（3）……………39
第11図 竪穴建物跡1号……………21	第27図 縄文時代後期～弥生時代の遺構配置図
第12図 集石1号……………23	・遺物出土状況図（1・2区）……………42
第13図 集石2・3・4・5号……………24	第28図 縄文時代後期～弥生時代の遺構配置図
第14図 集石6・7・8・9号……………25	・遺物出土状況図（3・4区）……………43
第15図 集石10・12号……………26	第29図 竪穴建物跡2号……………44
第16図 集石11号……………27	第30図 竪穴建物跡3号……………45

第31図	竪穴建物跡 3 号内遺物	46
第32図	土坑14・15号	47
第33図	土坑16・17号	48
第34図	土坑18号・ピット12・149・99・285・289・309号	49
第35図	ピット12・149・99・285・289・309号内遺物	50
第36図	遺物集中 2 号	51
第37図	遺物集中 2 号内遺物	52
第38図	遺物集中 3 号	53
第39図	遺物集中 4 号	54
第40図	遺物集中 5 号	55
第41図	遺物集中 5 号内遺物 (1)	56
第42図	遺物集中 5 号内遺物 (2)	57
第43図	縄文後期～弥生時代土器11～13類	59
第44図	縄文後期～弥生時代土器14・15類	60
第45図	縄文後期～弥生時代土器頸部・底部・16・17類	61
第46図	縄文後期～弥生時代石器 (1)	63
第47図	縄文後期～弥生時代石器 (2)	64
第48図	縄文後期～弥生時代石器 (3)	65
第49図	古墳時代の遺構配置図・遺物出土状況図 (1・2 区)	67
第50図	古墳時代の遺構配置図・遺物出土状況図 (3・4 区)	68

第51図	竪穴建物跡 4 号 (1)	69
第52図	竪穴建物跡 4 号 (2)・埋土内遺物 (1)	70
第53図	竪穴建物跡 4 号内遺物 (2)	71
第54図	竪穴建物跡 5 号	72
第55図	竪穴建物跡 5 号内遺物 (1)	73
第56図	竪穴建物跡 5 号内遺物 (2)	74
第57図	竪穴建物跡 6 号	75
第58図	土坑19・20号	76
第59図	土坑21・22・23・25・26号	77
第60図	土坑24・27・28・29号	78
第61図	古墳時代土器・土製品	79
第62図	時期不明遺構 (古道) 配置図 (1～4 区)	81
第63図	二子塚 A・B 遺跡溝状遺構・古道配置図	82
第64図	古道 1・2 (2 区)・3・4 号	83
第65図	古道 2 (3 区)・5 号	84
第66図	古道 5 号埋土内・近世・時期不明遺物	85
第67図	暦年較正年代マルチプロット表 (1)	92
第68図	暦年較正年代マルチプロット表 (2)	93
第69図	炭素・窒素安定同位体比	94
第70図	二子塚 A・B 及び細山田段遺跡の溝状遺構 (古道) 位置図	98

表 目 次

第 1 表	試掘調査結果	1
第 2 表	周辺遺跡一覧表	6
第 3 表	基本層序	11
第 4 表	土器分類表 (縄文時代早期)	32
第 5 表	出土石器の石材分類表	32
第 6 表	土器分類表 (縄文時代後期～弥生時代)	57
第 7 表	土器分類表 (古墳時代)	80
第 8 表	土器観察表 (1)	85
第 9 表	土器観察表 (2)	86
第10表	土器観察表 (3)	87
第11-1表	石器観察表	88

第11-2表	近世陶磁器観察表	88
第11-3表	鉄製品観察表	88
第11-4表	古銭観察表	88
第12表	測定試料および処理 (1)	91
第13表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (1)	91
第14表	測定試料および処理 (2)	92
第15表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (2)	92
第16表	炭素・窒素安定同位体比および窒素含有量, C/N 比	92
第17表	炭化種実同定結果	92
第18表	炭化材樹種同定結果	92
第19表	縄文時代早期及び後期～弥生時代の石器・石材別分類表	98

図 版 目 次

巻頭図版	遺跡遠景	
写真 1	手前⑫と奥⑪⑩の土層断面状況	16
写真 2	土器付着物採取位置	93
写真 3	二子塚 B 遺跡から出土した炭化種実 (1)	94
写真 4	二子塚 B 遺跡から出土した炭化種実 (2)	94
写真 5	二子塚 B 遺跡から出土した炭化種実 (3)	94
写真 6	二子塚 B 遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	94
写真 7	集石11号検出状況	96
写真 8	集石12号検出状況	96
図版 1	縄文時代早期の遺構 (1)	99
図版 2	縄文時代早期の遺構 (2)	100
図版 3	縄文時代早期・後期～古墳時代の遺構 (1)	101
図版 4	古墳時代の遺構・時期不明の遺構 (1)	102

図版 5	時期不明の遺構 (2)	103
図版 6	縄文時代早期遺物 (1)	104
図版 7	縄文時代早期遺物 (2)	105
図版 8	縄文時代早期遺物 (3)	106
図版 9	縄文時代早期遺物 (4)	107
図版10	旧石器・縄文時代早期遺物 (5)	108
図版11	縄文時代後期～弥生時代遺物 (1)	109
図版12	縄文時代後期～弥生時代遺物 (2)	110
図版13	縄文時代後期～弥生時代遺物 (3)	111
図版14	縄文時代後期～弥生時代遺物 (4)・古墳時代遺物 (1)	112
図版15	古墳時代遺物 (2)	113
図版16	古墳時代遺物 (3)・近世遺物・時期不明遺物	114

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

1 事業照会

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、調整を行っている。

鹿児島県土木部道路維持課は、平成7年に「県道黒石串良線改良工事」に先立って、同施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」）に照会した。これを受けて、文化財課が、平成7年4月に分布調査を実施したところ、事業区内に二子塚A・B遺跡、茶ノ木遺跡が所在すること、並びに両遺跡の間に試掘調査後に判断を要する地点（二子塚工区判断保留地点）が所在することが判明した。

この結果を受けて、二子塚遺跡A遺跡について、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）が平成9年9月17日から30日に確認調査を、平成11年10月12日から12月10日に1,250㎡を対象として本調査を実施し、平成16年4月から平成17年1月まで整理・報告書作成作業を行い、平成17年3月に発掘調査報告書を刊行した。

2 試掘調査

文化財課は、事業区域内の二子塚B遺跡、茶ノ木遺跡の2遺跡及び二子塚工区判断保留地点の一部について、周知の二子塚B遺跡・茶ノ木遺跡の埋蔵文化財包蔵地の範囲等の確認及び二子塚工区判断保留地点に未発見の遺跡が所在する可能性があることから、大崎町教育委員会の協力を得て、令和元年11月20日、令和2年10月8日、

令和3年1月25日、4月21日、11月24日、令和4年7月7日に試掘調査を行った。なお、二子塚B遺跡は、1月25日、11月24日、7月7日に実施した。試掘調査のトレンチ位置は第3図、結果は第1表のとおりである。

この結果、茶ノ木遺跡については、事業区域内においては遺物包含層が削平されていることを確認し、二子塚工区判断保留地点については、遺跡の残存は確認されなかった。二子塚B遺跡については、事業区域内に縄文時代草創期から古墳時代の遺構・遺物が存在することを確認し、令和4年度から埋文センターが本調査を実施することとした。

第2節 本調査

1 本調査の概要

令和4年度は、表面積1,020㎡を対象に、職員2名、作業員26名体制で、令和4年10月17日から令和5年2月22日（発掘調査実働71日）まで調査を実施した。なお、調査の効率化・迅速化を図るために、（株）パスコに測量業務委託を行い、遺構実測・測量業務を委託した。また、空中写真撮影を2回実施した。1回目は（株）ふじたに委託し、令和4年12月7日に実施した。2回目は（有）スカイサーベイ九州に委託し、令和5年2月15日に実施した。

令和5年度は、表面積875㎡を対象に、職員2名、作業員12名体制で、令和5年11月1日から令和6年2月22日（発掘調査実働61日）まで調査を実施した。なお、調査の効率化・迅速化を図るために、（株）九州文化財研究所に測量業務委託を行い、遺構実測・測量業務を委託した。また、空中写真撮影を（有）スカイサーベイ九州に委託し、令和6年2月13日に実施した。

第1表 試掘調査結果

調査年度	トレンチ番号	遺構	遺物
R2	1 T	—	—
	2 T	ピット3基、竪穴建物跡？3基	塞ノ神式土器、弥生土器、成川式土器
	3 T	—	成川式土器
	4 T	—	—
	5 T	—	—
	6 T	—	被熱破砕礫（流れ込み）
	7 T	ピット6基、道路状遺構1条（近代）	手向山式土器、礫器、被熱破砕礫
R3	8 T	—	縄文早期土器 ※ 試掘では隆帯文土器としていたが、検討の結果、縄文早期の遺物と判断
	9 T	—	弥生～古墳時代の土器、スクレイパー
R4	10 T	ピット1基、道跡（硬化面）1条、土坑1基	縄文後期土器
	11 T	—	—
	12 T	—	縄文後期土器

令和6年度は、表面積400㎡を対象に、職員2名、作業員15名体制で、令和6年5月8日から令和6年6月26日（発掘調査実働34日）まで調査を実施した。なお、調査の効率化・迅速化を図るために、（株）九州文化財研究所に測量業務委託を行い、遺構実測・測量業務を委託した。

2 発掘調査の体制

令和4年度

調査体制

事業主体	鹿児島県		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所	長	中原 一成
調査企画	次長兼総務課長		大口 浩嗣
	調査課長兼南の縄文調査室長		寺原 徹
	文化財主事兼第二調査係長		西園 勝彦
調査担当	文化財主事		中野 智也
	文化財研究員		鮫島 えりな
調査事務	総務係長		白坂 由香

令和5年度

調査体制

事業主体	鹿児島県		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所	長	中村 和美
調査企画	総務課長		荒瀬 勝己
	調査課長兼南の縄文調査室長		黒川 忠広
	文化財主事兼第二調査係長		楸田 岳志
調査担当	文化財主事		中野 智也
	文化財研究員		鮫島 えりな
調査事務	総務係長		白坂 由香

令和6年度

調査体制

事業主体	鹿児島県		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所	長	中村 和美
調査企画	次長兼総務課長		南 安洋
	調査課長兼南の縄文調査室長		黒川 忠広
	文化財主事兼第二調査係長		楸田 岳志
調査担当	文化財主事		山下 智沙子
	文化財主事		廣 栄次

調査事務 主幹兼総務係長 白坂 由香

3 本調査の経過

発掘調査の経過について、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

令和4年度

- 10月 調査開始、環境整備、グリッド設定・設置、
1区表土重機掘削、Ⅱa・Ⅱb層：掘下げ、遺物取上げ、Ⅲ・Ⅳa層：遺構検出、遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ
2区表土重機掘削
- 11月 1区Ⅲ・Ⅳa層：遺構検出、遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ、
2区表土重機掘削、Ⅲ・Ⅳa層：遺構検出、遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ
- 12月 空撮、1区Ⅲ・Ⅳa層：遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ、Ⅴ層・Ⅵ層：掘下げ、遺構検出、実測、遺物取上げ、写真撮影、
2区Ⅴ層・Ⅵ層：掘下げ、遺構検出、実測、遺物取上げ、写真撮影、Ⅷ・Ⅸ層：掘下げ
- 1月 1区Ⅲ・Ⅳa層：遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ、Ⅴ層・Ⅵ層：掘下げ、遺構検出、実測、遺物取上げ、写真撮影
2区Ⅴ層・Ⅵ層：掘下げ、遺構検出、実測、遺物取上げ、写真撮影、Ⅷ・Ⅸ層：掘下げ
- 2月 空撮、1区Ⅴ層・Ⅵ層：掘下げ、遺構掘下げ、実測、写真撮影、地形測量、埋戻し
2区Ⅷ層：掘下げ、遺構掘下げ、実測、写真撮影、地形測量、埋戻し

令和5年度

- 11月 調査開始、環境整備、グリッド設定・設置
3区表土重機掘削、Ⅲ層：掘下げ、遺構検出、遺物取上げ、実測、写真撮影
4区表土重機掘削、Ⅱa～Ⅱc層掘下げ
- 12月 3区遺構検出、遺構掘下げ、遺物取上げ、実測、写真撮影、Ⅳa～Ⅳb層：重機掘削、Ⅴ層：掘下げ、遺構検出、遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ、3区調査終了
4区Ⅱa～Ⅱc層：掘下げ、遺構掘下げ、実測、写真撮影、遺物取上げ
- 1月 3区埋戻し
4区表土重機掘削、Ⅱc～Ⅱd層：掘下げ、遺構検出、遺構掘下げ、遺物取上げ、実測
- 2月 4区Ⅱc～Ⅱd層：掘下げ、遺構検出、実測、遺物取上げ、写真撮影、下層確認トレンチ重機掘削

令和6年度

5月 調査開始、環境整備

4区Ⅵa層：掘下げ、遺構検出、Ⅵb～Ⅵc層：重機掘削、実測、写真撮影、遺物取上げ

6月 4区Ⅶ層：重機掘削、Ⅷ層：掘下げ、下層確認トレンチ、実測、写真撮影、遺物取上げ、調査終了、埋戻し

第3節 整理作業・報告書作成

1 整理作業の概要

二子塚B遺跡の整理作業・報告書作成作業は、令和5、6年度に、埋文センターで実施した。

整理作業・報告書作成作業の内容は、以下のとおりである。

- ① 遺構実測図と図面台帳の照合、遺構ごとに実測図の仕分け、注記、トレース原図作成及びトレース
- ② 遺構内出土遺物と包含層遺物の仕分け、遺物と遺物台帳の照合、遺構内出土遺物と遺構実測図との照合、分類
- ③ 出土遺物の洗浄、注記、選別、接合・復元、分類、掲載資料の選別、実測、土器の拓本、トレース
- ④ 石器実測委託、自然科学分析（年代測定、炭素・窒素安定同位体分析、テフラ分析、種実・樹種同定）業務委託
- ⑤ 遺物写真撮影、レイアウト、原稿執筆

2 整理作業・報告書作成の体制

令和5年度

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 中村 和美

調査企画 総務課 課長 荒瀬 勝己

調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広

文化財主事兼第二調査係長 楸田 岳志

作成担当 文化財主事 中野 智也

文化財研究員 鮫島 えりな

調査事務 総務係 係長 白坂 由香

令和6年度

事業主体 鹿児島県

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 中村 和美

調査企画 次長兼総務課 課長 南 安洋

調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広

文化財主事兼第二調査係長

楸田 岳志

作成担当 文化財主事

廣 栄次

文化財主事

中野 智也

調査事務 主幹兼総務係長

白坂 由香

3 整理作業の経過

整理作業・報告書作成の経過について、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

令和5年度

4月 オリエンテーション、図面確認、遺物確認、遺物水洗、写真整理

5～7月 図面確認、遺物注記、写真整理

8～11月 図面確認、接合、写真整理、石器分類

12～1月 図面確認、水洗い、実測、写真整理

2月 図面確認、注記、実測、土器分類、写真整理

3月 図面確認、写真整理、遺物整理、実測委託成果品納品

報告書作成指導委員会

令和5年6月14日、8月8日、10月3日、11月21日、令和6年2月6日 調査課長ほか7名

報告書作成検討委員会

令和5年6月21日、8月28日、10月12日、10月31日、11月22日、令和6年2月9日 所長ほか7名

令和6年度

4月 オリエンテーション、遺物確認、水洗、遺構図チェック、修正、トレース、写真整理

5～6月 水洗、注記、接合、遺構図チェック、修正、トレース、石器分類、復元、実測遺物抽出

7～9月 土器分類、実測遺物抽出、土器・石器実測、復元、写真整理、原稿執筆

10月 石器実測委託成果品納品、自然科学分析委託成果品納品、原稿執筆

11月 写真撮影、原稿執筆、19日池畑耕一氏（前鹿児島県考古学会副会長）指導

12月 レイアウト、観察表作成

1～2月 校正、遺物収納

3月 遺物収納、報告書納品

報告書作成指導委員会

令和6年6月10日、8月9日、10月8日、11月5日、19日 調査課長ほか7名

報告書作成検討委員会

令和6年6月10日、8月19日、10月17日、11月11日、22日 所長ほか7名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

二子塚B遺跡は鹿児島県曾於郡大崎町持留・野方字二子塚に所在する。遺跡の所在する大崎町は鹿児島県の東南部、大隅半島の東部に位置し、東西に約8km、南北に約18kmの町域である。東は志布志市、西は鹿屋市、北は曾於市に接し、南東部は志布志湾を臨む。

志布志湾は、都井岬から串良川まで半円状を呈し、砂浜と岩礁海岸が交互に連なる。大崎町の沿岸部分は志布志市から東串良町まで約16kmにわたって続く幅1～1.5kmの砂丘海岸のほぼ中央部にあたり、菱田川河口から南西に弧状を描いて東串良町に至るまで約7kmの海岸線となっている。

南北に細長い大崎町は、南部は志布志湾から北に向かって緩やかな勾配を成して上がり、北部は標高約150m～180mの丘陵地帯となっている。さらに北端部に至っては谷間の多い起伏の激しい地形を成し、その中を菱田川、田原川、持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部はこの3河川に沿って水田地帯が開け、その中間の台地は畑地を形成している。北部は、大鳥川が水源を發し、蛇行しながら志布志市へと流れており、山林、原野の多い地帯となっている。

地質は、厚い入戸火砕流堆積物及びその二次的堆積物で埋められた低地である。基盤の四万十層群の丘陵は志布志湾に近い有明付近に点在している。これらの層の上に黒色火山灰土壌を多く形成している。また、砂丘地域には砂州・砂丘列とその背後の低湿地が発達している。低湿地は水田地帯となっているが、時折泥岩層を成している所がある。

気候は、志布志湾に面し、黒潮の影響を受けるため、温暖で農作物の育成に適した風土である。

二子塚B遺跡は、谷間の多い起伏のある地形で、標高約160mの台地上に位置し、東側の低地には持留川が流れている。

第2節 歴史的環境

大崎町内の遺跡については、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布しており、二子塚B遺跡周辺の遺跡については、大隅中央広域農道や東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって次第に歴史的様相が明らかになりつつなる。ここでは、二子塚B遺跡周辺の主な遺跡について、時代別に紹介する。なお、大崎町以外の遺跡については、遺跡名の後に市町村名を記すことにする。

旧石器時代

二子塚A遺跡では、Ⅵ層（薩摩火山灰）の下層から剥片が出土し、永吉天神段遺跡では、角錐状石器やナイフ形石器など、ナイフ形石器文化期の遺物や製作跡が出土し、天神段遺跡では、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が出土している。

荒園遺跡では、細石刃文化期の石器類が出土している。

宮脇遺跡では、石器製作に関連すると考えられる石核、フレーク、チップ等が出土している。

縄文時代

益畑遺跡（鹿屋市串良町）では、早期前半の竪穴建物跡2軒や連穴土坑16基が検出され、前平式土器・加栗山式土器・石坂式土器等が出土している。

二子塚A遺跡では、早期の集石と吉田式土器・石坂式土器・桑ノ丸式土器・押型文土器等が出土している。晩期では土坑が検出され、入佐式土器や石斧等が出土している。

細山田段遺跡（鹿屋市串良町・大崎町）では、早期の集石18基、埋設土器2か所が検出され、吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器が出土している。前・中期では、土坑178基、土器集中18か所が検出され、大量の深浦式土器や近畿地方の大歳山式土器、瀬戸内地方の船元式土器が出土するなど当時の遠隔地交流の一端が明らかになった。

下堀遺跡では、早期の集石・土坑が検出され、前平式土器・加栗山式土器・下剥峯式土器等が出土している。後期では、指宿式土器等が出土している。

荒園遺跡では、早期の集石40基が検出され、塞ノ神式土器や苦浜式土器、石鏃や石匙等が出土している。

平良上C遺跡では、早期の竪穴建物跡、連穴土坑、集石、土坑が検出され、岩本式土器・加栗山式土器等が出土している。

宮脇遺跡では、早期の集石や土坑が検出され、志風頭式土器や加栗山式土器等が出土している。

野方前段遺跡では、早期の集石や土坑が検出され、石坂式土器や塞ノ神式土器等が出土している。

天神段遺跡では、晩期の竪穴建物跡・土坑群とともに、入佐式・黒川式土器、石鏃・打製石斧・磨製石斧等が出土している。

永吉天神段遺跡では、突帯文土器を伴う竪穴建物跡や鉢・壺、打製石斧・石鏃・石匙等が出土している。

弥生時代

天神段遺跡では、中期前半の入来式を伴う竪穴建物跡

が検出されている。

沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡で、多くの竪穴建物跡・土坑・柱穴等が検出された。また、入来Ⅰ・Ⅱ式土器、山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器などの土器や鉄製品、軽石製加工品も出土した。その他、須玖式土器も出土し、九州北部方面との交流があったことが示唆される。

下堀遺跡では、須玖式土器を伴う大型竪穴建物跡2軒や掘立柱建物跡5棟が検出され、山ノ口Ⅱ式土器が出土している。

古墳時代

昭和18年に国指定史跡となった横瀬古墳は、古墳時代中期（5世紀前半頃）の大型前方後円墳で、県内では隣接する肝属郡東串良町の唐仁大塚古墳に次いで2番目に大きい。墳丘では、円筒埴輪片・形象埴輪等が発見され、周濠内からは、須恵器片が出土している。

神領古墳群では、前方後円墳4基、円墳9基、地下式横穴墓7基が確認された。6号墳は、前方後円墳で、後円部に竪穴式石室がある。主体部は花崗岩質板石を使用した組合せ石棺で、鉄剣、鉄刀、鏡等が副葬され、日光鏡・仿製獣帯鏡各1面が採集されている。地下式横穴墓1号の主体は、長方形、家形の玄室で羨道部取付けは妻入りである。副葬品として鉄剣、骨製筭、イモガイ製貝釧、内向花文鏡がある。

下堀遺跡は、地下式横穴墓5基が調査されている。いずれも平入りでドーム形の玄室である。鉄剣・刀子などが出土しているが、この中には、大隅半島では初めての出土となる異形鉄器がある。

川久保遺跡は、多数の竪穴建物跡や古墳時代末から古代にかけての製鉄炉跡が検出されている。

古代

古代の大崎は、日向国諸県郡に属し、その南端にあったと考えられるが、具体的な郡域等は不明である。この地域の古代相当期の考古学的様相も明らかになってはいない。

天神段遺跡では、掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡、土師器・墨書土器・刻書土器、鍛造剥片が確認されている。

永吉天神段遺跡では、7棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器、須恵器、焼塩土器、鉄製刀子、砥石等が発見されている。

柿木段遺跡では、古道12条、溝1条、土坑3基が検出され、土師器や須恵器が出土している。

中・近世

中世には各地で山城が造られ、この地域にも大崎城

跡、胡麻ヶ崎城跡、野卸城跡、龍相城跡、金丸城跡、梶谷城跡、遠見ヶ丘などがある。

金丸城跡では、中世から近世の遺構・遺物が発見され、青磁・白磁・青花・瓦質土器・備前焼播鉢・天目碗など14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。また、17世紀前半を中心とする陶磁器も多く出土している。遺構は多数の柱穴と建物7棟、水溜土坑（大型6基、小型2基）、炉跡16基、溝状遺構が検出されている。炉跡はいずれも意図的に破壊され、炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱片粘土片が集中している場所も確認されている。

村落跡としては、天神段遺跡で多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され、中でも土坑墓1号からは、同安窯系青磁6点・龍泉窯青磁1点・青白磁1点、銅鏡1点、滑石製石鍋2点、鉄製品・木製品・土師器など豊富な副葬品が出土している。

下堀遺跡では、溝状遺構・畝間跡が検出され、青磁・青花・中国陶器などが出土している。

荒園遺跡では、掘立柱建物跡や土坑・溝などが検出され、土師器・東播系須恵器などとともに華南三彩も出土している。

柿木段遺跡では、古道7条、溝10条が検出され、陶磁器が出土している。

照信院跡では、寺院と他の区域を分ける回廊、もしくは、それに付随する施設を分ける可能性のある溝状遺構や一字一石経の可能性のある小礫を伴うピットが検出された。

【引用・参考文献】

大崎町教育委員会

2005「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

串良町教育委員会

2005「益畑遺跡」串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2005「二子塚A遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(84)

2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(173)

鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2015・2016・2018「天神段遺跡1・2・3」(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)、(6)、(18)

2017・2022「荒園遺跡1・2」(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)、(43)

2019・2021「細山田段遺跡1・2」(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(25)・(35)

2020「永吉天神段遺跡5」(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(27)

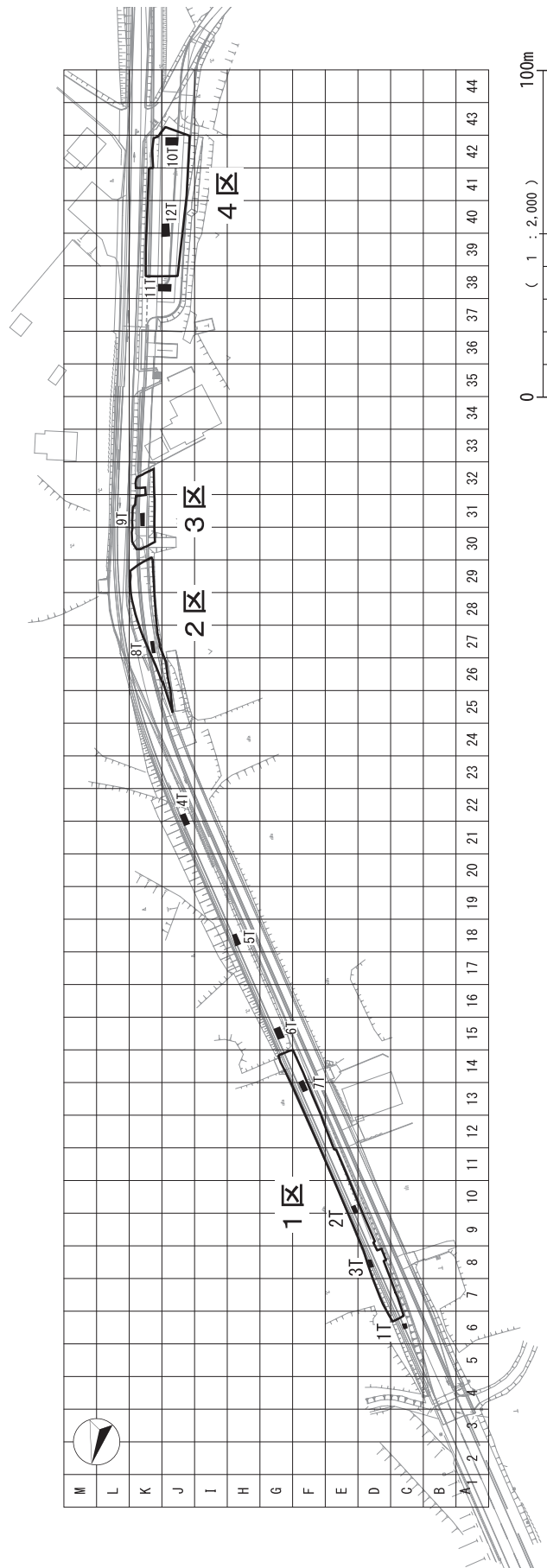
2023「川久保遺跡5」(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(53)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	468	66	瀬ノ堀 B	曾於郡大崎町野方瀬ノ堀	台地		
2	468	113	篠之段	曾於郡大崎町野方篠之段 4983-1	台地	弥生	
3	468	112	釜ヶ字都前ノ段	曾於郡大崎町野方宇土 4271-4	台地	弥生	
4	468	9	釜ヶ字都	曾於郡大崎町野方宇土	山地	縄文（後）	
5	468	39	二松	曾於郡大崎町野方瀬ノ堀二松	台地	弥生，古代，中世，近世	
6	468	5	横内 A	曾於郡大崎町野方平段	台地	縄文（後）	
7	468	23	横内 B	曾於郡大崎町持留横内	台地	弥生（中・後）	
8	468	110	中段	曾於郡大崎町野方 4440-1	台地	弥生	
9	468	111	宇都	曾於郡大崎町野方中ノ段 4649	台地	弥生	
10	203	299	立小野	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	
11	203	296	高松	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
12	468	6	二子塚 A	曾於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早・晩），弥生，古墳	県埋セ発掘調査報告書（84）
13	468	4	二子塚 B	曾於郡大崎町持留・野方二子塚	台地	縄文，弥生，古墳	本報告書
14	468	22	二子塚 C	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生（中・後）	
15	468	18	大佐土原	曾於郡大崎町大佐土原	山地	弥生（中）	
16	468	115	大久保 B	曾於郡大崎町持留大久保 73・野方鍋山 4769-2	台地	縄文	
17	468	116	佐土原	曾於郡大崎町野方佐土原 4715-2	台地	縄文，古墳	
18	468	26	栢山城跡	曾於郡大崎町持留栢山	台地	弥生，古墳，中世	
19	468	2	川上神社	曾於郡大崎町持留貫ノ下	山腹段斜面	縄文（後）	
20	468	67	持留牧	曾於郡大崎町持留牧・東尾ノ花	台地	縄文，古墳	
21	468	135	西ノ上	曾於郡大崎町持留西ノ上 2271-1	台地	弥生	
22	203	329	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
23	468	117	茶ノ木	曾於郡大崎町持留茶ノ木上 1406-2	台地	古墳	
24	468	100	栢木段	曾於郡大崎町永吉栢木段	台地	弥生，古墳	
25	203	346	入部堀	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
26	203	300	町田堀	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	縄文（後・晩），弥生（中），古墳，古代	鹿公財発掘調査報告書（7），（20）
27	203	344	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉）	
28	203	352	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
29	203	349	川久保	鹿屋市串良町細山田川久保	台地	弥生	鹿公財発掘調査報告書（24），（31），（37），（38），（53）
30	203	350	小牧	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	弥生，古代，中世，近世	鹿公財発掘調査報告書（26），（39），（46）
31	203	347	新堀	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
32	203	348	是ヶ迫	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
33	203	292	ホンドンガマ	鹿屋市串良町細山田下中	洞穴	縄文	
34	203	334	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
35	203	351	益畑	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	串良町発掘調査報告書（11）
36	203	325	京の塚古墳	鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	古墳	
37	203	304	細山田段	鹿屋市串良町下中京の塚	台地	弥生	
38	468	52	細山田段（旧：京の塚遺跡）	曾於郡大崎町細山田段・茶ノ木	台地	縄文（後・晩），弥生（前），古墳	鹿公財発掘調査報告書（25），（35）
39	482	10	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	468	103	下原	曾於郡大崎町持留下原	台地	縄文（後），弥生，古墳	



第2図 周辺遺跡図



試験調査	令和3年1月25日	1～7T	本調査	令和4年10月17日～令和5年2月22日	1・2区(完了)
"	令和4年11月24日	8・9T	"	令和5年11月1日～令和6年2月22日	3区(完了)
"	令和4年7月7日	10～12T	"	"	4区(V層上面迄)
			"	令和6年5月8日～6月26日	4区(V～完了)

第3図 グリッド配置図・試験調査トレンチ・年度別調査範囲

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

1 発掘調査の方法

本遺跡の発掘調査は、令和3年度及び4年度に試掘調査、令和4年度から6年度に本調査を実施した。調査対象表面積は1,895㎡、調査対象延面積は4,115㎡である。

本遺跡の調査区割（グリッド）は、工事用センター杭No13（X=-170184.786, Y=-5036.025）とNo15（X=170223.738, Y=-5027.059）を結ぶ直線を基に10m×10mのグリッドを設定した。具体的には、「第3図グリッド配置図・試掘調査トレンチ・年度別調査範囲」（P.8）に示すように北側から南側に向かって1・2・3・（中略）…44、西側から東側に向かってA・B・C・（中略）…Mと調査区割を設定した。なお、本遺跡の調査区は南北に長く、途中で調査対象外の範囲を挟むため、調査区を4か所に細分し、6～14区を1区、25～29区を2区、29～32区を3区、38～43区を4区とした（第3図、P.8参照）。

発掘調査は、安全上の措置として、用地境界等では境界から約1.0～2.0m程度内側に控えて調査範囲を設定した。調査前に樹木の伐採、除草などを行い、重機で表土を除去した後、遺物包含層の掘下げ及び遺構検出を人力により行った。遺構は、できるだけ包含層上面で検出できるように、層が変わるところ（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層）で精査後に遺物の取上及び遺構検出を行った。埋土状況を確認するために埋土確認ベルトを残し、移植ごてなどの小型の道具を用いて埋土を除去しながら調査を行った。なお、遺構の埋土確認ベルトの設定及び掘り進め方は、土坑の種類や規模により違った。ピットや小規模の土坑は半裁にて、集石や大きな土坑は十字に埋土確認ベルトを設定して1/4カットし、堅穴建物跡は十字の埋土確認ベルトに並行する幅20cm程の先行トレンチを設定して貼床の有無を先行確認した後に半裁を、溝状遺構は溝に対して直交する複数の埋土確認ベルトを設定して残して、埋土の確認を行いながら完掘した。なお、遺構は検出時及び検出中の写真の撮影、埋土堆積状況の実測を行い、完掘状況の写真撮影後、遺構の規模に応じた縮尺で実測を行った。遺構内から遺物が出土した場合はその状況に応じて撮影・取上げ・出土状況の実測を行った。包含層内遺物は、検出時のまま動かさずに、周囲及び下位の地山を柱状に残したまま掘下げを行い、層が変わる所でトータルステーションで位置を記録した後、取上を行った。なお、各調査区の調査終了間際には、西側もしくは東側及び南北いずれかの壁面の土層断

面を実測して記録した。なお、2区から4区にかけては縦走する古道が南北のいずれかの壁面を切って検出されたが、その場合は埋土状況を含めた壁面を土層断面として実測した。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第1章に掲載）は以下のとおりである。

令和4年度

令和4年10月17日から令和5年2月22日までの実働日71日間、調査表面積は1,020㎡、延面積は2,200㎡である。調査範囲は、1区（C～G-6～14区）、2区（J・K-25～30区）である。1区では令和2年度の試掘調査でⅡ・Ⅲ層から弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が、Ⅶ層から縄文時代早期の遺物が、2区では令和3年度の試掘調査でⅨ層から縄文草創期の土器片－後に縄文早期の土器と判断－が確認されていた。そのため、重機で表土掘削後は、Ⅶ層上面（縄文時代早期）までは人力掘削による全面調査を行った。Ⅶ層上面に到達した後は、1区では2か所、2区では1か所の下層確認トレンチを設定し、Ⅷ層からⅩⅤ層（発掘調査時はⅩⅧ層と呼称。いわゆるシラス層）に遺構・遺物がないか確認をした。なお、2区はK-27～29区を調査し、埋め戻した後、反転する形でJ・K-25からJ・K-27区の調査を行った。ほかに株式会社パスコに遺構の一部の実測・測量業務の委託を行い、作業の進捗を図った。

令和5年度

令和5年11月1日から令和6年2月22日までの実働61日間、調査表面積は875㎡、延面積は1,115㎡である。調査範囲は、3区（K-30～32区）、4区（J・K-38～43区）である。3区では、令和4年度の試掘調査で、Ⅲ層から弥生～古墳時代の遺物が、3区に隣接する2区のⅨ層から上記のとおり縄文草創期の可能性のある土器片－後に縄文早期の土器と判断－が確認されていた。そのため、表土を重機掘削後は、Ⅶ層上面までは人力掘削により全面調査を行った。なお、Ⅳ層（アカホヤ火山灰層：無遺物層）は重機で掘削した。Ⅴ層上面に達した後、調査区北側に下層確認トレンチを1か所設定し、Ⅴ～ⅩⅤ層まで人力で掘り進めたが、遺構・遺物は見られなかった。4区では、令和4年度の試掘調査で、北側のⅡc層から縄文時代後期の遺物が、南側のⅠb層から道跡及びⅦ層から礫を含む遺構が確認されていた。そのため、表土を重機掘削後は、Ⅱa～Ⅳ層（アカホヤ火山灰）上面までは人力掘削による全面調査を行った。その後、試掘調査で遺構・遺物が確認されなかった北側についてはJ-38区に、中央についてはJ-41区に、それぞれ1か所ずつの下層確認トレンチを設定した。J-38区のトレン

チはⅣ層～Ⅶb層まで、J-39・40区のトレンチはⅧ層上面まで機械掘削により調査を行った。いずれのトレンチでも、遺構・遺物は確認されなかった。以上の調査により、4区の北側は、Ⅱa層～Ⅲ層までの調査で終了することとした。中央のトレンチは小規模だったため、追加の下層確認調査が必要と判断し、令和4年度の試掘調査によりⅦ層から礫を含む遺構が確認されていた南側と合わせて、Ⅴ層以下は次年度に調査することとした。ほかに、(株)九州文化財研究所に遺構の一部の実測・測量業務の委託を行い、作業の進捗を図った。

令和6年度

令和6年5月8日から6月26日までの実働34日の2か月間でJ・K-38～43区(4区と呼称)の表面積400㎡、延面積は800㎡を対象として行った。4区は令和5年度にⅤ層上面までを全面調査を実施し、中央・南側のみⅤ層以下の調査が未実施となっていた。そのため、追加の下層確認調査が必要と判断された中央と、令和4年度の試掘調査によりⅦ層から礫を含む遺構が確認されていた南側のⅤ層以下を調査した。

地形が傾斜し低くなっている調査区中央では、調査途中で、掘削深度が地表面から2mに達したため、調査区の壁面より2mの間隙を設けて、その内側を調査することとし、その範囲内でⅦb層上面(縄文時代早期)まで全面調査を進めた。その後、南北方向に縦断する1m×18mと1m×16mの2本のトレンチを設定し、Ⅶb層以下Ⅶb層の下位までの下層確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認されず、Ⅶb～Ⅶb層は無遺物層であることを確認した。そのため、トレンチ以外の範囲については、Ⅶb～Ⅶb層を重機により掘削し除去した。ただし、Ⅶb層の下面には、遺跡によって縄文時代草創期の遺物が含まれる事例もあることから、Ⅶb層下面は重機掘削をせずに層を残して発掘調査することとした。Ⅶb層以下、Ⅷ層(いわゆるチョコ層)は1m×17mに1m×7mのトレンチを交差させて十字状に設定し、人力掘削にて下層確認調査を行った。Ⅷ層(チョコ層)は捻り鎌にて、Ⅸ層以下、Ⅹ層(シラス)上面までは、山鋏にて人力掘削を行った。調査終了後は、トレンチの埋め戻しを行った。なお、(株)九州文化財研究所に測量業務委託を行い、遺構実測・測量業務を委託し、作業の進捗を図った。

2 遺構の認定と調査方法

当時の地表面に限りなく近い位置での遺構の検出に努めたが、各地点で土層堆積状況に違いが認められたり、削平により消失している部分もあったり、色調が酷似する土層が上下に連続したり、遺構の構築面を捉えることが非常に困難であった。特に、黒褐色及び黒色の微細な色調の違いで細分されるⅡa～Ⅱd層、黒褐色に含まれる黄橙色のパミスの密度で細分されるⅥa・Ⅵb層の細

分には難を伴った。そこで、調査時には検出面、遺物出土状況、埋土状況、床面の状況等を観察しながら慎重に検討し、さらに、整理作業時には調査年度が異なる遺構について、総合的に判断して遺構の認定・時期判断を行った。遺構については、遺構の種類を問わず連番を振ることとし、検出順に遺構名と遺構番号を付した。調査の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

整理作業・報告書作成作業を令和5・6年度の2年間にわたって実施した。出土遺物の水洗い後、注記作業を行い、注記記号は遺跡名を「二子b」とし、グリッド、層、取上番号を記入した。遺構内出土遺物は、遺跡名の次に区、遺構名、取上番号を記入した。出土遺物は遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、土器等は形態の特徴や施文等から時期ごとに分類・接合を行った。石器は剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。石器は作業の効率化を図るため、一部実測委託を行った。

遺構の認定・分類は、発掘調査時に加え整理作業においても、実測図や写真等を用いて再検討を行い確定した。掲載スケールを決定し、点検・修正後、デジタルトレースを行った。土層断面図、遺構配置図及び地形図は、点検・修正後、デジタルトレースを行った。なお、遺構の認定・分類を整理作業において再度行ったことに伴い、報告書に掲載する際には、発掘調査時の遺構番号と異なる新たな遺構番号を付し直した。遺物出土状況図はトータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

令和5年度に遺構図の整理、遺物の水洗い・注記、接合、完形品土器の実測、一部石器の実測委託、写真整理を行った。令和6年度には、遺構図の修正・デジタルトレース、遺物の水洗い・注記(令和6年度発掘分)、遺物(1区を除く)の接合、遺物の実測・デジタルトレース、一部石器の実測委託・デジタルトレース、拓本、遺構・遺物のレイアウト、原稿執筆、観察表の作成、遺物写真撮影を終了後、印刷・製本を行った。

4 出土遺物の分類

出土遺物の時代・時期の判断は、発掘現場での出土層位を基本とした。

本遺跡で出土した縄文時代後期から古墳時代に比定されるⅡa～Ⅱc層、縄文時代早期に比定されるⅤ・Ⅵa層に加え、遺物落ち込みを考慮し、Ⅶb層出土の土器を、既知の土器型式の研究成果をもとに、第1～25類に分類した。石器についても、アカホヤ火山灰を間に明確に挟む縄文時代早期の石器と、縄文時代後期から古墳時代の石器を二分し、器種ごとに分類した。しかし、前述したようにⅡa～Ⅱc層は色調が酷似し明確に細分するのが困難な上、土層が混在している箇所も多いので、出土層に

よる時代区分は困難であった。そのため、それぞれの石器の周辺に出土する土器型式を参考に、石器の時代を判断しつつも、Ⅱa～Ⅱc層層出土の石器は縄文時代後・晩期の遺物と判断して報告することとした。なお、遺物の分類基準については、各節で述べる。

第2節 層序

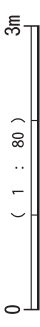
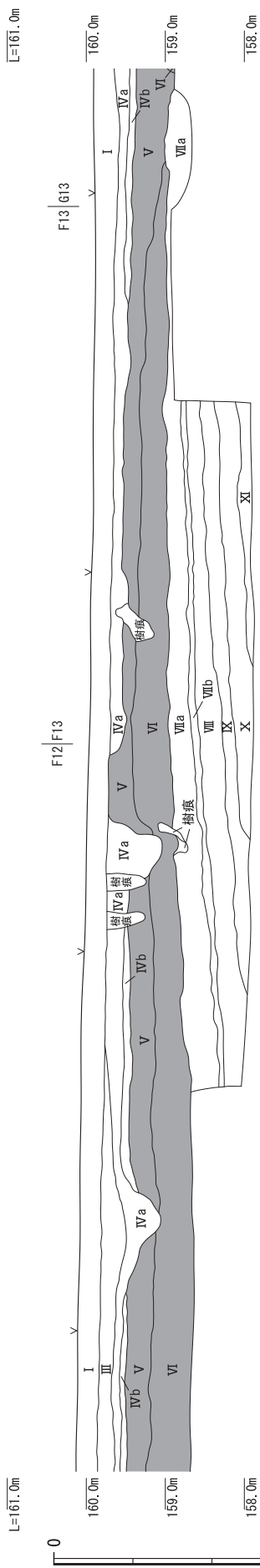
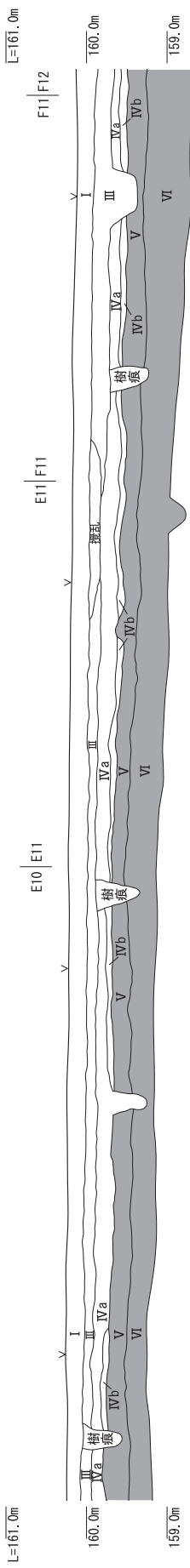
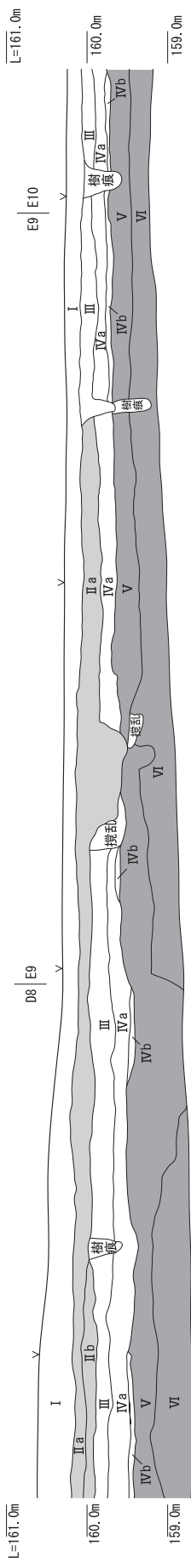
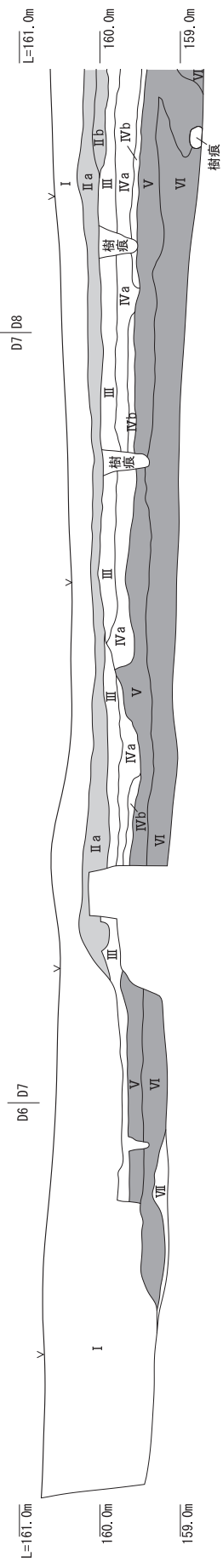
基本層序は、以下の第7表のとおりであるが、1区では、Ⅱ層が部分的に残存するのみである。また、1区では、Ⅶ層の薩摩火山灰層が良好に堆積しているが、2区では落ち込んだ所のみブロック状に残存していた。3区では表土直下がⅢ層で、約40cmと厚く堆積していたが、Ⅳ層の堆積は良好ではなかった。4区では全体的に

層の堆積が厚く良好で、Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ層でさらに細分が可能であった。特にⅡd層は御池降下軽石層に該当すると考えられ、4区では全体的に10cmの厚さで良好に堆積している。また、Ⅱc層下位や、Ⅲ層においても池田降下軽石が浮遊している。なお、Ⅵc層までは現在の地形とほぼ同じ地形であるが、Ⅶb層（薩摩火山灰層・P14）より下層は、地形が北側に大きく落ち込む谷があり、現在の比較的平坦で傾斜のない地形とは、大きく様相が異なっていた。阿多火砕流や入戸火砕流などの後期更新世の火砕流による地形改変により、大淀川の志布志湾への流入がせき止められたことも原因の一つだと考えられる。また、この谷に向かってローム層のⅧ層（いわゆるチョコ層）の堆積が厚くなっていた。

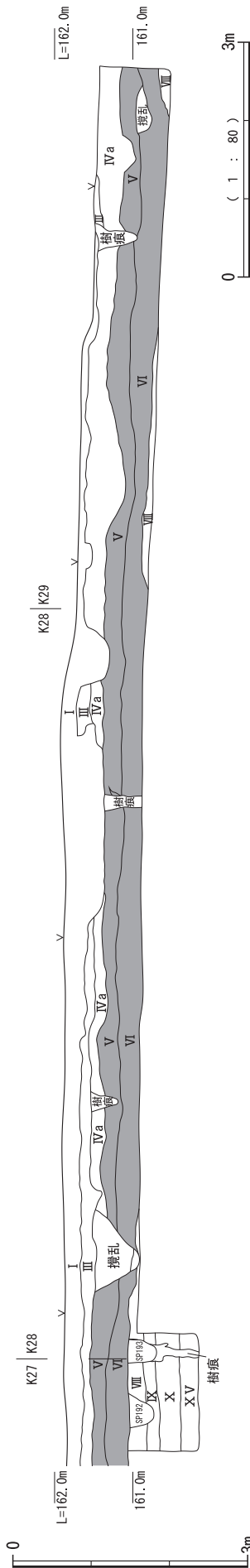
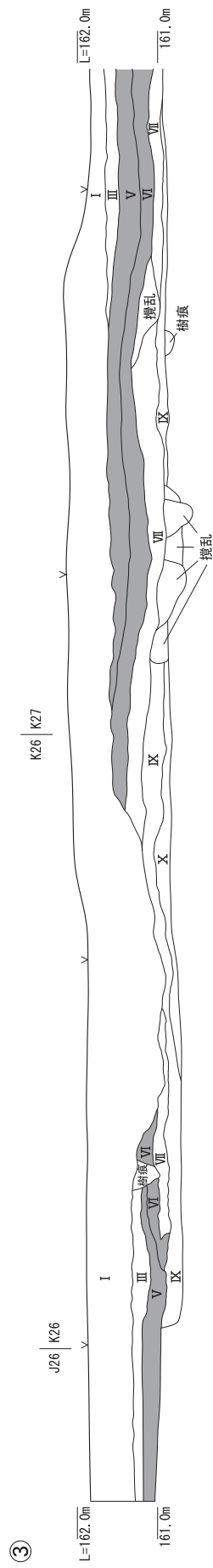
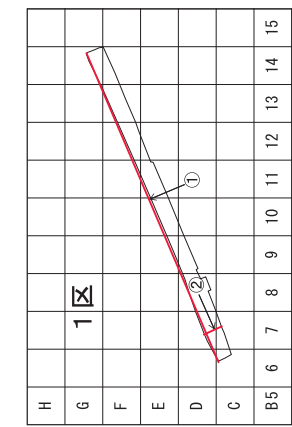
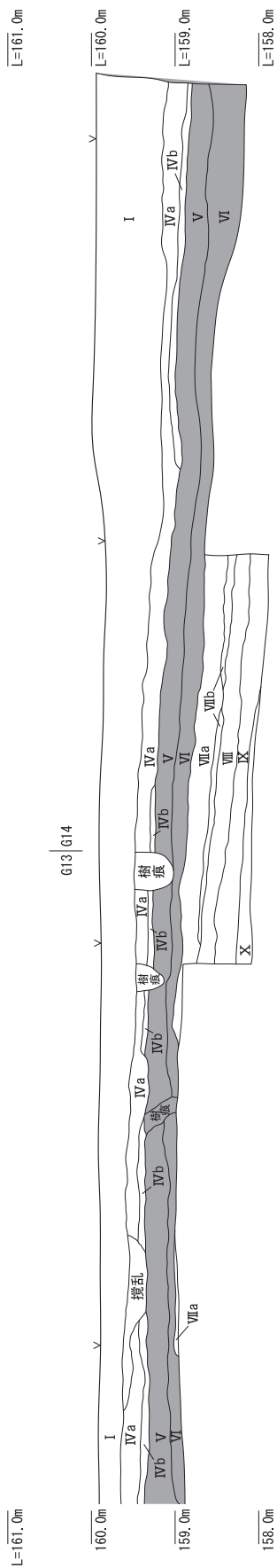
第3表 基本層序

層位	色調等・テフラ等	包含層	平均層厚 (cm)
I a		表土・耕作土	50
I b		近現代の造成土	
I c		桜島大正火山灰層 (P1)	
I d		近代の造成土 一部硬化面を含む 近代の道路状遺構の埋土及びその造成土か	
Ⅱ a	黒褐色土	弥生～古墳時代の包含層	20
Ⅱ b	黒褐色土	弥生～古墳時代の包含層	15
Ⅱ c	黒色土	縄文時代後期・晩期の包含層	25
Ⅱ d	黒色土 パミスを多く含む	縄文時代後期の包含層 御池降下軽石層？	10
Ⅲ	黄橙色土	アカホヤ火山灰二次堆積層	40
Ⅳ a	黄橙色土	アカホヤ火山灰層	25
Ⅳ b	黄橙色土	アカホヤ一次降下パミス	15
V	暗褐色土	縄文時代早期の包含層	25
Ⅵ a	黒褐色土 黄橙色・白色パミスを含む（低密度）	縄文時代早期の包含層	25
Ⅵ b	黒褐色土 黄橙色・白色パミスを含む（高密度）	P13？該当か	15
Ⅵ c	黒褐色土 黄橙色・白色パミスをやや含む		25
Ⅶ a	にぶい橙色土	薩摩火山灰二次堆積層	25
Ⅶ b	黄橙色土	薩摩一次降下パミス P14	15
Ⅷ	茶褐色粘質土 Ⅷa紫黒色土 Ⅷb：南 にぶい褐色土～北 褐灰色土 Ⅷc：南 暗褐色土～北 黒褐色土 Ⅷd褐色土 Ⅷe褐色土	チョコ層	30
Ⅸ	にぶい褐色粘質土 P15？ Ⅸa：南 にぶい褐色土～北 灰褐色土 Ⅸb黒褐色土		15
X	にぶい明黄褐色ローム質土 南 明黄褐色土～北 黒褐色土。南側では砂質が、北側では粘性が強くなる。		25
XI	黄橙色ローム質土 XIaにぶい橙色土。黄橙色・浅橙色の軽石、パミス直径1～5cmを3%含む。一部、上・中・下位に層状を成すところあり。XIbにぶい橙色土・黄橙色の軽石、パミス直径1～3cm10%含む。		30
XII	橙色ローム質土 XIIa橙色の軽石と褐青色の火山堆積物から成る。XIIbにぶい黄褐色土、上位に軽石直径1～5cmやパミスが80%、下位に数%含まれ層を成す。XII同様の土がブロック状に入り、一部層を成す。XIIと同様の層厚。		25
XIII	にぶい黄橙色ローム質土 XIIとXIVの中間的特徴。軽石やパミスは、XIVと同様。		15
XIV	にぶい黄橙色土 砂粒感が強くXV層（シラス）が混じる。黄橙色、浅黄橙色の軽石が5%混じる。		20
XV	黄橙色土 浅黄橙色の軽石やパミスを含む。	シラス	—

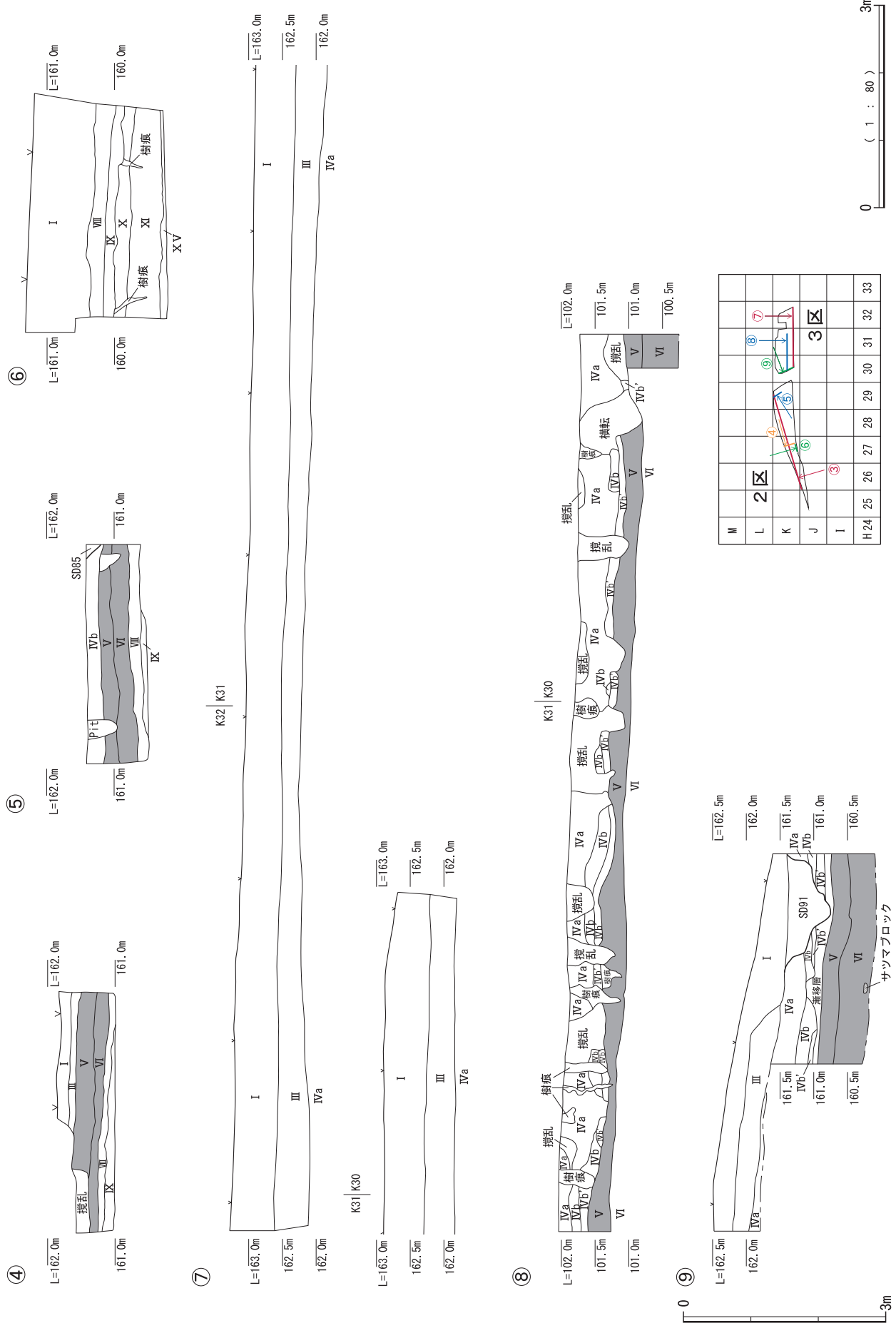
①



第 4 图 土層断面图 1

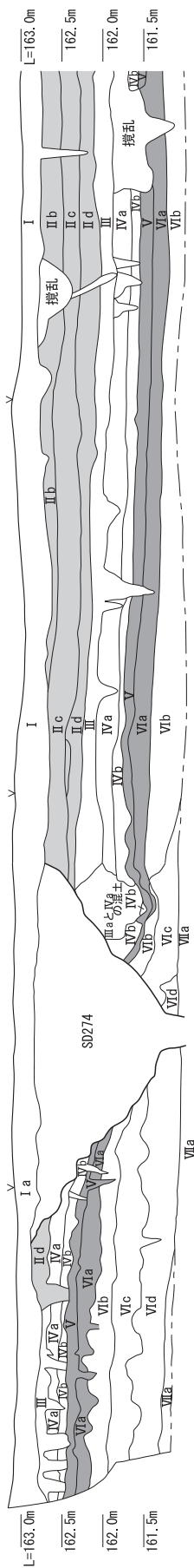


第5图 土層断面图 2



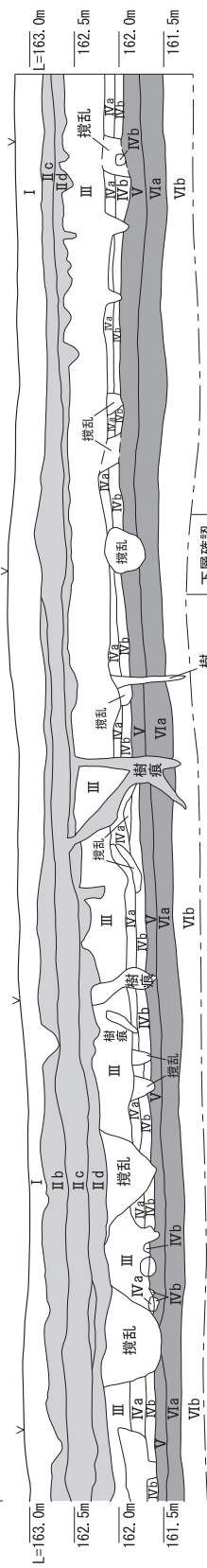
⑩ 南壁

西壁



J41 J40

J42 J41

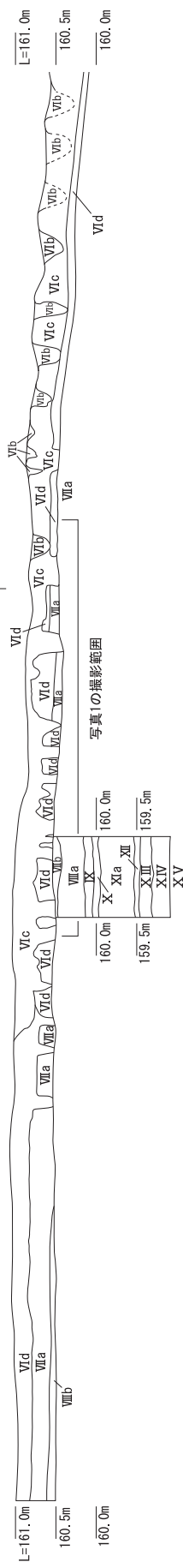


下層確認
トレンチ

写真1の撮影範囲

⑪ 南壁

西壁



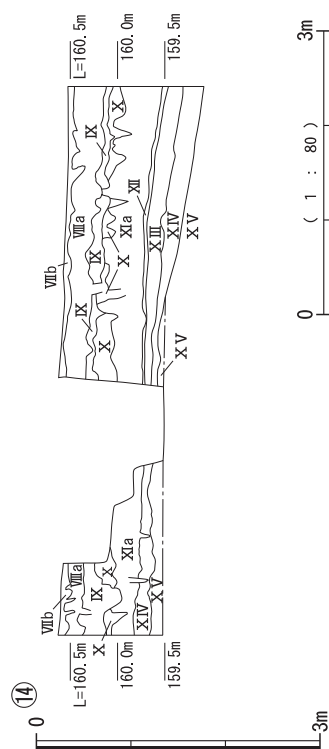
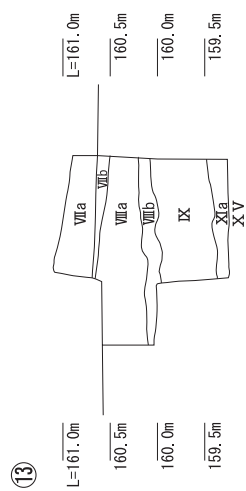
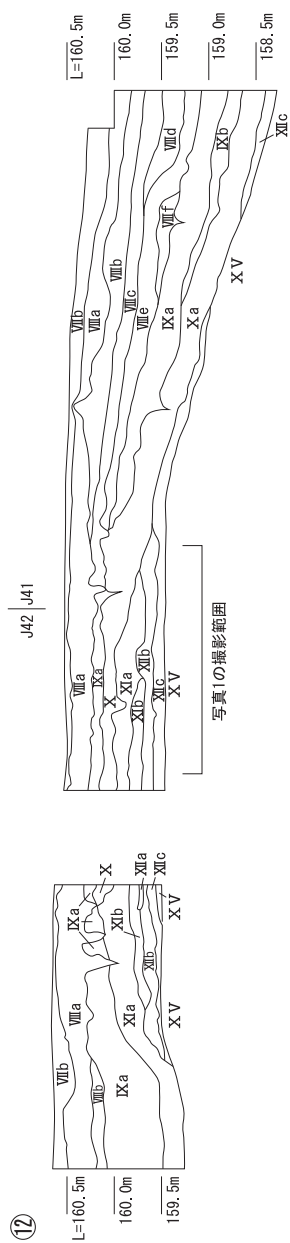
J41 J40

J42 J41

写真1の撮影範囲

0 (1 : 80) 3m

第7図 土層断面図4



L	4 区				
K					
J					
I					
H 37					



写真1 手前⑫と奥⑪⑩の土層断面状況

第4章 調査の成果

第1節 旧石器時代・縄文時代早期の調査

1 調査の概要

本遺跡は、道路の拡幅工事に伴う調査で、北側から南側にかけて帯状に長いので、北側から1～4区と細分して調査を進めた。3か年の調査は、区ごとに調査を行ったため、本節では、区ごとに分けて概要を記す。本節では、旧石器時代と縄文時代早期を一括して報告する。

旧石器時代の調査は、1区～4区の全区において、縄文時代早期の調査を終了後に実施した。具体的には、Ⅷ層からⅩ層を対象として、下層確認のためのトレンチ調査を行った。その結果、包含層から遺構・遺物は検出されなかったものの、2区の古道2号の埋土内から細石刃核が1点出土した。

令和2～4年度の試掘調査では、1区の第2トレンチで塞ノ神式土器が、同区の第7トレンチで手向山式土器が、第8トレンチで条痕文土器と礫器が出土した。

それらの試掘調査の結果を踏まえ、縄文時代早期の調査は、Ⅴ・Ⅵa層（包含層）を主とし、一部落込みの可能性を鑑みⅦb・Ⅷ層も対象とした。

令和4年度に、1・2区の縄文時代早期（草創期を含む）調査を実施した。縄文時代早期の調査対象であるⅤ層～Ⅶ層上面までは、全面調査を行った。その結果、Ⅴ～Ⅶ層上面で、遺構・遺物が検出された。

Ⅷ層上面までの全面調査の後には、1区では1.8m×8.8mと2.4m×5mの2か所の、2区では1m×1.6mの1か所の下層確認トレンチを設定して人力掘削を行い、縄文時代草創期以前の遺構・遺物の有無を調査した。いずれのトレンチからも、Ⅷ層から黒曜石のチップが数点（各トレンチから1～2点）出土したが、散布的な出土状況であったため、縄文時代草創期以前の調査はトレンチ調査で終了した。

令和5年度に3区の、令和6年度に4区の、縄文時代早期の調査を実施した。3区では、縄文時代早期の調査対象であるⅤ層までは人力掘削により全面調査を行った。なお、無遺物層であるⅣ層は重機により除去した。その後、調査区際に0.8m×1.9mの下層確認トレンチを設定し、Ⅵ～Ⅹ層までの人力掘削を行った。その結果、Ⅴ層で縄文時代早期の遺構・遺物が検出された。

4区では、令和5年度は、1.6m×3mと1m×3.6mの下層確認トレンチを設定し、遺構・遺物に留意しながらⅩ層まで重機による機械掘削を行った。調査区北側に設置した下層確認トレンチでは、遺構・遺物は確認されなかった。調査区中央西側壁際に設置した下層確認トレンチでは、表土から2mの時点でⅦa層に達した。そのため、2m控えて1m×3.6mを機械掘削した。しか

し、Ⅷ層を10cm程掘り下げた時点で掘削深度が2mに達したため調査を終了した。Ⅵa層では遺構は確認されず、遺物が少量出土した。4区中央に設定して掘り進めた下層確認トレンチは小規模のため、4区中央の調査は令和6年度に継続することとした。令和4年度の試掘調査で、Ⅷ層から縄文時代早期の遺構のプランが確認されていた調査区南側を含めた中央・南側の調査は、令和6年度に実施することになった。令和6年度の4区の調査は、3区同様に、縄文時代早期の調査対象であるⅤ層のほか、遺物の落込みの可能性を考慮し、Ⅵa層までは人力掘削により全面調査を行う予定であった。しかし、調査区の東側に向けて大きく落ち込むほか、中央を恐らくは自然流路が形成した谷状の落ち込みが横切るなど、高低差が激しかった。そのため、調査区の中央辺りを中心に、Ⅵa層の掘下げの途中で、掘削深度が地表面から2mに達し、調査区の壁面より2mの間隙を設けて、Ⅵa層上面までの全面調査を進めた。その結果遺構・遺物が検出された。その後、調査区を南北方向に、1m×24.4mと1m×15.8mの2本のトレンチを設定し、Ⅶb層以下Ⅶb層の下位までの下層確認調査を行った。当該層では遺構・遺物は確認されず、Ⅶb層からⅦb層は無遺物層であることを確認し、トレンチ以外の範囲を重機により掘削した。ただし、Ⅶb層の下面には、遺跡によって縄文時代草創期の遺物が含まれる事例もあることから、Ⅶb層下面は重機掘削せずに層を残した。Ⅶb層～Ⅹ層の縄文時代草創期・旧石器時代の下層確認のため、調査区の中央を南北に縦断する1m×15.2mを1本と、それに直交する1m×5.6mのトレンチを1本、十字状に交差させて設定し、人力掘削を行った。Ⅷ層（チョコ層）は捻り鎌にて、Ⅹ層以下、Ⅹ層（シラス：調査時はⅩ層）上面までは、山鉤にて掘下げを行い、層が替わる層理面の各層の上面で精査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。遺構・遺物に関しては、各項目で詳細を記す。

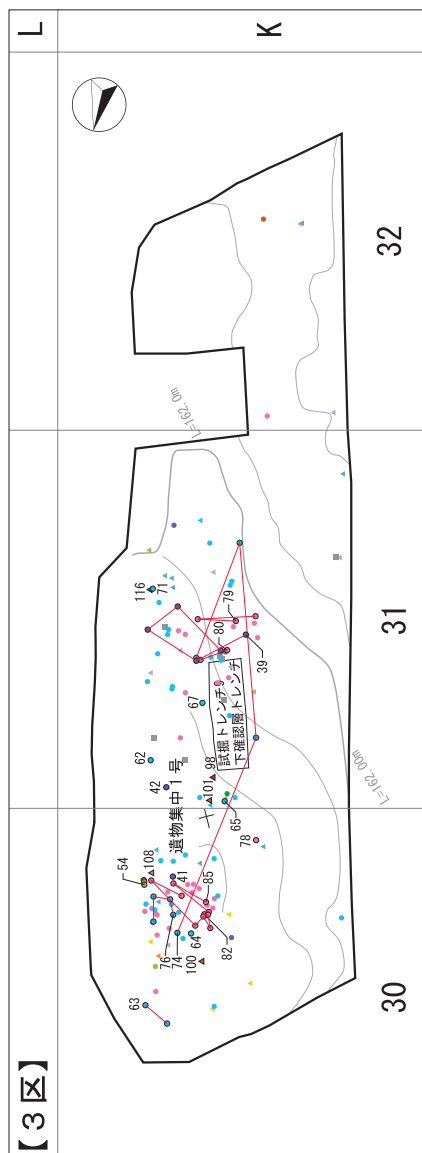
2 遺構

（1）竪穴建物跡

1 基の竪穴建物跡が検出された。

竪穴建物跡1号（第11図）

F-13区Ⅶ層上面で検出された。最終的なプランは、381cm×300cmで深さは検出面から24cmであった。焼土跡、床面の張替えや上屋構造、周堤帯などを捉えることはできなかった。埋土内出土遺物は5点で、そのうちの4点を図化した。いずれも①の上位で検出された。なお、埋土の③の科学分析（テフラ分析）を実施したが、

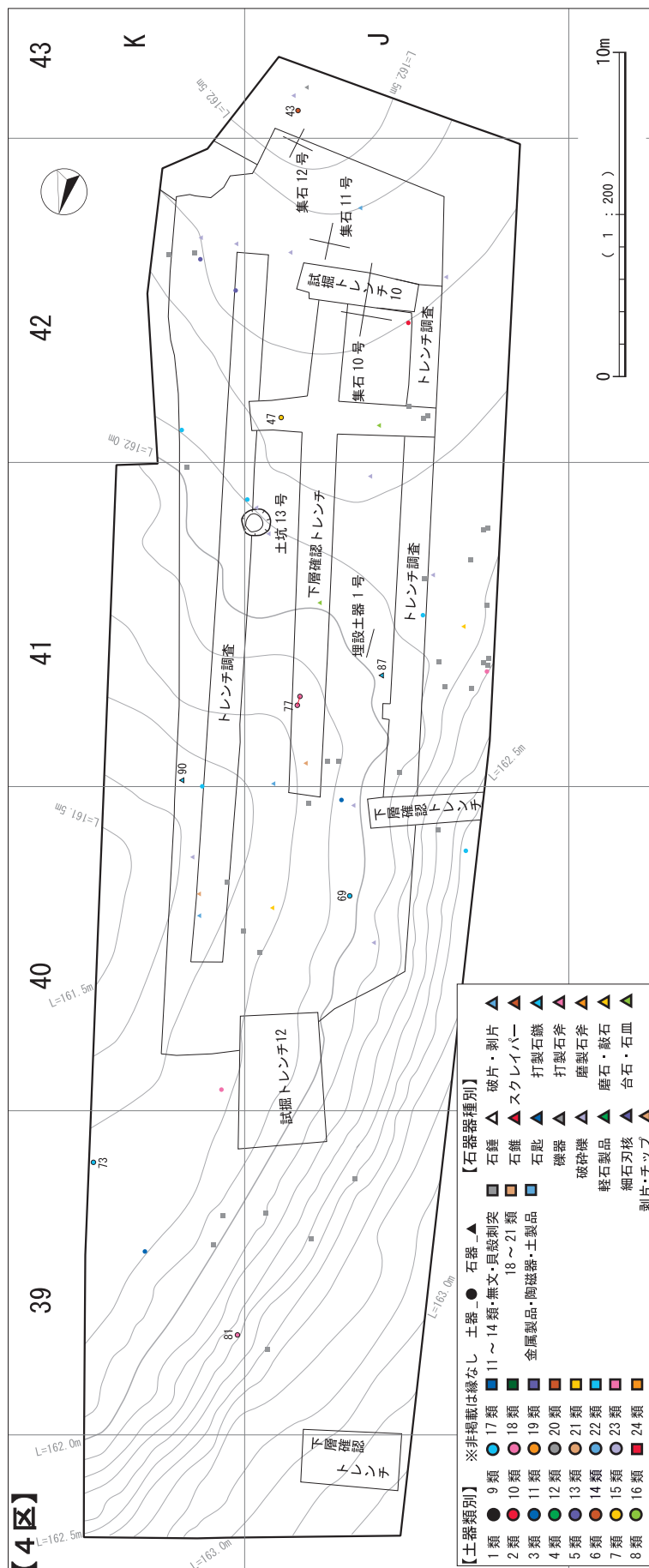


桜島起源のP12以前であるとの結果で、P12なのかP13なのかは特定できなかった。

1は6類で綾杉状の貝殻刺突文を施し、口縁最上位には、二条の貝殻刺突文が巡らされる。口唇部は平坦に仕上げられる。内面は、丁寧なナデ調整である。2は2類で斜位の貝殻条痕文が施され、恐らくは口縁部には二条の貝殻刺突文が巡らされる。縦位の楔形貼付文の頂部に横向きの刻みが施される。3は3類で縦列の貝殻刺突文が全面に施される。4は2類から4類の底部の立ち上がりに縦位な丁寧な刻みが巡らされる。

(2) 集石

12基の集石が検出され、9基はV層上面で、3基はVIb層上面で検出された。4基は、明確に掘込みをもつ。



第10図 縄文時代早期遺構配置図・遺物出土状況図（3・4区）

集石 1 号 (第12図)

D-8区V層上面で検出された。221cm×148cmの範囲に広がり、掘込み(116cm×190cm)を有し、検出面から最深30cmである。礫190個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんどが被熱破碎している。礫総重量は42,250.6gで、平均重量は222.4gである。礫集中の中央には大きめの角礫が据えられ、恐らくはその角礫を中心に、その周囲に礫を重ね合わせたものと考えられる。礫は中央に空隙を有する環状の形態に捉えられる。礫が集中する土には焼けた土も捉えられる。V層由来の埋土を主とする。

5は1類で口縁上位には、横位の貝殻刺突文が二条巡らされる。外面には胴部上半から口縁部に至り、貝殻条痕が連弧状に施される。焼成後に、外面側から穿孔(補修孔)が1孔穿たれる。口唇部は、やや平坦に仕上げられる。6は3類で貝殻による押引き文が施され、口縁部上位に縦位の貝殻刺突文が、二条巡らされる。7は1類で横方向に貝殻条痕文が施される。8は無文である。ナデ調整が丁寧でなく凹凸がある。口縁端部がやや丸く張り出し、口唇部も丸く仕上げられる。胎土に金雲母が含まれる。

集石 2 号 (第13図)

E-9区VI層上面で検出された。94cm×117cmの範囲に広がり、掘込みは確認できない。礫25個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんど被熱破碎している。礫総重量は8,611.1gで、平均重量は344.4gである。礫は中央に空隙のある環状の形態に捉えられる。9は3類で横位の貝殻刺突文が施される。底部立ち上がりの部分はナデにより無文を呈する。

集石 3 号 (第13図)

E-10区VI層上面で検出された。38cm×32cmの範囲に広がり、掘込みは(52cm×71cm)を有し、検出面から最深11cmであった。礫12個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんどが被熱破碎している。礫総重量は1,240.1gで、平均重量は103.3gである。

集石 4 号 (第13図)

F-13区V層上面で検出された。55cm×72cmの範囲に広がり、掘込みは(52cm×71cm)を有し、検出面から最深11cmであった。礫48個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多い。ほとんどの礫が被熱破碎している。礫総重量は6,511.7gで、平均重量は135.7gである。10は9類で縦方向に撚糸文を施し、三条の横方向の沈線が巡らされる。11は磨石の破片で浅い敲打痕が捉えられる。

集石 5 号 (第13図)

F-13区V層上面の、調査区の中で、やや高い地形で検出された。92cm×230cmの範囲に散在し、掘込みは確認されない。礫16個で構成される。石材は、安山岩B類

で亜円・亜角礫の自然礫である。被熱した礫は確認されない。礫総重量は2,005.3gで、平均重量は125.3gである。12は3又は4類で波状口縁部片である。横方向に、やや押引き状の貝殻条痕文が施される。口縁部には、斜位の貝殻刺突文が、その上に三条の貝殻刺突文が巡らされる。口唇部は平坦に仕上げられ、器面に直交する縦位の刻みが施される。13は9類で1cm程の空隙を置いて、縦方向に撚糸文を施す。14は9類で復元直径8.3cmの底部である。立ち上がりに空隙を置いて、縦方向の撚糸を施した後、三条の沈線が巡らされる。底部内面の周縁が指ナデにより窪みを呈し、底部中央がマウンド状に盛り上がる。

集石 6 号 (第14図)

J-26区V層上面で検出された。礫全体は、67cm×81cmの範囲に広がる。一部の礫の集中部に掘込みが確認された。掘込みは(28cm×28cm)を有し、検出面から最深13cmであった。礫集中の床面の礫の複数個はU字状に配置され、集石の基礎となっていると推察される。礫60個で構成される。掘込みのある礫集中の西側に捉えられる礫が比較的集中する箇所には、掘込みは確認されないため、単独の集石を形成する可能性がある。ほとんどの石材は、安山岩B類で角礫が多く、被熱破碎している。礫総重量は6,226.2gで、平均重量は103.8gである。埋土は、縄文時代早期相当のV層由来の埋土である。礫の隙間の埋土中に炭化物の小片が含まれる。

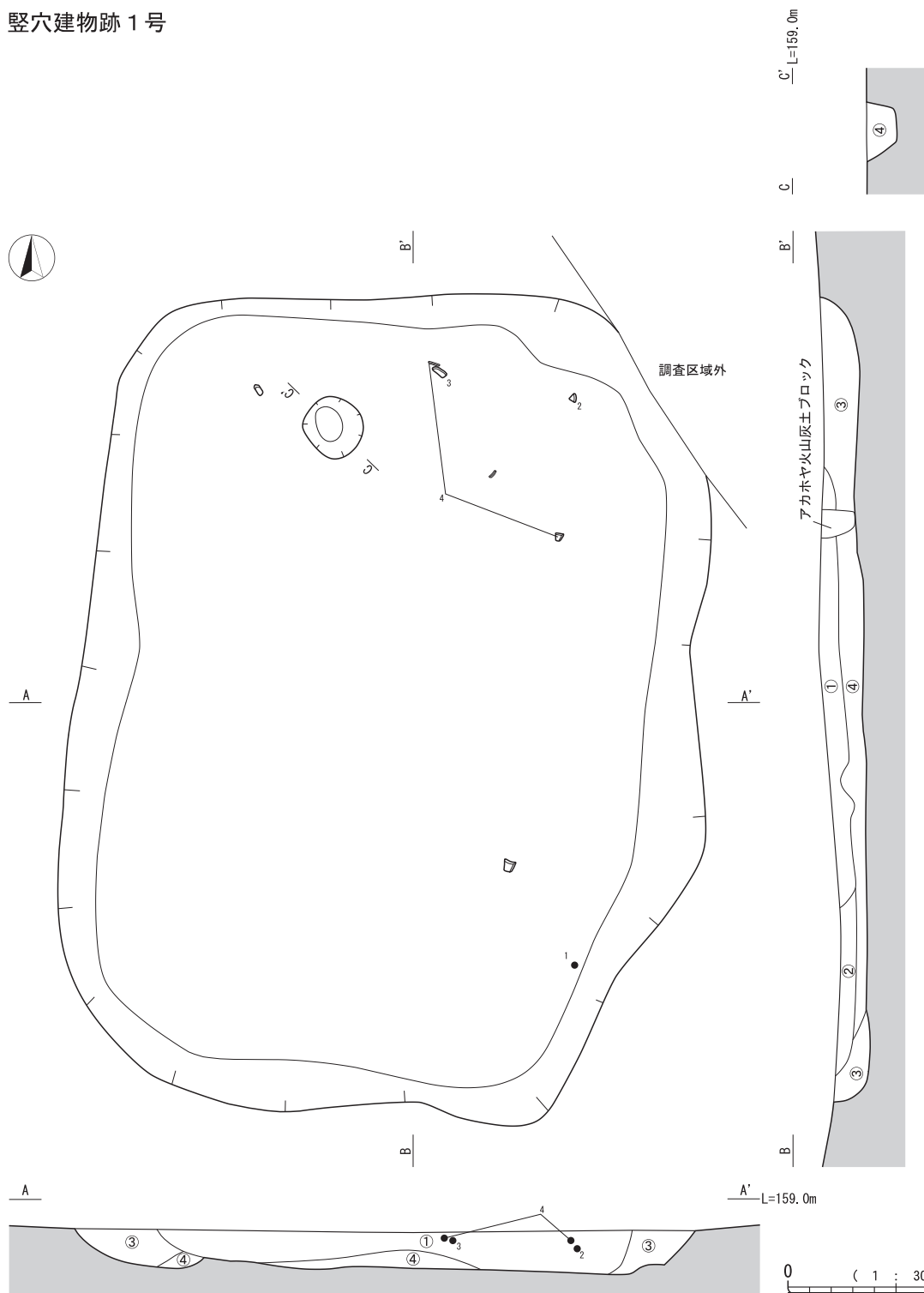
集石 7 号 (第14図)

K-28区V層上面で検出された。157cm×123cmの範囲に広がり、掘込みは確認できない。礫39個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんどが被熱破碎している。礫総重量は4,467.3gで、平均重量は114.5gである。集石の中央辺りには空隙が看取され、抜き取られた可能性を示す。15・16は9類(塞ノ神A式)である。胎土が似ており、同一個体の可能性が高い。大きく外反し、口唇部に縦の細かな刻みを施す。口縁部外面には貝殻条痕が横方向に巡らされる。口縁部と胴部の境には二条の沈線を巡らし、胴部には縦方向に外郭を伴わない撚糸文を施す。

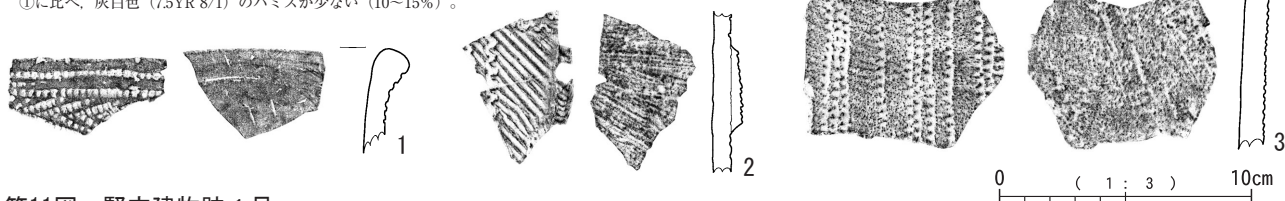
集石 8 号 (第14図)

K-28区V層上面で検出された。23個ほど、周囲に礫が散在し、礫集中と捉えた範囲についてのみ遺構と判断した。72cm×67cmの範囲に広がり、掘込みは確認できない。土器集中2号(縄文時代後・晩期)を掘り下げた直下から遺物集中3号(縄文時代後・晩期)と本遺構は検出された。土器集中2号(縄文時代後・晩期)形成以前に、本遺構は形成された傍証となる。礫23個で構成され、10cm未満の小さめの礫が多い。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんど被熱破碎している。礫総重量は2,170.0gで、平均重量は94.3gである。

竖穴建物跡 1 号



- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。締まりあり。粘性なし。黄橙色 (7.5/YR8/8) のパミス (直径5mm) を15%程度。黄橙色 (7.5YR 7/8) のパミス (直径5mm以下) を10%含む。パミスを含わせて25%含む。灰白色 (7.5YR 8/1) のパミス (直径3mm以下) を40%含む。(P13か?)
- ②①に比べ橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径5～10mm) が少ない。
- ③①と同色だが、黄橙色 (7.5YR 7/8) のパミス (5～10mmは1%, 5mm以下は2%)。白色パミスは10～15%, 締まりあり, 粘性なし。
- ④①と同色にⅢ層 (黒褐色粘質土 7.5/YR3/2) が10%混ざる。しまり強い。床面か?
- ①に比べ、灰白色 (7.5YR 8/1) のパミスが少ない (10～15%)。



第11図 竖穴建物跡 1 号

集石 9 号（第14図）

K-28区Ⅴ層上面で検出された。106cm×92cmの範囲に広がり、掘込みは確認できない。礫22個で構成される。石材は、安山岩B類で角礫が多く、ほとんどが被熱破碎している。礫総重量は2,447.5gで、平均重量は111.3gである。

集石10号（第15図）

J-42区Ⅵa層上面で検出された。72cm（半分ほど切られる）×105cmの範囲に広がり、掘込みは（81cm×187cm）を有し、検出面から最深58cmであった。令和4年度の試掘のトレンチにより南側が大きく掘削され、南側半分が残存しない。礫66個で構成される。石材は安山岩B類で、ほとんどが被熱破碎し角礫が多い。礫総重量は5,173.1gで、平均重量は78.4gである。礫10数個が、環状に配置されて検出された。大きめの礫は土坑の上半の周縁部に配置され、土坑中位の埋土に含まれる礫は比較的小礫である。P.99の写真図版⑧のように、検出面で確認された大き目の礫は、本遺構の土坑がほぼ埋まった状況で環状に配置されたように捉えられる。また、試掘のトレンチの断面上、扁平な礫が埋土②上面の位置に配置される。埋土②③が埋まった後に、これらの礫が現位置に配置された（入り込んだ）可能性を示す。埋土内には極小片の炭化物が検出されたが、小片のため分析にかけていない。埋土①の上面にも微細な炭化物が検出された。炭化物の量は①が多く、①上面の炭化物は、土坑から掻き出した際のものと考えられる。

集石11号（第16図）

J-42区Ⅵa層下面で検出された。86cm×85cmの範囲に広がり、掘込みは（93cm×96cm）を有し、深さは検出面から最深78cmであった。礫22個で構成される。石材は、安山岩B類を主とし、凝灰岩が続く。ほとんどの礫が被熱破碎し、亜角礫状を呈する。礫総重量は75,397.0gで、平均重量は243.2gである。最深は95cmを超える。土坑の上半は、礫があまり集中せず、下半に礫が密に集中する。集石の上位の散礫は、埋まる後半過程に入り込んだと推察され、機能を有する本来の礫は、下半の礫であろう。礫の堆積の断面観は、集石の中央がやや窪み壁面にかけて盛り上げて積み上げられ内湾状を呈する。集石の中央下位に、安山岩の大きめの円礫や菱形多面体状の礫が据えられ、それらを中心に、周囲に礫を重ねていく。礫同士は、それぞれの平坦面を隣接する礫の平坦面に重ね合わせてぴったり据え付けられるほか、角錐状の礫は、錐の先端を下にして差し込む傾向にある。最下層の④には礫が堆積せず埋土だけの空間で、その埋土は、堅いブロック状の塊と、その間隙を比較的柔らかい土から成る。④の色調はやや青灰色を呈し、灰と埋土の混土であり、堅いブロック状の塊は、被熱した灰が固まったものと推察される。埋土内には小片の炭化物

が全面的に、やや大きめの炭化物は土坑下半から多く出土した。出土した炭化物の一部は、科学分析を実施した。炭化材はクスノキ、種実はノビルやツルボ、年代は縄文時代早期中葉～後葉の可能性が指摘された（P.94参照）。周囲に出土する土器型式は、数は少ないものの押型文を施文する土器（7類）や平椀式土器（8類）、塞ノ神A式土器（9類）、塞ノ神B式・苫浜式土器（10類）である。

集石12号（第15図）

J-43区Ⅵa層下面で検出された。45cm×48cmの範囲に広がり、掘込みは（34cm×32cm）を有し、検出面から最深16cmで、掘り鉢状を呈する。礫10個で構成される。安山岩B類で、全て被熱している。礫総重量は589.5gで、平均重量は59.0gである。扁平な礫を地面に直立に突き刺すように、環状に配列したように捉えられた。検出面で確認された以外の礫は、埋土中に検出されない。1/4カットして掘込み状況を断面で観察し、②のように扁平な礫と同様な大きさの分だけ、異なる埋土が捉えられた。確認したのはベルト部分の4か所のみで、全周を確認していない。土坑の上位に壁面に貼り付けるように礫を巡らし、礫のない部分は、抜き取られた可能性がある。本遺構の北西方向に6mで検出された集石10号も、散布的ではあるが、環状に礫が検出された。それらの礫は埋土上位に配置され、埋まった後に礫が配置されたように捉えられ、本遺構も同様な過程が看取される。

土坑

13基の土坑が検出された。2基は、平・断面の形態や逆茂木痕の検出から落とし穴の可能性がある。

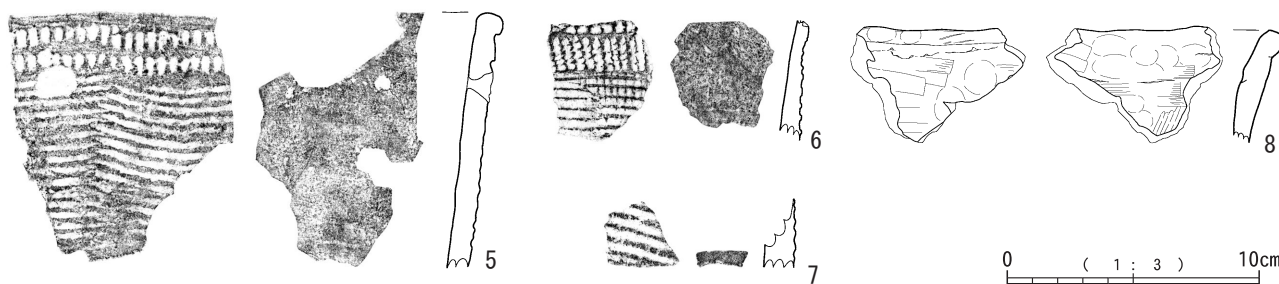
土坑 1・2 号（第17図）

D-8区Ⅶ層上面で検出された。土坑1号の平面プランは96cm×155cmで、深さは検出面から42cmであった。埋土は黒褐色土の単層で、遺物を含まない。土坑1号の埋土は、③を中心に②と④等が相対して堆積する。落ち込んだ③に、両側から埋土②・④が堆積したように捉えられ、③を橋梁とした連結土坑の可能性もある。土坑1号の埋土内出土遺物の2点を図化した。17は胴部に縦方向の貝殻条痕文を施す。横方向の貝殻条痕文が交錯すれば4類で、斜め方向に施されれば、5類となる。口縁部には、横方向の貝殻条痕文を横走させた後、ハの字状に貝殻刺突文を施す。口縁部上端には一条の貝殻刺突文を巡らす。口唇部には器面に直交する刻みを施す。18は1類から5類の復元直径12.4cmの底部である。底部の立ち上がり下端に、縦位の細いV字状の沈線が施される。

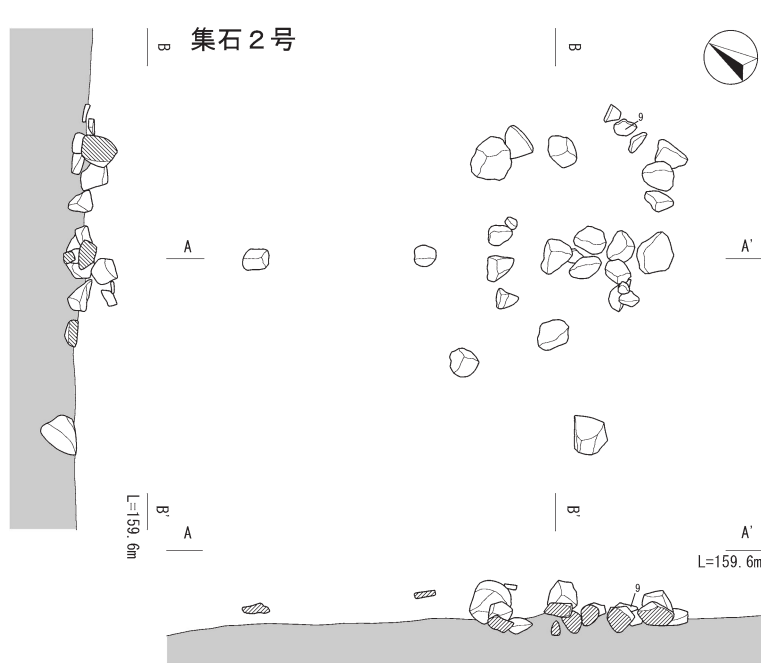
土坑 3・4 号（第17図）・土坑 5～9 号（第18図）

土坑3号はD-9区Ⅶ層上面検出で、平面プランは42cm×100cm、検出面からの深さは30cm。土坑4号はE-9区Ⅶ層上面検出で、平面プランは68cm×65cm、検出面からの深さは18cm。土坑5号はD・E-10区Ⅶ層上面検出

集石 1 号



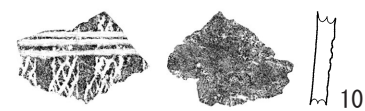
第12図 集石 1 号



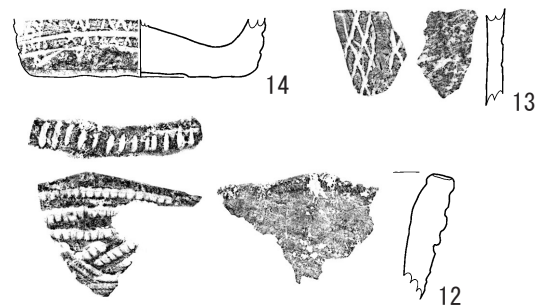
集石 2 号



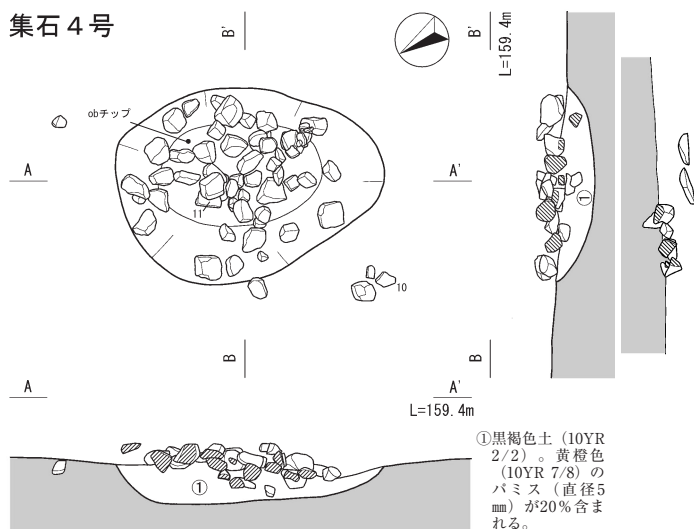
集石 4 号



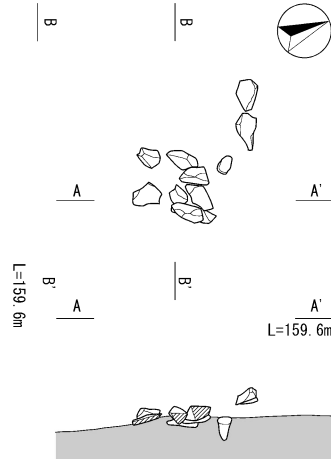
集石 5 号 (12・13・14)



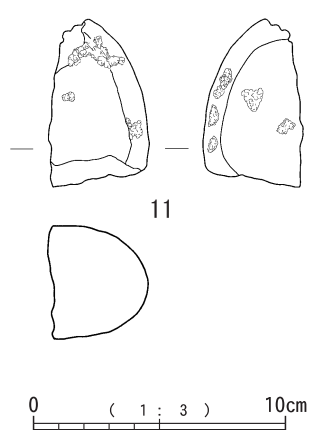
集石 4 号



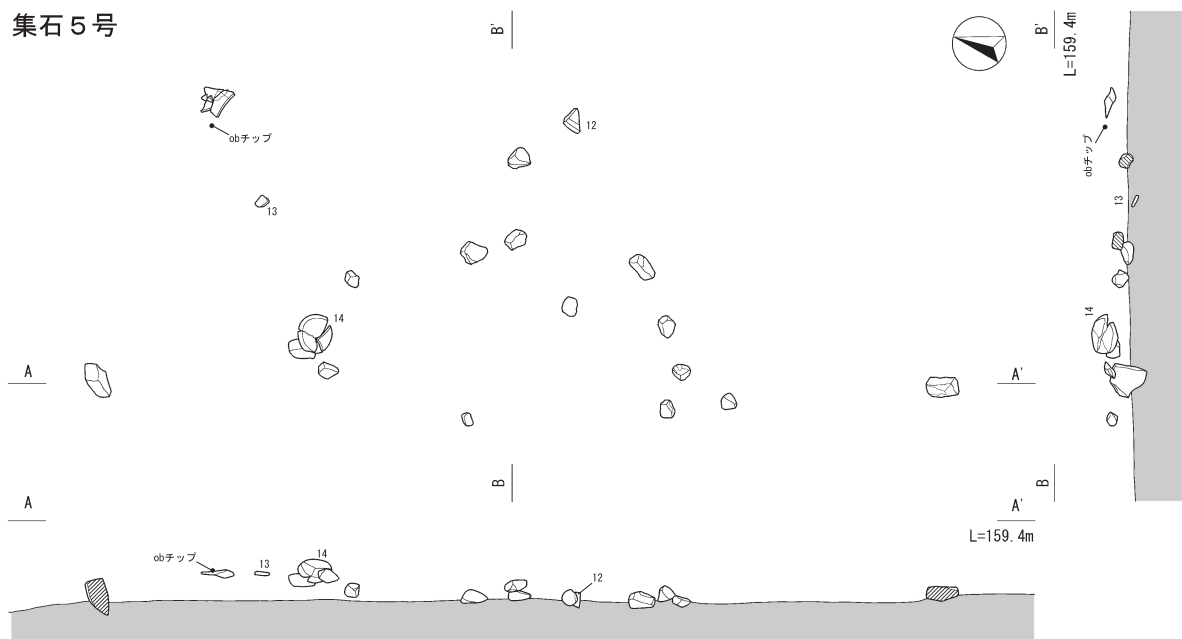
集石 3 号



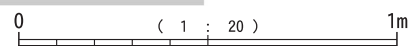
集石 4 号

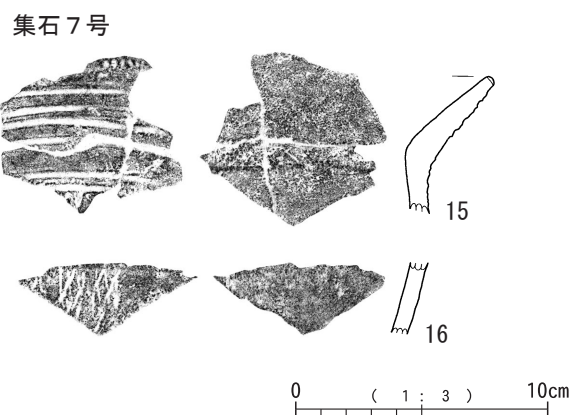
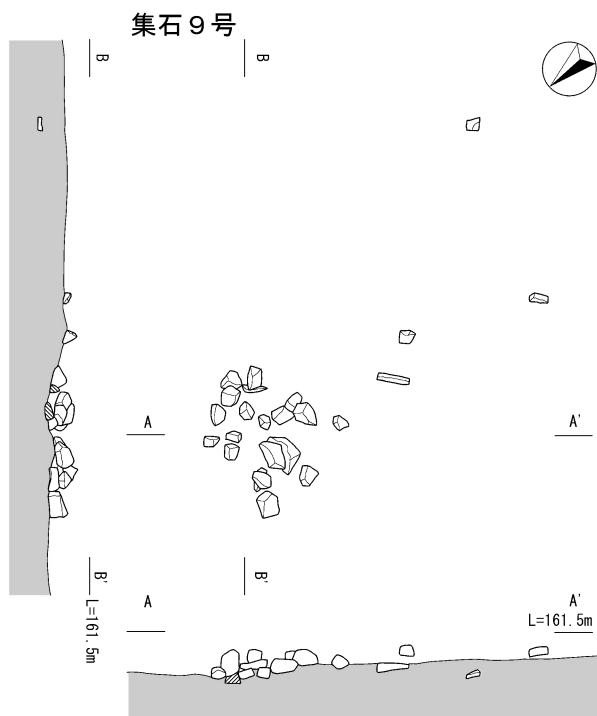
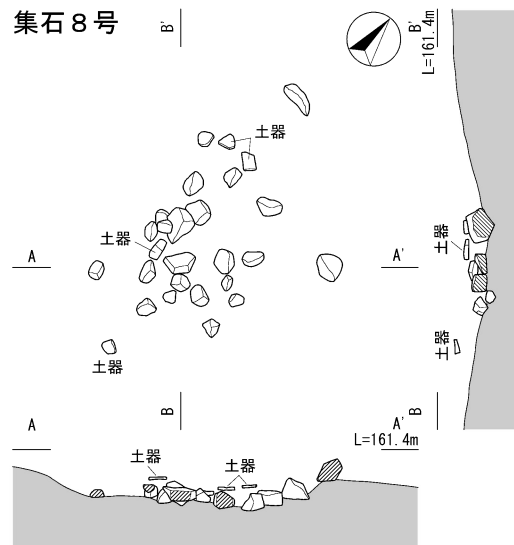
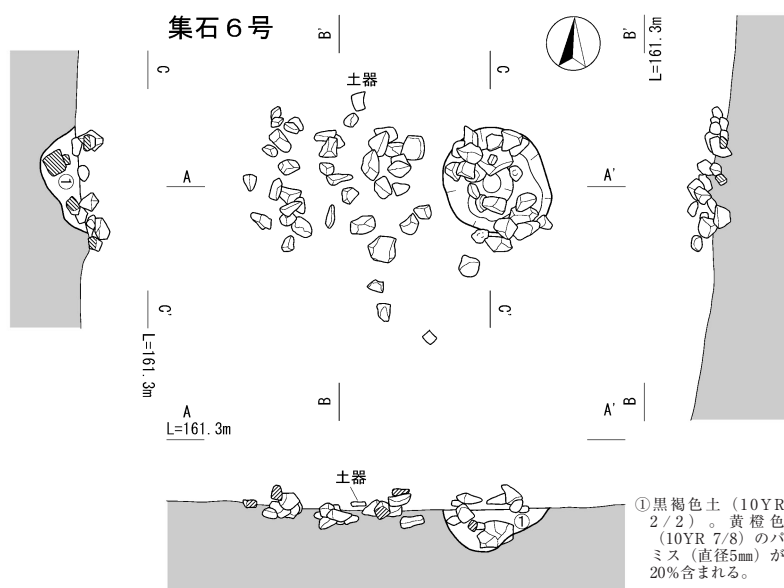


集石 5 号

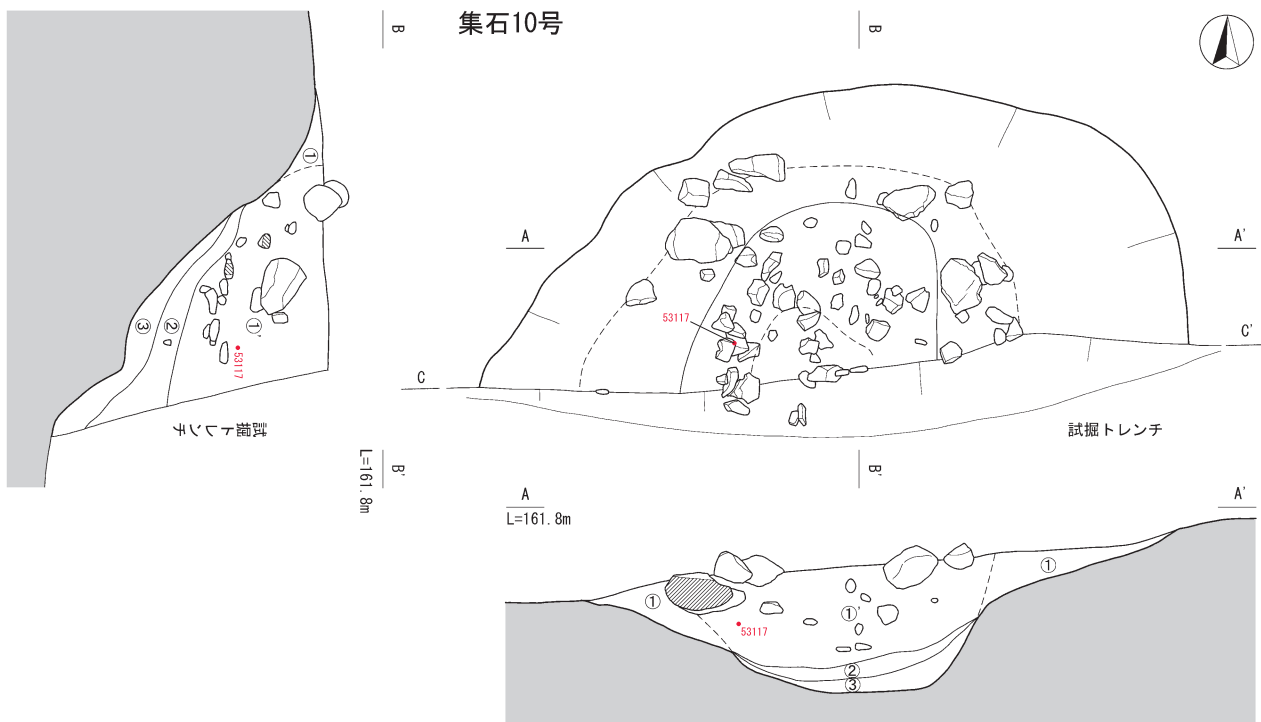


第13図 集石 2・3・4・5 号





第14図 集石 6・7・8・9号



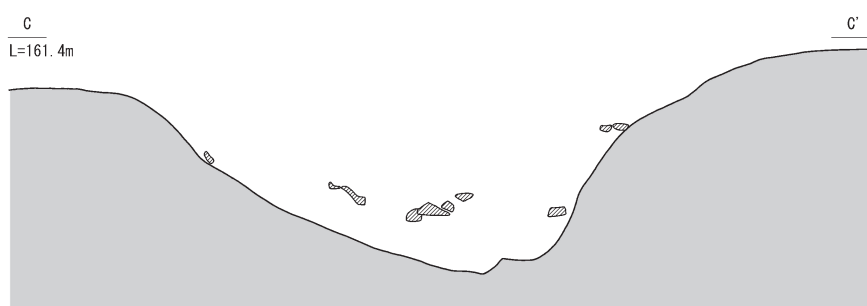
①黒褐色土 (7.5YR 2/2)。黄橙色 (10YR 7/8) のバミス (直径2~3mm) が30%程と同色のバミス (直径7mm~1cm程) が10%程。灰白色 (10YR 8/2) のバミス (直径2mmから3mm程) が30%程混じる。Ⅵa層を母材とする。

②色調などは①に同様だが①より炭化物が多く含まれる。

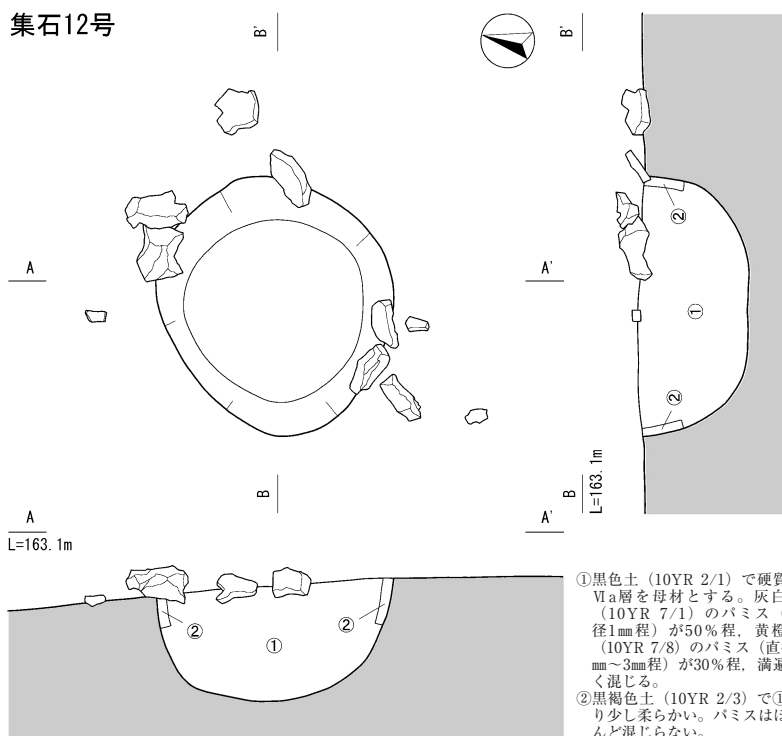
③黒色土 (7.5YR 1.7/1)。黄橙色 (10YR 7/8) のバミス (直径2~3mm) と灰白色 (10YR 8/2) のバミス (直径2mmから3mm程) が5%程混じる。炭化物が③よりは多く混じる。

④黒褐色土 (7.5YR 3/1)。黄橙色 (10YR 7/8) のバミス (直径2~3mm) と灰白色 (10YR 8/2) のバミス (直径2mmから3mm程) が5%程混じる。炭化物が少量混じる。Ⅵa層を母材とする。

※・(ドット)は炭化物を示す。化学分析の番号は「PLD-」を省略して記載。



集石12号



①黒色土 (10YR 2/1) で硬質。Ⅵa層を母材とする。灰白色 (10YR 7/1) のバミス (直径1mm程) が50%程。黄橙色 (10YR 7/8) のバミス (直径2mm~3mm程) が30%程。満遍なく混じる。

②黒褐色土 (10YR 2/3) で①より少し柔らかい。バミスはほとんど混じらない。

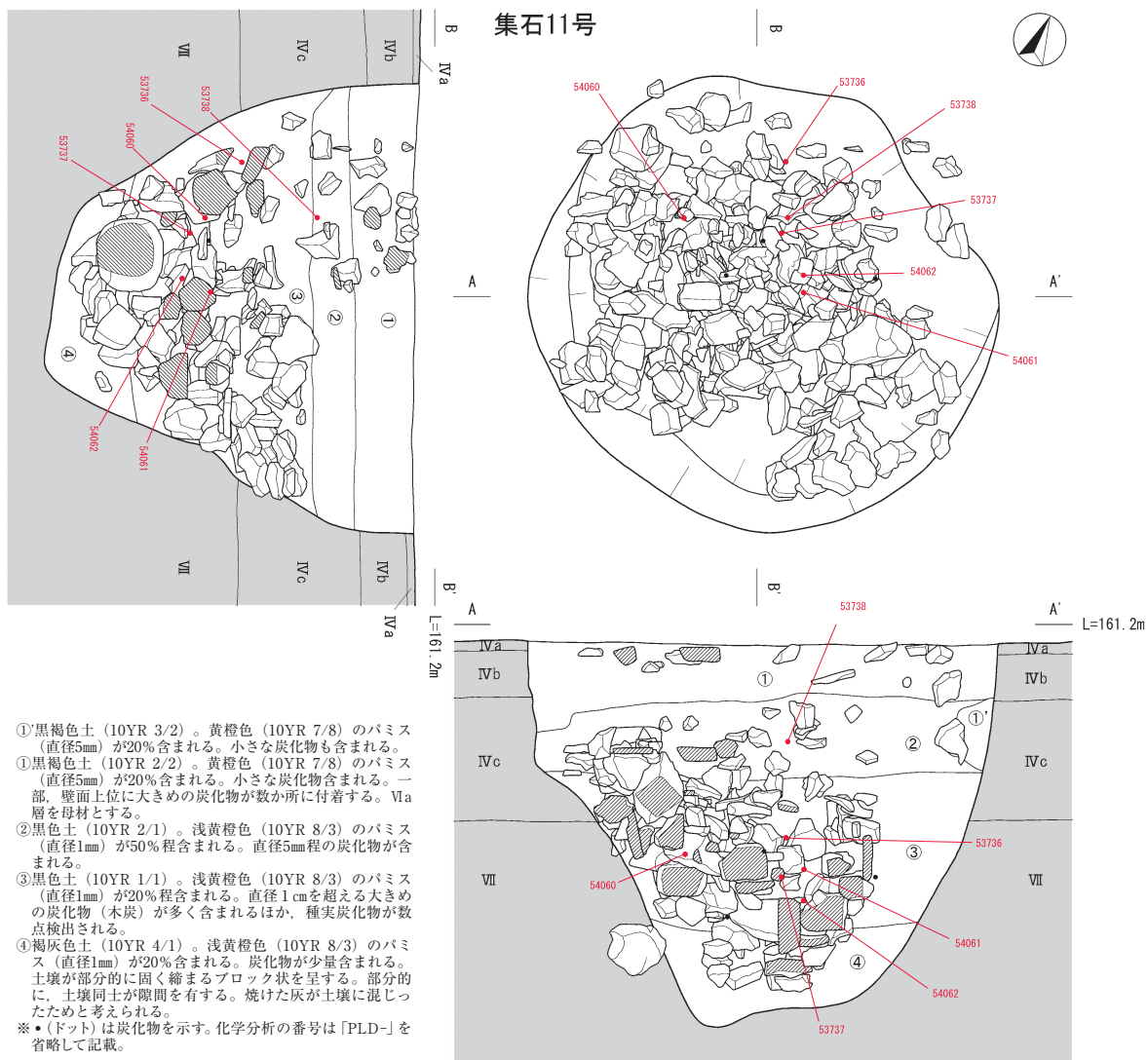
0 (1 : 20) 1m

で、平面プランは36cm×73cm、検出面からの深さは27cm。土坑6号はE-10区Ⅶ層上面検出で、平面プランは72cm (半分調査区外) ×108m、検出面からの深さは57cm。土坑7号はE-10区Ⅶ層上面検出で、平面プランは58cm×166cm、検出面からの深さは16cm。土坑8号はE-11区Ⅶ層上面検出で、平面プランは26cm×68cm、検出面からの深さは24cm。土坑9号はE-11区Ⅶ層上面検出で、平面プランは43cm×61cm、検出面からの深さは40cmであった。

土坑10号 (第18図)

E-11区Ⅵ層上面で検出された。平面プランは57cm×91cmで、深さは検出面から41cmであった。Ⅵ層上面で検出されていたが、樹木の横転内にあり、土坑と認識せずに掘り進めて検出が遅れた。床面のピット状の掘込みが逆茂木痕とすれば、落とし穴の可能性はある。

0 (1 : 10) 50cm



第16図 集石11号

土坑11・12号 (第19図)

土坑11号はJ-26区Ⅷ層上面検出で、平面プランは60cm×80cm、検出面からの深さは9cm。土坑12号はK-27区Ⅷ層上面検出で、平面プランは58cm×151cm、検出面からの深さは40cmであった。

土坑13号 (第19図)

J・K-41区Ⅵa層上面で検出された。平面プランは82cm×87cmで深さは検出面から79cmであった。逆茂木痕は検出されなかったが、埋土や周囲の遺構の構築面から、本来の構築面はⅤ層上面で、最深118cmほどあったと推察され、落とし穴の可能性はある。

(3) 遺物集中

掘込面が確認されない遺物集中箇所を、遺物集中として報告する。検出された遺物集中は1か所である。

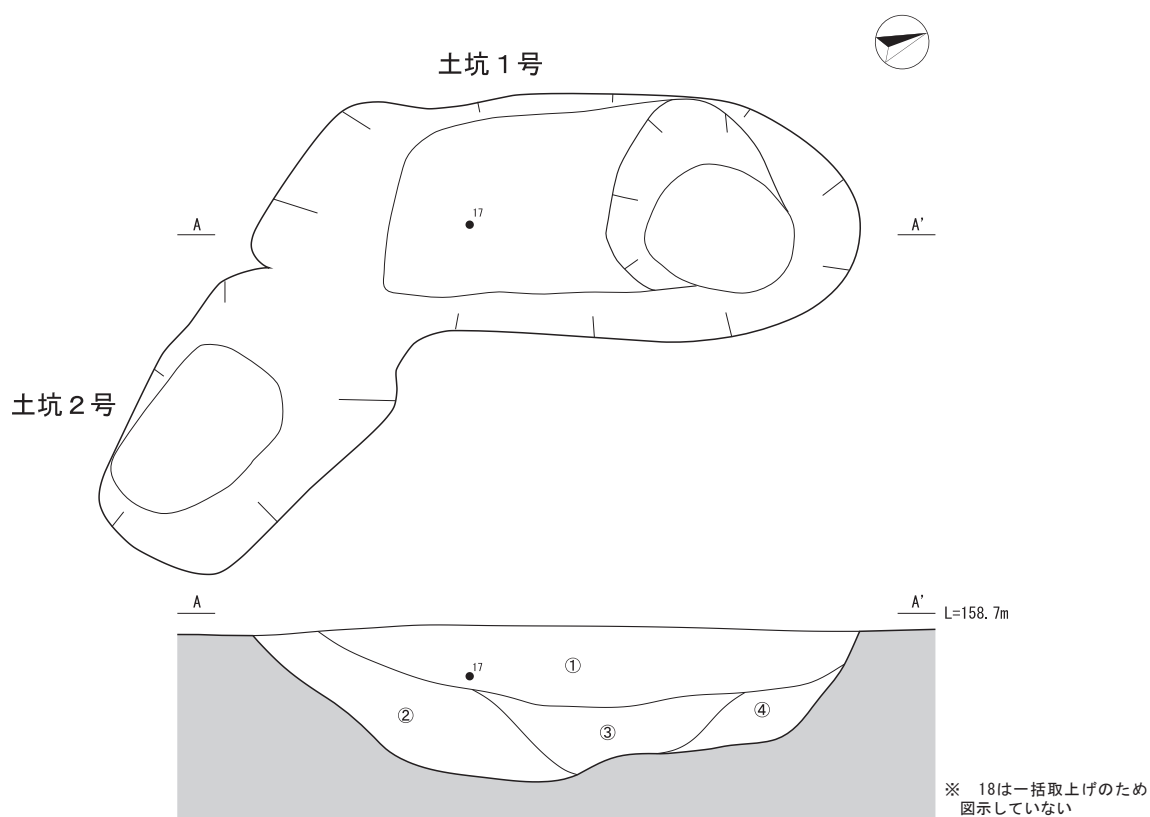
遺物集中1号 (第19図)

K-30・31区Ⅴ層上面で検出された。約30cm四方の範

囲に土器片が散在する状態で検出された。掘込みは検出されない。遺物は12点中5点を図化した。19・20・21・22・23のいずれも同一個体と思われ、9類である。口縁上位に4条の並行沈線を、口縁部と胴部の境には数条の並行沈線を巡らせる。その間を5条の並行沈線が斜行するが、文様帯上位に山形文が捉えられ、文様帯に山形文か鋸歯文を描く可能性が高い。口縁部最上端には、ヘラ状工具で細かい刻みを施す。口唇部は平坦に仕上げる。胴部は、右下りや左下りに斜行する編目燃糸文で文様を構成し、編目燃糸文の外郭を沈線により区画枠を作出する。

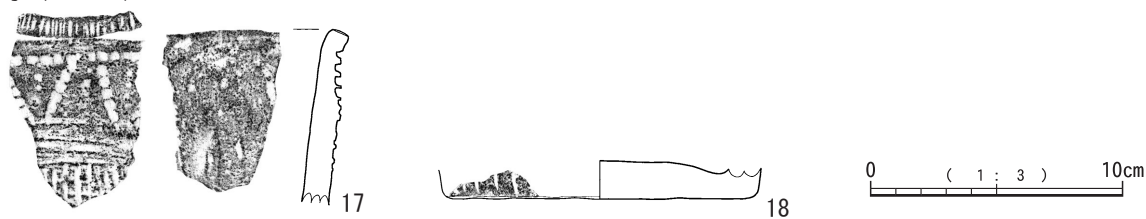
(5) ピット (柱穴)

68基のピット (柱穴) が検出された。掘立柱建物跡に伴うものを除き、柱穴列 (柵列など) など明確な構築物を示す規則的な並びを示すものがないため、埋土内に遺物を伴わないピット (柱穴) は、遺構配置図をもって平

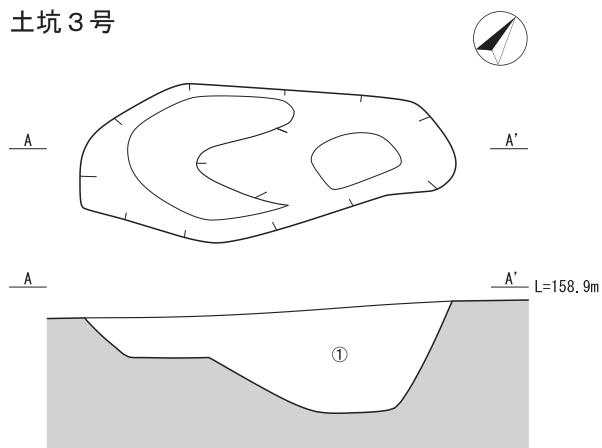


- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径1～5mm) を10%含む。
 ②黒色土 (7.5YR 2/1)。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径1～5mm) を1%含む。
 ③黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径1～5mm) を5%含む。
 ④黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径1～5mm) を5%含む。
 明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径5～15mm) を含む。

土坑 1 号 (17・18)

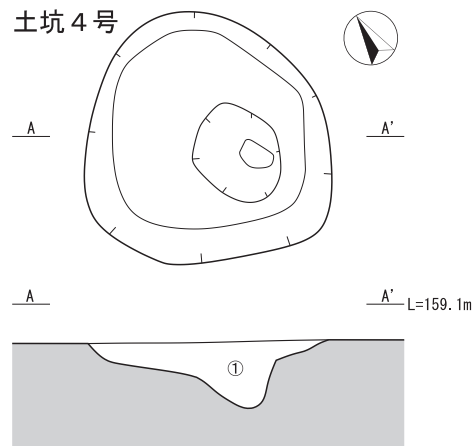


土坑 3 号

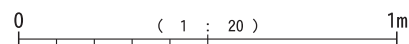


- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径1～5mm) を10%含む。

土坑 4 号

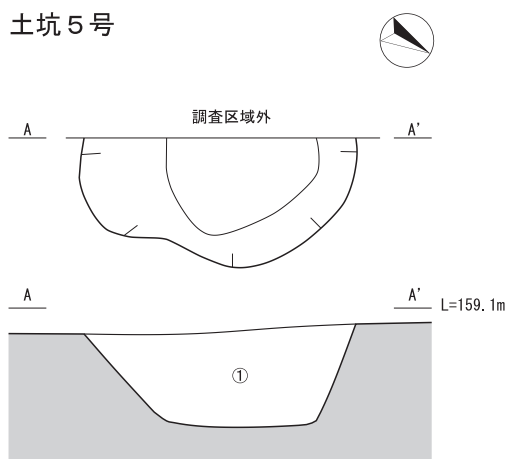


- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2) の中に、部分的に褐灰色土 (7.5YR 4/1) が混ざる。灰白色 (7.5YR 8/2) のパミス (直径5～10mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径5～10mm) を5%含む。



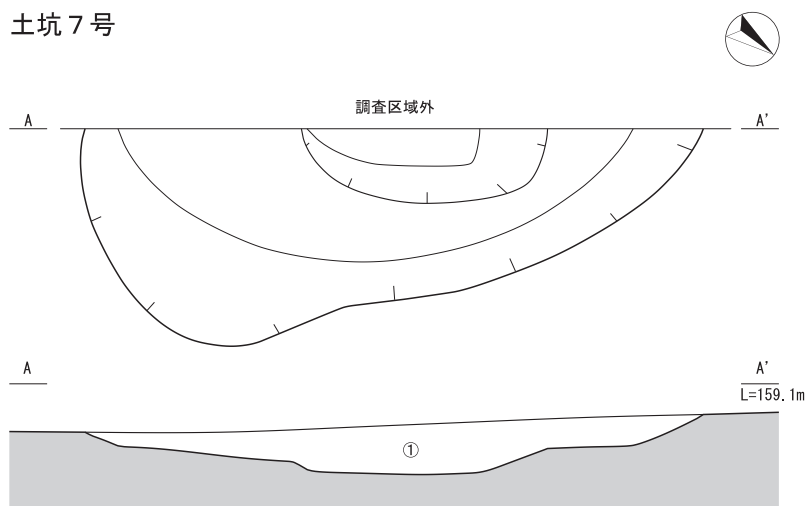
第17図 土坑 1・2・3・4号

土坑 5 号



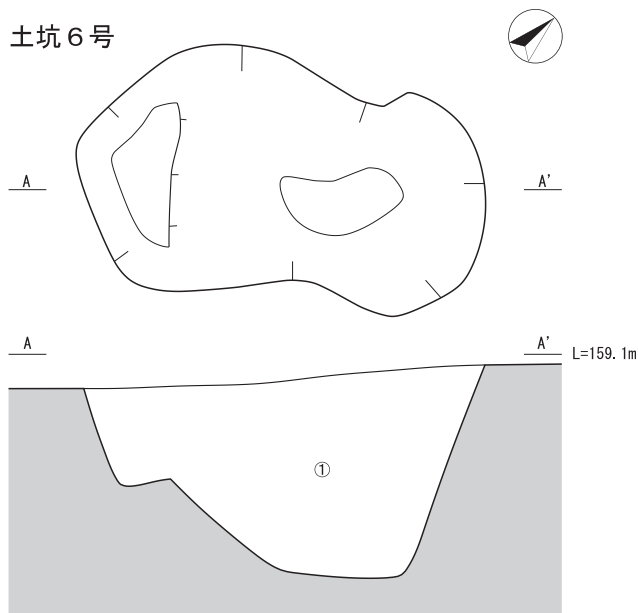
① 褐灰色土 (7.5YR 4/1)。灰白色 (7.5YR 8/2) のバミス (直径 1～5mm) を 10% 程と、明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径 10～30mm) を北側壁面を中心に 10% 程度含む。

土坑 7 号



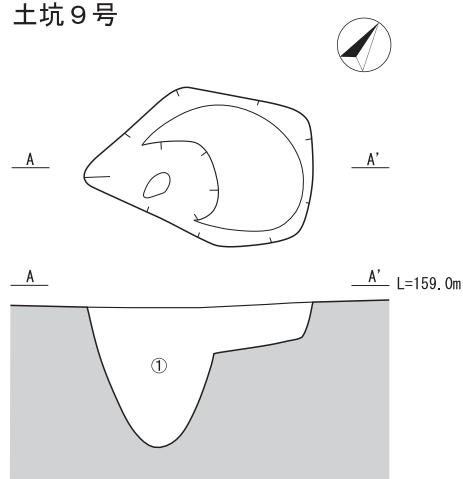
① 黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のバミス (直径 1～5mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径 1～5mm) を 1%、アカホヤ火山灰のブロック (直径 10～30mm) を複数箇所に含む。

土坑 6 号



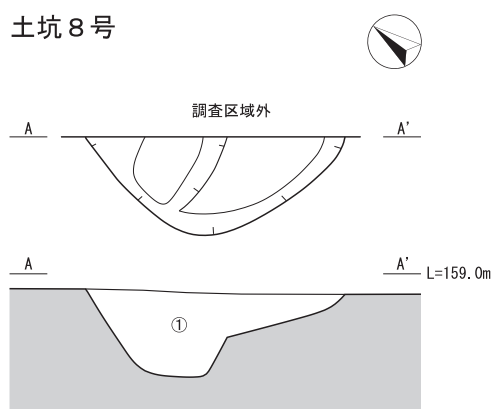
① 黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のバミス (直径 1～10mm) と橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径 5～10mm) を 20% 含む。

土坑 9 号



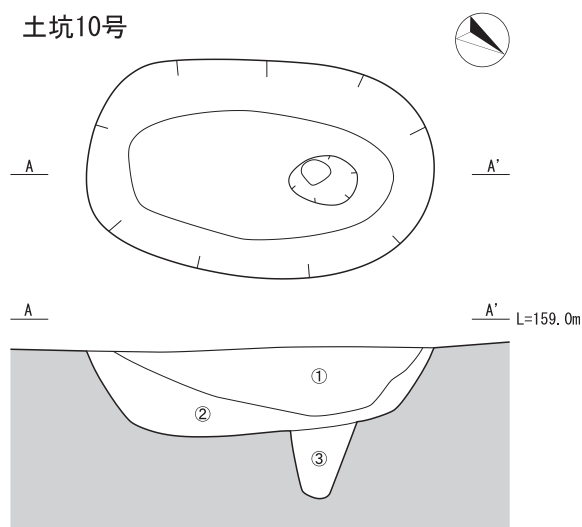
① 黒褐色土 (Y.5YR 2/2)。灰白色 (7.5YR 8/2) のバミス (直径 1mm) を 3%、橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径 1～2mm) を 1% 以下、橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径 4～10mm) を 2% 含む。薩摩火山灰のブロック (1～3cm) をまれに含む。

土坑 8 号



① 黒褐色土 (10YR 3/1) VI 層の土に類似。

土坑 10 号

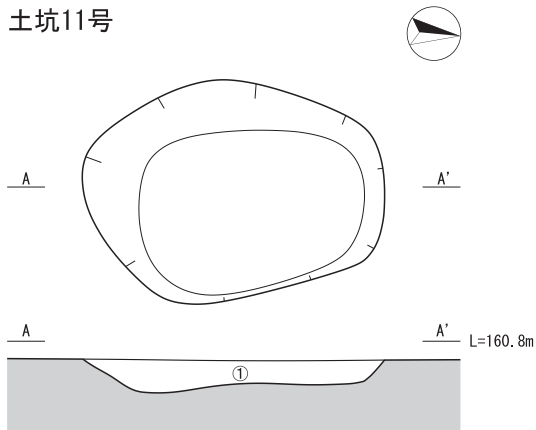


① 明褐色土 (7.5YR 5/6 アカホヤ火山灰層)。砂質土。縮まりなく、崩れやすい。
 ② 橙色 (7.5YR 6/8) のバミスを含む。
 ③ 褐色土 (7.5YR 4/3)。縮まりややあり。
 ④ 褐色土 (7.5YR 4/3)。縮まりなし。

0 (1 : 20) 1m

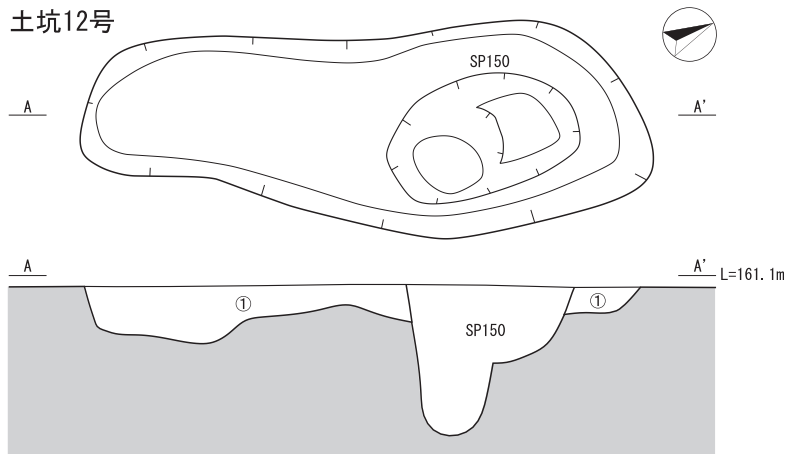
第18図 土坑 5・6・7・8・9・10号

土坑11号



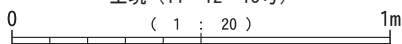
①黒褐色土（10YR 3/1）。締まりややあり。粘性あり。

土坑12号

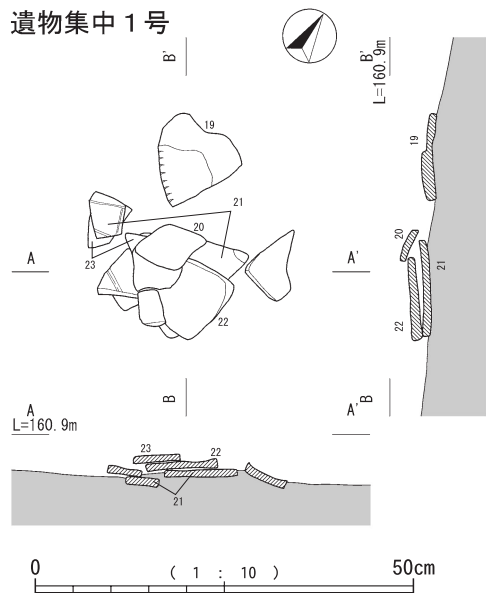


①黒褐色土（10YR 3/1 VI層の土に類似）。灰白色（7.5YR 8/2）及び黄橙色（7.5YR 6/8）のパミスをわずかに含む（1%）。締まり弱い。

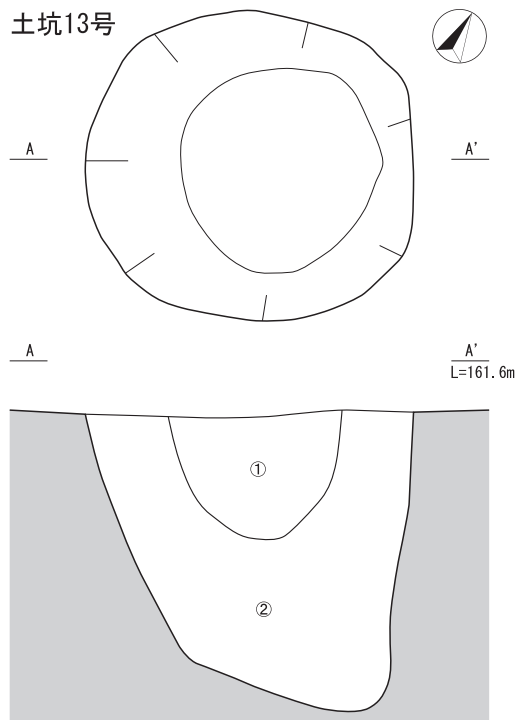
土坑（11・12・13号）



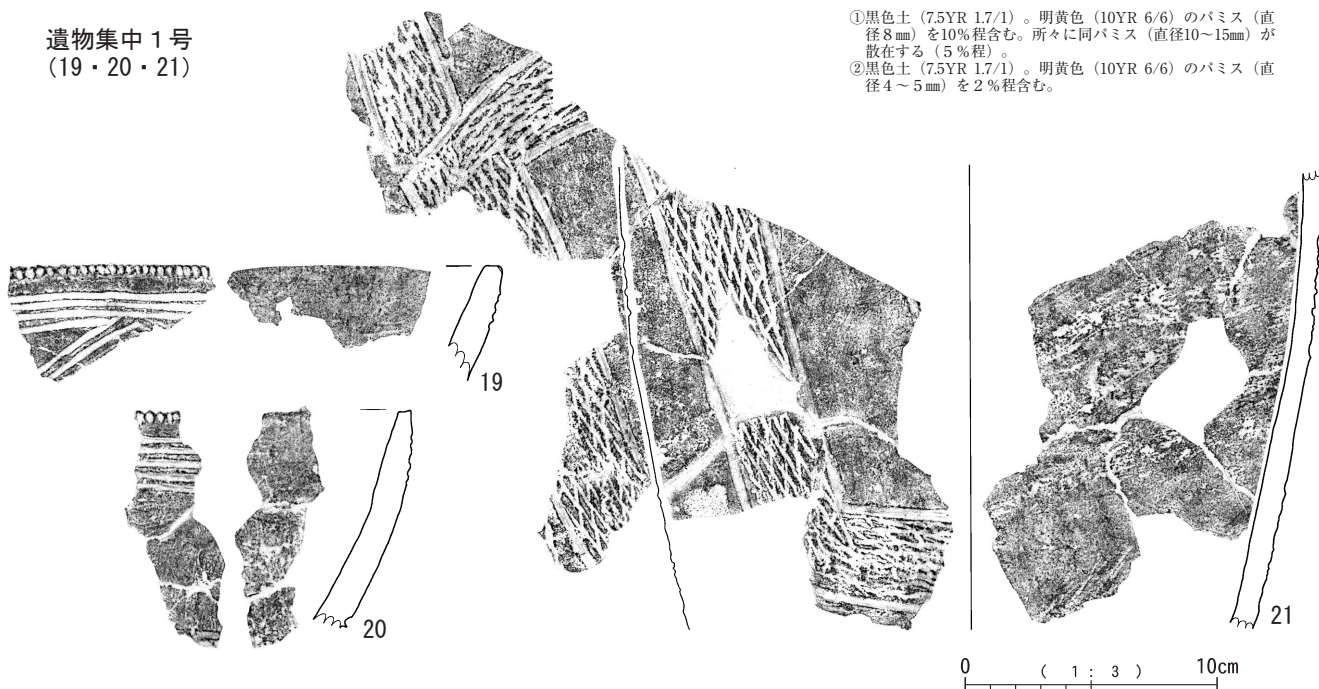
遺物集中1号



土坑13号

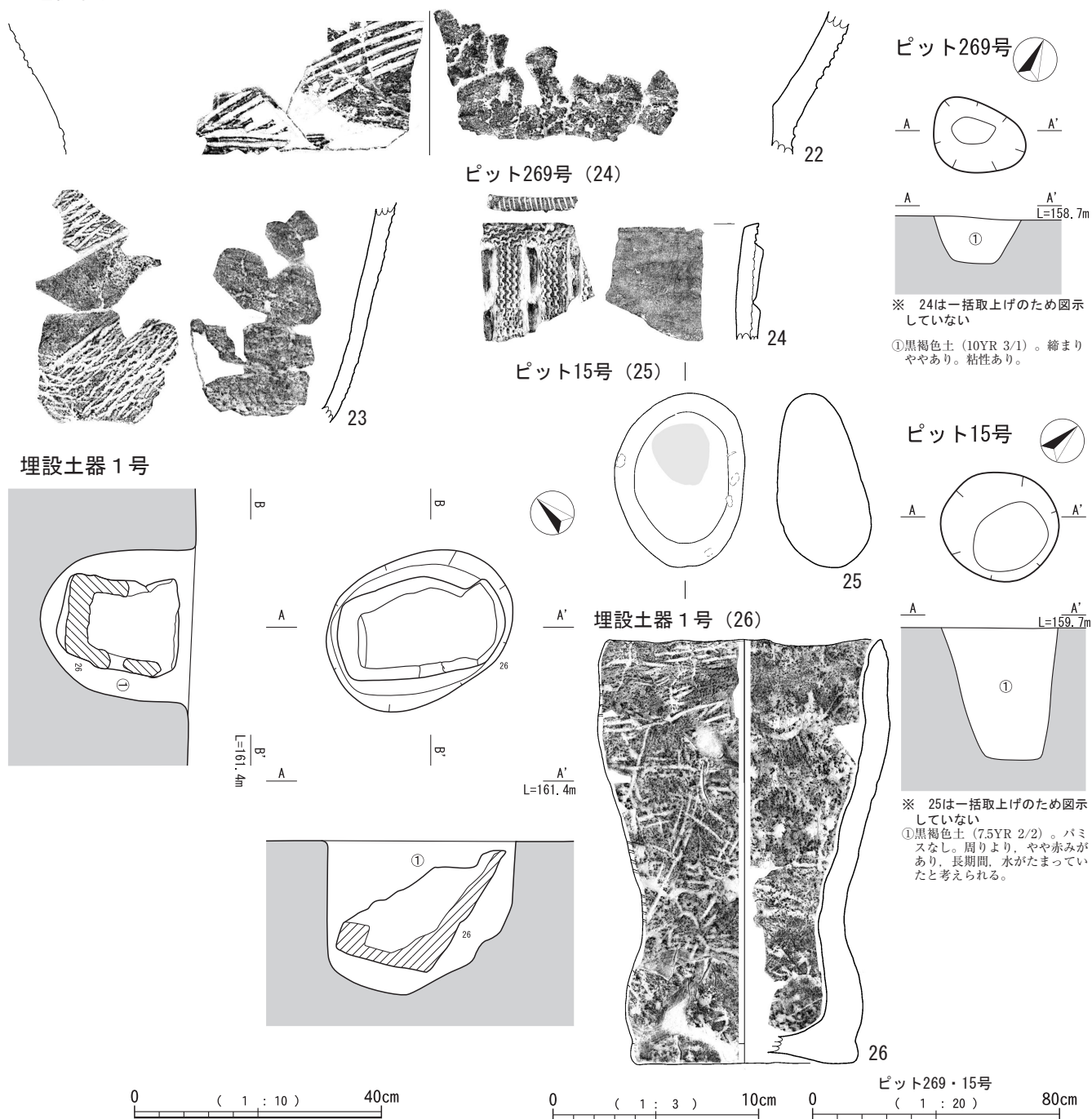


遺物集中1号
(19・20・21)



①黒色土（7.5YR 1.7/1）。明黄色（10YR 6/6）のパミス（直径8mm）を10%程含む。所々に同パミス（直径10～15mm）が散在する（5%程）。
②黒色土（7.5YR 1.7/1）。明黄色（10YR 6/6）のパミス（直径4～5mm）を2%程含む。

第19図 土坑11・12・13号・遺物集中1号



第20図 遺物集中内遺物・ピット269・15号・埋設土器 1 号

面図とし、断面図は省略する。

ピット269号 (第20図)

E-11区Ⅶ層上面で検出された。平面プランは25cm×30cmで、検出面から最深15cmであった。埋土内遺物1点を図化した。24は2類で、外面に縦位の貝殻刺突文を施し、口縁部上位には縦列の楔形の貼付文を施す。口縁上端には斜位の貝殻刺突文を巡らせる。口唇部は平坦面を作出し、器面に直交する刻みを施す。

ピット15号 (第20図)

F-12区Ⅳb層上面で検出された。平面プランは35cm×39cmで、深さは検出面から43cmであった。25は表面に

わずかに磨面を有する。

(6) 埋設土器

1基の埋設土器が検出された。

埋設土器 1 号 (第20図)

J-41区Ⅵb層上面で検出された。平面プランは、26cm×41cmで深さは検出面から25cmであった。地山と埋土の色調等差異がほとんどない。土器胎土が地山と一体化した状態で検出された。遺物取上げの際に土器がぼろぼろ崩れ落ちる状況で、埋設土器と認識するのに時間を要し、本来の埋設状況を保持できなかった。埋土はⅤ層を母材とする単層で、本来の掘込み面はⅤ層上面の可能性

が高い。土器が大変もろく、硬化剤を塗布し乾燥させながら取り上げたが、検出途中でも崩れていく状況であった。土器の胴部中位が大きく割れていた。土坑壁に樹根の穴が無数に横走り、樹根で土器が破砕した可能性が高い。26は、本来は完形だった可能性がある。胎土は大変もろく、内外面ともに貝殻条痕文が右下り、左下りに斜行し、一部交差する。胴部中位ほどに、粗雑な微隆起突帯が巡らされる。10類の塞ノ神B式か苦浜式土器のいずれかであろう。

3 遺物
(1) 遺物の分類

本項で扱う時代は、縄文時代早期である。当該期の基本的な遺物包含層は、V・VIa層であるが、地層（遺物）の落込みも考慮し、VIb層までを対象として調査した。当該期の土器を以下のように分類した。当該期の土器の施文には幾類に共通する施文も見られ、破片資料では厳密に分類できないものもあったが、器面調整の傾向等から総合的に判断して、分類したものもある。

第4表 土器分類表（縄文時代早期） ※土器の種別の掲載・出土点数は各遺物の文章中に記載（遺構分も含む）。

類	器形や文様、調整等の特徴
1	口唇部に刻目、口縁部上位を斜位の貝殻刺突文を施し、外面には貝殻腹縁による横位や斜位の条痕を施す。前平式土器に比定される。
2	口唇部に刻目、口縁部上位に斜位の貝殻刺突文を施し、外面には縦列の貝殻刺突文で、外面全体を覆う。口縁部の上位に、楔形の突起を施すものもある。内面はミガキ調整で、全体的に器壁が薄く、緻密な作りである。加栗山式土器に比定される。
3	2に似るが、外面には貝殻刺突を横方向に押し引いて施文する。吉田式土器に比定される。
4	外面の貝殻条痕の方向が縦方向と横方向に施され、部分的に交錯し格子状を呈する。辻タイプに比定される。
5	口縁部上位に斜位の貝殻刺突文を施し、器面全体には貝殻条痕文を綾杉状に施す。石坂式土器に比定される。
6	器面全体に貝殻刺突文を綾杉状に施す。下剥峯式土器に比定される。
7	外面に縦方向の押型文が施される。小片のため断定できないが、小ぶりの楕円押型文は押型文土器の、胴部がやや外反し大ぶりの山形押型文は手向山式土器の可能性はある。
8	口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて沈線文と刺突連点文とで文様を構成される。胴部文様帯に主に、単節斜行縄文を地文とする。平椀式土器に比定される。
9	口縁部文様帯に刻目微粒帯文を数条巡らすものや微粒帯間に沈線文や連点文を横位、波状に巡らす。胴部文様帯には、結節縄文や編目撚糸文を縦位に施すものがある。塞ノ神A式土器に比定される。
10	外面に粗い縦位や斜位の貝殻条痕文を施し、一部は胴部中位程に微隆起突帯が巡らされたり、縦位の隆帯が施されたりするものがある。塞ノ神B式土器や苦浜式土器が比定される。

※4類と5類は、土器編年上、前後する。

イ 石器

石器の器種ごとの出土数並びに石材分類表を以下に示す。表及び文章中の掲載・出土点数は遺構分も含めた。

※ 剥片・チップとしたのは黒曜石やチャートなど石鏃や石匙、小さなスクレイパーに使用される石材数で、打斧・礫器の剥片・破片としたのはホルンフェルスA・B類などの比較的大型の石器に使用される石材数である。

器種	掲載点数	出土点数	器種	掲載点数	出土点数
細石刃核	1	1	磨製石斧	2	4

器種	掲載点数	出土点数	器種	掲載点数	出土点数
打製石鏃	10	12	礫器	3	12
石鏃	2	2	磨石・敲石	7	35
石匙	1	1	石錘	1	1
スクレイパー	2	4	石皿・台石	1	10
剥片・チップ	0	53	軽石製品	1	1
打製石斧	2	3	計	33	203
打斧・礫器の剥片・破片	0	64			

第5表 出土石器の石材分類表 ※石材の中で、特に細分を試みたものについて、以下に特記する。

黒曜石	A類	石英や長石などの斑晶を多く含み、基質は黒色からアメ色などに変移が見られ、縁辺では光を通す。日東、三船、五女木、長谷産の可能性をもつ。小片の一部は、腰岳産の可能性もある。
	B類	石英や長石などの斑晶を多く含み、基質が漆黒で全く光沢がなく、剥離の縁辺でも透光性を全く有しない。上牛鼻産の可能性をもつ。
	C類	石英や長石などの斑晶をほとんど含まず、基質は漆黒で透明度が高い。腰岳産の可能性をもつ。
	D類	石英や長石などの斑晶をほとんど含まず、基質は青灰色を呈し、黒色ややや緑がかったのも見受けられる。針尾産の可能性をもつ。
安山岩	A類	緻密な質感で、堅硬である。石英や長石の斑晶をわずかに含み、灰色から黒灰色を呈する。無斑晶質安山岩で、サヌカイト、ガラス質安山岩、ハリ質安山岩、黒色緻密質安山岩などと呼称されたりする。
	B類	A類以外の安山岩を、本類に含めた。
ホルンフェルス	A類	青灰色や黒灰色の色調を呈す。断面に層状剥離がほぼ捉えられず、下のB類より堅硬な質感である。本遺跡では、磨製石斧や礫器などに利用される傾向にある。
	B類	A類に似るが、断面に層状剥離が顕著に捉えられ、元の泥岩・頁岩の特徴を残す。本遺跡では打製石斧や削器などに利用される傾向にある。
	C類	変成前の淡褐色の色調は捉えられるが、硬く、割れ目に入りこんでできた白っぽい石英脈や長石脈が見られ、砂粒のざらざらした質感は失っているものは、砂岩と分けて本類に分類した。砂岩質ホルンフェルス。

(2) 土器

ア 1 類土器 (第21図27・28)

17点中、2点を図化した。27は胴部に斜位の、28は胴部にほぼ横方向の深く明瞭で、間隙のない丁寧な貝殻条痕文が施される。なお、器面の凹凸やもろい胎土、粗目の貝殻条痕文が顕著な土器片は10類に分類した。

イ 2 類土器 (第21図29～31図)

13点中、3点を図化した。29は縦位の貝殻刺突を地文とし、縦位の楔形の隆帯を貼付する。30は薄く丁寧な器面調整から、本類の可能性で報告する。31は丁寧な作りで底部立ち上がりに細かな縦位の沈線を巡らせる。30の胎土に似るが、3類土器の可能性もある。

ウ 3 類土器 (第21図32)

15点中、1点を図化した。32は貝殻刺突を横方向に押引く。器壁も薄く、丁寧な作りである。

エ 4 類土器 (第21図33～35)

7点中、1点を図化した。33は口唇部に縦位の刻みを施し、口縁部上位に横位の貝殻刺突を施す。縦・横方向の貝殻条痕文を施し、部分的に交錯して格子状を呈する。35は縦と横の沈線が二重の「コ」の文様を構成する。器面には貝殻刺突文や沈線（条痕？）が捉えられる。

オ 5 類土器 (第21図36～42)

41点中、7点を図化した。36は口縁上位に2条の列点と1条の横位の短沈線を巡らせる。胴部には、浅い斜め方向の条痕が捉えられる。37は、口縁上位に2条の横位の貝殻刺突を横方向に連ねる。外面には貝殻条痕を綾杉状に施す。口唇部には、浅い斜位の刻みを施す。焼成後の穿孔が、内外両方向から穿たれる。38は口縁上位に横位の貝殻刺突文を巡らせる。胴部には貝殻条痕文を施す。口唇部には、部分的に微細な縦位の刻みが捉えられる。39・40は、間隙において横方向の貝殻条痕文が施される。39は胎土が粗く、10類土器の底部の可能性もある。40は底部の立ち上がりに微細な縦位の刻みが施され、本類の可能性が高い。41は底部立ち上がりに横位の刻みが入る。1類～4類の可能性もある。42は貝殻条痕による綾杉文が明瞭で、本類に典型的である。

カ 6 類土器 (第21図43～45)

6点中、3点を図化した。43は3条の、45は2条の並行刺突文を施す。45は器厚が4.5mmと薄く、丁寧なナデ調整である。

キ 7 類土器 (第21図46・47)

5点中、2点を図化した。46は斜め方向の楕円押型文を施す。文様が小ぶりなことから、押型文土器の可能性もある。47はやや大ぶりの縦方向の山形押型文を施す。上半がやや外傾する器形と大ぶりの山形押型文から、手向山式土器の可能性もある。

ク 8 類土器 (第21・22図48～59)

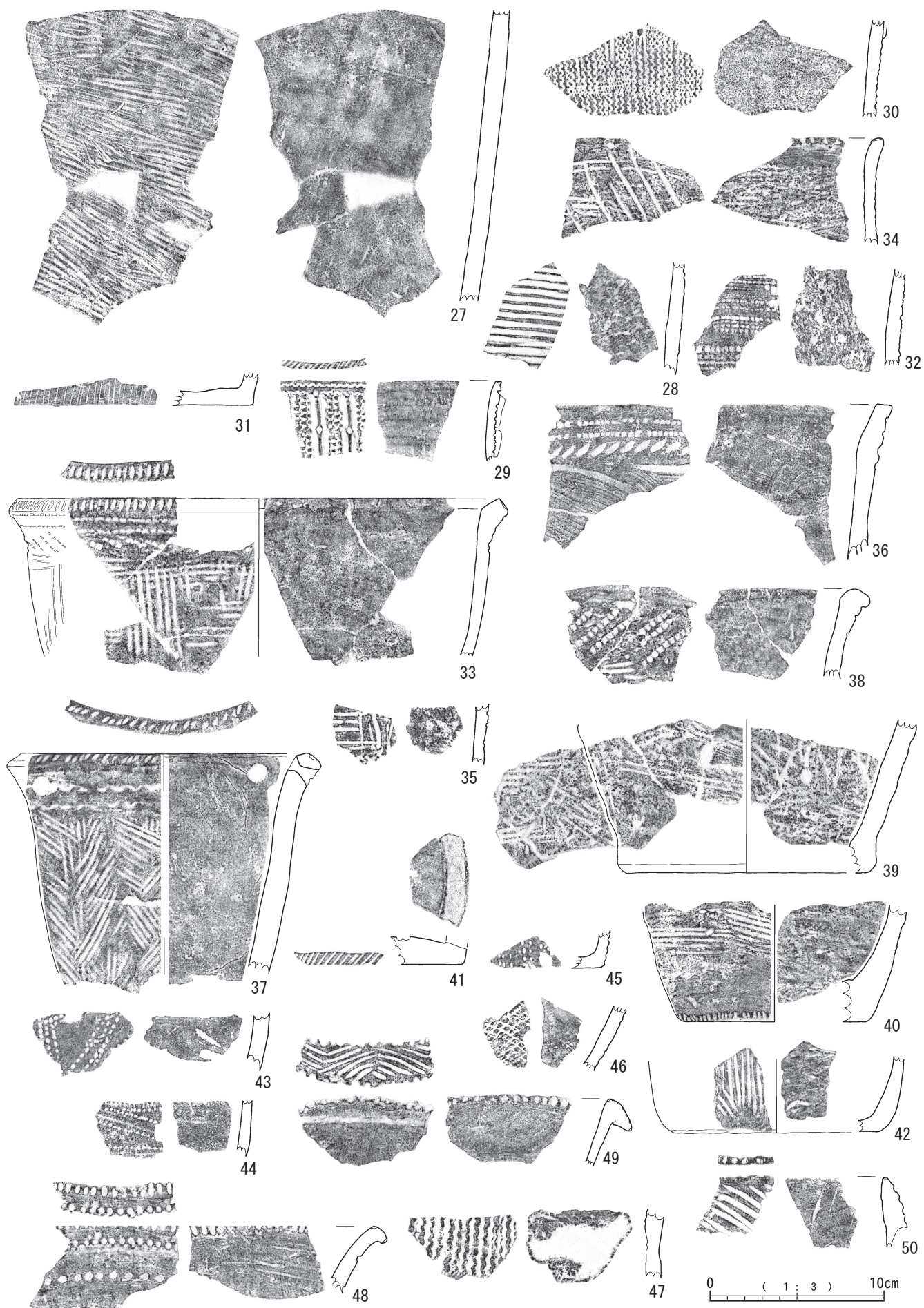
35点中、12点を図化した。48は口縁部に列点文を巡らせる。口唇の両端部に短沈線状の刻みを施す。胎土に金雲母を多く含む。49は口縁部に並行沈線により文様を構成する。口唇両端部に押圧状の刻みを施す。50は斜め方向の並行沈線で構成する。口唇部に浅い刻みを施す。51・52・53は無文で、器厚が7mmと薄く、にぶい黄橙色等の胎土である。緩やかな波状口縁で上面観が隅丸方形状を呈する。55はおそらくは波状口縁を呈する。口縁部は2、3条の並行細沈線で横方向に巡らし、山形文を構成する。口縁下位には微細な刻みを有する2条の微隆起突帯を巡らせる。胴部には文様は捉えられない。56は口縁部下位が「く」の字状にやや屈曲する。口縁端部がわずかに外に張り出し、左側には半月状の刻みを、右側には微細な斜沈線を施す。口縁部の屈曲の下には、横方向に刺突列点文が巡らされる。57は外面全面斜め方向に縄文を施す。58は外反する口縁部片で、地文に縄文を施し、2条の並行沈線を鋸歯状に巡らす。59は複数の並行沈線と貝殻復縁による刺突で構成される。押圧状の刻みを施す2条の縦位の突帯を有する。わずかに金雲母を含む。

ケ 9 類土器 (第22・23図60～76)

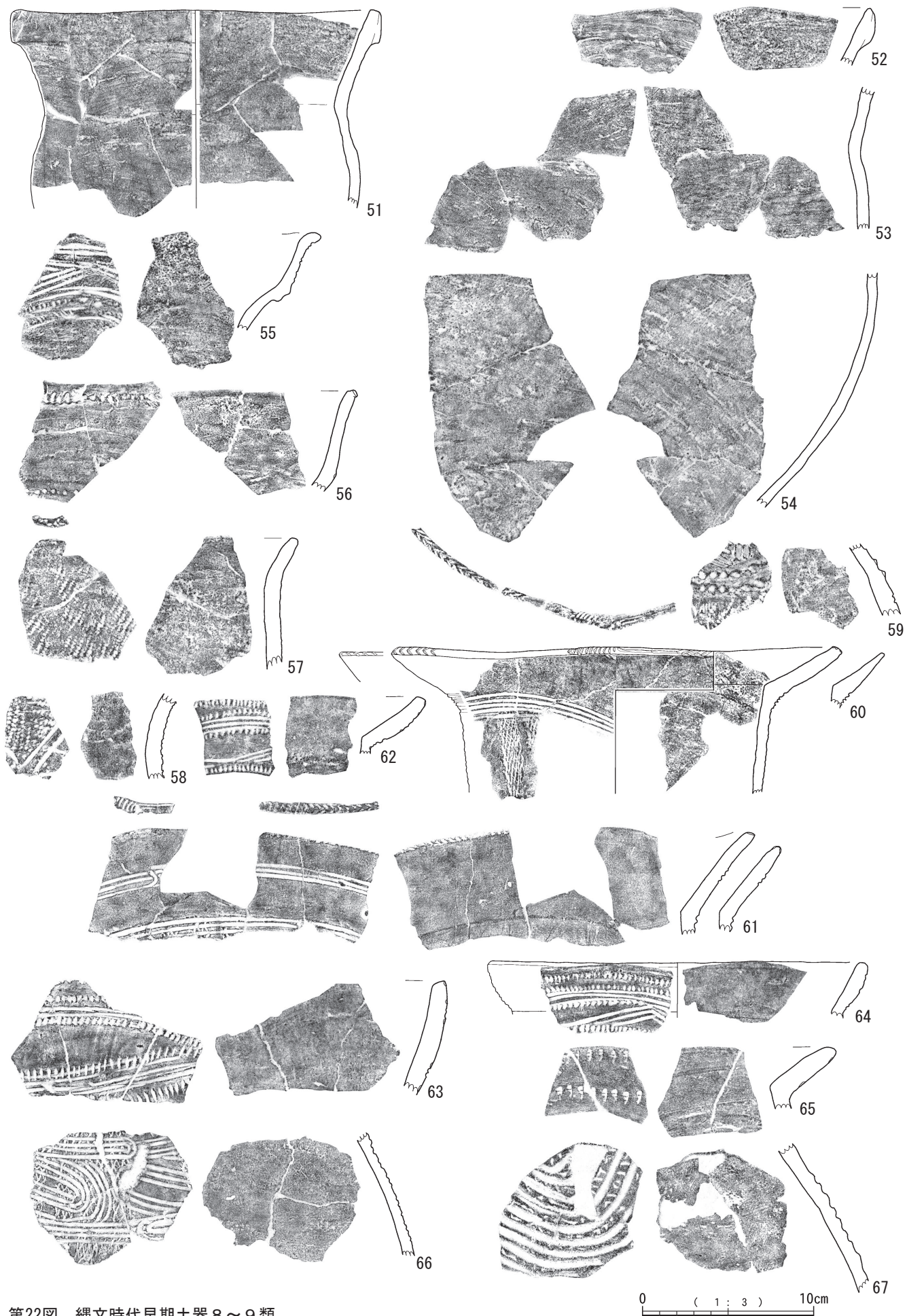
221点中、17点を図化した。60は波状口縁である。口縁部は無文で、胴部に縦方向の撚糸文を施し、口縁部と胴部の境に4条の並行沈線を巡らせる。61は口縁部に3条の並行沈線を巡らし、一部、横位の半円弧で並行沈線に施す。胴部には縦方向の撚糸文を施した後、口縁部と胴部の境には、3条の並行沈線が巡らされる。60・61は結節縄文で、文様帯区画を施さない。62・63・64はヘラ状工具による縦位の刺突と2、3条の並行沈線で構成される。62は口縁上位に横位の短沈線を2条巡らし、その下に縦位の貝殻刺突を横方向に巡らす。平坦な口唇部に刻みを施す。65は縦位の刺突のみ施す。66・68は頸・肩部で、複数条の並行沈線で文様を構成する。66の胴部には縦方向の、68は一部に撚糸文が捉えられる。多く金雲母を含む。69は胴部上位に横方向の沈線や押引文を施し、胴部に縄文もしくは撚糸文を斜め方向に施す。70・71は撚糸文の文様帯を沈線で区画する。70は胴部上位に刻みを施す突帯を巡らせる。72は縦方向に編目撚糸文を施し、胴部上位に3条の沈線を横方向に巡らせる。73は編目撚糸文を施し、沈線で区画する。74は3～5条の並行沈線で文様を構成する。このタイプは本資料のみの出土である。75・76は底部で、75はわずかに縦方向の撚糸文が捉えられる。76は無文のため、9類の可能性もある。

コ 10 類土器 (第23図77～85)

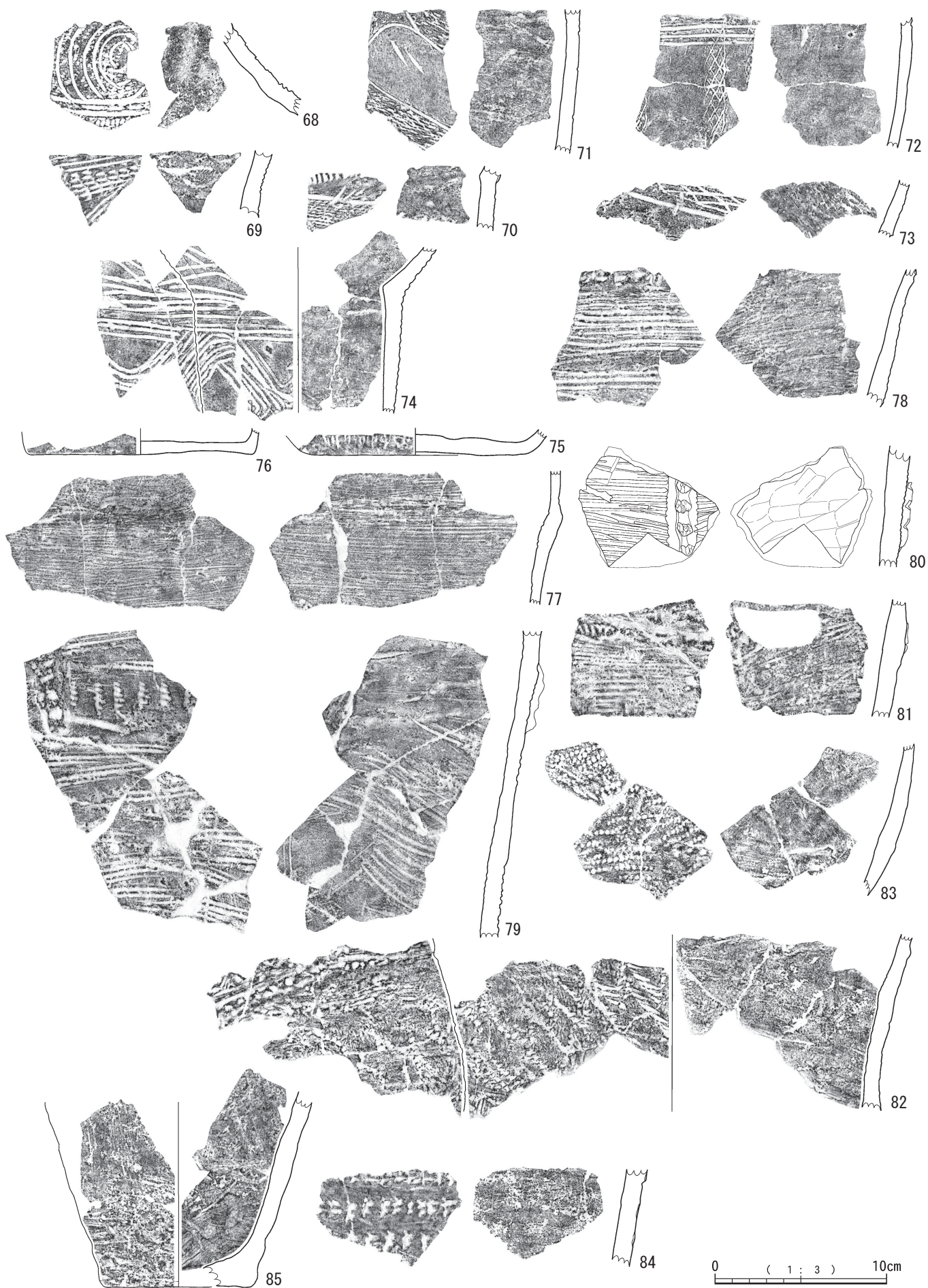
40点中、9点を図化した。77は地文に比較的微細な条痕を施し、胴部中位を微隆起状の粗雑な突帯が巡らされる。78は横方向の貝殻条痕文に、上位にやや押引き状の



第21図 縄文時代早期土器 1～8類

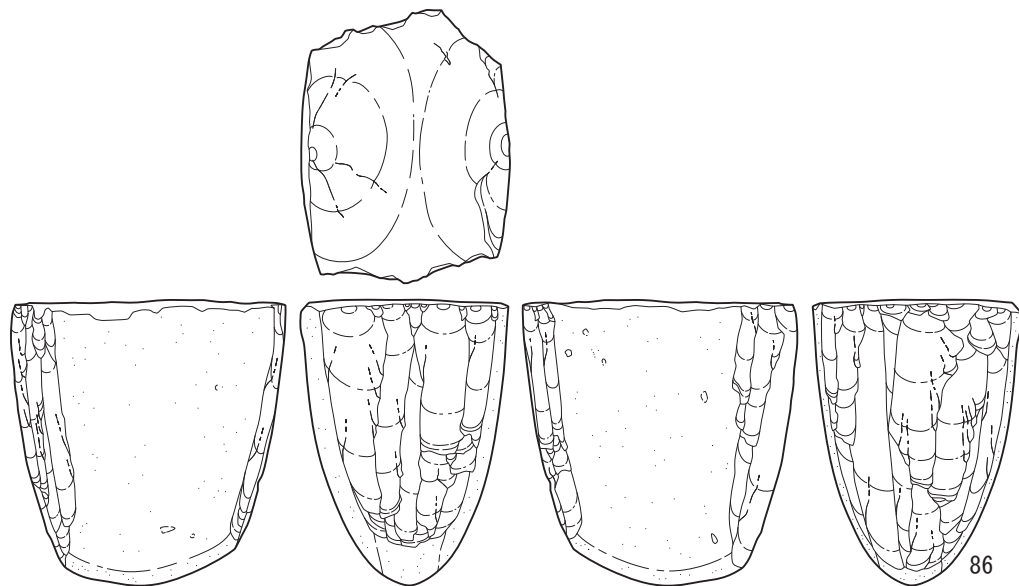


第22図 縄文時代早期土器 8～9 類

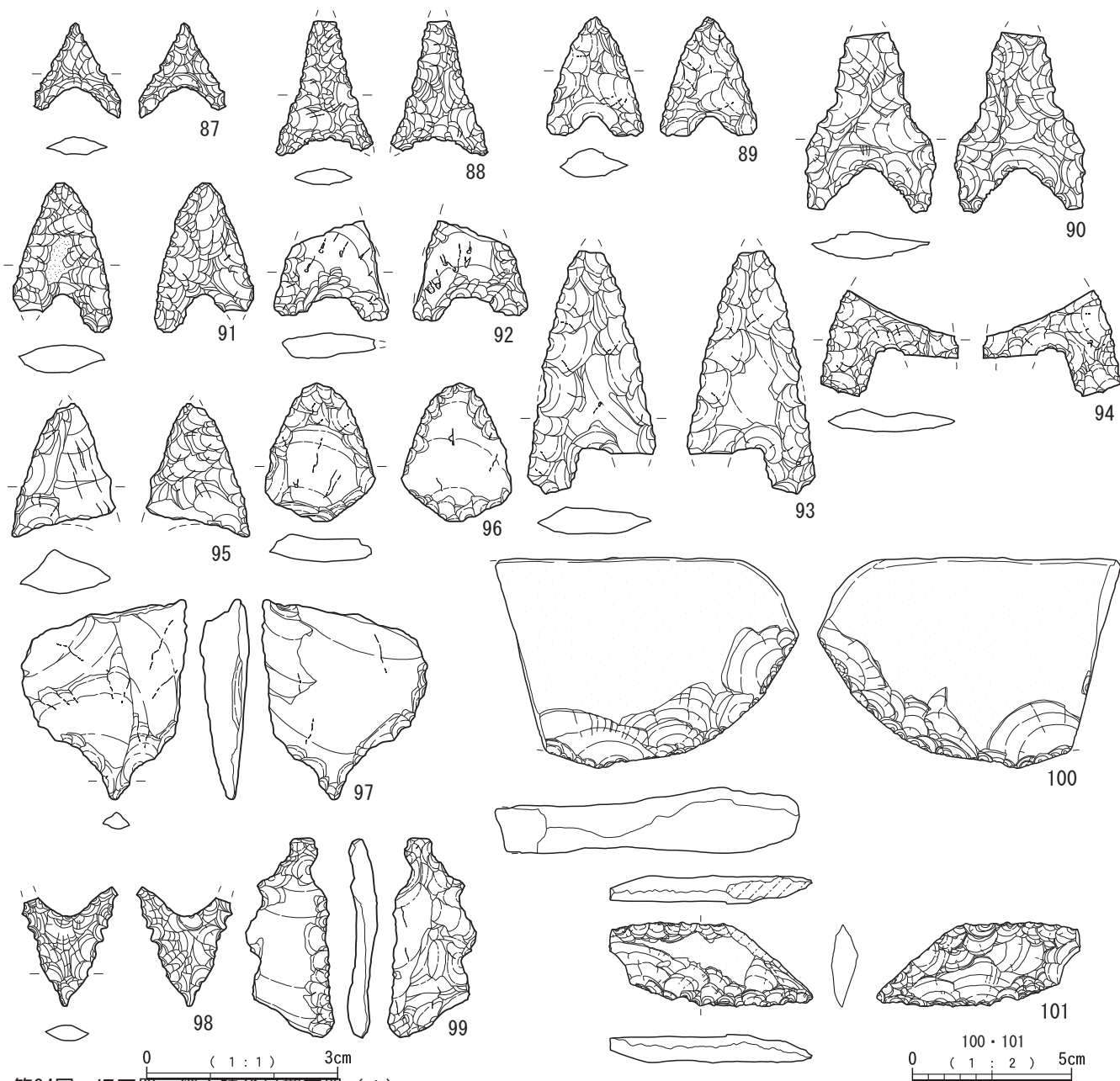


第23図 縄文時代早期土器 9～10類

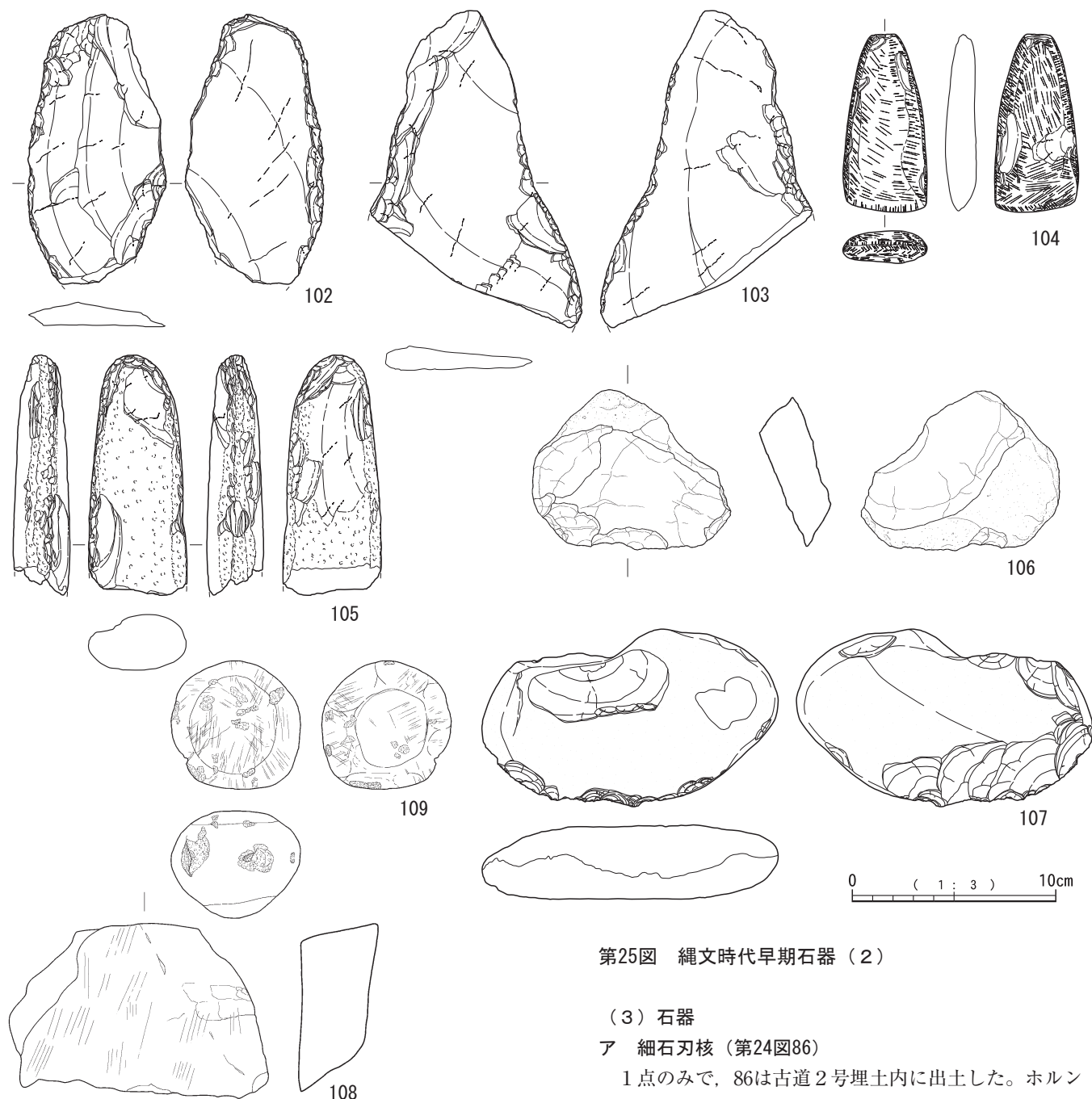
旧石器時代



縄文時代早期



第24図 旧石器・縄文時代早期石器 (1)



第25図 縄文時代早期石器（2）

（3）石器

ア 細石刃核（第24図86）

1点のみで、86は古道2号埋土内に出土した。ホルンフェルスA類の小円礫を半割して平らな打面を作り出し、上下面を規則的に敲打し剥片を採る。旧石器～縄文時代草創期の石器で、哇原型細石刃核である。

イ 打製石鏃（第24図87～96）

本稿では、抉りの深度及び形態で分類した。

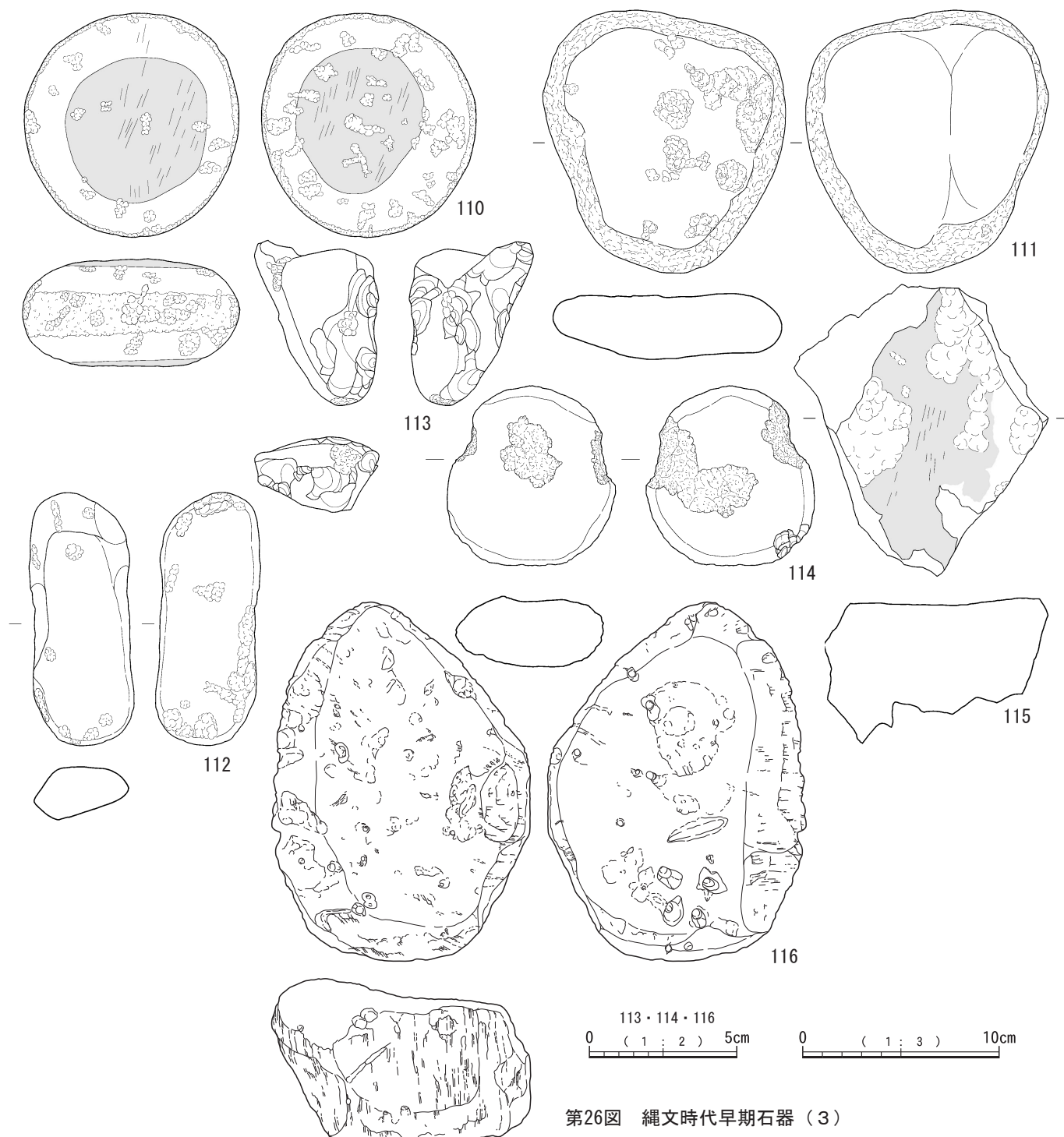
打製石鏃Ⅰ類（第24図87・88）

本類は、脚部に半円弧状のやや浅めの抉りを有する凹基鏃である。3点出土し、2点を図化した。87は正三角形の器形で、左右両側縁が鋸歯状を呈する。当該期の打製石鏃で正三角形の器形並びに鋸歯状の側縁部を呈するのは、この1点のみである。88は二等辺三角形の器形で、左縁辺を中心に縁端がやや鋸歯状を呈する。

打製石鏃Ⅱ類（第24図89・90）

本類は、脚部に半円弧状の深い抉りを有する凹基鏃で、Ⅰ類とⅢ類の中間的特徴をもつ。2点出土し、図化

列点が捉えられる。79は斜め方向の貝殻条痕文を地文に、胴部上位に縦位の貝殻刺突を横方向に巡らせる。貝殻の頂部による押圧の刺突を施す縦位突帯を貼付する。80は79に類似するが、縦位の貝殻刺突は捉えられない。81は外面にやや浅目の横方向の貝殻条痕が施される。2条の微隆起突帯が、突帯の一部には横位の貝殻刺突が施されて巡らされる。このタイプは5点出土する。82は斜位の貝殻刺突（一部、押引き）による双交弧文を施す。おそらく胴部中位程に、微隆起状突帯を巡らす。83は貝殻刺突文を横・斜方向に全面的に施す。胴部下位に微隆起突帯が部分的に捉えられる。84は縦位の貝殻刺突を横方向に施す。3点確認される。赤褐色の粘土質の胎土が特徴的である。85は無文である。器面の凹凸が顕著で、器面調整の粗雑さから本類の底部の可能性と報告する。



第26図 縄文時代早期石器（3）

した。89は二等辺三角形形状で、両側縁が尖端部にかけてやや内湾し丸みを帯びる。90は、左右両側縁の脚部側が大きく外側に張り出す。この器形は、この1点のみの出土である。尖端が大きく欠損する。

打製石鏃Ⅲ類（第24図91～96）

本類は、脚部にU字状の深い挟りを有する凹基鏃である。5点出土し、4点を図化した。91は、両側縁が尖端にかけてやや内湾する。92は大きく主要剥離面を残し、縁端を中心とした剥離により整形する。93・94は、やや大型の、細長い二等辺三角形形状の器形である。94は、安山岩A類製である。

打製石鏃欠損品・未製品（第24図95・96）

欠損品・未製品とも各1点ずつの出土である。95は左脚端部が鋭く尖り、脚部中央の挟りが浅く、打製石鏃Ⅰ類の未製品の可能性がある。96は主要剥離面を大きく残す。調整剥離が一部施されないことから、未製品の可能性で報告する。

ウ 石錐（第24図97・98）

先端が鋭く尖り、その直上の側縁に挟りが施され、尖端が特徴的に作出されたと捉えた石器を、石錐の可能性で報告する。2点出土し、図化した。

石錐Ⅰ類（第24図97）

つまみ部が不定形なものである。1点のみ出土し、図化した。97は、主として尖端を中心に整形剥離が施され

る。先端部の側縁の稜2.5mm程が摩滅し使用痕と考えられる。

石錐Ⅱ類（第24図98）

比較的浅い抉りを有する打製石錐Ⅰ類の器形である。1点のみ出土し、図化した。打製石錐のⅠ類の可能性もある。98は、左右両側縁が鋸歯状を呈し、つまみ部の基部が半円弧状の抉りを有する。鋭く尖る先端の直上の両側縁の抉りに加え、体部中位の両側縁がやや抉り状を呈する。先端が鋭く尖る打製石錐は、他の遺跡でも出土例が見られ、打製石錐として報告される事例も多い。

エ 石匙（第24図99）

1点のみ出土し、図化した。つまみ状突起から身が縦に長く伸びる縦型で、つまみ状突起の軸と刃部が平行になる。99は玉髓製で右側縁に細かな調整剥離を施し、直線的な刃部を作出する。稜の凸部が微細に潰れ、使用に伴うものと考えられる。天地逆にして、つまみ状突起を錐部の欠損と見なす石錐の可能性もある。

オ スクレイパー（第24図100・101）

4点出土し、2点を図化した。100は半割した礫の一侧縁に粗い剥離を施し刃部とする。製作技法的には礫器に似るが、礫器にしてはやや小ぶりなため本類に含めた。101は、先端を呈する側縁の一つが自然面で未加工なため、上下縁部を刃部及び基部と見なした。表面右下を先端とする石槍の可能性もある。安山岩A類（サヌカイト）製である。

カ 剥片・チップ

本類の多くは、黒曜石や安山岩A類（サヌカイト）で、本石材の製品の多くは打製石錐であり、その製作に伴うものと考えられる。53点出土したが、図化していない。

キ 打製石斧（第25図102・103）

3点出土し、2点を図化した。102は略短冊形の器形である。未掲載の1点も、同様に略短冊形である。左上側縁の稜の一部が潰れるが、正対する右側縁の稜には潰れは捉えられない。刃部が欠損する。主要剥離面が大きく残され、着柄痕が片側縁にのみ認められ、左側縁を刃部とする横刃形石器の可能性もある。103は円形の体部をもつラケット形である。左側縁下位3cmほどやや窪んで摩滅する。相対する右側縁の窪みや摩滅は1cm幅で顕著ではない。着柄痕の可能性はある。

ク 磨製石斧（第25図104・105）

4点出土し、2点を図化した。104は定格式磨製石斧である。ホルンフェルスA類で比較的堅硬な石材である。刃部・左右側縁ともに丁寧に研磨加工を施すが、基部には上縁からの敲打剥離のリングが表裏面側に残される。当初からの剥離か、着柄時の加撃に伴う剥離かは判断できない。刃縁端に、裏面側から表面側方向に微細な剥離（リング）が捉えられる。105はホルンフェルスB類でやや軟質の石材である。器厚の最大厚が2.8cmで、

比較的厚いことから、蛤刃石斧の欠損品と考えられる。表裏面に自然面が多く残され、棒状の自然礫の周縁を中心に部分的剥離により成形する。基部の縁端は摩滅して平坦面を成すほか、上端から4～9.5cmほど、左右両側面がわずかに凹みを呈し、ともに着柄痕の可能性はある。なお、欠損面は、上面側の斜方向からの加撃で欠損している。

ケ 礫器（第25図106～108）

12点出土し、3点を図化した。刃部が半円弧状を呈するタイプと直線的なタイプがある。半円弧状のタイプは4点出土し2点を図化、直線的なタイプは1点のみ出土し図化した。106・107は、下縁から左右両側縁の下半にかけて半円弧状の稜を刃部とする。108は下縁が直線的である。表面が磨面を呈し、石皿等の破片を再利用した可能性がある。

コ 磨石・敲石（第25・26図109～113）

把持可能な小型の自然礫を素材とし、磨面や敲打痕が認められる器種を一括して本類に含めた。35点出土し、円・長楕円礫等を素材とするものと棒状に細長い礫を素材とするものがある。調理に伴う石器、石器製作に伴う石器の用途の違いの可能性を鑑み、二分して報告する。

磨石・敲石Ⅰ類（第25・26図109～111）

31点出土し、3点を図化した。109・110・111のいずれも全面的に敲打痕を有する。特に、浅い敲打痕が捉えられる。109は側面が五面体状を成し、顕著な側面の使用の痕跡（摩擦）が捉えられる。

磨石・敲石Ⅱ類（第26図112・113）

2点出土し、図化した。112は上面や左右側縁の下半に敲打痕が集中する。113は全面的に剥離痕を有し、特に下面に敲打痕が捉えられる。

サ 石錘（第26図114）

自然礫の左右両側面に、敲打による抉りが確認されるものを本類とした。以下の1点のみの出土である。114は扁平な円礫を素材とし、左右両側面のやや上位に抉りをもつ。表裏面の中央辺りに敲打痕があり、磨石・敲石の再利用の可能性を示す。

シ 石皿・台石（第26図115）

把持不可能な比較的大型の自然礫を素材とし、磨面や敲打痕が認められる器種を一括して本類に含めた。10点中、1点を図化した。115は表面の辺縁部を除き、全面的に磨面を呈するほか、複数の範囲にわたって、敲打痕があり、台石の機能も併せ持つ。

ス 軽石製品（第26図116）

当該期軽石製品は、116の1点のみの出土である。8.8cmほどの直径で、9mm～13mmほどの深さの貫通しない穿孔が8か所確認される。ほかにU字状の溝を有する擦痕が2条捉えられる。左右側面・下面の3面は、磨ったと思われ平坦面を成す。

第2節 縄文時代後期から弥生時代の調査

1 調査の概要

本遺跡は、道路の拡幅工事に伴う調査で、北側から南側にかけて带状に長いため、北側から1～4区と細分して調査を進めた。3か年の調査は、区ごとに調査を行ったため、本節でも、区ごとに分けて概要を記す。

縄文時代後期から弥生時代の調査は、Ⅱc層（包含層）を主とする。Ⅱc層が黒褐色土で、その上位のⅡa・Ⅱb層が黒色土と、色調の違いが明瞭でない。また、所により層が堆積しなかったり、希薄であったりすることから、Ⅱa・Ⅱb層の出土状況にも留意しながら調査を進めた。

令和2～4年度の試掘調査では、1区の第2トレンチのⅡ層から弥生土器が、Ⅲ層から竪穴建物跡及びピットが確認された。縄文時代後・晩期を明確に示す遺構・遺物は1区で確認されなかった。しかし、1区の第2トレンチのⅢ層で時期不明のピットや竪穴建物跡（整地作業段階で、いずれも古墳時代相当と判明）が、第7トレンチのⅣ層で同じく時期不明のピットが検出された。3区では、第9トレンチのⅢ層から、弥生時代から古墳時代と思われる土器片とスクレイパーが出土した。また、4区では、第12トレンチで、縄文時代後期の中岳Ⅱ式土器と思われる土器片が出土、第10トレンチではⅡb層を検出面とする時期不明のピットや硬化面（古道）が確認された。さらに同区内では、縄文後期の包含層が厚く堆積していることから、縄文時代後期から弥生時代の可能性を含めた調査が必要と判断された。

それらの試掘調査の結果を踏まえ、令和4年度に、1・2区の縄文時代後期から弥生時代の調査を実施した。表土を重機で掘削した後、人力掘削により全面調査を行い、層が明瞭に変わるⅢ・Ⅳ層上面（アカホヤ火山灰）で精査をし、遺構検出を行った。その結果、1区では、ピットが1基確認され、弥生時代の土器が出土した。2区では、竪穴建物跡2軒と遺物集中を3か所検出した。縄文時代後期から弥生時代の中岳Ⅱ式土器を含む遺物集中で、石鏃やチップなども出土した。

令和5年度には、試掘調査の結果を受けて、3区で弥生時代を想定した調査を実施した。表土を重機で掘削した後、Ⅱc～Ⅲ層及びⅤ層まで人力掘削により全面調査を行った。その結果、3区では縄文時代後期から弥生時代の土坑3基、遺物集中1か所、ピットが多数検出された。立石を伴う土坑2基と断面箱形の形態から、落とし穴の可能性のある土坑1基を検出した。遺物集中は中岳Ⅱ式土器の浅鉢を主体とする。Ⅱc～Ⅲ層の包含層からは、中岳Ⅱ式土器などの後・晩期の土器や、刻目突帯文土器、石鏃、石錐、石匙、石斧、磨石・敲石、石皿・台石などの石器など多数出土した。

4区の縄文時代後期から弥生時代の調査は、試掘調査

の結果を受けて、3区と同様に令和5年度に実施した。表土を重機で掘削した後、人力掘削により層が顕著に替わるⅢ・Ⅳ層上面（アカホヤ火山灰）で精査を行い、遺構検出を行った。その結果、遺構は検出されなかったが、中岳Ⅱ式土器など後・晩期の土器、刻目突帯文土器や山ノ口式土器などの弥生時代の土器、石鏃、石錐、石匙、石斧、磨石・敲石、石皿・台石などの石器が出土した。なお、令和6年度の同区の縄文時代早期の調査において、Ⅴ層上面で検出された土坑1基は、土坑の形態や埋土状況から、縄文時代後期から弥生時代の落とし穴の可能性があると見て、当該期の遺構として追加した。各遺構・遺物に関しては、各項目で詳細を記す。

2 遺構

（1）竪穴建物跡

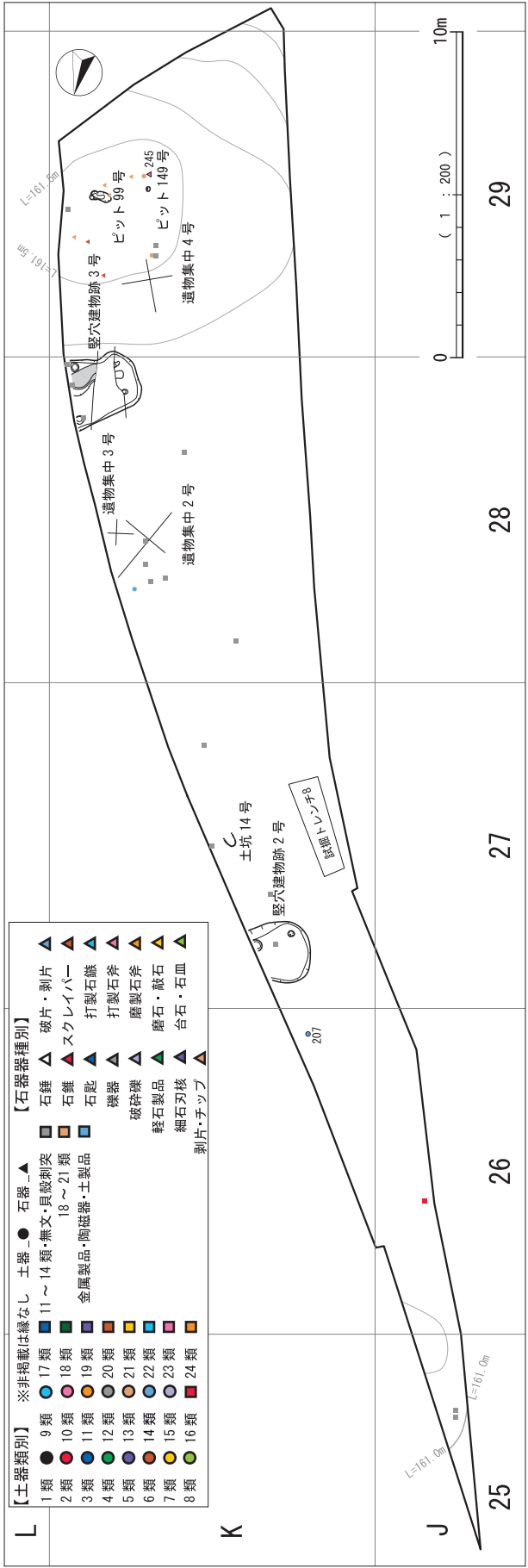
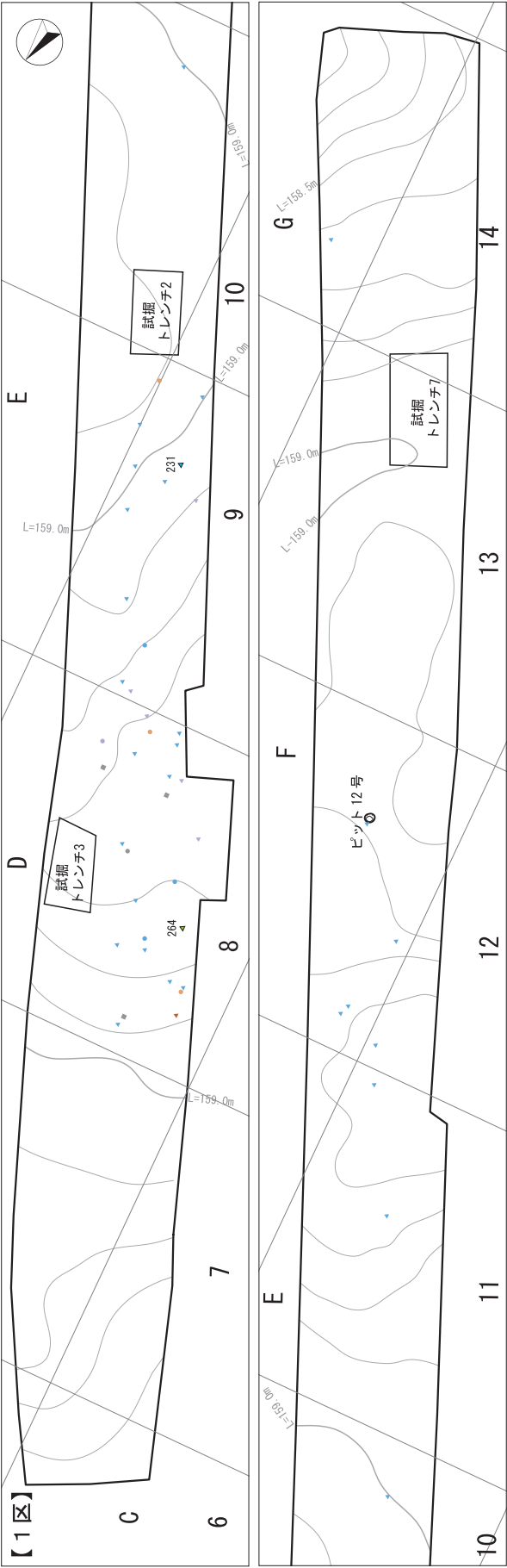
竪穴建物跡が2軒検出された。検出面や周辺に出土する遺物からは、当該期と古墳時代との峻別は困難であった。そこで、埋土内遺物を基に当該期として報告する。

竪穴建物跡2号（第29図）

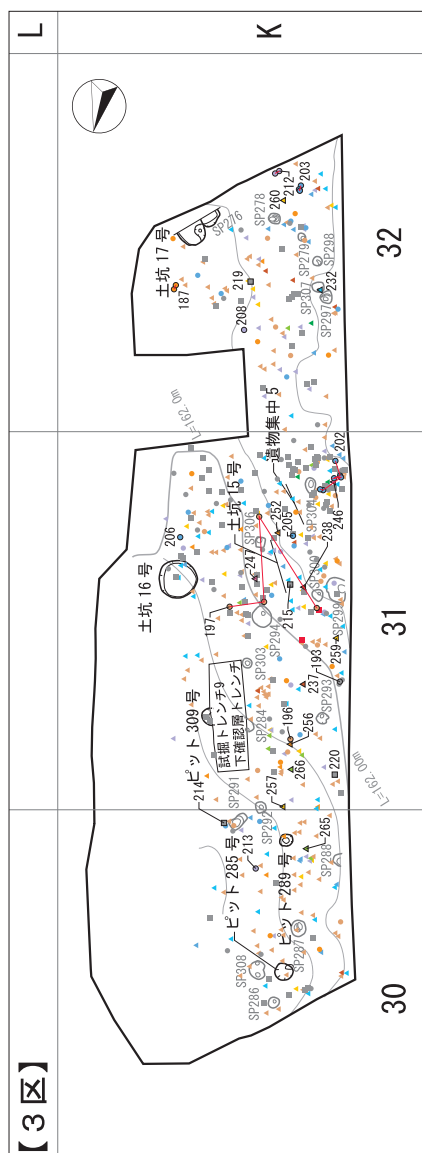
K-27区Ⅷ層上面で検出された。最終的なプランは、188cm×188cm（調査区外に切られる）で深さは検出面から26cmであった。大きさから土坑の可能性もあるが、本遺構の半分ほどが調査区外に及ぶこと、埋土内に遺物が集中したことから、竪穴建物跡の可能性で報告する。土器廃棄の土坑の可能性もある。焼土跡、床面の張替や上屋構造、周堤帯などは捉えられなかった。埋土内出土遺物は25点で、2点を図化した。117は11～14類の深鉢形土器の胴部下半である。外面は丁寧なミガキ調整である。118はわずかな敲打痕を有する磨石・敲石である。

竪穴建物跡3号（第30図）

K-28・29区Ⅴ層上面で検出された。縄文時代早期の検出面であるが、埋土内から縄文時代後期相当の遺物が主として出土したことや本遺構周辺はⅣ層の堆積が薄く検出を下層で捉えた可能性があることから、当該期の遺構として報告する。最終的なプランは、246cm（調査区外で切られる）×210cmで深さは検出面から24cmであった。埋土①の上位に、焼土跡が検出された。竪穴建物跡内に、5基のピットが検出された。多くのピットがやや床面を掘り抜く程度で構築され、①を埋め戻した後に、ピット造築や焼土形成がなされたと推察される。柱痕は検出されず、硬化面や周堤帯なども捉えられなかった。埋土内出土遺物は79点で、5点を図化した。P5の埋土上位には土器片が複数含まれ、埋もれかけの際に、入り込んだ可能性がある。119は15類の浅鉢と推察され、丁寧な作りの頸部片である。肩部に段を成し、頸部は大きく外反すると推察される。外面は横方向のミガキで、内面は丁寧な工具ナデを施す。120は恐らくは13類の深鉢で、肩部がやや張り出す。内外面とも丁寧なナデ調整である。121は粗製深鉢で、やや上げ底である。122は顕著



第27図 縄文時代後期～弥生時代の遺構配置図・遺物出土状況図（1・2区）



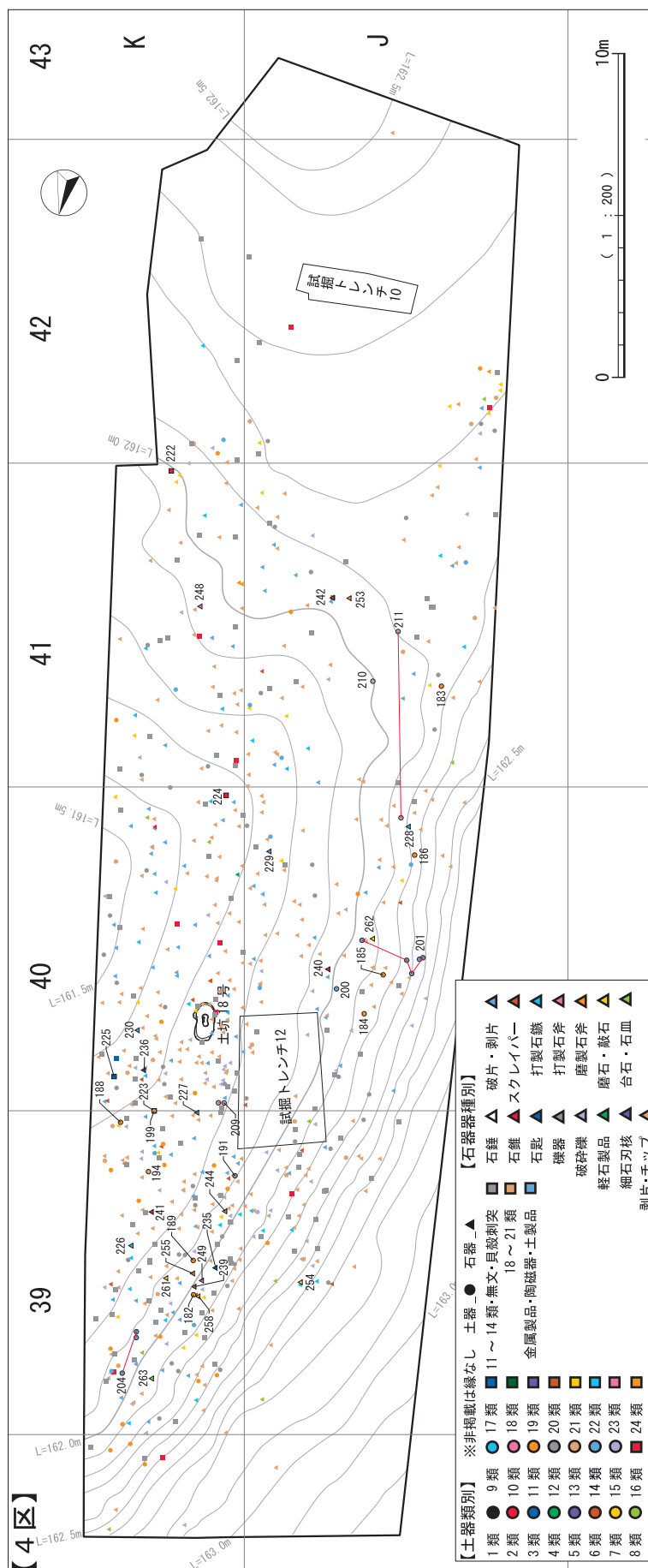
な敲打痕・磨面を有する磨石・敲石である。123は中央が直径2cm、深さ5mmほど凹む凹石である。

(2) 土坑

土坑が5基検出された。2基は、土坑内に石皿・台石が含まれていた。

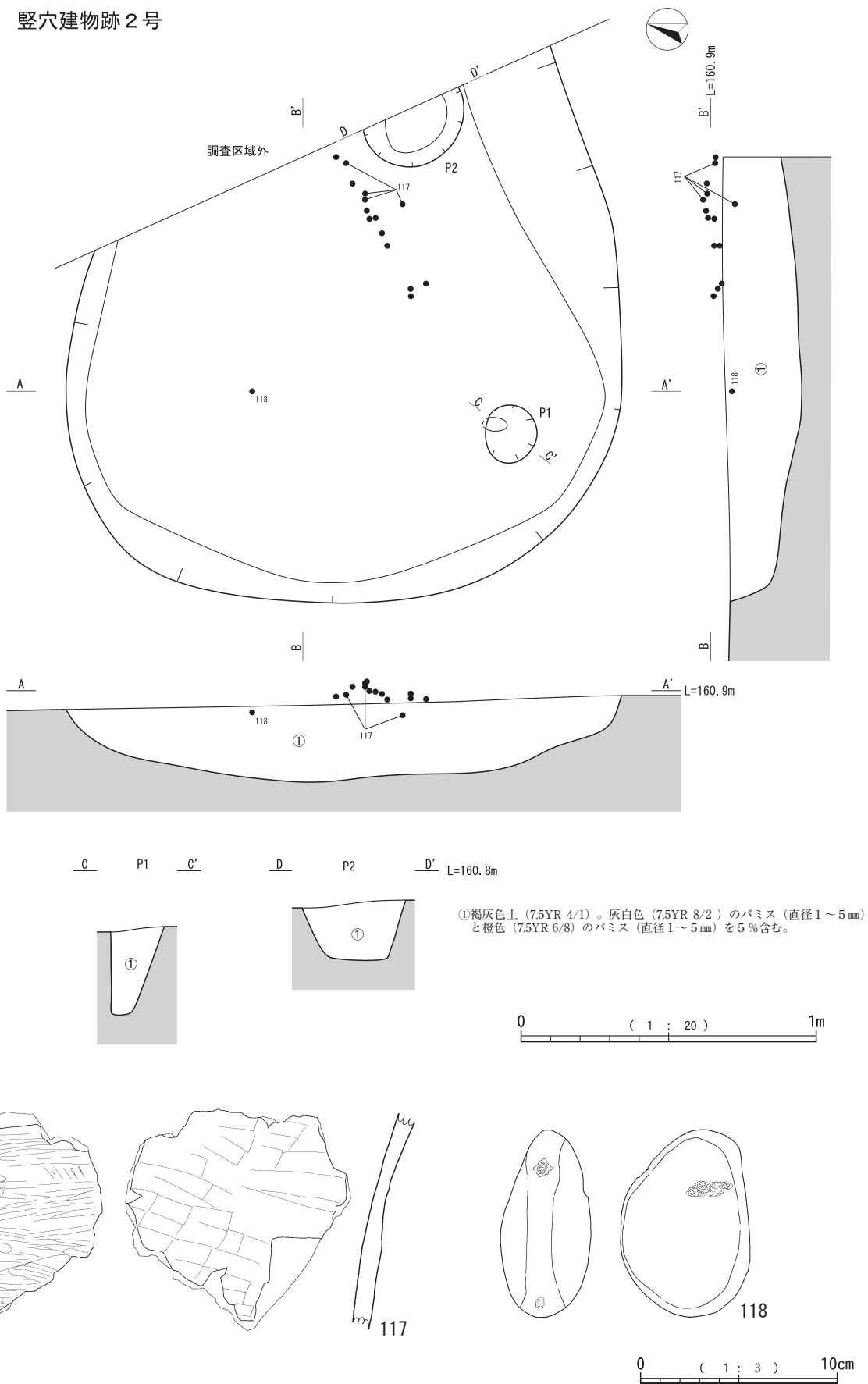
土坑14号 (第32図)

K-27区VI層上面で検出された。VI層は縄文時代早期の包含層である。本遺構周辺はIV・V層の堆積が薄く、VI・Ⅲ層が黒褐色土で色調が似て違いが不明瞭で、掘り過ぎて検出した可能性がある。またほかの土坑より浅く、掘込み面が本来はより高い位置にあったと推察されること、同様な特徴の土坑15号がⅢ層で検出されたことから、当該期の遺構の可能性で報告する。平面プランは、34cm(下半不明)×32cmで深さは検出面から15cmで

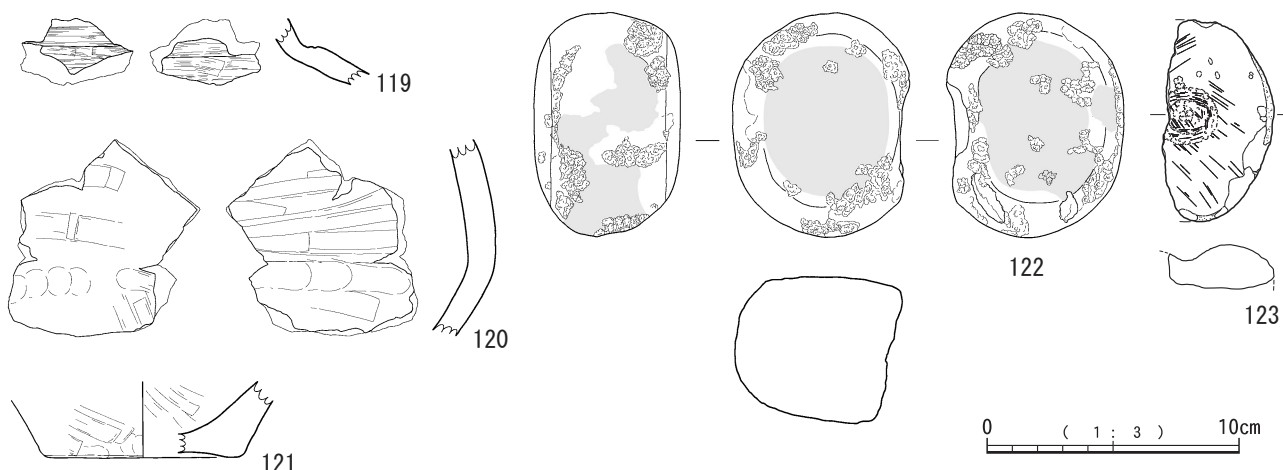


第28図 縄文時代後期～弥生時代の遺構配置図・遺物出土状況図 (3・4区)

豎穴建物跡 2 号



第29図 竪穴建物跡2号



第31図 竪穴建物跡3号内遺物

あった。埋土内に石皿・台石が1点含まれていた。石皿・台石と土坑幅がほぼ同一で、石皿・台石の大きさに合わせて掘り込んだと推察される。124は最大長34.2cm、最大幅27.6cm、最大厚10.0cmの石皿・台石である。表面全面が磨面を呈し、中央は大きく長楕円状に凹み、砥石の機能も推察される。

土坑15号（第32図）

K-31区Ⅲ層上面で検出された。遺構と認識せず掘り進めたところ、石皿・台石2点を検出した。石皿・台石を含む土坑14号の例に鑑み、土坑と判断した。地山のⅡ・Ⅲ層と埋土が黒色・黒褐色土で色調が酷似し、掘り過ぎて検出が遅れた可能性が高い。なお、同様な土坑14号は比較的近い場所で検出された。埋土内には、縄文時代後期の土器小片が含まれていた。125は石皿・台石である。磨面を有し、中央が大きく凹み、部分的に敲打痕が捉えられる。126も平滑な磨面の周縁に敲打痕を有する石皿・台石である。

土坑16号（第33図）

K-31区Ⅴ層上面で検出された。平面プランは98cm×100cmで、深さは検出面から49cmであった。Ⅳ層掘削後すぐに捉えていたが、隣接の樹木の横転と同一と誤認識し掘り進めた。樹木横転の痕跡が消え輪郭が顕現して、土坑と認識できた。埋土にⅣ層主体のⅢ層が混ざり、本来の掘込み面はⅣ層上面と考えられる。床面に逆茂木痕は検出されなかったが、形状や本来の深さを勘案すると、落とし穴の可能性がある。127は13類で、口縁部外面はわずかに凹みが巡らされるが、明瞭な凹線文には至らない。口唇端部を舌状に仕上げる。口縁内面にはわずかな窪みを巡らせ、明瞭な段を成す。128は、外面は縦方向の丁寧なナデ及びミガキを、内面は主として横方向の丁寧なナデに、部分的にミガキを施す胴部片である。129は浅鉢の口縁部片と思われる。口縁端部は舌状に仕上げ、口唇部内面は明瞭な段を成す。外面には丁寧なミ

ガキ調整、内面は丁寧な工具ナデ調整である。130は深鉢の底部である。131は浅い敲打痕を有する磨石・敲石である。

土坑17号（第33図）

K-32区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは56cm×72cmで、深さは検出面から66cmであった。半分ほどは、調査区外に及ぶ。調査区外の壁面上に、検出面より高い位置で埋土が確認され、本来の構築面は52cmほどである。西側に接するピット276号に切られる。

土坑18号（第34図）

K-40区Ⅵa層上面で検出された。埋土にⅣ層が含まれることから、長楕円状の形態や深さも勘案して、本来の構築面はⅣ層以下の当該期の遺構と判断した。平面プランは長楕円状の66cm×114cmで、土坑の深さは検出面から45cm、逆茂木痕の深さは床面から40cmであった。床面中央に、近接する2つの逆茂木痕が一体化したと推察される上面観が瓢箪状のピットが検出され、落とし穴の可能性を示す。

（3）ピット（柱穴）

本遺跡では、ピット43基が検出された。P.27「（5）ピット（柱穴）」の項に示す理由により、本稿では、埋土内に遺物を伴わないピット（柱穴）は、遺構配置図をもって平面図とし、断面図は省略する。

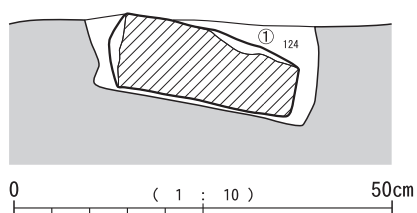
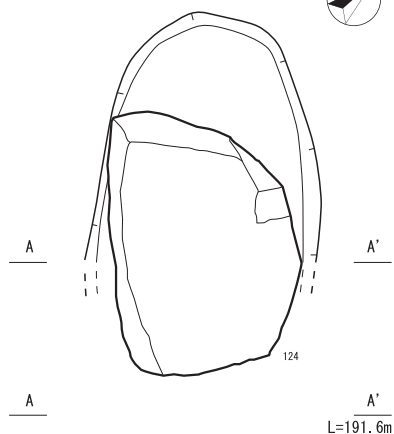
ピット12号（第34図）

F-12区Ⅳb層上面で検出された。平面プランは28cm×32cmで、深さは検出面から58cmであった。132は口縁を舌状に仕上げ、口唇部の内面側に明瞭な凹みを巡らせ段を成す。丁寧なナデ調整の浅鉢15類である。

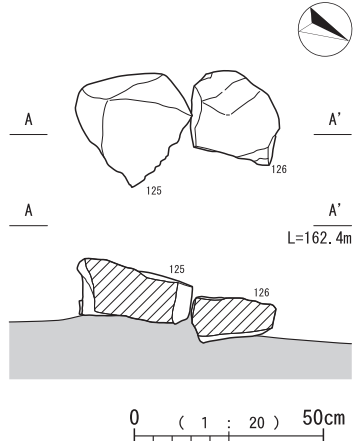
ピット149号（第34図）

K-29区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは120cm×140cmで、深さは検出面から113cmであった。打製石斧が埋土内に直立して出土し、意図的に入れ込んだ可能性がある。133は扁平なラケット形の打製石斧で、刃部を

土坑14号

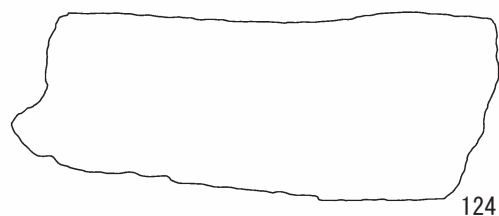
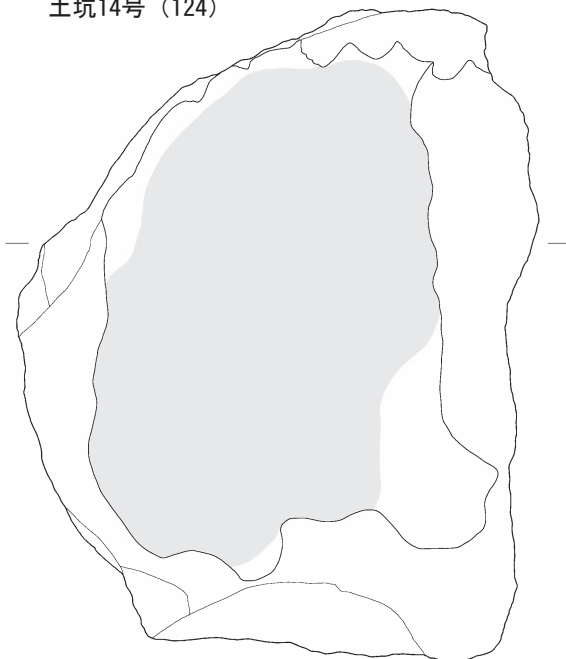


土坑15号

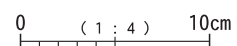
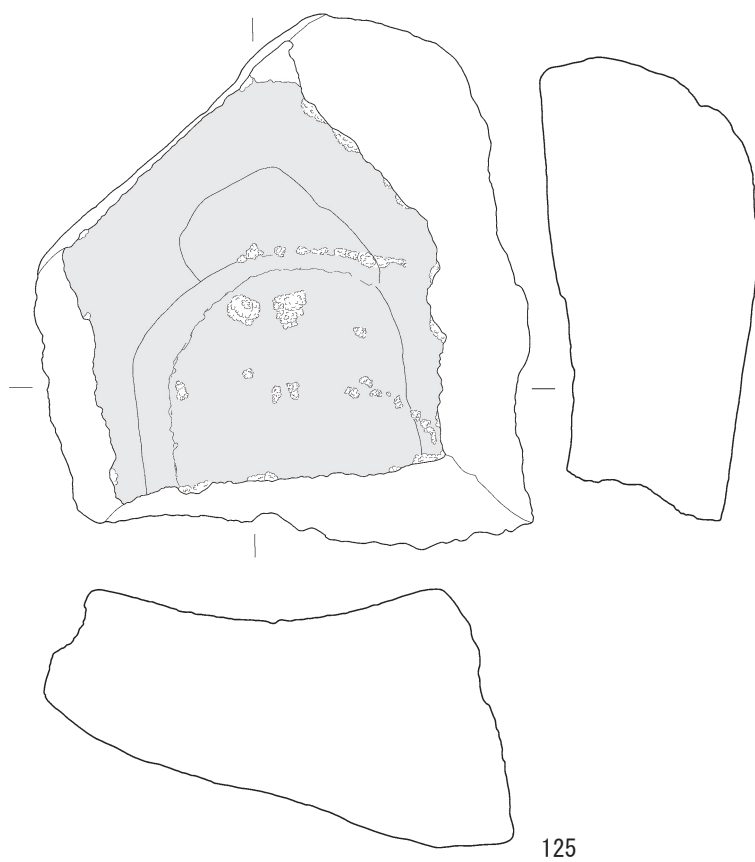


①黑色土 (7.5YR 2/1)。

土坑14号 (124)

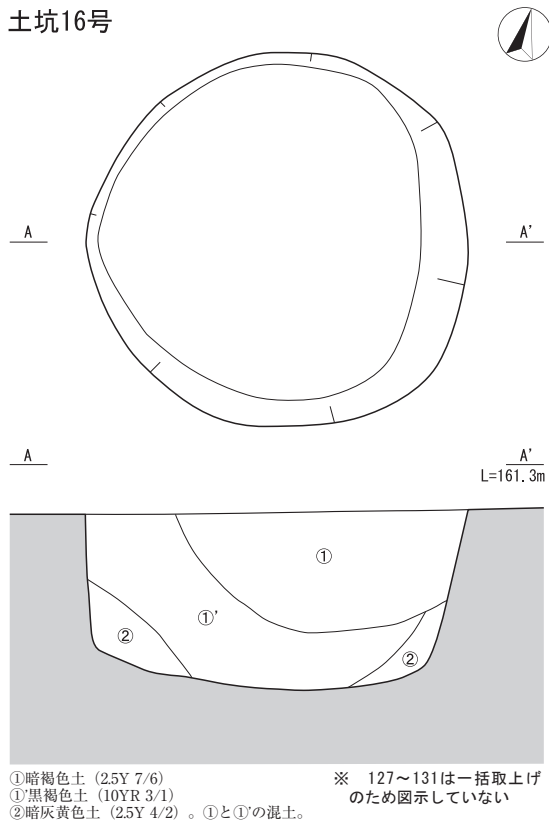


土坑15号 (125 · 126)

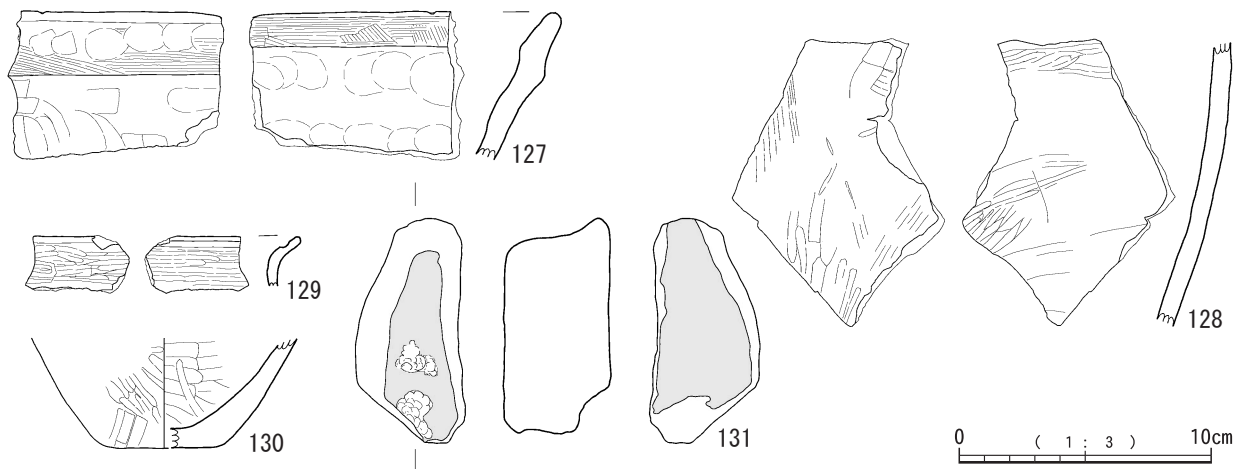


第32图 土坑14 · 15号

土坑16号

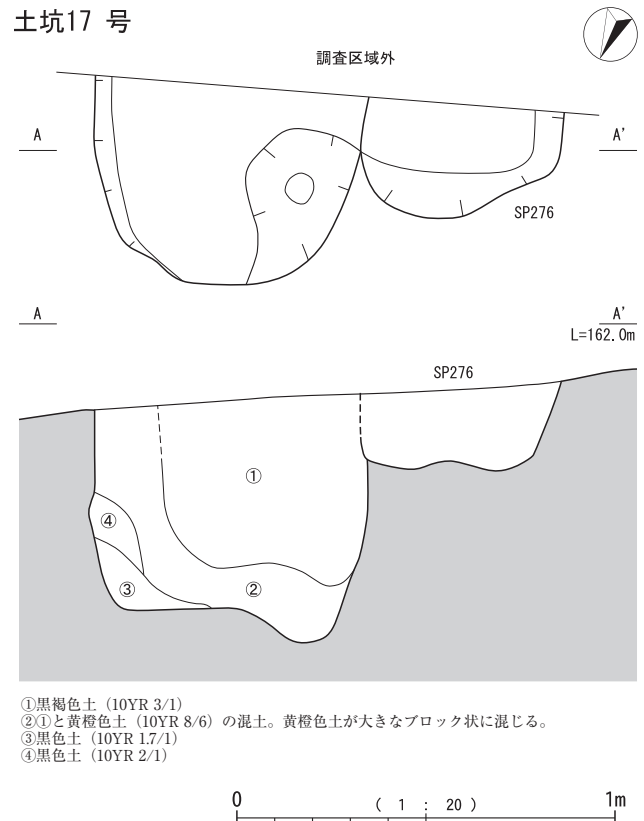


土坑16号 (127・128・129・130・131)



第33図 土坑16・17号

土坑17号



ナデ調整である。

ピット289号 (第34図)

K-30区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは34cm×35cmで、深さは検出面から40cmであった。136は13類で、口縁部下位外面に2条の沈線を施す。内外面には丁寧な工具ナデや一部ミガキ調整がされている。

ピット309号 (第34図)

K-31区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは20cm (トレンチに切られる) ×35cmで、深さは検出面から24cmであった。西側半分は試掘時のトレンチで削平を受ける。埋土の上半に土器小片が多数含まれ、半分ほど埋も

大きく欠損する。

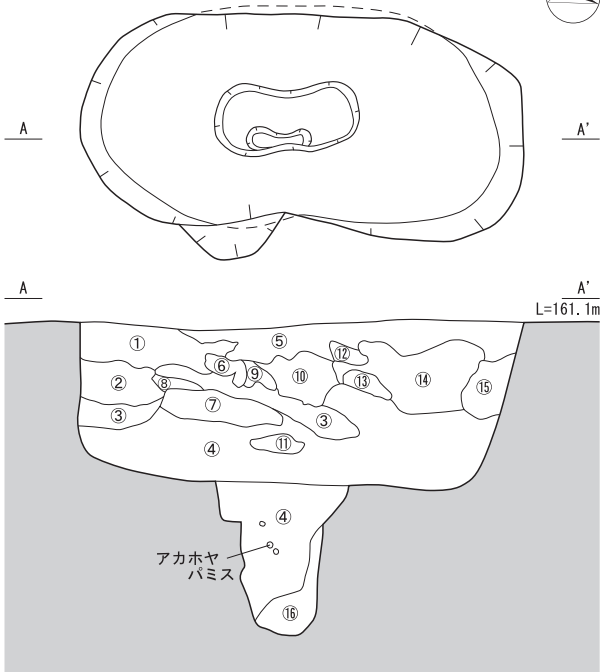
ピット99号 (第34図)

K-29区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは30cm×64cmで、深さは検出面から32cmであった。134は扁平な自然礫の側面に浅い敲打痕を有し、表面が磨面を呈する。

ピット285号 (第34図)

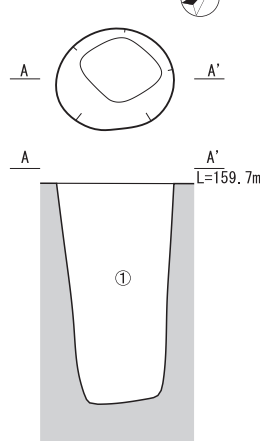
K-30区Ⅳa層上面で検出された。平面プランは44cm×49cmで、深さは検出面から76cmであった。埋土①が壁面にへばりつくことから柱痕の可能性もある。周囲には、柱穴が無数に検出されたが並ばなかった。135は丁寧な

土坑18号



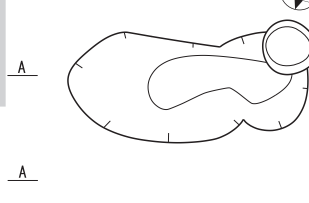
- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (10YR 8/1) のバミスを30%程含む。黒色土 (7.5YR 2/1) も混じる。
 ②褐色土 (7.5YR 4/4)。黄褐色 (10YR 8/8) のバミスを少量10%程含む。
 ③極暗褐色土 (7.5YR 2/3)。黄褐色 (10YR 8/8) のバミスを30%程含む。
 ④黄褐色土 (10YR 4/3)。黄褐色 (10YR 8/8) のバミス (直径1～2mm) を少量10%程含む。
 ⑤にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)。にぶい黄褐色 (10YR 6/4) のバミス (直径1～5mm) を少量10%程含む。
 ⑥黄褐色土 (10YR 5/6)。ブロック状を呈する。
 ⑦黒褐色土 (10YR 3/2)。灰白色バミス (10YR 8/1) を少量10%程含む。
 ⑧にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)。
 ⑨⑥をベースに、黒色土 (7.5YR 2/1) がまだらに入る。
 ⑩⑤をベースに黄褐色土 (10YR 5/6) がラミナ状に入る。
 ⑪黒褐色 (7.5YR 3/2)。灰白色バミス (10YR 8/1) と黄褐色バミス (10YR 8/8) がそれぞれ10%程混じる。
 ⑫にぶい黄褐色 (10YR 6/4) がブロック状に堆積する。
 ⑬明褐色土 (10YR 6/6) がブロック状に堆積する。
 ⑭黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色バミス (10YR 8/1) を20%程含む。
 ⑮褐色土 (7.5YR 4/3)。
 ⑯灰黄褐色土 (10YR 4/2)。全体的ににぶい黄褐色土 (10YR 8/4 アカホヤ火山灰) のにじみがブロック状に (均一化せずに) 混じる。

ピット12号



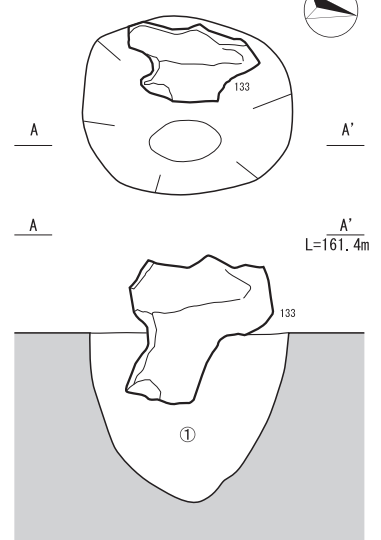
- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。灰白色 (10YR 8/1) のバミスを30%程含む。黒色土 (7.5YR 2/1) も混じる。

ピット99号



- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や黄褐色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径1～5mm) を1%程含む。締まり強い。

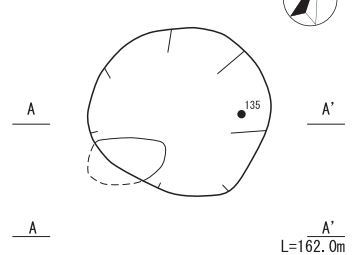
ピット149号



- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や黄褐色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径1～5mm) を1%程含む。締まり強い。

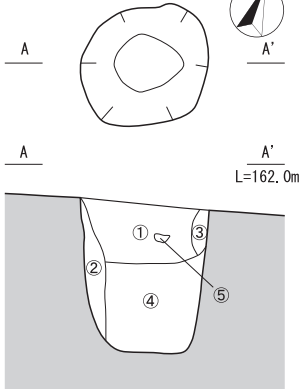
ピット149号
(1 : 5) 20cm

ピット285号



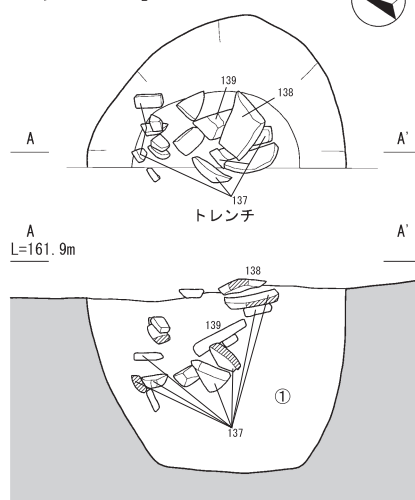
- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や黄褐色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径1～5mm) を1%程含む。締まり強い。

ピット289号



- ①黒褐色土 (10YR 3/1)。ブロック状に締まりあり。粘性なし。にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) が所々ブロック状 (直径1～2cm) に不定形に含まれる (密度20%)。黄褐色バミス (10YR 7/8) が所々含まれる (直径2.3mm。密度1%)
 ②にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)。ブロック状に締まりあり。粘性なし。
 ③にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)。締まり弱い。黒褐色土 (10YR 3/1) が層的に、もしくはブロック状に (1cm～3cm) 含まれる (密度3%)。
 ④暗褐色土 (10YR 3/3)。締まり弱い。粘性なし。皿層由来か。橙色バミス (7.5YR 6/8) を含む (密度2%)。
 ⑤明黄褐色土 (10YR 6/8)。

ピット309号



※137は断面ラインより手前だが断面位置を示すために図示した

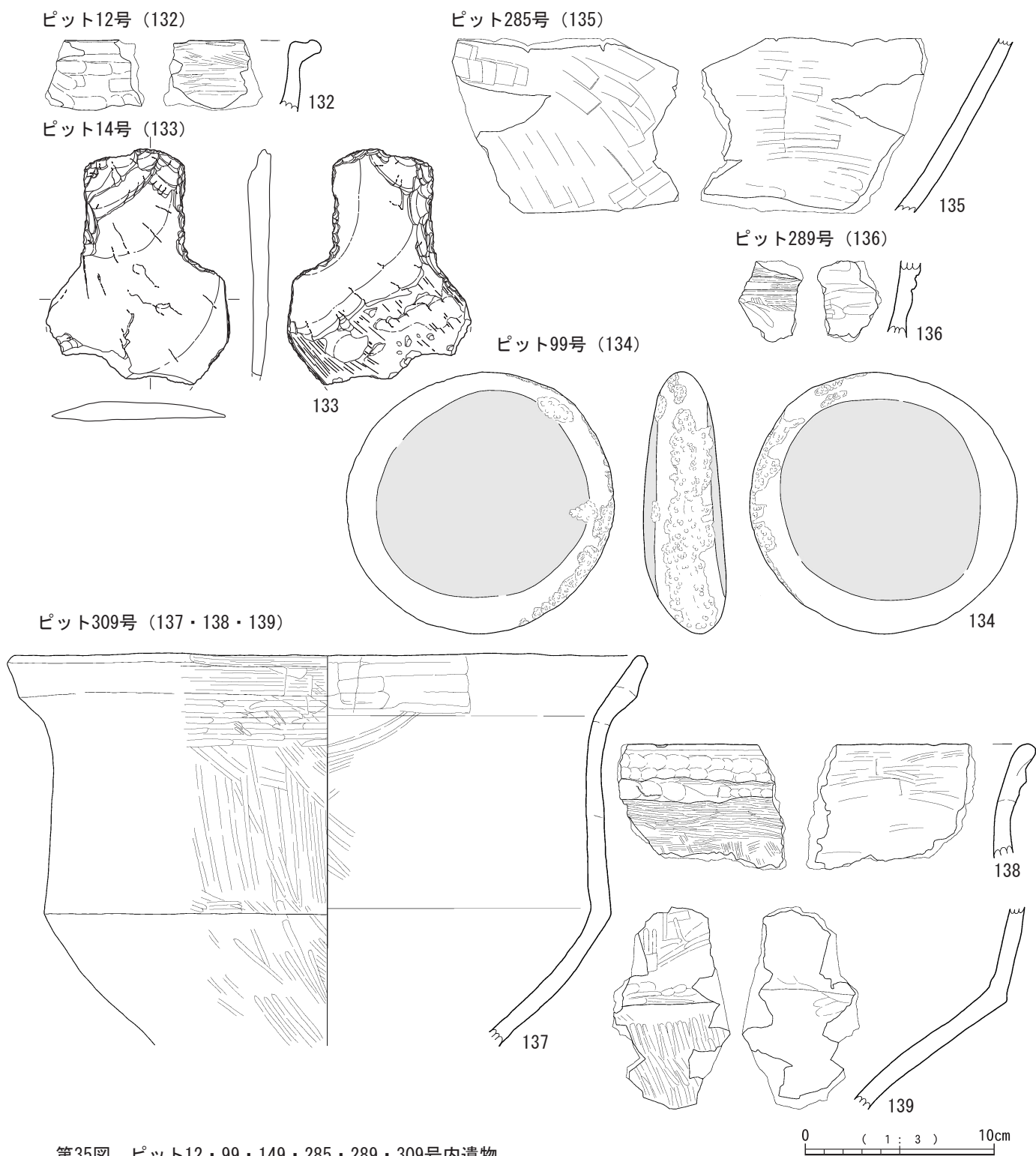
- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や黄褐色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径1～5mm) を1%程含む。締まり強い。

ピット309号
(1 : 10) 50cm

- ①黒褐色土 (10YR 3/1)。ブロック状で締まりあり。粘性なし。②にぶい黄褐色土 (10YR 5/3) が混土し、②よりやや明るく、やや締まりが弱い (密度40%)。黄褐色バミスが含まれる状況は②に同じ。
 ②黒褐色土 (10YR 5/3)。ブロック状で締まり強い。粘性なし。黄褐色バミス (10YR 7/8) が所々に含まれる (直径2.3mm。密度1%)。
 ②'にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)。締まり強い。粘性なし。
 ②''にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)。締まり強い。粘性なし。
 ③暗褐色土 (10YR 3/3)。締まり弱い。粘性なし。橙色バミス (7.5YR 6/8) を含む (密度5%)。

(1 : 20) 1m

第34図 土坑18号・ピット12・99・149・285・289・309号



第35図 ピット12・99・149・285・289・309号内遺物

れた後に、意図的に廃棄した可能性が高い。137は13類で、口縁部は指ナデ調整、胴部はミガキ調整である。口縁部の中央がわずかに凹みを呈し、微妙に凹線状を呈する箇所もある。138は特徴が137と似る。口縁部の指頭押圧による凹みと胴部のミガキが顕著である点がやや違いがあるが、部分的な違いによる差異と見る。139は13類で137・138と同一個体の可能性が高い。

(4) 遺物集中

本遺跡では、遺物集中が4か所検出された。

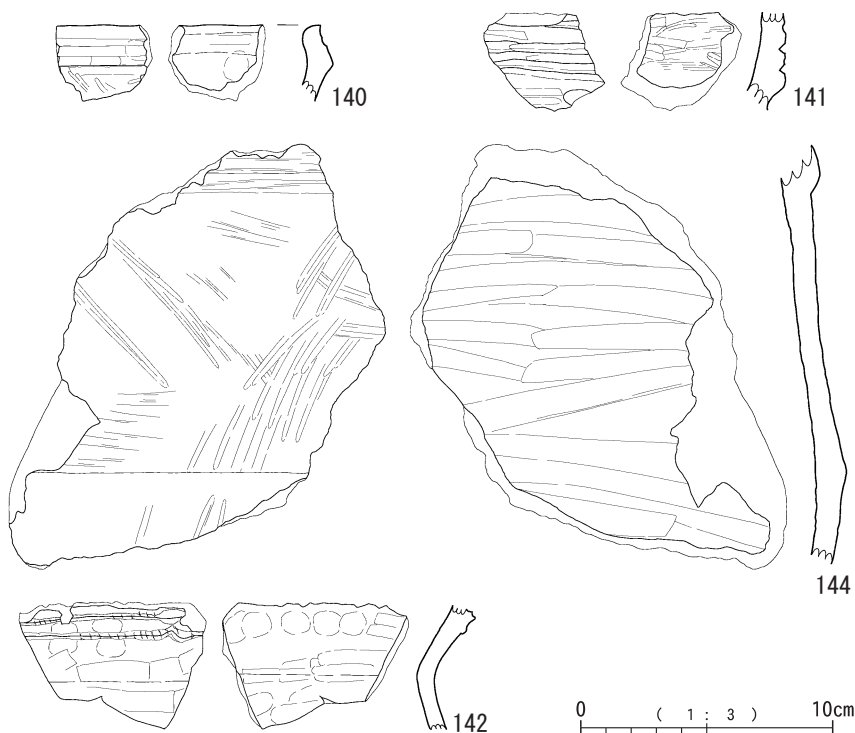
遺物集中2号 (第36図)

K-28区V層上面で検出された。縄文時代早期の包含層であるが、本遺構周辺はIV層の堆積が薄く、Ⅲ層とV層の違いが認識しにくい。そのため、遺物で時代を確認して当該期の遺構と判断した。遺物は17.8m×26.2mの

遺物集中 2 号

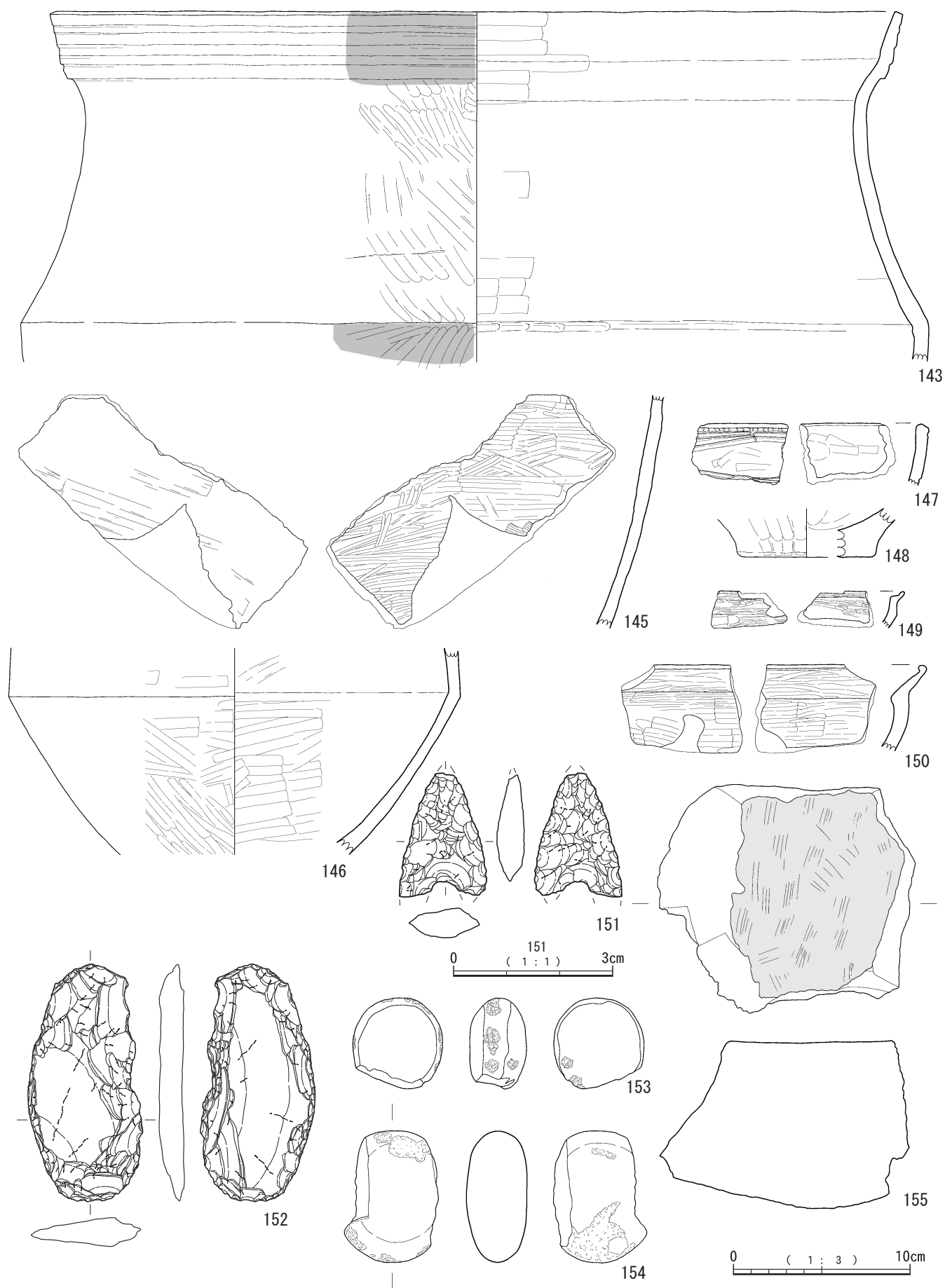


※ 149・151は一括取上げのため図示していない
 ・(ドット)は炭化物を示す。化学分析の番号は「PLD-」を省略して記載。



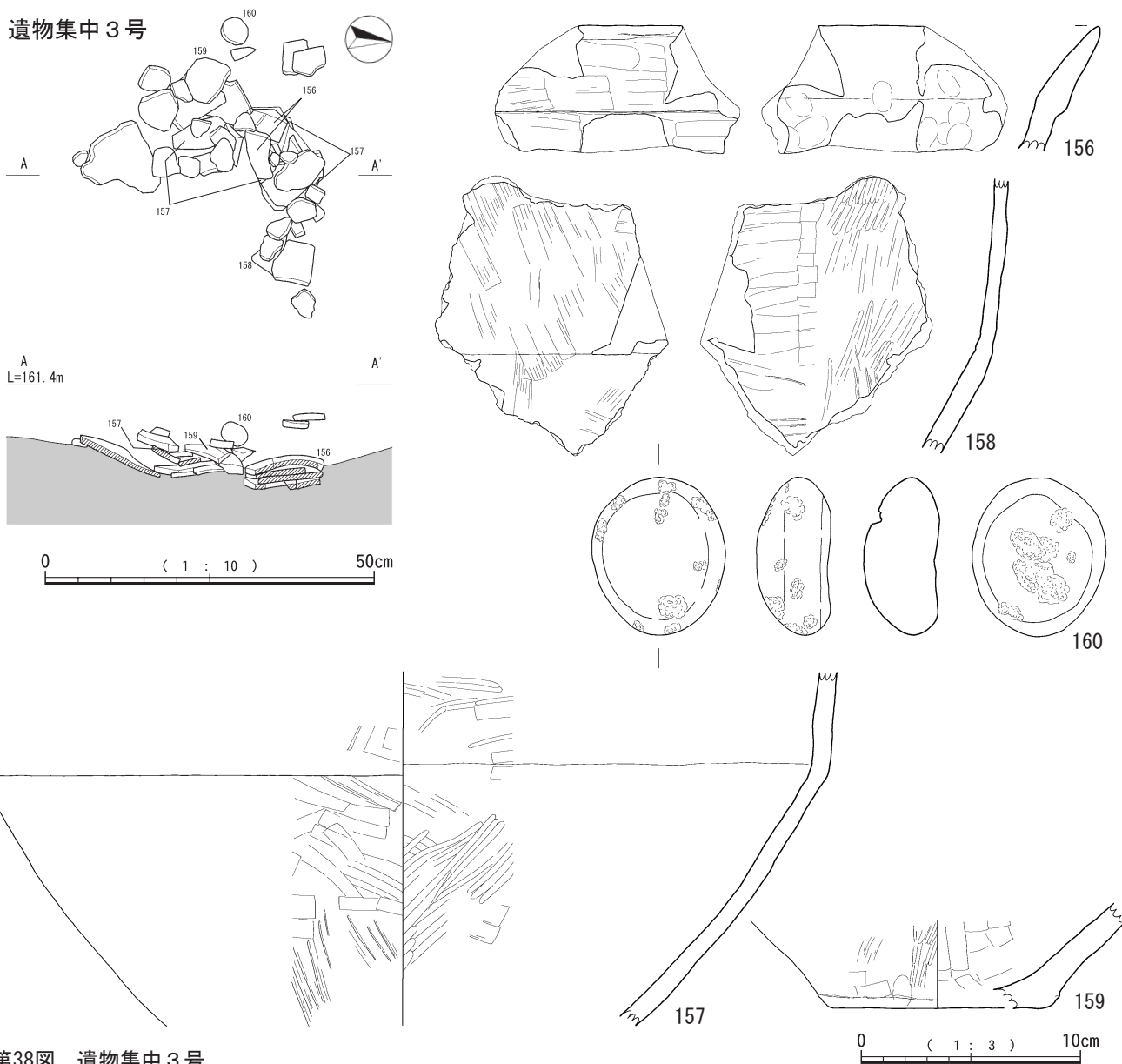
範囲に、一部集中を捉えられる箇所はあるものの、全体的には土器片が散在して検出された。掘込みは確認されなかった。なお、本遺構を掘り下げた後、直下から遺物集中 3 号と集石 8 号（縄文時代早期）は検出され、時期差が捉えられた。遺物は、115 点中 16 点を図化した。図化しないが、本遺構内土器（11～14 類）の胴部外面の付着炭化物（試料 3 PLD-51348）の年代測定の結果、 $2998 \pm 21 \text{yrBP}$ の値が出た（P.91 第 13 表参照）。140 は 12 類で、口縁部に極浅の 2 条の凹線が、141 は 3 条の凹線が巡る。丁寧なナデ及びミガキ調整である。142 は 13 類で口縁上端が欠損する。幅 1 cm 程の凹線文が少なくとも 2 条入る。一周する凹線が左右両方向から山形を成し、突起状に先端を成す。143 は 13 類で、口縁部を凹

第 36 図 遺物集中 2 号



第37図 遺物集中2号内遺物

遺物集中 3 号



第38図 遺物集中 3 号

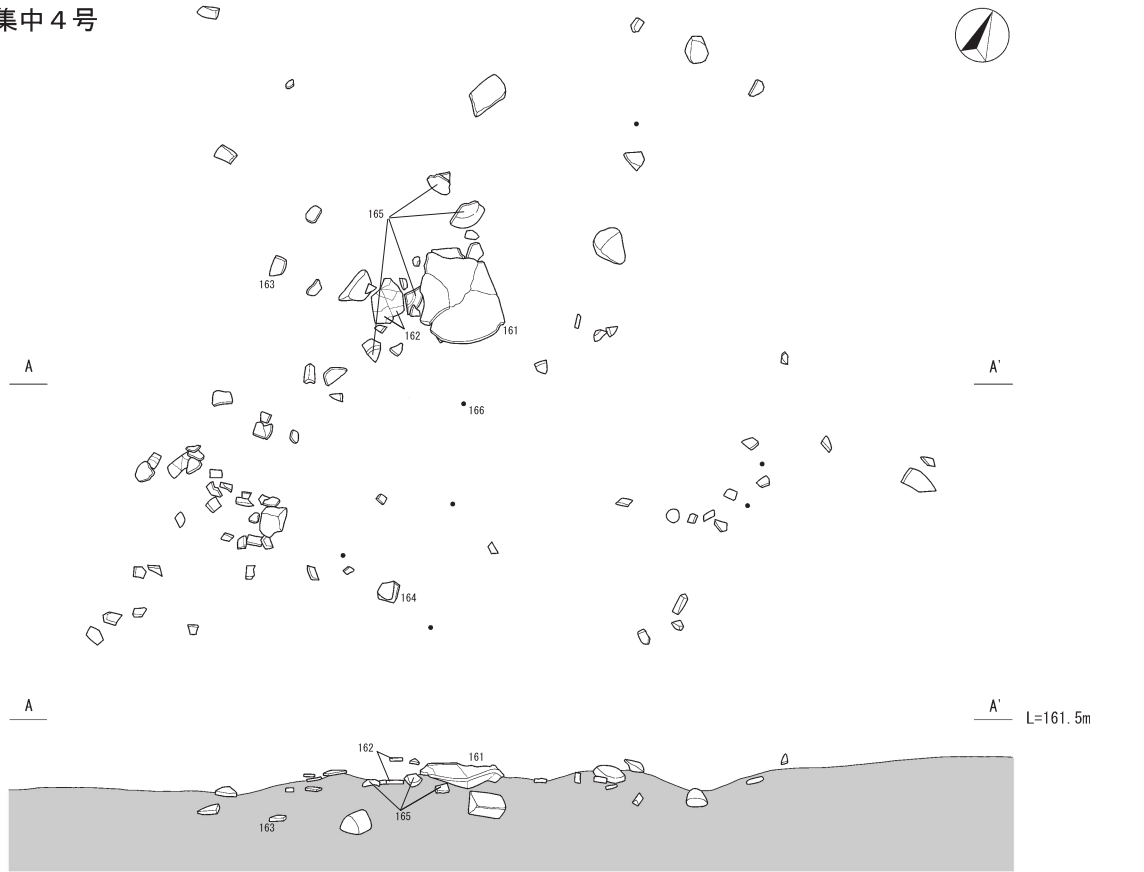
線が4条巡る。口縁部内面は下端で段を、頸部上位で緩やかな稜を、肩部では明瞭な稜を成す。一部ヘラミガキを含む丁寧なナデ調整である。144は口縁部下位がわずかに残存する。胴部全体の器形から12類の可能性はある。143と酷似するが、肩部から口縁部までの長さが異なり、同一個体と見なせない145・146は、143や144とミガキ調整や胎土、色調など酷似し、同一個体の可能性が高い。なお、146は遺物集中2号の埋土内土器片と接合し、遺物集中2号と3号は、近い時期の遺構の可能性を示す。147は14類で、口唇部直下に、並行する2・3条の沈線を、恐らくは弧状に巡らせる。148は、やや高台を呈し、平底（微妙に上げ底気味）である。149は15類（浅鉢）の黑色磨研で丁寧にミガキを施す。口縁部外面がややくの字に肩部を有する。口唇端部は外に張り出し、口唇部に段をもつ。150は15類（浅鉢）である。肩部は持たない弯状の器形である。口唇部と口縁部内面の境に明瞭な段を形成する。口縁部内面がやや内側に張り出し、胴部内面と

の境に明瞭な稜を有する。内外面ともに、丁寧なナデ及びミガキ調整である。151は打製石鏃Ⅲ類で、尖端部が欠損する。152は、側縁上位にわずかに挟りが捉えられ打製石斧としたが、表面左側を刃部とする横刃形石器の可能性もある。153・154の磨石・敲石は比較的明瞭な敲打痕を有し、154の敲打痕は浅い。153は平面では古道3号に重なるが、断面上遺物集中2号に含まれる。155の石皿・台石は、全面が磨面で、表面は完全な平滑でなく、集中的に磨ってできた微妙な面的な傾斜を成す。

遺物集中 3 号（第38図）

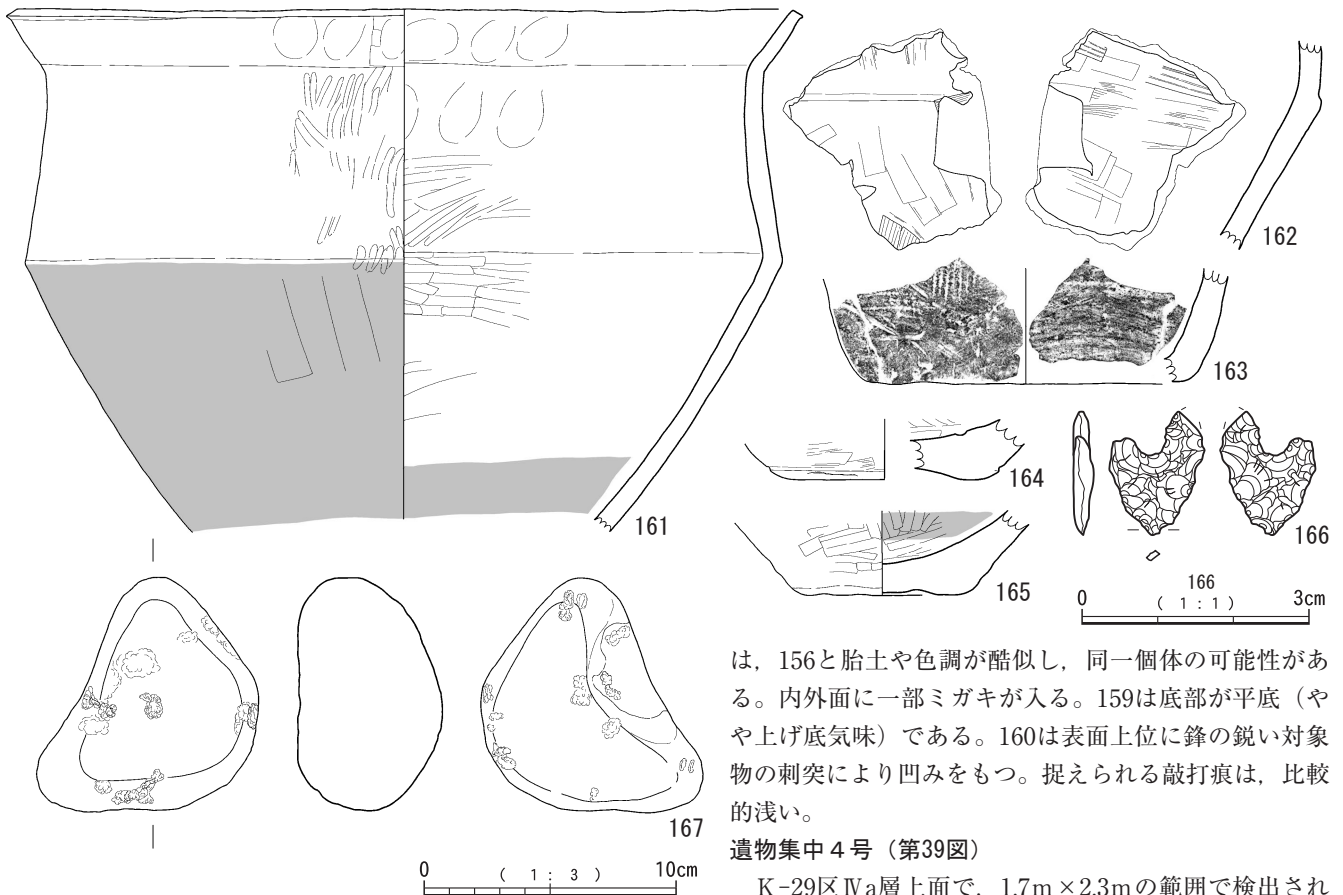
K-28区V層上面で、45cm×39cmの範囲に集中して検出された。掘込みは確認されなかった。土器集中2号を掘り下げた後、直下から本遺構と集石8号（縄文時代早期）が検出され、遺物集中2号以前の形成時期が明確である。埋土内遺物の30点中5点を図化した。156は口縁部が幅4.5cmの肥厚帯を成し、頸部境に段を成す13類である。口唇部はやや尖らし気味に仕上げる。157・158

遺物集中4号



※ 167は一括取上げのため図示しない

0 (1 : 20) 1m



は、156と胎土や色調が酷似し、同一個体の可能性がある。内外面に一部ミガキが入る。159は底部が平底（やや上げ底気味）である。160は表面上位に鋒の鋭い対象物の刺突により凹みをもつ。捉えられる敲打痕は、比較的浅い。

遺物集中4号（第39図）

K-29区Ⅳa層上面で、1.7m×2.3mの範囲で検出され

第39図 遺物集中4号

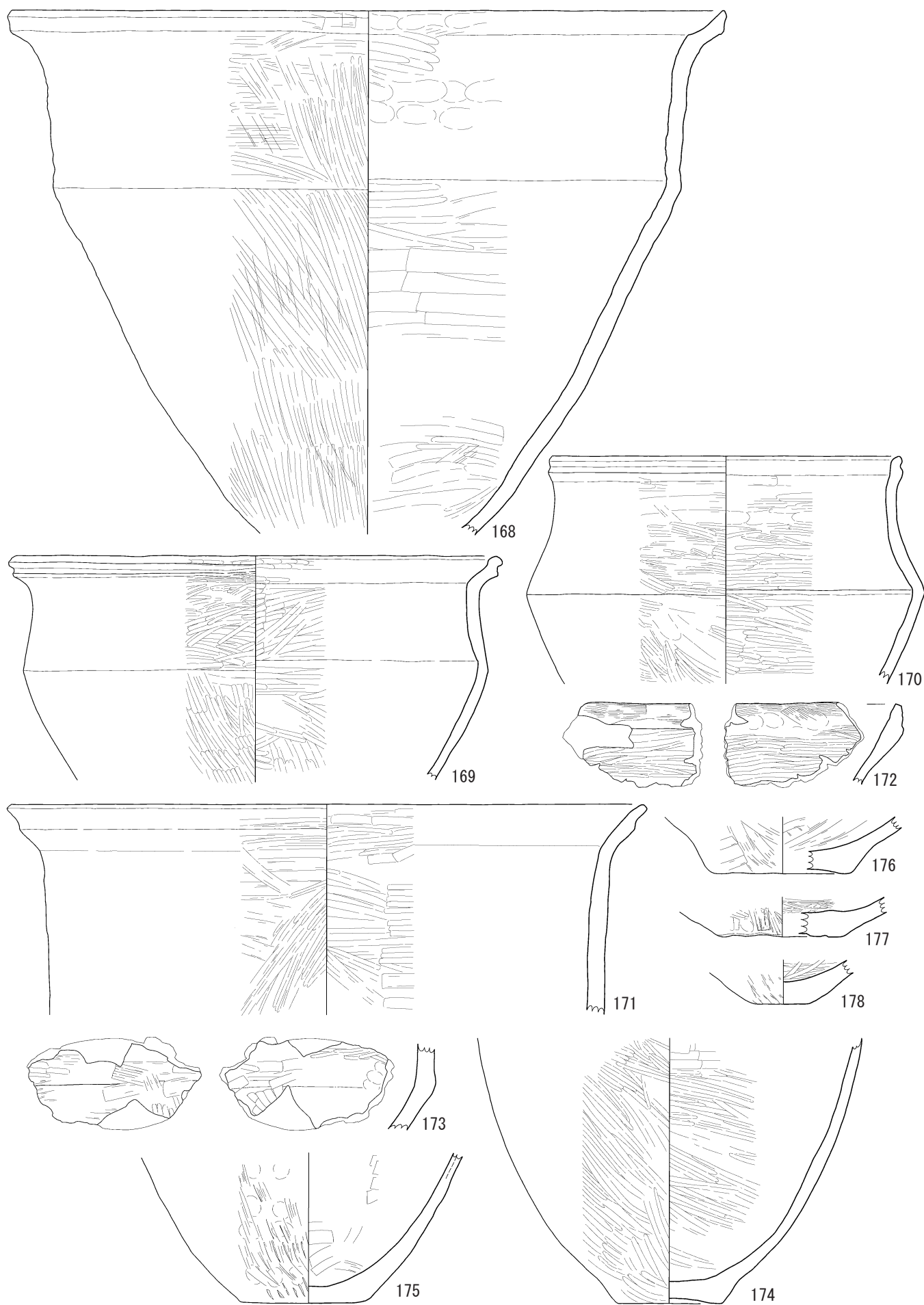
遺物集中5号



第40図 遺物集中5号

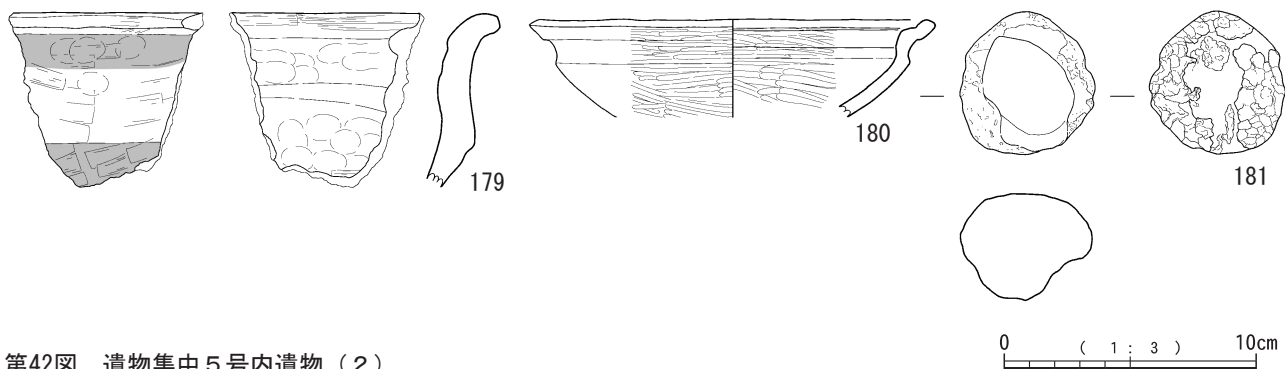
た。1個体が破損して散在する状態で検出された。掘込みは確認されなかった。遺物は、87点中7点を図化した。図化しないが、本遺構内土器の胴部外面の付着炭化物（試料4 PDL-51349）の年代測定の結果、 $3014 \pm 20\text{yrBP}$ の値が出た（P.92第15表参照）。161は無文であるが器形的には13類に相当する。ミガキや丁寧なナデ

（特に、内面の肩部以下）により光沢をもつ。頸部及び肩部以下に煤が付着する。162はやや肩部が張り出し、段を成す。163は場所により底部立ち上がりやや屈曲を成す。やや上げ底の可能性がある。164・165は底部外面が幅1.3cmほどの蛇の目敲打状で、その内側が上げ底となる。165は内面胴部に煤が付着する。166は先端部状



第41図 遺物集中5号内遺物(1)

0 (1 : 3) 10cm



第42図 遺物集中5号内遺物（2）

がわずかに凹みを成す石錘である。器形的には打製石鏃Ⅲ類に酷似する。167は比較的浅い敲打痕を有する磨石・敲石である。

遺物集中5号（第40図）

K-31区Ⅲ層上面で、1.7m×1.5mの範囲に検出された。当該期の浅鉢の1個体が潰れた状態で検出された。掘込みは確認されなかった。遺物は、182点中14点を図化した。168は12類で、口縁部は1.7cm幅で、やや断面三角形形状を成し直行する。口縁部にはわずかに凹みを巡らせる。口縁部には、やや浅めの一条の凹線文を巡らせる。外面はミガキ調整で、内面は丁寧なナデにより光沢をもつ。169・170は口縁部の外反の程度は大きく異なるものの、口縁部の傾きで12類とする。内外面ともに丁寧なミガキ調整である。幅1cmの口縁部に一条の深い凹線が巡らされる。169は口唇端部がやや外側に張り出す。171は13類で、1.5cm幅の口縁部に凹みを巡らせる。口唇端部はやや尖り気味の舌状である。口縁部内面はわずかに窪みを呈する。外面のミガキや丁寧なナデ、内面の丁寧なナデにより光沢をもつ。172は頸部が口縁部に向かって外傾する。一段わずかに凹みを呈する口縁部で、明瞭な凹線を施さない。無文である。口唇端部を平坦に仕上げる。外面は頸部以下、内面は口縁部以下、丁寧なミガキ調整である。173はやや肩が張り、部分的にごく緩やかに段を成す。174はやや上げ底で、内外面ともに丁寧なミガキ調整である。175は直径7.5cm、176は8.6cm、

177は7.4cmの平底である。176は微妙に、178はやや上げ底を呈する。176は外面のミガキ、内面の丁寧なナデにより光沢をもつ。178は内面が黒色を呈する。179は13類とするが、浅鉢の可能性もある。丁寧なナデ調整である。器厚が13mmと比較的厚い。頸部上位・肩部以下に煤が付着する。180は15類で、内外面ともに丁寧なミガキ調整である。内面の口唇部と口縁部の境及び頸部と胴部の境を凹ませ明瞭な段を形成し、断面観でクランク状に仕上げる。181は、磨面を呈する器面の側面・裏面を著しく敲打する。特に裏面は欠損、剥離の後も敲打する。

3 遺物

（1）遺物の分類

ア 土器

本項で扱う時代は、縄文時代後期から弥生時代である。縄文時代後期から晩期はⅡc層を、弥生時代から古墳時代はⅡa・Ⅱb層を基本的な包含層と捉えている。しかし、場所によって地層が確認されない、もしくは著しく層厚が薄い場所があることや、黒褐色土と黒色土の色調の分別が困難であることから、包含層を基準としながらも、既知の土器編年の研究成果と併せて、遺物の時期認定は行った。なお、Ⅱa～Ⅱc層中の出土石器は、包含層的には、古墳時代の遺物である可能性もある。しかし、周囲に縄文時代後期から弥生時代の土器が出土した場合は、縄文時代後期から弥生時代に含めて報告することとした。

第6表 土器分類表（縄文時代後期～弥生時代）

※11～13は深鉢形土器・甕を主とし、一部鉢の可能性を含む。土器の類別の出土・掲載点数は文章中に記載（遺構分も含む）。

類	器形や文様、調整等の特徴
11	肥厚する断面三角形形状の口縁部が内傾し、口縁内面に明瞭な段をもつ。頸部の屈曲が強く、肩部が強く張り出し瘤状を呈し、明瞭な稜をもつものが多い。口縁部には1, 2条ほどの凹線（沈線）が巡らされる。中岳Ⅱ式に比定される。
12	やや肥厚、もしくは肥厚しない口縁部がやや内傾、もしくは直行し、内面に明瞭な段や浅い段をもつ。頸部がやや屈曲し、肩部がやや張り出し瘤状を呈する。口縁部には2, 3条の凹線や沈線が巡らされる。
13	やや肥厚する、もしくは肥厚しない口縁部が外反する。口縁内面に緩やかな段をもつ。全体的に頸部の屈曲は弱く、口縁部直下で屈曲し外反する。肩部がやや張り出すものの瘤状は呈しない。口縁部には2, 3条の凹線や沈線が巡らされる。一部無文であるが、器形的に本類に含めたものもある。入佐式（古段階）に比定される。
14	口縁部に凹線や沈線が巡らされず、無文である。器形的には13類に近似するもののほか、口縁部が外反せず、胴部から口縁部にかけて直行するものがある。深鉢・甕のほか、鉢の可能性を含む。
15	浅鉢と考えられる。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に大きく屈曲し直行する。口縁内面は明瞭な段をもつ。頸部が大きく外反する。
16	口縁部上位に刻目突帯を巡らす。刻目突帯文土器に比定される。
17	2.7cm程の幅の口縁部が屈曲を呈し、大きく外反する。山ノ口Ⅱ式土器に比定される。

イ 石器

石器の器種ごとの出土数を、以下に示す。表及び文章中の掲載・出土点数は遺構分を含めた。

(2) 土器

器種	掲載点数	出土点数	器種	掲載点数	出土点数
打製石鏃	10	85	礫器	0	0
石匙	2	2	打斧・礫器の剥片・碎片	0	101
スクレイパー・横刃形石器含む	3	29	磨石・敲石	17	68
石錐	4	5	石皿・台石	7	25
剥片・チップ	0	458	軽石製品	1	5
打製石斧 (欠損含む)	11	77	計	59	870
磨製石斧	4	15			

ア 11類土器 (第43図182～190)

44点中、9点を図化した。182～186は、口唇部を丁寧な平坦面に仕上げる。183～185・187～189は黒色磨研土器であり、本類の黒色磨研土器は6点出土した。182は器面が赤色に発色する。外面は丁寧なナデにより光沢をもち、内面にはハケメを施す。口縁部の台形状の突帯に断面V字状の刻みを施す。187～190は口唇端部を舌状に仕上げる。187は口縁部に2条の浅目の凹線を巡らせる。肩部に沈線により横方向に半円弧文を施文する。188は、口縁部に1条の、頸部下端に2条の凹線を巡らし、その間隙の隆起状の頂部に断面U字状の刻みを施す。4点出土した。肩部以下、煤が付着する。内面は丁寧なナデで光沢をもつ。189は口縁部に一条の凹線を巡らせ、その上位に断面V字状の斜位の刻みを、下位にハの字状に刻みを施す。同様なタイプは3点出土した。190は胎土がにぶい褐色やにぶい橙色を呈し、中九州以北や宮崎県等の胎土に似る。口縁部に工具による断面V字状の沈線を巡らせ、口縁部は丁寧な工具ナデやハケメ調整である。

イ 12類土器 (第43図191～193)

96点中、3点を図化した。191・192は、口縁部に3条の凹線を巡らせる黒色磨研である。191は頸部上面の外反する面に煤が付着する。193は口縁部に沈線が5条巡らされる。明黄褐色の胎土で色調は中九州以北や宮崎的である。胎土は砂粒が入り緻密な作りではない。

ウ 13類土器 (第43図194～199)

43点中、6点を図化した。194・195は黒色磨研土器である。194は口縁部に2条の浅い凹みを巡らす。196は口縁部直下に微隆起突帯を巡らし、口縁部に4条の沈線をやや雑に巡らす。胎土が灰黄色で、やや宮崎の胎土に似るか。197は3条の並行沈線を連弧文状に巡らす。その交点の直上の口唇部に舟底状凹みを施す。この1点のみの出土である。195は口縁部と頸部の境が段を成し、

口縁部が大きく外傾する。外面調整はやや粗雑な工具ナデか、浅い条痕状を呈する。口縁部内面は明瞭な稜を成す。長石や火山ガラスなどが顕著に含まれる。197は復元直径38.4cmで、内外面ともに丁寧なミガキ調整である。199は波状口縁の無文である。浅鉢の波状口縁は小片の為確認できなかった。口縁部がやや肥厚する。器面調整はやや粗雑な工具ナデか、浅い条痕状を呈し、195に似る。

エ 14類土器 (第44図200～207)

39点中、8点を図化した。200～203は黒色磨研土器である。200～205は無文で、口縁部が外反する。ほとんどが、ミガキや丁寧なナデにより光沢をもつ。200は胴部に煤が付着する。203はやや口縁部が帯状にやや肥厚気味で、口縁部内外面ともに、わずかに稜を有する。204はやや小型の深鉢で、胎土に金雲母を含む。205は口縁端部から口唇部にかけて直角に整形され口唇部を丁寧な平坦面に仕上げる。206は粗製で内外面ともに工具ナデ調整である。207は小型の深鉢で、底部を上げ底に仕上げる。本類の小型深鉢は、1点のみの出土である。

オ 15類土器 (第44図208～213)

14点中、6点を図化した。208～210は口縁部に2・3条の凹線を巡らす黒色磨研土器で、211・212も同様に黒色磨研土器の頸～肩・胴部である。208は頸部上半に煤が付着する。210は頸部が大きく外傾するが、おそらく肩部を持たずそのまま底部に至ると推察される。209は口縁端部が外に張り出す。213は口唇部外端に指頭押圧状の刻みが1か所捉えられる。口縁内面には明瞭な段を有し、口縁部内面も明瞭な稜をもつ。丁寧なミガキ調整である。このタイプはこの1点のみの出土である。212は底部が丸底である。

カ 頸部・肩部 (第45図214)

120点中、1点を図化した。214は、肩部が張り出すが、肩部と頸部の境目が段を呈しない。頸部下位に2条の凹線を巡らせ、部分的に斜位にヘラで掻き取ったような刻みが施される。外面は、明赤褐色の丁寧なハケ目状のミガキを施す。

キ 底部 (第45図215～220)

88点中、6点を図化した。215の底部の立ち上がり付近は丁寧なミガキで、胴部や内面は丁寧なナデにより光沢をもつ。216はわずかに上底を呈する。217は内面に煤が付着する。218は内外面ともに丁寧なナデにより光沢をもつ。219は底部が高台状で、底部外端を外側に摘み出し、やや上げ底を呈する。丁寧なナデにより光沢をもつ。220は底部がやや高台状を呈し、底部外面に組織痕が捉えられるのは、この1点のみである。

ク 16類土器 (第45図221～224)

18点中、4点を図化した。221は口縁上端より5mmほど下位に、貝殻復縁刺突による刻目突帯を巡らせる。外



第43図 縄文後期～弥生時代土器11～13類

面に顕著に煤が付着する。222は、口縁部が内傾し、口唇端部に細いヘラ刻みを巡らし、口縁部下半に無刻突帯で半円弧状の、おそらくは連弧文を巡らせる。223は口唇端部に細いヘラ刻みを巡らし、口縁部には縦位の刻目突帯文が捉えられる。口縁部に横位と縦位の刻目突帯で四角形状を作出するタイプと考えられる。胴部上半に、

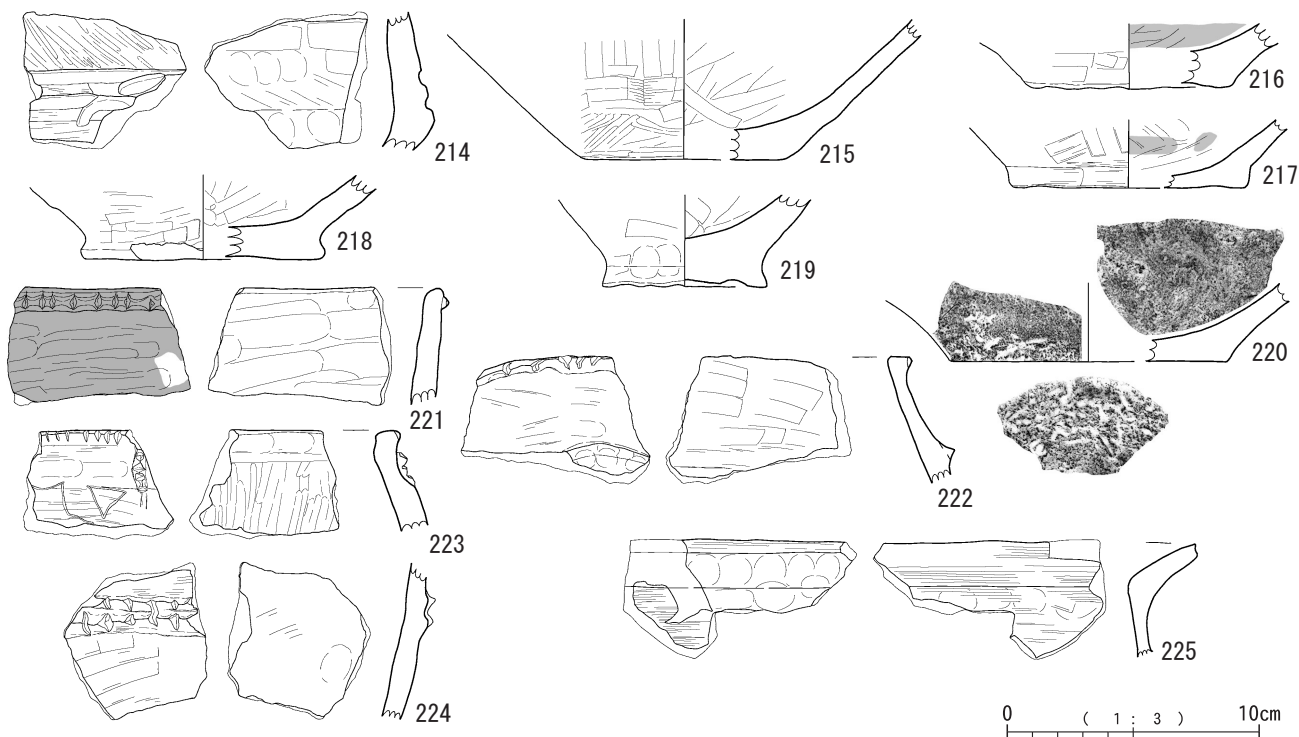
逆位の三角形や相対する弧状の文様が捉えられる。224は断面V字状の2条の刻目突帯を巡らせる。

ケ 17類土器（第45図225）

2点中1点を図化した。225は口縁部が大きく外側に張り出す。口唇部幅が9cm程と幅広である。内外面ともにハケ目状の丁寧な工具ナデである。



第44図 縄文後期～弥生時代土器14・15類



第45図 縄文後期～弥生時代土器頸部・底部・16・17類

(3) 石器

ア 打製石鏃 (第46図226～234)

打製石鏃Ⅰ類 (第46図226～229)

本類は、脚部に半円弧状のやや浅めの抉りを有する凹基鏃である。脚部の左右両端は、やや鋭く尖る。6点出土し、4点を図化した。226・227は、脚部が尖り気味に仕上げられ、基部が丁寧な弧状に作出される。227は安山岩A類で摩滅しやすいためか、表裏面の中央を縦方向の稜の複数及び表面の脚端部の稜などに微細な摩滅が捉えられる。228・229は、左右両側縁が尖端に向けて内湾し丸みを帯びる。228は、正三角形の器形である。229は珪藻土製で、極めて軟質である。珪藻土は、県内では国分層群に見られる土層である。裏面右側に斜方向の擦痕を主とし、縁辺に直交する方向に擦痕が随所に捉えられ、整形に伴う磨き痕とも考えられる。

打製石鏃Ⅱ類 (第46図230～233)

本類は、脚部に半円弧状のやや深い抉りやU字状の抉りを有する凹基鏃である。4点出土し、図化した。

230は両側縁が尖端に向けて内湾し弧状を描く。表面右脚端部は先端が方形に仕上げられている。表裏面の稜や尖端部に、微細な摩滅が捉えられる。231・232は細長い二等辺三角形である。両側縁の中位ほどが、わずかに窪む。233は表面左脚端部や尖端部が欠損する。

打製石鏃Ⅲ類 (第46図234)

234は、いわゆる五角形鏃であり、本遺跡唯一の出土である。

打製石鏃未製品・欠損品 (分類不能)

それぞれ1点ずつ出土したが、図化していない。

イ 石匙 (第46図235・236)

2点出土し、図化した。つまみ状突起から身が縦に長く伸びる縦型と、つまみ状突起から身が横につく横型がそれぞれ1点ずつ出土した。

石匙Ⅰ類 (第46図235)

235は刃部が横方向に欠損する。つまみ状突起や身が本遺跡出土の打製石斧に比して小型であることから、本類に含めた。身を横断する欠損状況は下縁側からの強い加撃を示し、打製石斧の可能性も考えられる。

石匙Ⅱ類 (第46図236)

236はつまみ状突起に対して、身が表面右側に軸が大きくずれる。全体的に剥離が大きく粗い作りである。右上縁とつまみ部の表面右側縁にやや細かな整形剥離が施される。身の下縁に粗い調整剥離を施し刃部を仕上げる。

ウ スクレイパー・使用痕剥片 (第46図237～239)

比較的薄く、細かな剥離により仕上げる、小型の器種を本類に含めた。29点出土し、3点を図化した。237は下縁にやや丁寧な調整を施す半弧状の刃部である。238は粗い調整の上縁を基部とし、細かい調整の下縁を刃部とする。239は下縁がやや直線的な刃部を作出し、鋭く尖る。

エ 石錐 (第46図240～242)

先端が鋭く尖り、その直上の側縁に抉りを施すことで、先端がより先鋭的に作出されたと考えられる石器

を、本稿では石錐の可能性で報告する。4点出土し、3点を図化した。

石錐Ⅰ類（第46図240）

つまみ部が不定形なものである。1点のみの出土し図化した。240は安山岩A類製である。柳葉状の器形の表面左1/3程が欠損したと見られる。表裏面とも主要剥離面が大きく残され、周縁をやや粗めの剥離により整形する。先端部の直上の右側縁がわずかに窪み、左側縁には押圧剥離痕が捉えられ、先端を意識的に作出したと見られる。先端部の一部稜が潰れており、石錐の可能性を示す。

石錐Ⅱ類（第46図241・242）

打製石鏃の器形に先端を特に尖らすタイプである。2点出土し図化した。この類は打製石鏃の可能性も付加しておく。241は、基部の形状は打製石鏃Ⅱ類に似る。先端部の直上を丁寧な窪ませ、先端部4mm程を錐状に鋭く尖らせる。この資料の存在は、概観的に打製石鏃の器形を呈するもののうち、先端を特に錐状に仕上げる石錐の一群があることを明確に示す。242は、概観的に打製石鏃の器形に見えることから、本類の欠損品と判断した。表面右側面下半が屈曲して内傾し、先端部の意識的作出が看取される。

オ 打製石斧（第46図243～251）

77点（欠損品含む）出土し、9点を図化した。いずれもホルンフェルスB類である。ラケット形（分銅形を含む）、短冊形の外形の打製石斧が出土しており、器形により分類して報告する。なお、礫器を含めホルンフェルスB類の剥片・碎片が101点出土し、主に打製石斧の製作・使用に伴うものと推察される。

打製石斧Ⅰ類（第16・17図243～248）

器形がラケット形を成すものである。欠損品を含め、7点出土し、6点を図化した。243～246は表裏面に自然面や主要剥離面を大きく残し、周縁部を中心に成形・整形剥離を施す。243は、側縁に直交する擦痕が入る傾向にあり、整形に伴うものと考えられる。一方、刃部の比較的細かな剥離痕は使用に伴うものと推察される。244の刃部は表裏面の主要剥離により器厚が薄く、わずかな敲打剥離により刃部を仕上げる。245は刃部周辺に横や斜め方向の擦痕が捉えられる。成形後に刃部を磨き上げたと考えられる。挟り部の中央辺りの稜（1.5～2cm幅）が潰れ、着柄痕の可能性を示す。他方、挟り部の直下から外側に開く体部の側縁の稜には光沢を帯びる微細な摩滅が捉えられ、掌握による摩滅の可能性も考えられる。刃部の剥離痕は裏面側に及び、上面側からの加撃を示す。246は磨製状に整形されないことから、刃部周辺の擦痕は、使用に伴うと考えられる。挟り部の下端から体部側縁の膨らみにかけて稜が摩滅し光沢を帯びる。挟りに潰れは捉えられない。刃縁の欠損の剥離痕は

わずかに裏面側に及ぶ。247・248は挟り部で欠損する体部片である。挟り部での欠損は、使用に伴う衝撃が挟り部に集中したことを示し、着柄の傍証になると考えられる。

打製石斧Ⅱ類（第47図249）

器形が短冊形を成すもので、1点出土し、図化した。249は表面の下半に斜め方向、上半に縦方向の擦痕が捉えられる。

基部・刃部欠損品（第47図250・251）

250は基部欠損、251は刃部欠損品である。ホルンフェルスB類の打製石斧・礫器の剥片・破片のうち、明瞭に基部・刃部欠損と判断されるものを細分すると、基部欠損が23点、刃部欠損が6点であった。

カ 磨製石斧（第47図252～255）

15点出土し、4点を図化した。

磨製石斧Ⅰ類（第47図252・253）

いわゆる蛤刃形磨製石斧である。8点出土し2点を図化した。252・253は基部先端が尖る。内外面に横や斜め方向の擦痕が入る。253は基端部が平坦面を成す。側面が細かな敲打痕により整形される。

磨製石斧Ⅱ類（第47図254・255）

いわゆる定格式磨製石斧である。7点出土し2点を図化した。254は基部の欠損品である。表裏面の全面にやや斜め方向の擦痕が入る。側面にも斜め方向の擦痕が入ることから、擦痕は整形に伴うものと考えられる。255は、刃部の欠損品である。表面左側・側面には、整形に伴う敲打痕が残され、大きな剥離痕上に擦痕が入る。以上のことから、敲打痕を伴う整形した製品を再剥離して、刃部を中心に磨きをかけて再加工した可能性がある。

キ 磨石・敲石（第47図256～262）

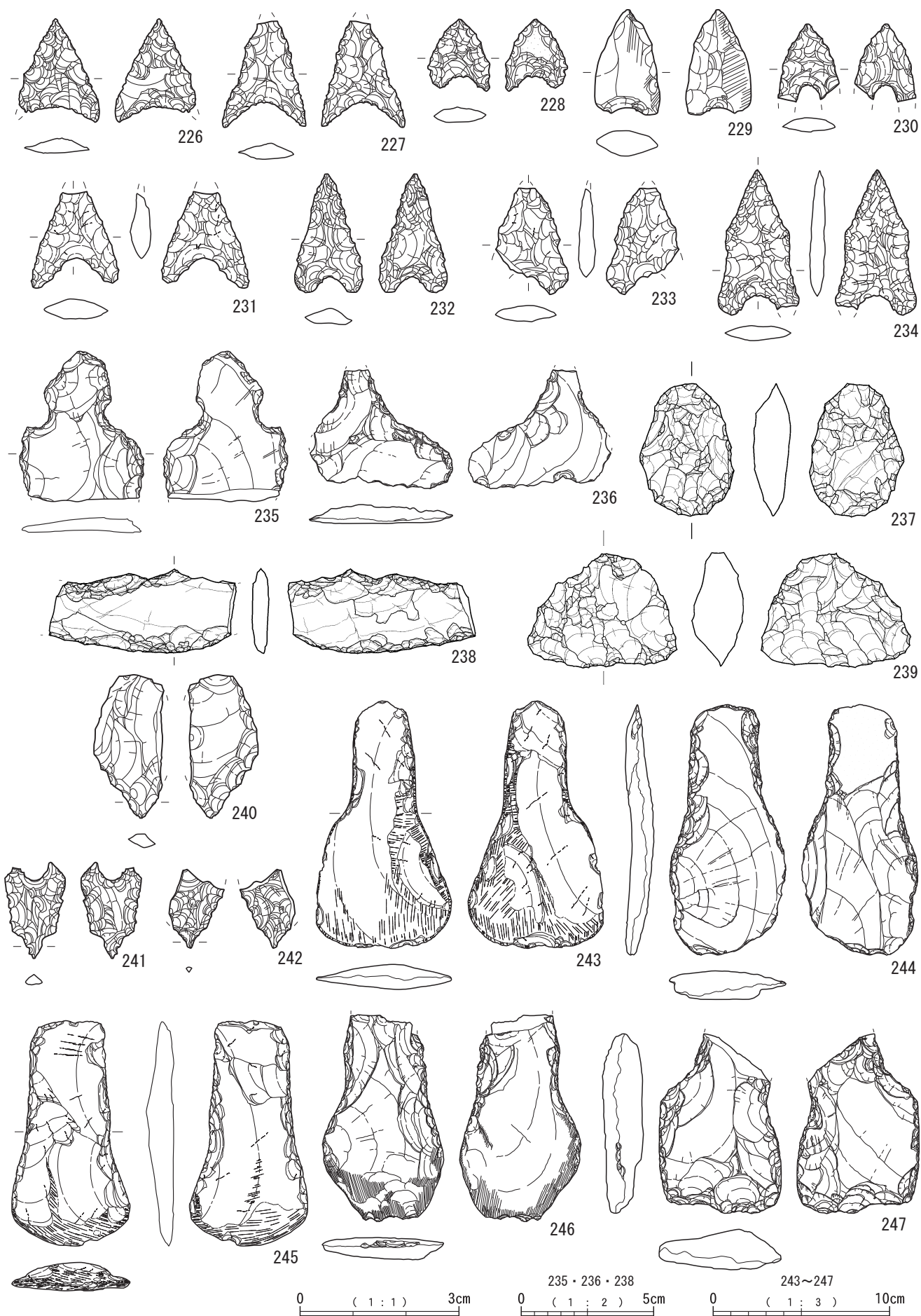
把持可能な小型の自然礫を素材とし、磨面や敲打痕が認められる器種を一括して本類に含めた。68点出土し、7点図化した。円・長楕円礫等を素材とするものと棒状に細長い礫を素材とするものがある。違いの可能性を鑑み、二分して報告する。

磨石・敲石Ⅰ類（第47図256～260）

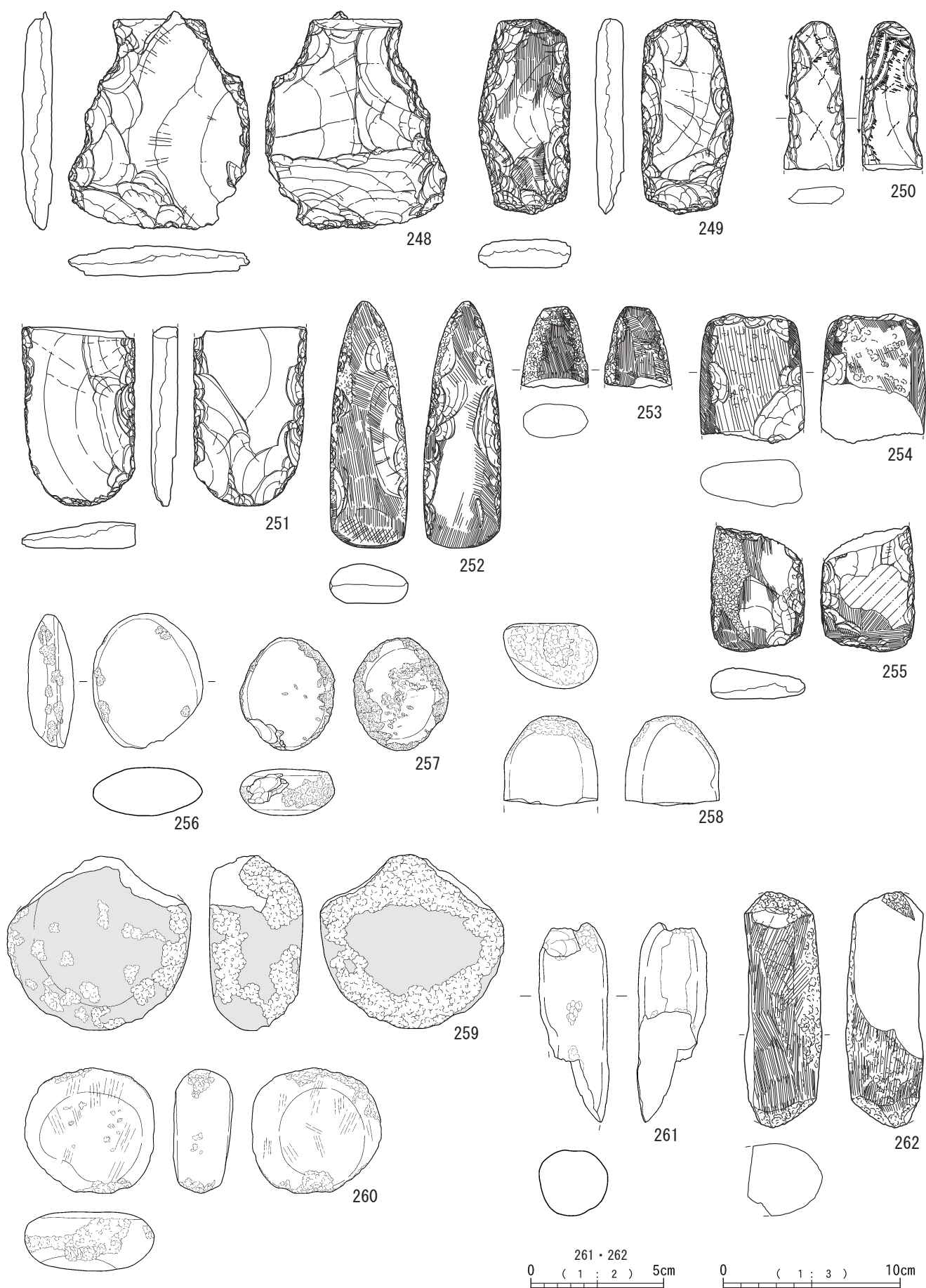
63点出土し、5点を図化した。256・259は側面全周に、258・260は上・下面を中心に、257は側面全周及び裏面に敲打痕を有する。特に、259は、強く敲打され、敲打痕が摩滅する。

磨石・敲石Ⅱ類（第47図261・262）

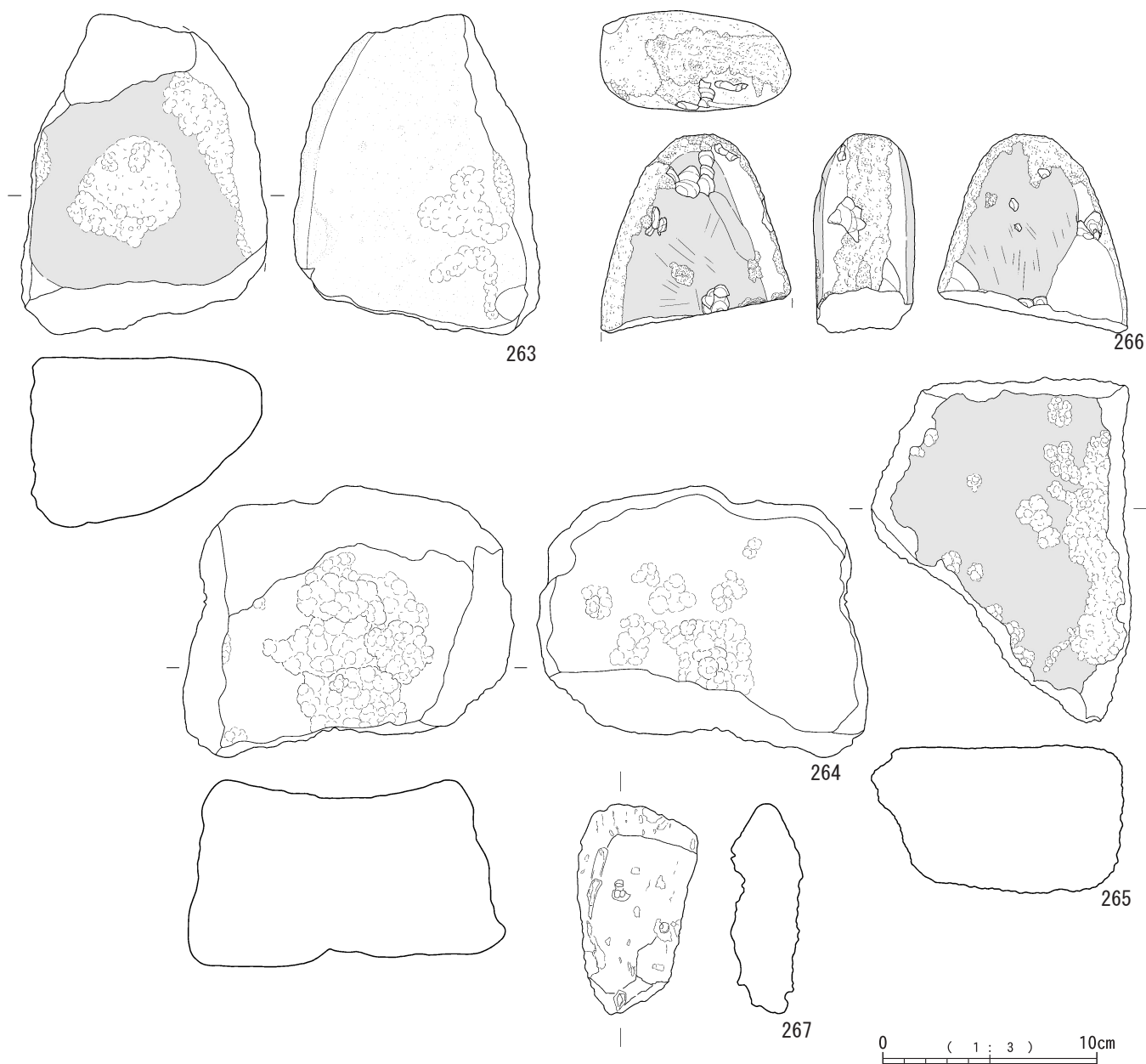
5点出土し、2点を図化した。261は欠損品である。上面に集中的に敲打痕を有し、一部は大きく欠損する。表面中央に、わずかに浅い敲打痕が捉えられる。262は上下面及び表面右側面に、顕著な敲打痕を有する。内外面に、いろんな方向からの擦痕が捉えられるが、磨製石斧の転用品の可能性はある。



第46図 縄文後期～弥生時代石器 (1)



第47図 縄文後期～弥生時代石器（2）



第48図 縄文後期～弥生時代石器（3）

ク 石皿・台石・砥石（第48図263～266）

把持不可能な比較的大型の自然礫を素材とし、磨面や敲打痕が認められる器種を一括して本類に含めた。25点出土し、4点を図化した。263・264は表面全面に磨面を呈する。表面中央に集中的に敲打痕を有する。264は表面が碗状に窪むほか、裏面中央辺りにも敲打痕を有する。敲打痕の範囲が欠けることから、使用後に表面下側が大きく欠損したと考えられる。265は表面に磨面を有し、敲打痕は表面周辺に見られる。266は側面全周を敲打痕が巡る。特に上面の敲打痕はより集中的である。表裏面は磨面を有し、縦方向の擦痕が顕著で、石材が砂岩であることと併せて、砥石としても利用された可能性が高い。

ケ 軽石製品（第48図267）

5点出土し、1点を図化した。267は表面上・左上が斜め方向に摩擦により平坦面を成す。表面には穿たない深さ3～4mmの浅い穴が2～3穴捉えられるが、そのうちの一部は人為による可能性もある。

第3節 古墳時代の調査

1 調査の概要

本遺跡は、道路の拡幅工事に伴う調査で、北側から南側にかけて帯状に長いため、北側から1～4区と細分して調査を進めた。3か年の調査は、区ごとに調査を行ったため、本節では、区ごとに分けて概要を記す。

古墳時代の調査は、Ⅱa・Ⅱb層（包含層）を主とする。しかし、Ⅱa・Ⅱb層が黒色土でⅡc層が黒褐色土と色調の違いが明瞭でない。また、所により層が堆積しなかったり、希薄であったりすることから、Ⅱc層の出土状況にも留意しながら調査を進めた。

令和2～4年度の試掘調査では、1区内の第2トレンチのⅡ層から弥生土器が、Ⅲ層から竪穴建物跡1軒及びピットが、第3トレンチのⅡ層から成川式土器が確認された。3区では、第9トレンチのⅢ層から、弥生時代から古墳時代と思われる土器片とスクレイパーが出土した。

それらの試掘調査の結果を踏まえ、令和4年度に1・2区の、令和5年度に3・4区で古墳時代の調査を実施した。表土を重機で掘削した後、人力掘削により全面調査を行い、層が明瞭に変わるⅢ・Ⅳ層上面（アカホヤ火山灰）で精査をし、遺構検出を行った。その結果、1区ではⅡ～Ⅴ層上面で、古墳時代の竪穴建物跡2軒、土坑11基、ピットが多数検出された。Ⅳa層で検出された花弁型の竪穴建物跡の埋土内には東原式土器を伴う。一部が調査区外に及び、全容は確認できない。周囲の包含層からは古墳時代の東原式土器、辻堂原式土器、台石などが出土した。もう1基のⅣ層で検出した竪穴建物跡は、炭化物や焼土を伴い、張出し部を伴う隅丸形状を呈する。調査区外に及び全容は不明である。周囲の包含層からは東原式土器、辻堂原式土器、台石などが出土した。張出部分を含めて全長10m弱に及ぶ。埋土内に東原式土器や台石を伴う。

2区では、1区同様に、Ⅱ～Ⅴ層上面で、古墳時代のピットを多数検出した。

3区では、Ⅱ～Ⅲ層上面で古墳時代の竪穴建物跡1軒が検出された。竪穴建物跡の中央部は、後世の古道に切られ、全容は捉えられない。3・4区の包含層からは、東原式土器、辻堂原式土器が出土した。

各遺構・遺物に関しては、各項目で詳細を記す。

2 遺構

（1）竪穴建物跡

竪穴建物跡が3軒検出された。2基はⅣa層上面で、もう1基はⅢ層上面で検出された。

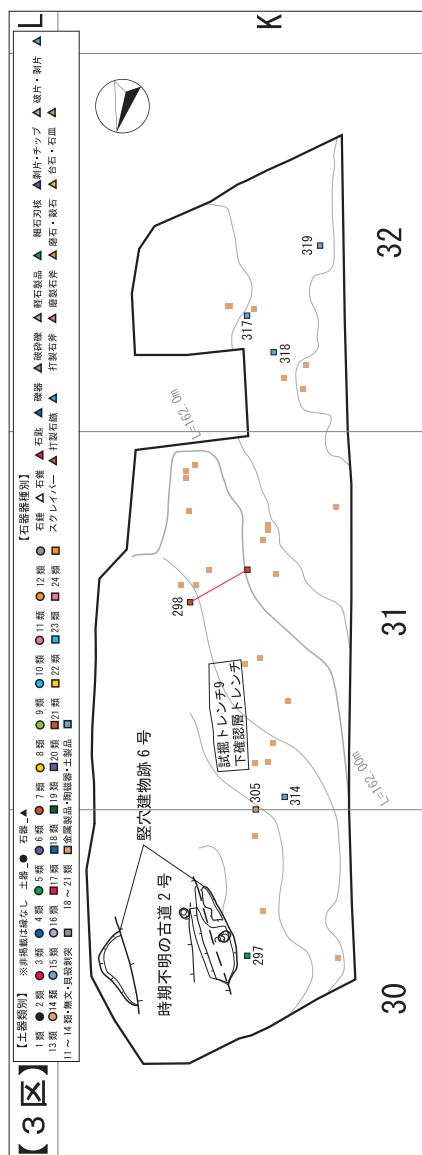
竪穴建物跡4号（第51図・第52図）

D-8区Ⅳa層上面で検出された。最終的なプランは465cm×378cm（ともに調査区外で切れる）で、深さは検出面から57cmであった。床面には硬化面が検出された。張出し部を伴う。顕著な焼土跡は確認されなかった

が、東端に炭化物を伴う土坑が中央に検出された。遺構内外にピットも検出され、上屋構造の可能性はある。床面の張替えや周堤帯などは捉えられない。埋土内に多量の遺物を伴う。埋土内出土遺物は73点中、12点を図化した。土器の口縁部外面に付着した炭化物1点を科学分析し、3世紀中頃から5世紀初頭の年代値を得た。268・269・270・271は19類で、突帯が巡らせる位置がやや凹み、湾状に直口する。口縁内面に稜を成す。19類は6点出土し、4点図化した。268はすれ違い突帯である。269は、中空の脚をもち、脚の外面上部は、やや平坦面を成す。底部内面は、指頭押圧により顕著な凹みを呈する。270は刻目突帯をもたない。口縁部下端のやや窪む位置に突帯が貼付されると推察され、胴部と口縁部の接着の強化の意義も見える。中空の脚の外面上部が、やや平坦面を成す。271は底径が3.5cmで、上げ底である。刻目突帯は、断面三角形の頂部を指頭押圧により平坦面に整形し、断面台形状を呈する。272・273・274は20類で、胴部から口縁部まで一直線上に外傾する。273は、突帯の刻目は網目状を呈し、工具に布などを巻き付けた可能性を示す。275は22類（鉢形土器）で、口縁部が内湾する。口唇端部を丁寧に尖らし気味に仕上げる。外面は粗いナデ調整で、内面は丁寧なミガキ調整である。外面に煤が付着する。縄文時代後・晩期の紛れ込みの可能性もある。22類は3点出土し、2点図化した。276は粗いナデ調整で器面の凹凸が顕著である。底部外面はやや湾状を呈し安定しない。277は底径5.4cmで、底部最下端は27mmと厚く、胴部も18mmと器厚が厚い。甕と報告するが壺の可能性もある。底部内面を指頭押圧痕で整形する。21類は全部で4点出土し、1点図化した。278は21類の壺で、器壁が2～7mmと薄く、丁寧な作りである。外面は丁寧な工具ナデ、内面はナデにより仕上げる。胎土が宮崎平野や北・中九州に見られる土器の色調や質感を呈する。279は24類の小型丸底壺（埴）である。底部乳房状を呈し、最下端に突起を持つ。丁寧なミガキ調整で、底部内面の最下端は、直径6mm程の穿たない孔を持ち、その周囲にケズリ状の工具痕が巡る。内外面に橙色の赤色が捉えられ、全面的に着色されていた可能性がある。280は刀子である。茎が欠損する。ほぼ直刃であるが、わずかに鋒手前で刃側に反って捉えられる。ふくらが45°の傾きに仕上げられる。

竪穴建物跡5号（第54図）

D・E-9・10区Ⅳa層上面で検出された。最終的なプランは336cm×972cmで、深さは検出面から108cmであった。硬化面が検出された。焼土跡周堤帯などを捉えられなかった。北側が一部張り出す。中央の竪穴周囲を堤状にⅢ・Ⅳ層を残す。中央竪穴は層厚10cm程度のしっかりした硬化面を成す。張出し部の床面は、Ⅳc層を混ぜて、やや硬化させる。遺構内にはピットや土坑などが検出された。中央の深い床面から外側に一段上がった床面



4区は遺構は検出されず、わずかに遺物が検出されたのみで、図は未掲載である。

第50図 古墳時代の遺構配置図・遺物出土状況図（3・4区）

には環状に捉えられるピットが数基検出された。上屋構造の可能性はある。埋土内出土遺物は303点中、15点を図化した。埋土内土器の胴部外面に付着した炭化物1点（試料1 PLD-51346）を科学分析し、3世紀中頃～4世紀中頃の年代値を得た（P.91第13表参照）。281は19類で、胴部はナデ調整で、口縁部は横方向のハケメを施す。口唇部は平坦に仕上げる。内面に粘土の貼付痕が捉えられる。282も19類で、口唇部は舌状に仕上げる。外面はナデ調整が主であるが、底部から木工具（杵目）もしくは貝殻復縁による調整痕が縦方向に施され光沢をもつ。283は脚を有する小型の鉢で、1点のみの出土である。内外面に工具ナデが捉えられる。284・285は内外面ともに丁寧な工具ナデの調整である。284は割れ口から脚がついていたと推察される。285の高台状の浅い脚で、底部内面は意図的に平坦に仕上げられる。286・287・288は丸底で21類（壺）ある。286の外面は丁寧なハケメ、内面は工具ナデ（一部ミガキ）調整である。

286・287の底部内面は、指頭押圧により凹みを呈する。287は、外面はナデのほか、一部はミガキ調整である。286・287・288の内面は、指や工具によるナデ調整である。290・291は24類（小型丸底壺）である。289は23類（高坏）の脚台で、丁寧なミガキが施される。脚内部は、指頭によるケズリ（強いナデ）調整がらせん状に巡らされる。筒状の脚部に坏部を上から重ねて接合した製作過程が看取される。290は口縁部と胴部はつながらなかったが、同一個体の可能性が高いと判断し図化した。口縁部は丁寧な工具によるナデ、胴部はミガキにより仕上げる。内面は、指頭押圧により整形する。頸部直下の内面には、粘土の貼付痕が明瞭に捉えられる。292は24類（小型丸底壺）で、丁寧なナデ調整で、内面の側面は指頭で丁寧に整形する。293は25類（手捏ね土器）で尖底である。1点のみの出土である。胴部がわずかに肩部状に張り出す。口唇部はつまみで、やや細く仕上げられる。内外面ともにナデ調整である。294は打製石斧か、表面右側縁を刃部とする横刃形石器である。縄文・弥生時代の可能性もあるが、共伴の可能性で報告する。295は砂岩で、表面の中央が長軸方向にやや凹み、砥石の可能性はある。全面的に擦痕が走る。

竪穴建物跡 6号（第57図）

K-30区Ⅲ層上面で検出された。最終的なプランは366cm×312cmで、深さは検出面から54cmであった。古道2号に分断される。貼床が検出されたが、焼土跡、上屋構造、周堤帯などは捉えられなかった。科学分析を実施した埋土中の1点の炭化材（樹種不明）は古墳時代前期を、貼床直下の2点の炭化種実（アカガシ、イチイガシ）は、縄文時代後期後葉～晩期前葉を示した（P.92第17表参照）。埋土中の1点（試料5 PLD-53114）と貼床直下の2点（試料6 PLD-53115 試料7 PLD-53116）の年代が大きく異なり、埋土中の炭化物は古墳時代、貼床直下の炭化物は縄文時代後・晩期を示し判断が困難であった。埋土中に含まれる土器で型式の分かる口縁部資料は18類（中津野式・東原式古手）や胴部に刻目突帯を有するもので古墳時代の甕形土器が大半だったため、当該期の可能性で報告する。なお、周辺の包含層からは当該期は出土せず、縄文時代後・晩期の土器が大半であるが、他の1・2区でも同様な傾向がある。296は甕形土器の底部で直径7cmである。底部外面の下半は縦方向の丁寧な工具ナデである。竪穴建物跡4号内遺物271・272・273・277などの一括に出土した状況から296のような平底の甕につながる口縁部は、18～20類であろうと推察する。

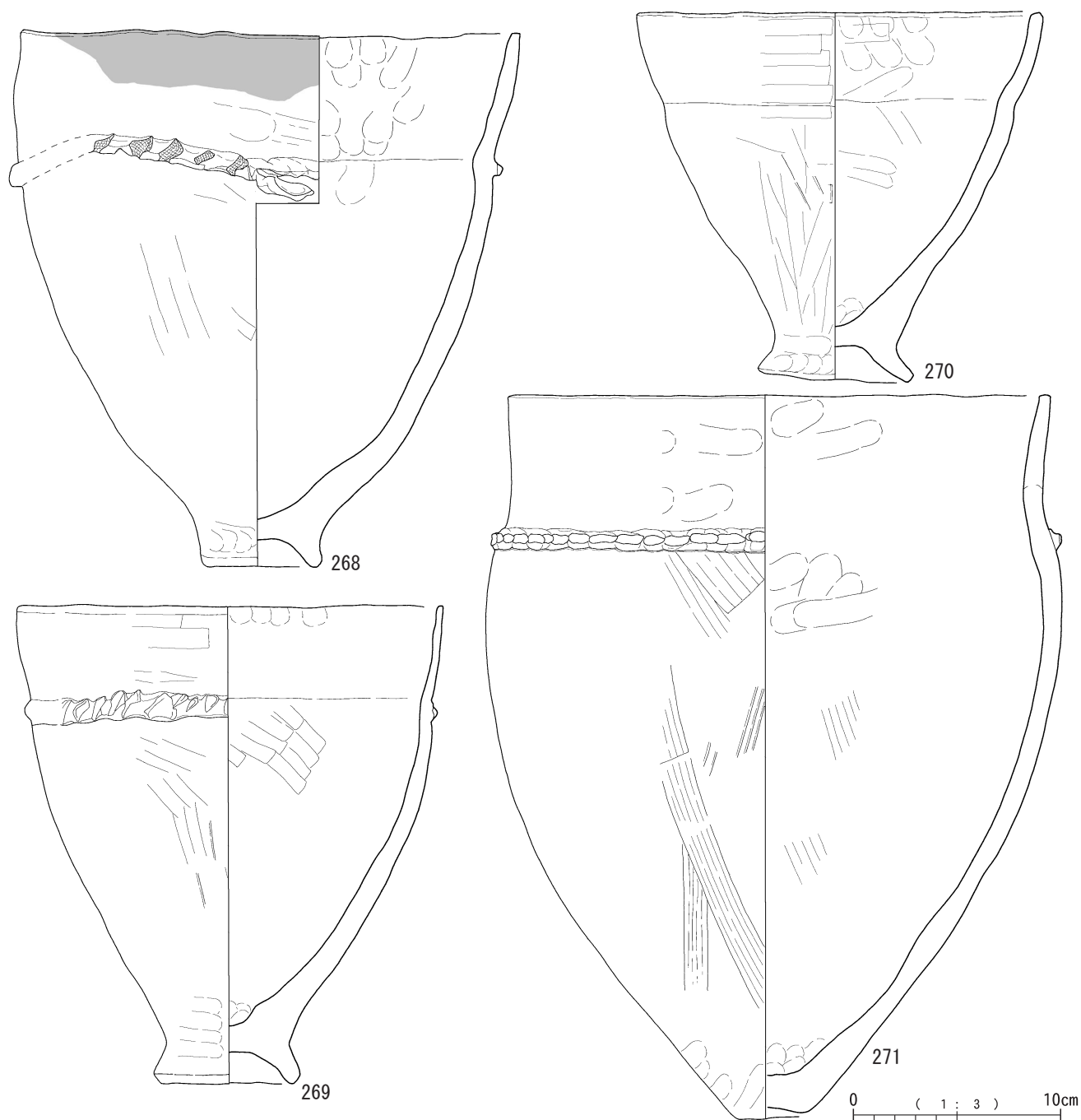
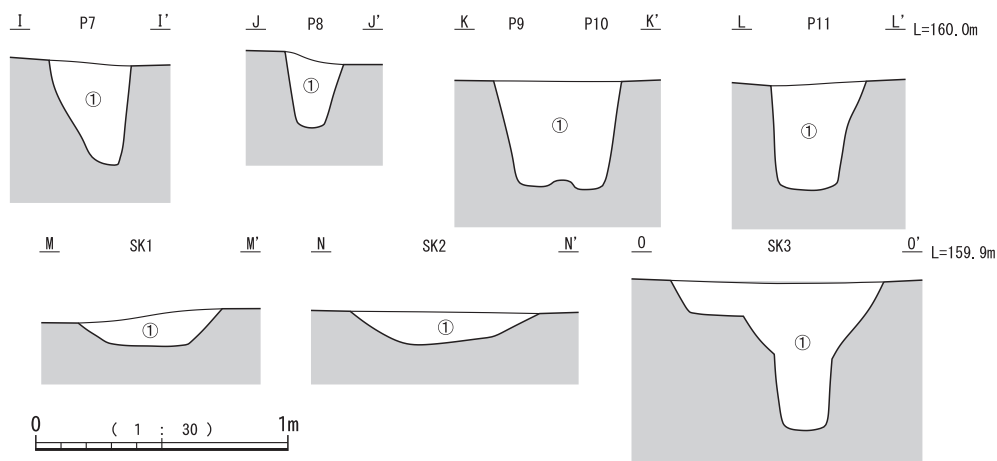
（2）土坑

土坑11基が検出された。

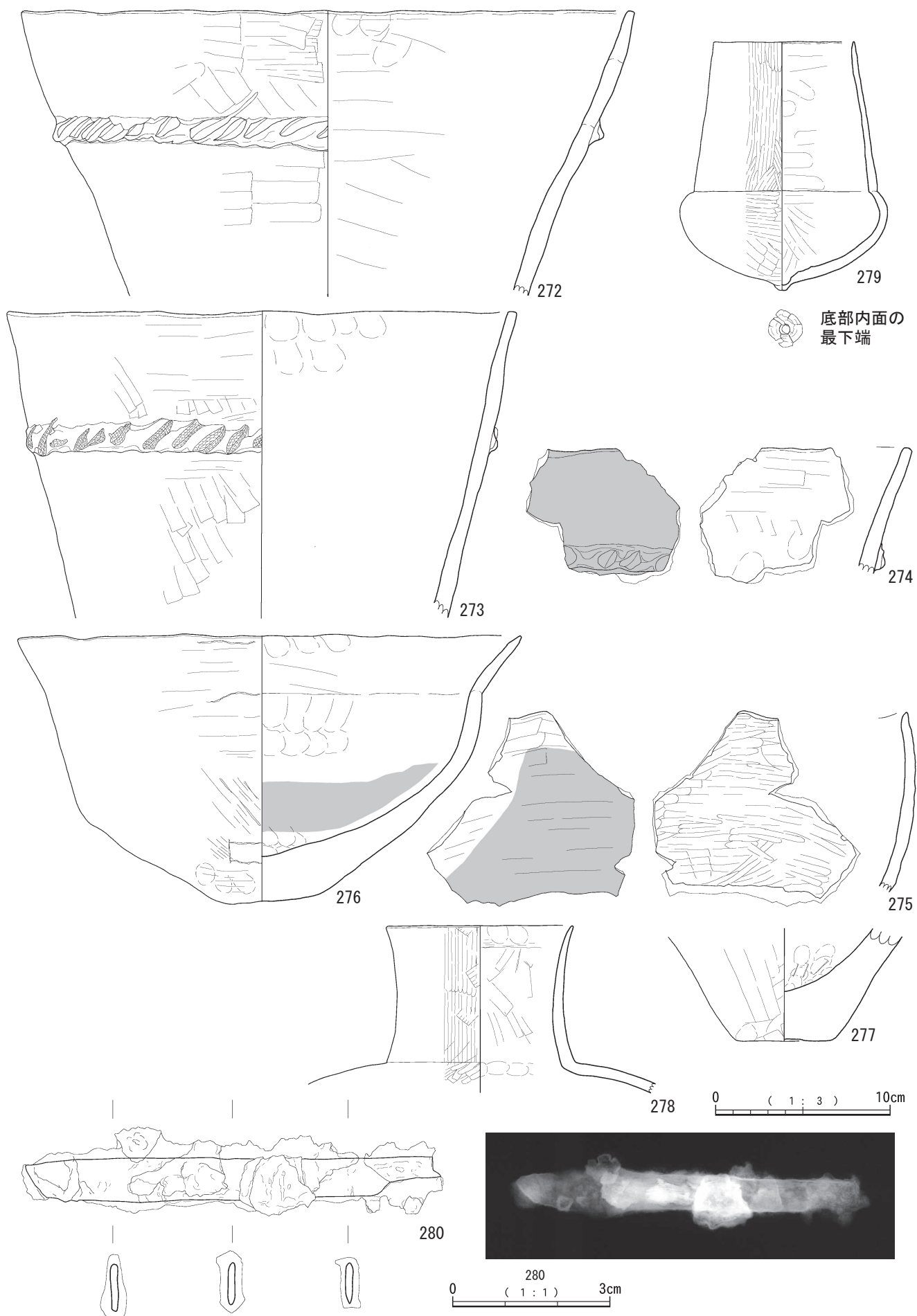
土坑19・20・21・22・23・24号（第58・59・60図）

土坑19号はD-7区Ⅳa層上面検出で、平面プランは



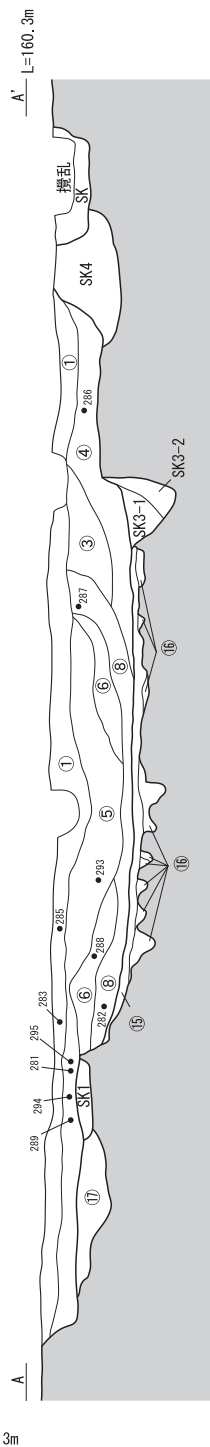
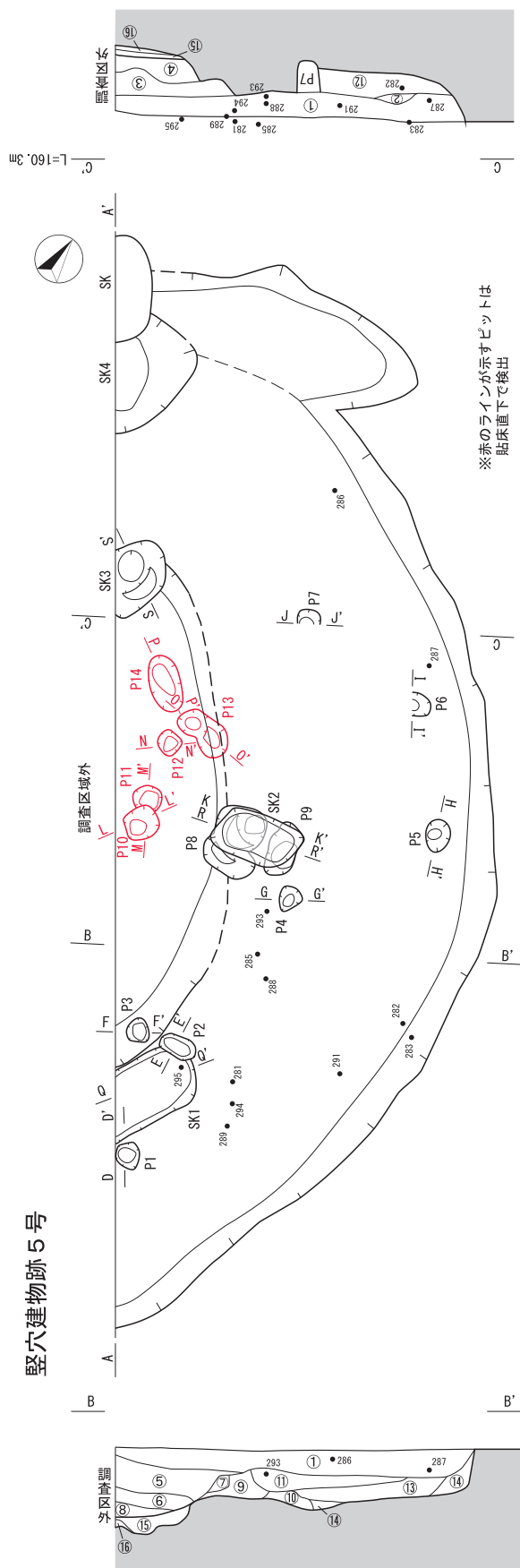


第52図 竪穴建物跡4号(2)・埋土内遺物(1)



第53図 竪穴建物跡4号内遺物(2)

竖穴建物跡 5号



K

P8・9

K'

L=159.8m

槽瓦

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

SK3-2

SK2

SK1

SK

SK4

SK3-1

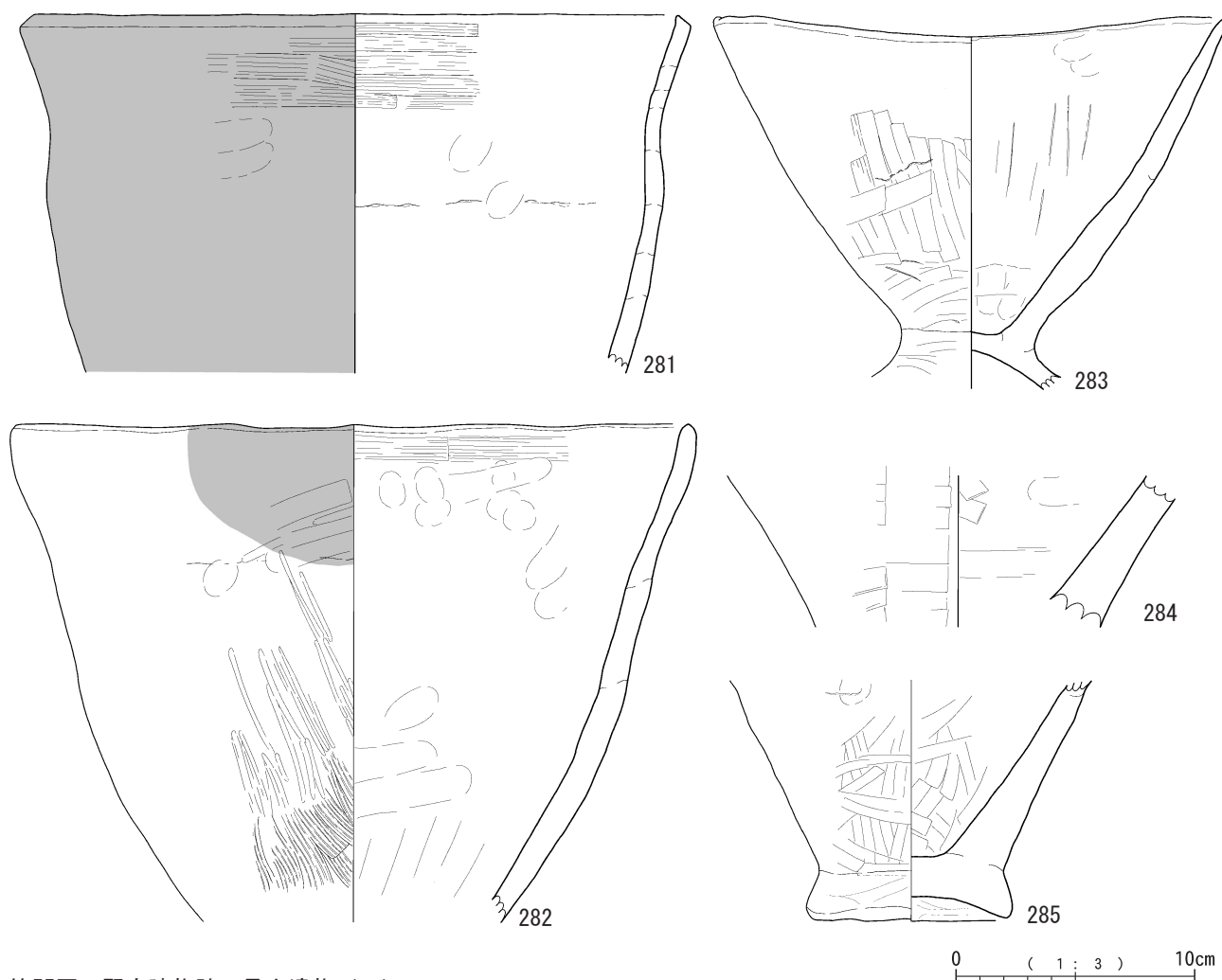
SK3-2

SK2

SK1

SK

- ①黄橙色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径5～10mm程) を10%程、明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径1cm程) を10%程含む。
 ②黄褐色 (7.5YR 7/8) のバミス (直径5～10mm程) を5%程含む。バミスにはまれに5～10mm程のものを1%程含む。炭化物を1%以下含む。
 ③褐色土 (7.5YR 3/3)。締まりが強い。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1～2mm) を2%程含む。
 ④③より明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (2～5cm) を3%程含む。
 ⑤暗褐色土 (7.5YR 3/3)。締まりが強い。粘性なし。明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径5cm程) をまれに含む。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1～2mm) を10%程、直径5mmのバミス (7.5YR 6/8) のバミス (直径2～5mm) を3%含む。あれに炭化物を含む。
 ⑥⑤より明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径1～2cm) を5～10%含む。中には、10cm大のブロックを含む。
 ⑦暗褐色土 (7.5YR 3/3)。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径2～5mm) を3%含む。締まりが強い。
 ⑧黒色土 (7.5YR 3/2)。締まりが弱い。
 ⑨明褐色土 (7.5YR 5/6) 締まりが強い。アカホヤ火山灰の二次堆積が混じる。
 ⑩⑨よりも褐色土 (7.5YR 4/4) の割合が高く、褐色土 (7.5YR 4/4) が主で、明褐色土 (7.5YR 5/6) を20%程含む。締まりが硬化面程に大変強い。黄褐色 (7.5YR 7/8) の軽石 (直径1～2cm) が⑨側に集中し、橙色 (7.5YR 5/8) のバミス (直径2～5mm) を10%程含む。
 ⑪褐色土 (7.5YR 4/4)。締まりが強い。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径2～5mm) を3%程含む。部分的に、橙色 (7.5YR 6/8) のアカホヤ火山灰のブロックを極わずかに含む。
 ⑫褐色土 (7.5YR 4/4)。締まりが強い。明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径1cm～5cm) を40%程含む。他に、固い黒褐色土 (7.5YR 3/2) のブロック (直径1～3cm) を20%含む。全体的に橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1～2mm) を10%含む。
 ⑬褐色土 (7.5YR 4/4)。締まりが強い。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1～10mm) を10%含む。明褐色 (7.5YR 5/8) のアカホヤ火山灰のブロック (直径2～3cm) を10%程含む。
 ⑭褐色土 (7.5YR 4/4)。締まりがややあり。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1～5mm) を1%含む。固い黒褐色土 (7.5YR 3/2) のブロック (直径1cm) を1%含む。
 ⑮～⑰貼床。褐色土 (7.5YR 4/4) と硬化した橙色 (7.5YR 6/8) のアカホヤ火山灰を1:1の割合で混ぜ、明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径3cm程) を20%含む。とても固く締まった硬化面である。下層のⅥ層土 (黒褐色粘性土 7.5YR 2/2 締まりが強い。) を混ぜている。硬化面は、10cm程の厚さを有するが、まれに5cm程と厚みがない箇所もある。Ⅵ層を掘り込んで敷設する。
 P1 褐色土 (7.5YR 4/4)。締まりあり。アカホヤ火山灰が3%、橙色 (7.5YR 7/6) のバミス (直径5mm以下) を10%含む。
 P2 暗褐色土 (7.5YR 3/4)。締まりあり。橙色 (7.5YR 7/6) のバミス (直径1cm以下) を5%含む。



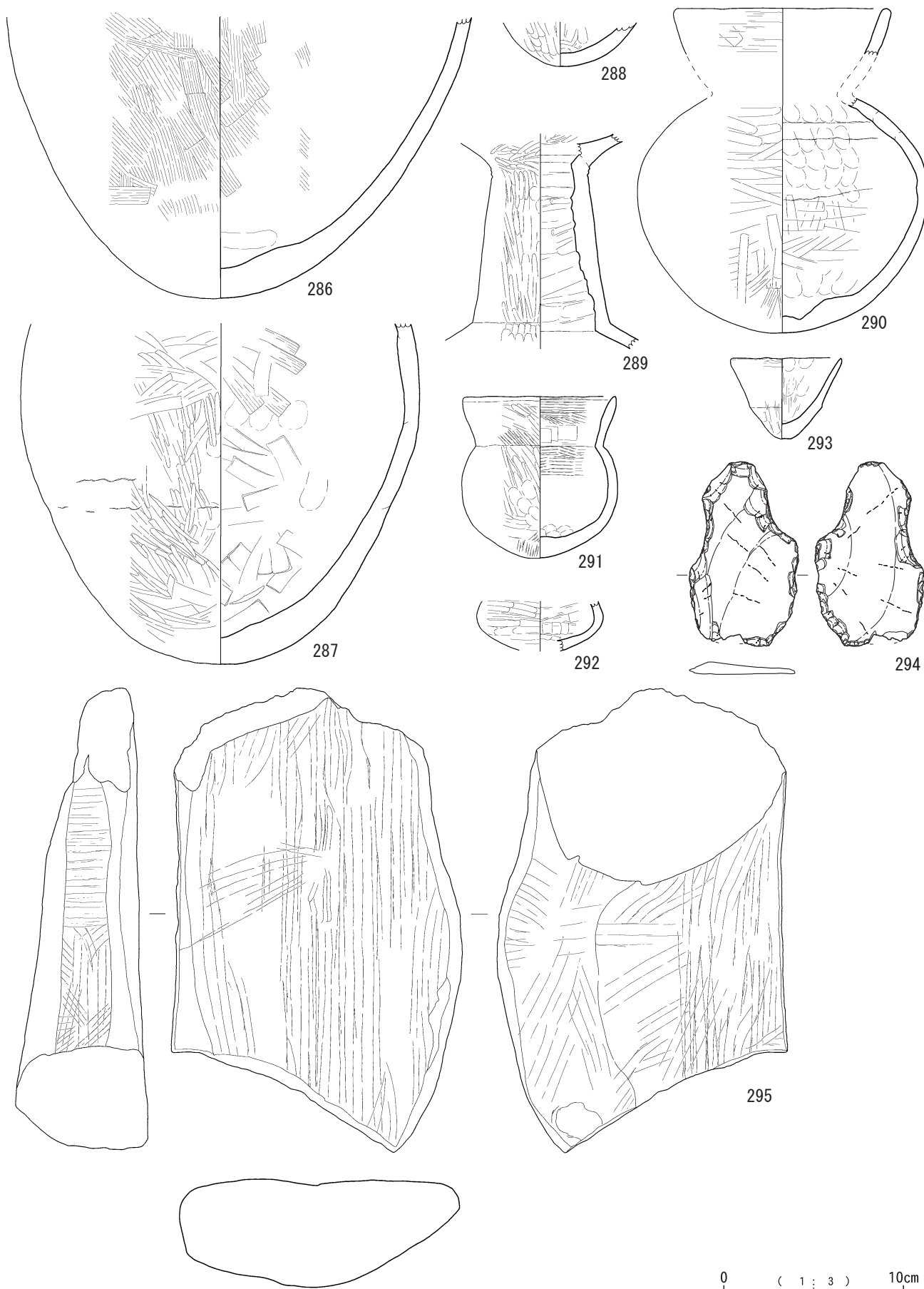
第55図 竪穴建物跡5号内遺物(1)

164cm×210cm, 検出面からの深さは34cm。土坑20号はD-8区Ⅳa層上面検出で、平面プランは146cm×184cm, 検出面からの深さは18cm。土坑21号はD-8区Ⅳa層上面検出で、平面プランは52cm×190cm, 検出面からの深さは40cm。土坑22号はD-9区Ⅳa層上面検出で、平面プランは42cm×62cm, 検出面からの深さは56cm。土坑23号はD-9区Ⅳa層上面検出で、平面プランは60cm×106cm, 検出面からの深さは74cm。土坑24号はD-9区Ⅲ層上面

検出で、平面プランは127cm×190cm, 検出面からの深さは32cm。

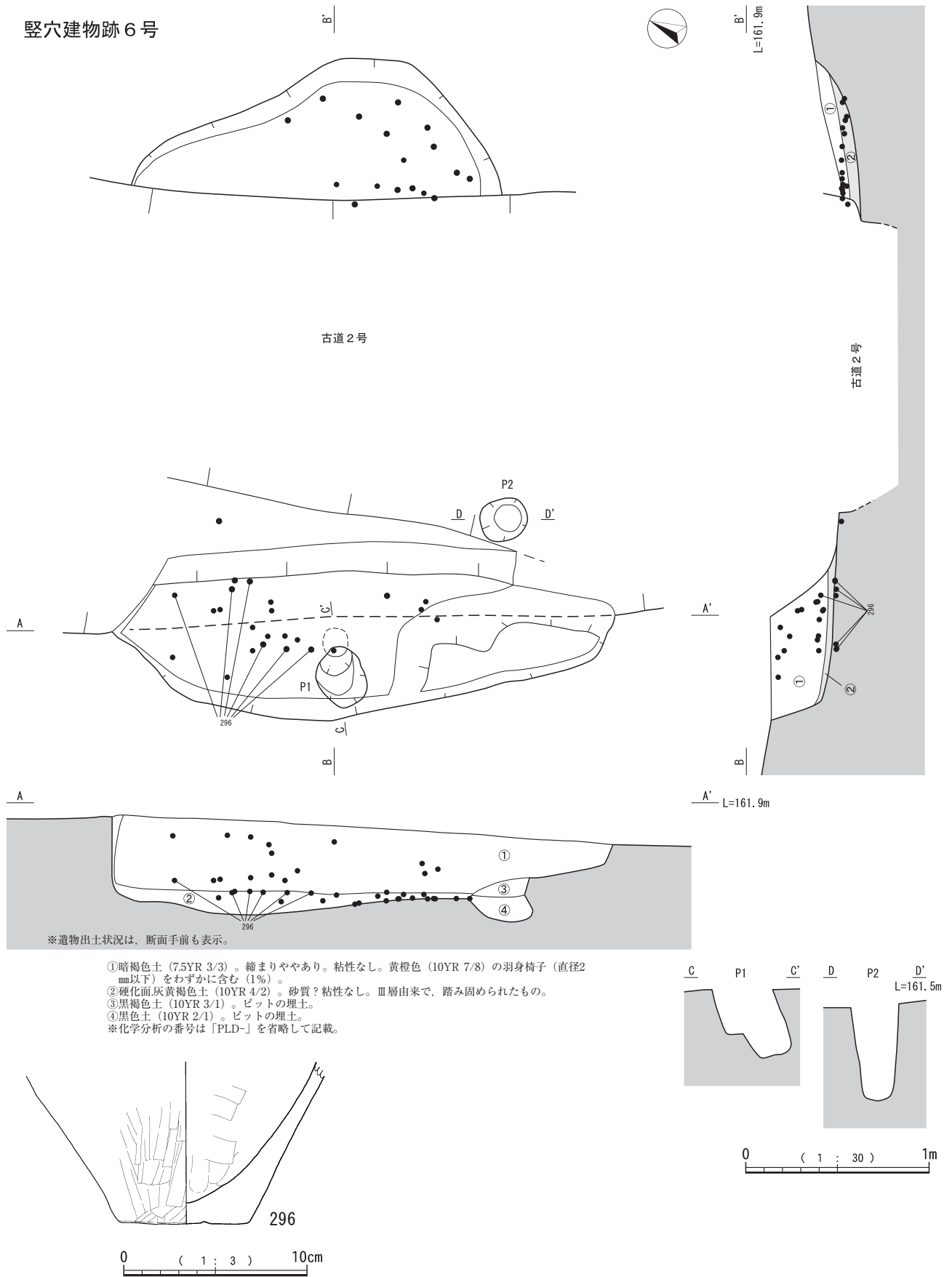
土坑25・26・27・28・29号(第59・60図)

土坑25号はD-9区Ⅳa層上面検出で、平面プランは54cm×76cmで、深さは検出面から54cm。土坑26号はF-12区Ⅳa層上面検出で、平面プランは44cm×145cmで、深さは検出面から24cm。土坑27号はF-12・13区Ⅳa層上面検出で、平面プランは70cm×84cmで、深さは検出面から18

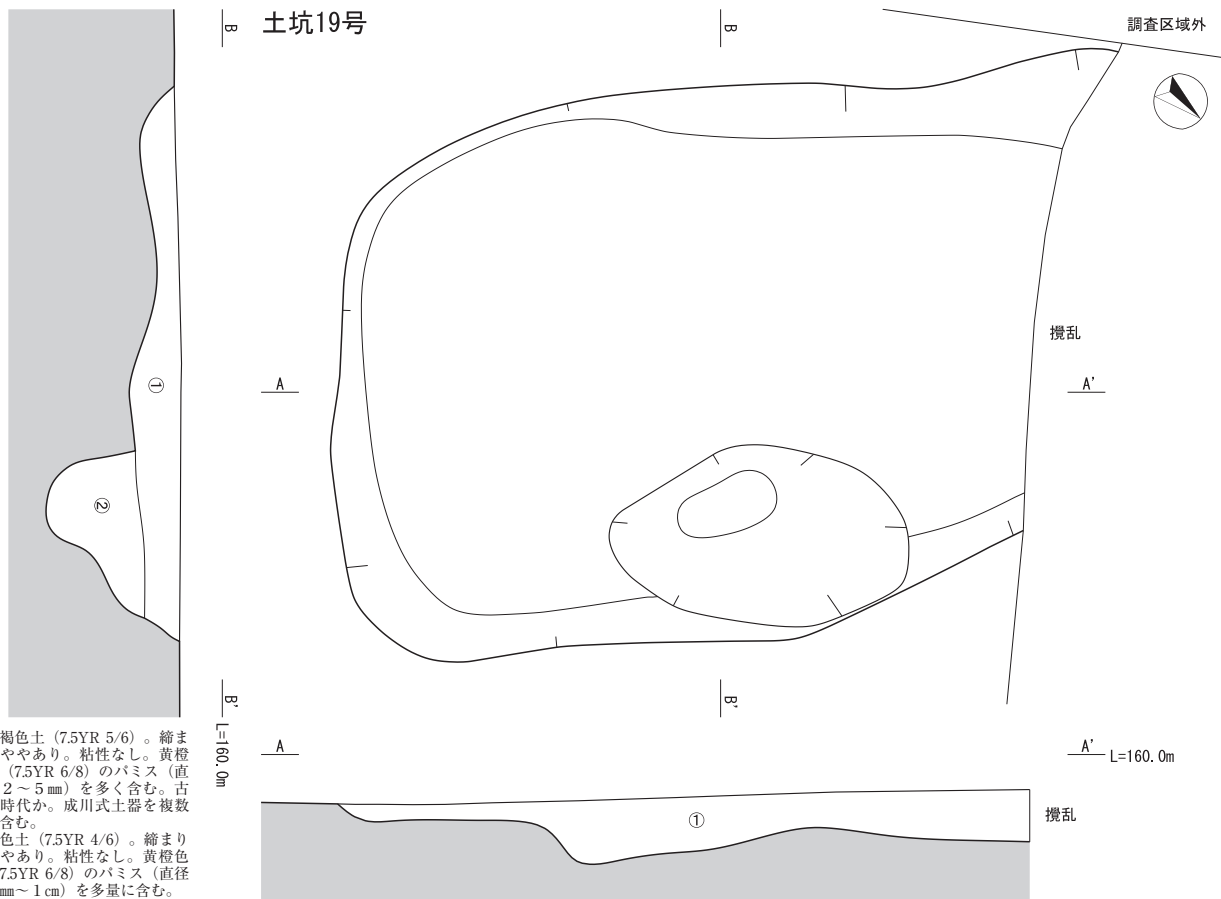


第56図 竪穴建物跡5号内遺物(2)

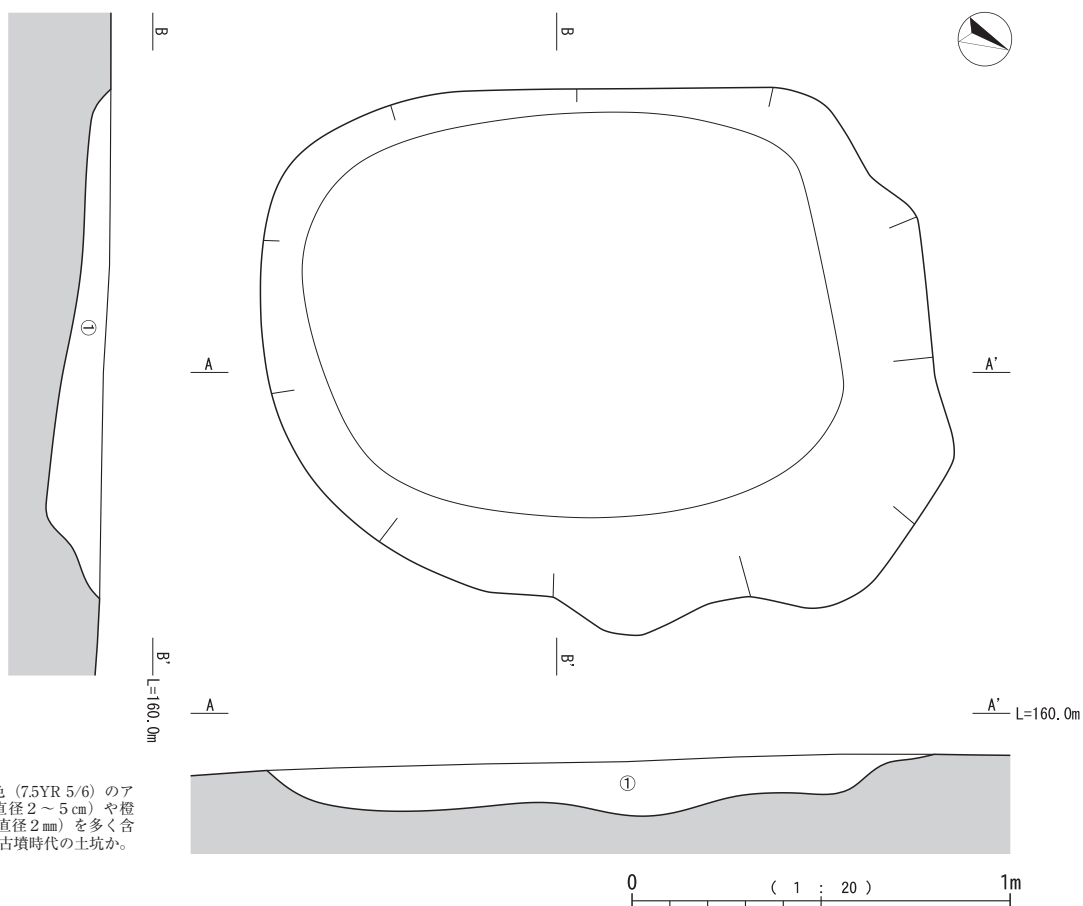
竪穴建物跡 6 号



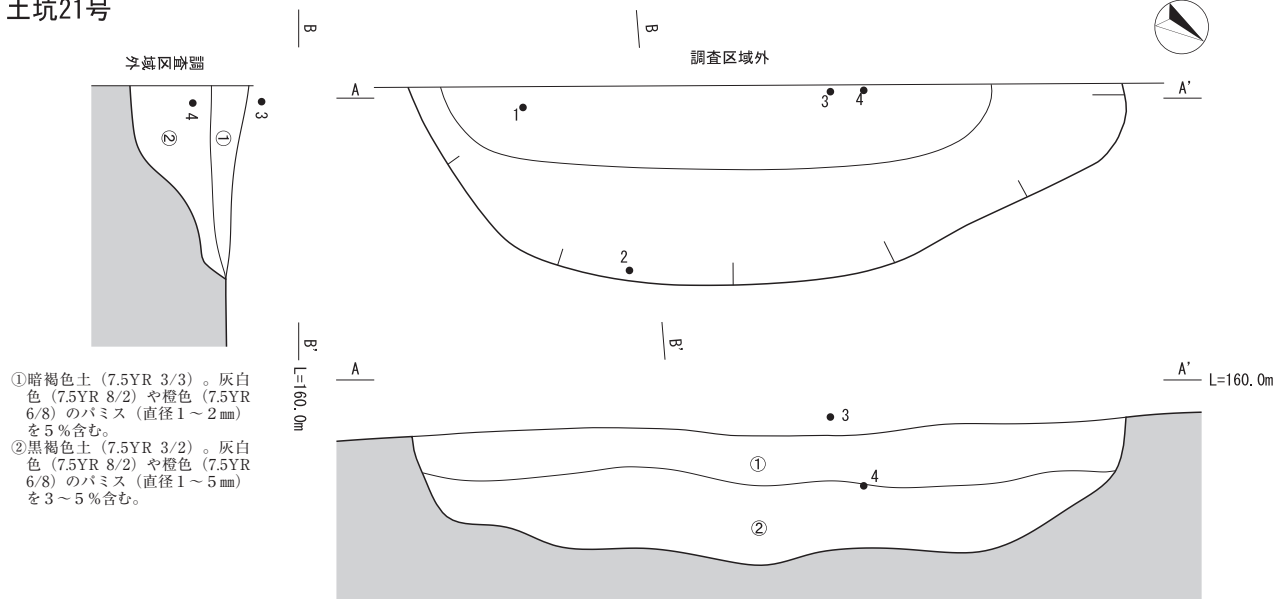
第57図 竪穴建物跡 6 号



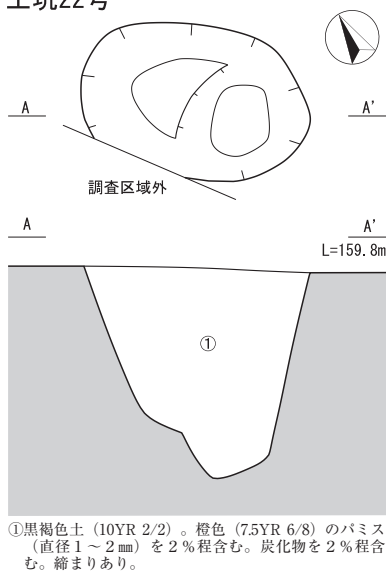
土坑20号



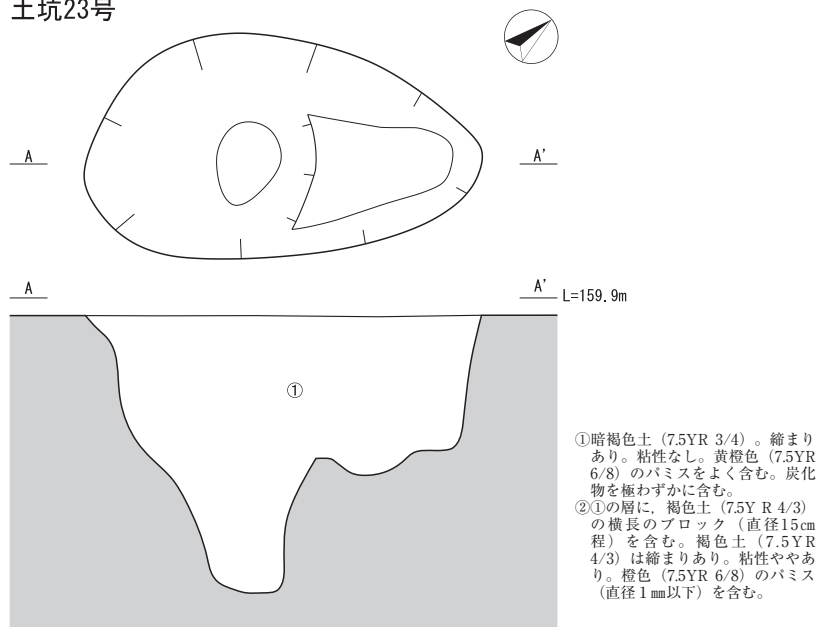
土坑21号



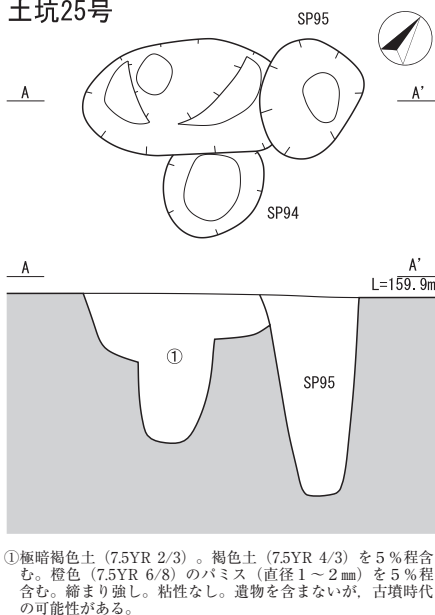
土坑22号



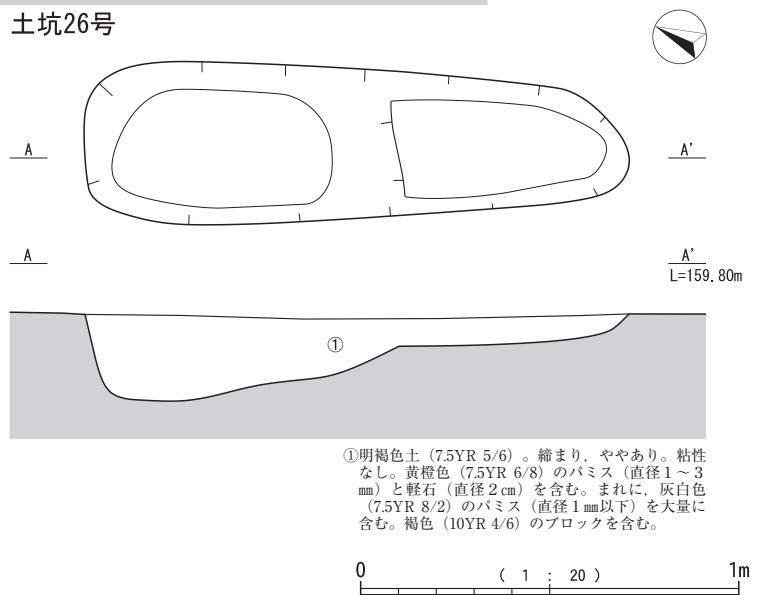
土坑23号



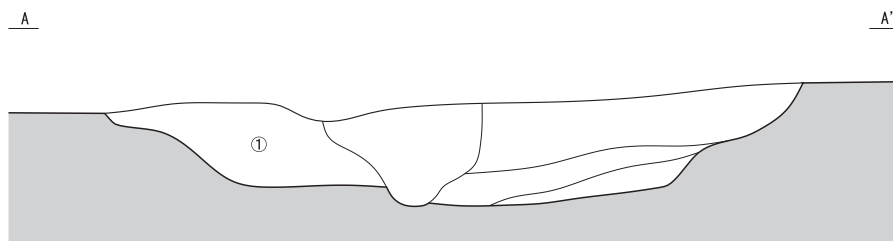
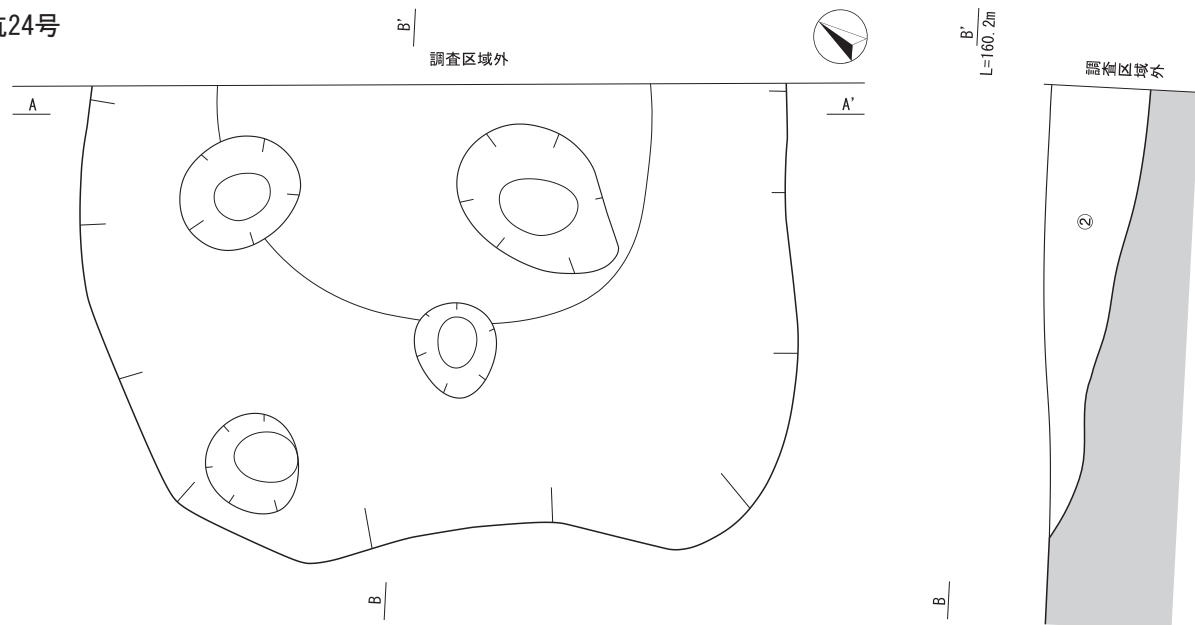
土坑25号



土坑26号

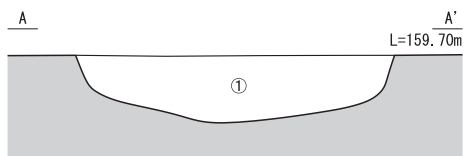
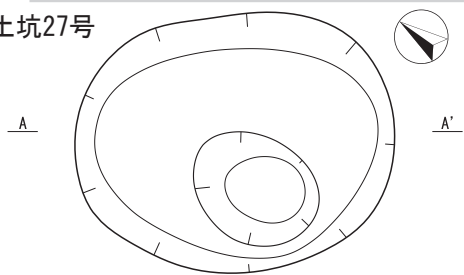


土坑24号



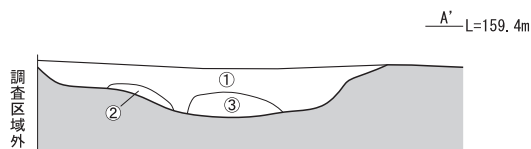
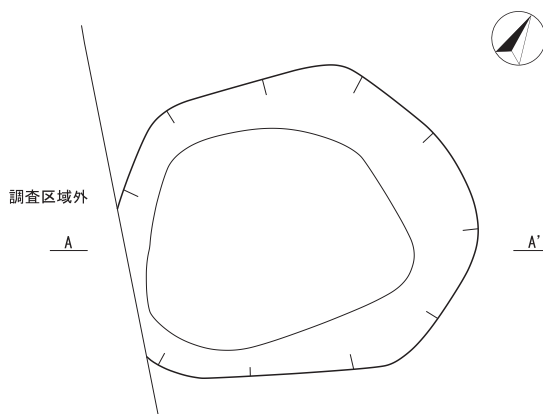
- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径 1~2mm) を5%含む。
- ②黒褐色土 (7.5YR 2/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径 1~2mm) を5%含む。
- ③暗褐色土 (7.5YR 3/3)。橙色 (7.5YR 6/8) のパミスをよく含む。
- ④にぶい褐色土 (7.5YR 5/4) 灰白色 (7.5YR 8/2) や橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径 1~2mm) を5%含む。締まりややあり。粘性あり。

土坑27号



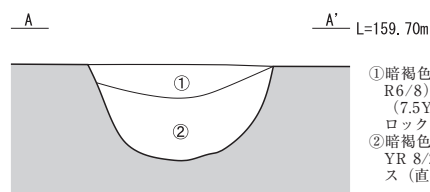
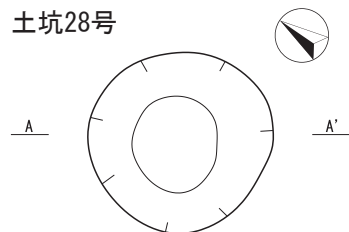
- ①暗褐色土 (7.5YR 3/3)。締まり、ややあり。粘性なし。明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径 5~15mm) を多く含む。灰白色 (7.5YR 8/2) の軽石も含む。土器を含む。

土坑29号



- ①黒褐色土 (7.5YR 3/2)。黄橙色 (7.5YR 6/8) のパミスを含む。締まりややあり。粘性なし。古墳時代か。成川式土器を含む。
- ②黒色土 (7.5YR 2/1)。
- ③②に明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰土が混ざる。

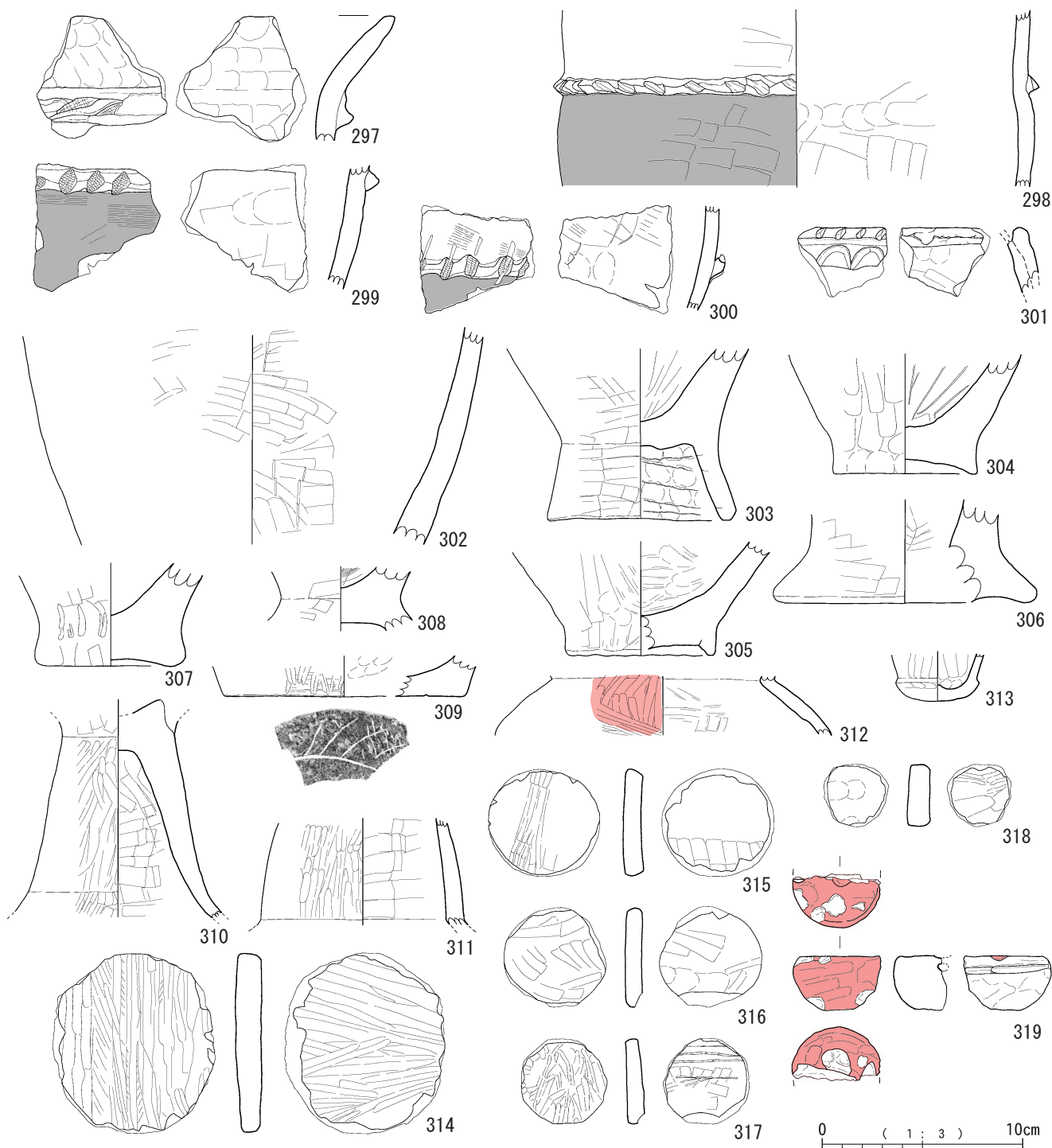
土坑28号



- ①暗褐色土 (7.5YR 6/8)。橙色 (7.5YR 6/8) のパミスをよく含む。明褐色 (7.5YR 5/6) のアカホヤ火山灰のブロック (直径 5~15mm) を含む。
- ②暗褐色土 (7.5YR 3/3)。灰白色 (7.5YR 8/2) や橙色 (7.5YR 6/8) のパミス (直径 1~2mm) を5%含む。

第60図 土坑24・27・28・29号





第61図 古墳時代土器・土製品

cm。土坑28号はF-13区IVb層上面検出で、平面プランは48cm×50cmで、深さは検出面から26cm。土坑29号はF-14区IVa層上面検出で、平面プランは82cm×94cm、検出面からの深さは14cm。

(3) ピット

ピット122基が検出された。本稿では、P.27「(5) ピット (柱穴)」の項に示す理由により埋土内に遺物を伴わないピット (柱穴) は、遺構配置図をもって平面図

とし、断面図は省略する。当該期のピットに遺物を含むのは確認されなかったため、本項では省略する。

3 遺物

(1) 遺物の分類

本項で扱う時代は、古墳時代である。古墳時代はⅡa・Ⅱb層を基本的な包含層と捉えているが、場所によって地層が確認されない、もしくは著しく層厚が薄い場所があり、地山や埋土の色調の分別が困難である。そ

のため、包含層を基準としながらも、既知の土器・石器編年の研究成果と併せて、遺物の時期認定は行った。本遺跡では古墳時代の土器が包含層中にあまり出土せず、

縄文時代後・晩期の土器が主に出土することから、Ⅱa・Ⅱc層出土の石器は、縄文時代後期から弥生時代の項で報告する。

第7表 土器分類表（古墳時代）

※18～20類は甕を主とし、一部鉢の可能性を含む。土器の種別の出土・掲載点数は各遺物の文章中に記載（遺構分も含む）。19・21・22・25類は遺構内にのみ出土し、全点図化。これらの出土・掲載点数は遺構の文章中に記載。

類	器形や文様，調整等の特徴
18	口縁部が大きく外反し，口縁部内外面ともに，明瞭な稜を有する。口縁部下位に刻目突帯を巡らす。
19	口縁部がやや外反し，縁部内外面ともに，わずかに稜を有する。口縁部下位に刻目突帯を巡らすものや無文のものがある。
20	口縁部が胴部から直線的に直行し，もしくは口縁端部がやや内湾する。口縁部内外面にわずかに稜を有する。口縁部下位に刻目突帯を巡らすものや無文のものがある。
21	丸底の底部から胴部中位にかけて大きく膨らみ，胴部上半は逆に大きくしほみ頸部に至る。頸部から口縁部は直行して筒状を呈する，壺形土器である。
22	胴部が比較的浅い鉢形土器である。平底で，胴部下半は外傾し，胴部上半にかけて膨らむ。口縁部は大きく外反する。
23	大きくラッパ状に開く高台に，やや内傾する脚部がつく。高坏である。
24	丸底で胴部は膨らみ，頸部から湾状に開いたり，やや内湾したりして口縁端部に至る。小型丸底壺，埴である。
25	手捏ねの小型の土器である。
その他	土器片の周縁を打ち搔いたり擦ったりして円形に整形したメンコ形土製品，特殊土製品，刀子等を報告する。但し，刀子は堅穴建物跡4号内に出土し，P.71を参照されたい。

（2）土器

ア 18類土器（第61図297）

3点中，1点を図化した。297は断面三角形状に突帯を作出し，突帯上には斜位にヘラ状工具で刻みを施す。

イ 20類土器（第61図298）

6点中，4点（内，3点遺構）を図化した。298は，胴部上半の刻目突帯の貼付に伴い同位置がやや凹む。刻目突帯以下に煤が付着する。

ウ 胴部（第60図299～302）

23点中，4点を図化した。299・300は，突帯以下に煤が付着する。突帯上の刻みが微細な布目状を呈し，ヘラ状工具に布を当てて刺突した可能性が見える。同様な資料は6点出土する。301は幅広突帯上に短斜位の刻み，半円の連弧文が施される。1点出土する。302は丁寧なナデにより光沢をもつ。

エ 底部（第61図303～309）

19点中，7点を図化した。いずれも甕の底部である。303は，高台の外表面は工具ナデで，高台裏は，やや斜め方向の輪積み痕を指頭による接着する。304・305・306・307は上げ底で，304・305・306は底部外表面を指頭押圧で整形する。306は高台裏を平坦に仕上げる。307は畳付けが著しく摩滅する。309は木葉痕が底部外表面に貼付される。この1点のみの出土である。

オ 23類土器（第61図310・311）

3点出土し，全点（内，1点遺構）図化した。310は赤褐色を呈し，重量感がある。脚外表面は縦方向に，丁寧

な工具・指ナデにより光沢をもつ。脚内面3点（内，1点遺構）は，横方向の輪積み痕に沿って，指（工具）ナデにより丁寧に整形する。脚上端には坏部との接着面が露出する。311はにぶい橙色の大変軽い胎土で，縦方向のミガキ調整である。

カ 24類土器（第61図312・313）

小型丸底壺は6点出土し，全点（内，4点遺構）図化した。312は外表面に赤色顔料を塗布する。313は丁寧な指ナデにより光沢をもつ。

キ その他（第61図314～319）

19点中，6点を図化した。314・315・316・317・318は円盤土製品（いわゆるメンコ）である。いずれも，縄文時代後・晩期から古墳時代の土器片を再利用している。ほとんどが周縁を打ち欠いているが，未掲載の中に周縁の角を擦り潰して整形したのもあった。319は，穿孔が横方向に穿たれる点で，紡錘車と特徴を異にする。穿孔の先端は，丁寧に面取りがなされる。全面的に赤色顔料を塗布する。下面の球状の先端付近は部分的剥離を含めて，使用により磨れている。

第4節 時期不明遺構の調査

1 調査の概要

本項に記載する古道については、埋土や埋土内遺物、周辺の遺物出土状況を入念に検討したが、時期を特定する客観的な旁証を見出せず、時期判断が困難なものとして記す。

2 遺構

(1) 古道

本遺跡では、1区から4区にかけて、古道が5条検出された。本遺跡の北側に位置する二子塚A遺跡でも溝状遺構が5条、古道が7条検出されている。本遺跡で検出された古道は、二子塚A遺跡のそれらに続く遺構群と考えられる。二子塚A遺跡の報告書（鹿児島県2005）P.98では、層状に堆積する埋土の一部は、大正3年の桜島噴火時の火山灰の可能性が指摘されており、「大正時代以前の江戸あるいは明治時代の」「明治時代以前となる」古道の可能性が報告されている。以下の本遺跡の遺構も、同様の認識で捉えられる。

古道1号

G・H-13・14区のIVa層上面で検出された。検出した全長は18.9m以上、最大幅は10.4mで、2面の硬化面が見られた。硬化面の埋土は、下部からIVa・Ⅲ・Ⅱ層を混土とする。硬化面の上部にはⅢ層土の混じった土が含まれることから少なくとも縄文後・晩期が下限と推察される。

古道2号

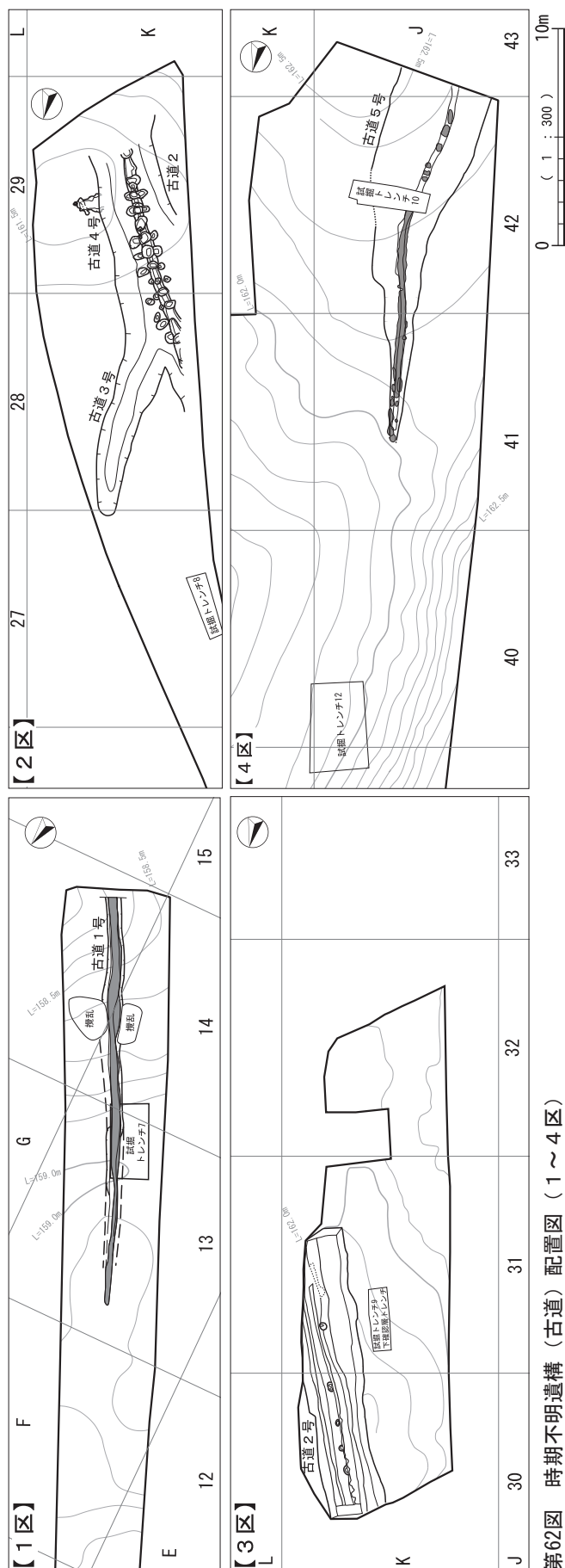
K-28・29区のIVa層上面で検出された。検出した全長は32.4m以上、最大幅は3.2mで、6面の硬化面が見られた。硬化面の埋土は、下部からⅢ層、Ⅱ層を混土とする。硬化面の上部にはⅢ・Ⅱ層に加え、IV層（アカホヤ火山灰）の混じった土が含まれる。硬化面は波板状を呈する。古道3・4号に切られることから、古道2・3・4号のうち、古道2号は最も古くから存在する古道ということになる。

古道3号

K-27～30区のIVb層上面で検出された。検出した全長は14.16m、最大幅は2mで、2面の硬化面が見られた。硬化面の埋土は、下部からIV～Ⅱ層を混土とする。硬化面の上部にはⅢ・Ⅱ層の混じった土が含まれる。古道2号を切ることから、古道2号形成後に、新たに形成された分岐する古道と考えられる。

古道4号

K-29区のIVa層上面で検出された。検出した全長は1.44m、最大幅は88cmで、1面の硬化面が見られた。硬化面の埋土は、Ⅱb層に類似する。硬化面の上部にはⅡa・Ⅱb層の混じった土が含まれる。古道2号を切ることや、古道3号に直交することから、主要道である古道3号から派生した人家や田畑、山につながる私道・里道と推察される。この古道3号に連なると考えられる二子塚A遺跡で検出された、現道と並行する溝状遺構1や古道1～5に対して直交



第62図 時期不明遺構（古道）配置図（1～4区）

【古道5号埋土】

- ①黒色土 (10YR 2/1)。1d層由来。P1 (桜島大正噴火噴出物) と考えられる。灰白色 (10YR 8/1) の軽石 (直径2~10mm) を3%程と灰を含む。灰は全体に混ざり、砂質。縮まりややあり。
- ②①には同じだが、さらにアカホヤ火山灰層のブロック (直径3cm) や黄褐色 (10YR 8/6) の軽石 (直径1cm) をごくわずかに含む。灰の砂質は①より弱い砂質で、含まれる灰も①より少ない。P1も①より少ない。①より縮まりは強い。
- ③②に同様だが、P1が少なく、灰も少ない。P1を1%以下、ごくわずかに含む。縮まりは②と同等。
- ④③に黄褐色 (7.5YR 7/8 アカホヤ火山灰層) のバミス (直径1mm) を1%含む。
- ⑤黒褐色土 (10YR 2/2)。縮まりややあり。粘性あり。黄褐色 (10YR 5/8) のバミス (直径1mm以下) を多量に (40%程) 含む。
- ⑥黒褐色土 (10YR 2/2)。縮まりややあり。⑤に類似するが、⑤より土色はより黒い他、含まれるバミスの量が少なく、含まれるバミスの量は、黄褐色 (10YR 5/8) のバミスが20%程度、黄褐色 (10YR 5/8) のバミス (直径1~5mm) が5%である。
- ⑦⑥より含まれるバミスの密度が低く、3%程である。③と⑥の中間的色調で、⑥より黒い土色である。
- ⑧黒色土 (10YR 2/1)。縮まりややあり。粘性ややあり。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1~3mm) を5%程含む。ごくわずかに同様のバミス (直径1cm) を含む。IVa層由来か。
- ⑨黒色土 (10YR 2/1) に黒褐色土 (7.5YR 3/2 III層由来) が40%混ざる他、同じ土のブロック (直径5~10cm) が混在する。縮まりややあり。粘性ややあり。
- ⑩黒色土 (10YR 2/1) にIII層由来のブロックがごくわずかに含まれる。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1cm) を5%程含む。⑧と近似する。
- ⑪黒色土 (7.5YR 2/1) に橙色 (7.5YR 6/8 IVa IVb層由来) のブロック (直径1~5cm) を40%含む。縮まりあり。粘性ほとんどなし。
- ⑫黒色土 (7.5YR 2/1) にブロック (直径5~10mm IV層由来) を10%含む。橙色 (7.5YR

- 6/8) のバミス (直径1~2mm) を5%含む。縮まり⑪よりない。粘性もほとんどない。
- ⑬⑫に似るが、⑫よりやや明るい土色で、ブロック (直径1cm) が少ない。
- ⑭黒色土 (10YR 2/1) に黄褐色 (10YR 5/6 IV層由来) のブロック (直径1~5cm) を5%程含む。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1mm) を3%含む。
- ⑮黒色土 (10YR 2/1)。縮まり弱い。粘性ややあり。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1mm) を1%以下含む。
- ⑯黒色土 (7.5YR 2/1) 縮まり⑮よりややあり。粘性も⑮よりあり。⑮よりやや明るい土色である。バミスを含まない。溝の下端か。
- ⑰黒色土 (10YR 2/1)。縮まり弱い。粘性ややあり。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径1~2mm) と明黄褐色 (10YR 6/6) のバミス (直径5mm 池田軽石か) をごくわずかに1%含む。
- ⑱黒色土 (10YR 2/1) に黒褐色 (10YR 3/2 II c層由来) のブロック (直径2~5cm) を40%含む。
- ⑲黒色土 (10YR 2/1)。縮まりややあり。粘性ややあり。橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径2mm) を1%含む。
- ⑳黒褐色土 (10YR 2/2)。縮まりややあり。やや砂質。VIIa層 (薩摩火山灰層) のブロック (直径1~3cm) をごくわずかに含む。
- ㉑黒褐色土 (10YR 3/1)。縮まりなし。やや砂質。水成堆積か? 橙色 (7.5YR 6/8) のバミス (直径2mm) をごくわずかに含む。
- ㉒㉑より土色が明るく、砂質。バミスを含まない。
- ㉓黒褐色土 (10YR 3/2)。縮まりがなく、砂質。VIIa層 (薩摩火山灰層) を多く含む。VIIa層が削られ、埋土に含まれたか。
- ㉔硬化面①。縮まり強い。黒褐色土 (10YR 3/2)。灰白色 (10YR 8/2) のバミス (直径2mm) を2%含む。VIIa層が踏みしめられたものか。鉄分が薄い層状に堆積する。
- ㉕硬化面②。縮まりが大変強い。暗褐色土 (10YR 3/3 VIIa層由来か) を主で、加えて鉄分の層と㉔の層の3つの層が交互にラミナ状に堆積する。水成堆積によるか。砂質が強い。

する古道6は、「人家や畑・山への道となっていた」と指摘されている。

古道5号

J-41~43区のIIc層上面で検出された。検出した全長は6.5m、最大幅は44cmで、2面の硬化面が見られた。硬化面の埋土は、VIIa層を由来とする。硬化面の上部にはVIIa・IV・III・II層の混じった土が含まれる。㉕層は水成堆積の上に道として利用して㉔層が形成された可能性がある。㉕層は、地山の層 (VIIa層) と考えられ、道の利用に伴い踏み固められて地山が沈降したと推察される。①~⑥層は桜島の大正噴火以降の層 (P1が含まれる) である。⑦層以下は大正噴火以前で時期は不明である。地山の高さと比較すると、中世以降の古道の可能性で考えたい。なお、硬化面は古道2号同様、波板状を呈する。

3 遺物

(1) 遺物の分類

本項で扱うのは、上記古道の埋土内に出土した遺物のうち、時代を特定できない遺物及び近世遺物である。

(2) 陶磁器 (第67図321)

321は古道2号の埋土内から出土した皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎ、畳付けに釉薬がかからない。龍門寺焼とすれば18世紀中頃か。内野山窯の可能性もあり、それならば、17世紀末から18世紀初頭と考えられる。

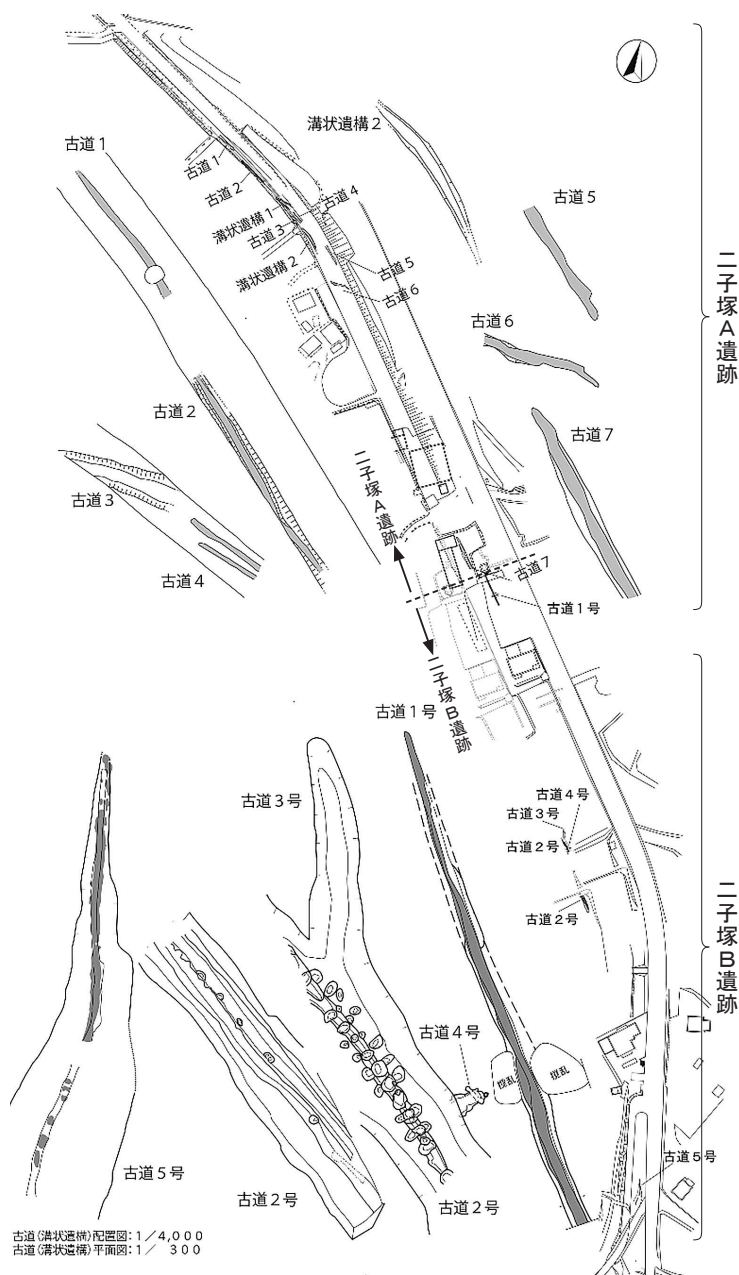
(3) 金属製品

刀子 (第67図320)

320の刀子は古道5号の埋土内から出土した。残存長5.9cm、最大幅2.3cmである。全面的に錆びているが、レントゲン照射により、原形を留めていると判断される。古道埋土内を含め、中世相当の遺物が出土せず、古墳時代の遺物が含まれるため、古墳時代の可能性もある。

古銭 (第67図321)

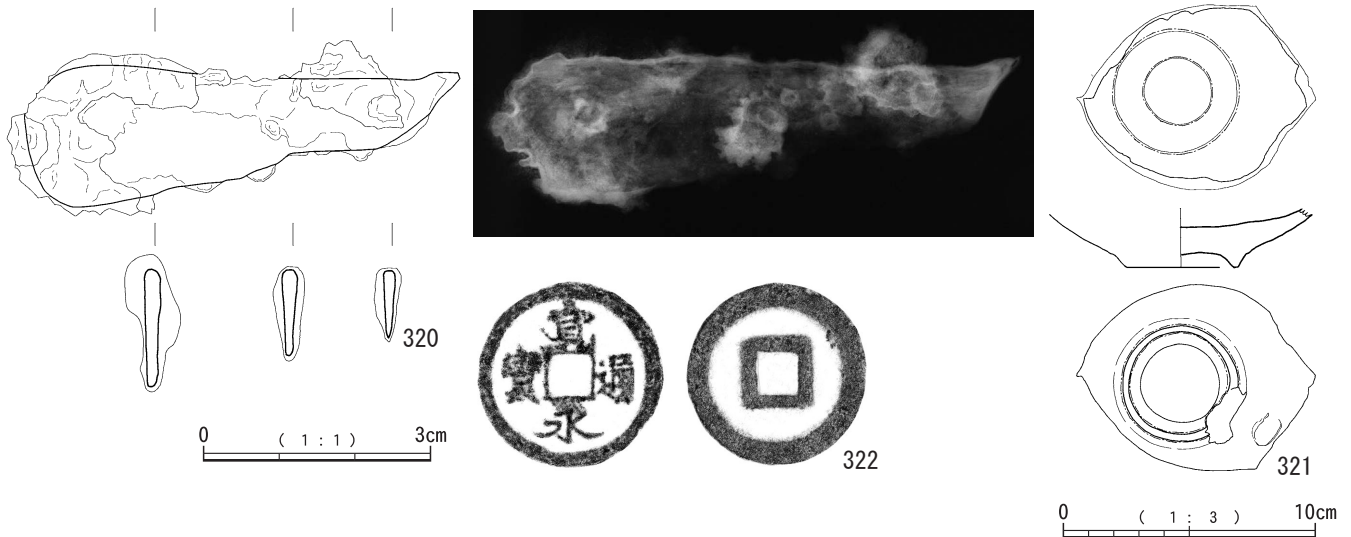
322はIIa層から出土した寛永通宝で、遺物である。



第63図 二子塚A・B遺跡溝状遺構・古道配置図



第65図 古道 2 (3 区) ・ 5 号



第66図 古道5号埋土内・近世・時期不明遺物

第8表 土器観察表 (1)

所蔵 番号	掲載 番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	器種	類	注量(cm) 口径 底径 器高	調整・主文様	色調	胎土 雲母	焼成	備考
	1				11		6	— — —	口横並行貝殻刺突連点「く」の字貝殻刺突連点文	外面			
	2				3.1029		2	— — —	胴:斜貝殻条痕 縦貝殻刺突文	内面(全て調整)			
	3				2		3	— — —	胴:縦貝殻押し引き文 縦貝殻刺突文				
	4				5		2-4	— 11.6 —	底部立上りの縦へら刻み				
	5				15		1	— — —	口横並行貝殻刺突文 胴:横貝殻条痕文				
	6				190		3	— — —	唇:刺突刻み 口:縦貝殻刺突文 胴:貝殻押し引き文				
	7				58		1	— — —	胴:横貝殻条痕文				
	8				59.1067		—	— — —	口:胴:無文				
	9				24		3	— — —	胴:横貝殻刺突文				
	10				1		9	— — —	胴:並行沈線 縦擦糸文				
	12				9		3-4	— — —	唇刺突連点 口横並行貝殻刺突連点文 斜貝殻刺突連点文				
	13				14		9	— — —	胴:縦編目状擦糸文				
	14				15		9	— 8.3 —	胴:横並行沈線文 縦擦糸文				
	15				43.44		9	— — —	唇:刺突刻み 口横並行沈線文 縦擦糸文				
	16				42		9	— — —	胴:縦擦糸文				
	17				2		4-5	— — —	唇:縦へら刻み 口:横貝殻刺突文「の」字貝殻刺突文 縦貝殻刺突文				
	18				埋土		1-5	— 12.4 —	底部立上りの縦へら刻み				
	19				3		9	— — —	胴:斜網目擦糸文区画あり				
	20				8		9	— — —	胴:斜・横並行沈線文				
	21				埋土		9	— — —	唇:刺突刻み 口横並行沈線文 斜並行沈線文 縦擦糸文				
	22				8		9	— — —	胴:縦編目状擦糸文				
	23				2.4		9	— — —	胴:斜網目擦糸文区画あり				
	24				E11 SP269	一括	2	— — —	口横貝殻刺突文 胴:縦貝殻刺突文 楔形貼付文				
	26				J41 埋設土器	埋土	10	13.2 11 20.5	口～底:横基調に縦斜貝殻条痕				
	27				D7-8 V-VI	1315.1354.496	1	— — —	胴:斜位貝殻条痕				
	28				E12 VI	456	—	— — —	胴:横貝殻条痕				
	29				F12	1025	—	— — —	口横貝殻刺突 胴:縦貝殻刺突				
	30				E11 V	506	2	— — —	胴:縦貝殻刺突 楔形貼付文				
	31				G14 VI	561	—	— 11.4 —	底立上りの縦へら刻み				
	32				E11 III	331	3	— — —	胴:横貝殻押し引き				
	33				D7-8 VI-V	951-978-483	—	28.6 —	唇:縦へら刻み 口横・斜貝殻刺突 胴:縦貝殻条痕 横貝殻押し引き				
	34				K28 IV	284	4	— — —	唇:縦へら刻み 胴:横・斜貝殻条痕				
	35				K27 V	一括	—	— — —	胴:縦・横貝殻条痕				
	36				D9	1352.1353	—	— — —	口横貝殻刺突・斜沈線 胴:斜位貝殻条痕				
	37				E11 VI	1222	—	18 —	唇:縦へら刻み 口横貝殻刺突 胴:貝殻綾杉文				
	38				F12 V-VI	513.515	—	— — —	口:斜貝殻刺突 胴:横貝殻条痕				
	39				K31	3079.3082.3083他	5	— 14.8 —	胴:横・斜貝殻条痕				
	40				D9	1176	—	11 —	胴:横貝殻条痕 底立上りの縦へら刻み				
	41				K30 V	3065	—	— — —	底立上りの縦へら刻み				
	42				K31	3163	—	13 —	胴:縦・斜貝殻条痕				
	43				J43 VIb	4430	—	— — —	胴:縦・横・斜貝殻刺突				
	44				K30 V	一括	6	— — —	横・斜貝殻刺突				
	45				D7-8	494	—	— — —	胴:貝殻刺突 底立上りの斜へら刻み				
	46				F12 VI	758	—	— — —	胴:栴檀押型文				
	47				J42 VIb	4431	7	— — —	胴:縦山形押型文				
	48				E10 V	1200	—	— — —	唇:縦へら刻み 口横刺突連点文				
	49				F11	332	—	— — —	唇:波状沈線文・縦へら刻み 口:無文				
	50				F14	555	—	— — —	唇:縦へら刻み 口:斜並行沈線文				
	51				G14 VI	805.808.809.811他	21.4	— — —	口:無文 胴:横貝殻条痕調整				
	52					806	—	— — —	胴:無文 横貝殻条痕調整				
	53					639.807.813	—	— — —	胴:無文 横貝殻条痕調整				
	54				K30 V	3202.3203.3204	8	— — —	口横並行沈線文・山形文				
	55				K28 VI	884	—	— — —	口横並行沈線文・山形文				
	56				F11-12 V-VI	454.752	—	— — —	唇:縦へら刻み 口:無文 横刺突連点文				
	57				D9 V	473.475	—	— — —	唇:刺突連点文 胴:斜網文				
	58				F14	556	—	— — —	胴:縦網文 並行沈線山形文				
	59				F13 VI	781	—	— — —	胴:縦並行沈線 擦糸文 並行突帯(付 横刺突連点文)				

第9表 土器観察表 (2)

採掘 番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	器種	類	法量(cm) 口径 底径 器高	調整・主文様		色調		胎土 雲母	焼成	備考		
22	60	E-F11	V-VI	301.302.306.307他	9	深鉢	26.2	—	唇・縦「く」の字刻み 胴・無文 縦線系文 並行沈線	胴・横貝殻条痕	10YR4/2 灰黄褐色	7.5YR4/3 褐色		良好		
	61	F13		540.534.535			—	—	唇・縦ヘラ刻み 胴・横貝殻条痕調整	胴・横貝殻条痕	7.5YR5/3 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
	62	K31		3114			—	—	口上位置 縦並行刺突点文 横並行沈線文 並行沈線山形文 下段 横刺突点文	口・横貝殻条痕・指ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
	63	K30	V	3183.3146			—	—	口・横並行刺突点文 横並行沈線文 胴・並行沈線 並行沈線山形文 横刺突点文	胴・横貝殻条痕	7.5YR4/3 褐色	5YR5/6 明赤褐色		良好		
	64	K30-31		3178			22	—	口・横並行刺突点文 横並行沈線文 胴・並行沈線 並行沈線山形文 横刺突点文	口・横貝殻条痕・指ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好		
	65	F13		3160			—	—	唇・縦ヘラ刻み 口・無文 横刺突点文		10YR6/4 に近い黄褐色	7.5YR4/3 褐色		良好		
	66	F13		523.624			—	—	頸・縦線系文 並行沈線文・(長柄)円弧文	胴・横貝殻条痕	5YR5/6 明赤褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好		
	67	K31		3166			—	—	頸・並行沈線円弧文		10YR4/2 灰黄褐色	2.5Y6/3 に近い褐色		良好		
	68	E13	VI	865			—	—	頸・縦線系文 並行沈線文・円弧文		10YR6/4 に近い黄褐色	7.5YR4/3 褐色		○	良好	
	69	J40		4393			—	—	胴・横並行刺突点文 横斜並行沈線文	胴・指ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好		
23	70	K32	III	一括	10	深鉢	—	—	胴・横刺突点文 区画斜線系文		10YR5/3 に近い黄褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
	71	K31	V	3172			—	—	胴・区画斜線系文	胴・横貝殻条痕	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
	72	E10		11501.230			—	—	胴・縦線系文 横並行沈線文		7.5YR4/2 灰褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好		
	73	K39	IIc	3990			—	—	胴・区画斜線系文	胴・横貝殻条痕・指ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR4/2 灰黄褐色		良好		
	74	K30-31		3066.3111.3143他			—	—	口・胴・波状並行沈線文	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好			
	75	E10	V	1197.1198			—	13	—	底・指ナデ	10YR6/4 に近い黄褐色	10YR7/4 に近い黄褐色		良好		
	76	K30		3194.3196.3201他			—	13.4	底部立上りか・縦ヘラ刻み		7.5YR5/4 に近い褐色	5YR5/6 明赤褐色		良好		
	77	J41	IIb	2790.2791			—	—	胴・横貝殻条痕	胴・横貝殻条痕	7.5YR4/3 褐色	10YR5/4 に近い黄褐色		良好		
	78	K30		3107			—	—	胴上・微隆起突帯 胴下・横貝殻条痕		5YR4/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い黄褐色		良好		
	79	K31	V	3081.3087.3090			—	—	胴・縦貝殻刺突文 横・斜貝殻条痕	胴・横・斜貝殻条痕	7.5YR6/4 に近い褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好		
29	80	K31		3122.3125	10	深鉢	—	—	胴・横貝殻条痕 縦突帯(付 貝殻刺突点)	ヘラ・指ナデ	10YR5/3 に近い黄褐色	7.5YR4/2 灰褐色		良好		
	81	K39	II	4207			—	—	胴・微隆起突帯(縦刺突点) 横貝殻条痕	胴・横・斜貝殻条痕	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好		
	82	K30	V	3060.3066.3097他			—	—	胴・微隆起突帯(付 刺突点) 貝殻刺突点双交弧文	胴・横貝殻条痕・指ナデ	10YR4/3 に近い黄褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		不良		
	83	J-K26	VI	1263.1261			—	—	胴・横貝殻刺突点 刺突点双交弧文	胴・横貝殻条痕	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
	84	K28	遺物集中2号	1			—	—	胴・貝殻条痕調整 貝殻刺突点双交弧文	胴・横貝殻条痕・指ナデ	5YR5/6 明赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色		不良		
	85	K30	V	3101.3104.3189			—	9.1	胴・横・斜貝殻条痕調整	胴・横・斜貝殻条痕	10YR5/3 に近い黄褐色	7.5YR2/1 黒色		不良		
	117	K27	堅穴建物跡2号	4・6・8・15			11-14	—	胴・横ミガキ	胴・工具ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	10YR4/2 灰黄褐色		良好		
	119	K29		9			浅鉢	15	—	頸・胴・横ミガキ	頸・胴・工具ナデ	7.5YR3/3 暗褐色	5Y4/2 灰オリーブ色		良好	
	31	120	K28-29	堅穴建物跡3号			PTT5-31.37.10	13	—	胴・横・工具ナデ	胴・横・工具ナデ	10YR3/2 黒褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好	
	33	121	K31	土坑16号			埋土	深鉢	11-14	8	胴・斜・工具ナデ	胴・斜・工具ナデ	7.5YR4/4 褐色	7.5YR4/3 褐色		良好
127	13	—			口上・指頭押圧 下半 横・工具ナデ	口上・横・工具ナデ 下半 指頭押圧 胴・横・指頭押圧(指ナデ)			5YR3/2 暗赤褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好				
128	11-14	—			胴・横・工具ナデ 縦・工具ナデ 縦ミガキ	胴・横・斜・ミガキ 下半 横・工具ナデ			7.5YR4/3 褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好				
129	15	—			口・横ミガキ	口・横・工具ナデ			7.5YR5/4 に近い褐色	5YR5/6 明赤褐色		良好				
35	130	K30	SP285	一括	深鉢	11-14	5	胴・斜・ミガキ 底立上り・縦・工具ナデ	胴・横・工具ナデ	5YR4/4 に近い赤褐色	2.5YR4/4 に近い赤褐色		良好			
132	F12					SP12	—	浅鉢	15	—	唇・縦ヘラ刻み 口・横・工具ナデ	口・横・斜・工具ナデ	2.5YR6/3 に近い褐色	2.5YR5/3 に近い黄褐色		良好
135	K30					SP285	一括	11-14	—	胴・斜・工具ナデ 上半 一部 横・工具ナデ	胴上・横・工具ナデ 下半 横・指ナデ	7.5YR4/4 褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好	
136						SP289	—	—	—	口・横並行四線 横・工具ナデ 胴・斜・ミガキ	口・胴・横・工具・指ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好	
36	137	K31	SP309	16.3.4.5.11.11他	深鉢	13	33.8	口・横・指ナデ 胴上・横・工具ナデ 以下 斜・縦・ミガキ	胴・横・工具ナデ 頸・一部斜・ミガキ	2.5YR3/2 暗赤褐色	10YR3/2 黒褐色		良好			
138	—					—	口・横・指頭押圧(指ナデ) 胴上・横・ミガキ 下半 縦・ミガキ	口・横・工具ナデ 頸・一部横・工具ナデ	5YR4/2 灰褐色	10YR4/2 灰黄褐色		良好				
139	—					—	頸・縦・横・ミガキ 胴・縦・ミガキ	頸・胴・一部横・指ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	7.5YR4/2 灰褐色		良好				
140	—					—	口・横・工具ナデ 胴・横・ミガキ	口・横・工具ナデ 頸・指頭押圧	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好				
37	141	K28		81	深・浅鉢	11-15	—	口(頸)・横並行四線 横・工具ナデ	口(頸)・横・工具ナデ	7.5YR3/2 黒褐色	10YR4/2 灰黄褐色		良好			
142	—					—	口・並行横四線 横・工具ナデ 胴・横・工具ナデ	胴・横・横・工具ナデ	5YR4/4 に近い赤褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好				
143	47.8					—	口・横・指ナデ 胴上・横・ミガキ 下半 縦・斜・ミガキ	口・横・横・工具ナデ 肩・横・工具ナデ	7.5YR3/2 暗褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好				
144	12					—	口・横・工具ナデ(一部ミガキ) 胴・斜・横・ミガキ 胴・一部縦・ミガキ	胴・横・横・工具ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	7.5YR4/2 灰褐色		良好				
38	145	K28	遺物集中2号	27.36.56	深鉢	11-14	—	胴・斜・ミガキ・工具ナデ	胴・横・工具ナデ(一部ミガキ)	5YR3/2 暗赤褐色	10YR3/1 黒褐色		良好			
146	13.14.13.14.18.68他					11-14	—	頸・横・工具ナデ 胴上・横・工具ナデ 下半 斜・工具ナデ(一部ミガキ)	胴・斜・工具ナデ 胴・横・工具ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	5YR3/1 黒褐色		良好			
147	53					14	—	口・並行沈線(頸状) 横・工具ナデ	口・横・工具(一部指)ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好			
148	24					深・浅鉢	11-15	7.8	胴・縦・工具(指)ナデ 底立上り・横・指ナデ	胴・放射状に工具(指)ナデ	5YR5/6 明赤褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		良好		
39	149	K28	遺物集中2号	一括	浅鉢	15	—	口・頸・横・工具ナデ 工具ナデ	口・頸・横・工具ナデ 肩・横・工具ナデ	5Y4/2 灰オリーブ色	5Y4/2 灰オリーブ色		良好			
150	71					—	口・胴・横・工具ナデ(一部ミガキ)	口・胴・横・工具ナデ(一部ミガキ)	10YR3/2 黒褐色	10YR3/1 黒褐色		良好				
156	21.31					13	—	口・頸・横・工具(指)ナデ	口・頸・部分的に指頭押圧	10YR4/2 灰黄褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好			
157	35					深鉢	11-14	—	頸・横・工具ナデ 胴上・横・工具ナデ 下半 縦・工具ナデ(一部ミガキ)	頸・横・工具ナデ(一部ミガキ) 胴・斜・ミガキ(一部工具ナデ)	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
40	158	K23	遺物集中3号	23.26	深・浅鉢	11-15	11	胴・縦・ミガキ 底立上り・横・工具(指)ナデ	胴・横・工具ナデ 縦・ミガキ 胴・横・工具ナデ	7.5YR4/2 灰褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好			
159	36					深・浅鉢	11-15	—	胴・縦・ミガキ 底立上り・横・工具(指)ナデ	胴・縦・横・工具ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR4/3 褐色		良好		
161	8					14	31.4	—	口・指頭押圧 頸・縦・ミガキ 胴・縦・工具ナデ	口・指頭押圧 胴上・横・指頭押圧 下半 横・工具ナデ(一部ミガキ) 胴上・横・工具ナデ	10YR5/3 に近い黄褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好		
162	37.38					—	—	頸・縦・工具ナデ 胴・縦・斜・工具ナデ	頸・横・工具ナデ 胴・斜・工具ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	7.5YR4/3 褐色		良好			
41	163	K29	遺物集中4号	85	深・浅鉢	11-14	13	胴・縦・横・工具(指)ナデ 条痕状	胴・横・工具(指)ナデ ケズリ状	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/3 に近い黄褐色		良好			
164	62					—	9	胴・横・工具ナデ	胴・横・工具ナデ	10YR5/4 に近い黄褐色	7.5YR4/4 褐色		良好			
165	11.12.39.41					—	7	胴・横・斜・工具ナデ	胴・放射状に工具ナデ	5YR3/3 暗赤褐色	10YR6/3 に近い黄褐色		良好			
168	19.27.47.50.54他					12	41.6	口・横・ミガキ・工具ナデ 頸・横・縦・ミガキ・工具ナデ 胴・縦・ミガキ・工具ナデ	口・横・指ナデ(指頭押圧) 胴上・横・工具ナデ(一部ミガキ) 下半 横・指ナデ(指頭押圧) 胴・工具ナデ(一部ミガキ)	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR4/1 褐色		良好			
42	169	K31	遺物集中5号	52.77.110.144.177	深鉢	12	28.5	—	口・横・工具(指)ナデ 胴・横(一部斜)ミガキ 胴・縦・ミガキ	口・横・工具(指)ナデ 胴・横(一部斜)ミガキ 胴上・横・指ナデ 下半 横・指ナデ 胴・縦・ミガキ	5YR4/4 に近い赤褐色	5YR4/2 灰褐色		良好		
170	13.98.99.101.128					20.4	—	口・横・指ナデ 胴上・横・工具ナデ 下半 横・工具ナデ(一部ミガキ)	口・横・指ナデ 胴上・横・工具ナデ 下半 横・工具ナデ(一部ミガキ) 胴・縦・ミガキ	5YR4/2 灰褐色	5YR4/2 灰褐色		良好			
171	17.18.19					37	—	口・横・工具(指)ナデ 胴上・横(一部斜)ミガキ 胴・縦・ミガキ	口・横・工具ナデ 胴・横(一部斜)ミガキ 胴・工具ナデ(一部ミガキ)	2.5YR4/4 に近い赤褐色	5YR4/4 に近い赤褐色		良好			
172	180					—	—	口・横・工具ナデ 胴上・横(一部斜)ミガキ 胴・縦・ミガキ	口・横・工具ナデ 胴・横(一部斜)ミガキ 胴・工具ナデ(一部ミガキ)	10YR3/2 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色		良好			
173	123187					—	—	胴・横・工具ナデ(ミガキ) 胴上・横・工具ナデ 下半 横・ミガキ	胴・横・工具ナデ(一部ミガキ) 胴・斜・ミガキ	10YR3/1 黒褐色	10YR3/2 黒褐色		良好			
174	52.77.110.144.177					—	6.2	胴・斜・ミガキ	胴・横・ミガキ	5YR3/2 暗赤褐色	5YR4/3 に近い赤褐色		良好			
175	95.96					11-14	7.5	胴・縦・工具ナデ・ミガキ 部分的に指頭押圧	胴・横(下位は部分的に斜) 工具ナデ	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR4/3 に近い黄褐色		良好			
176	172					—	8.6	胴・斜・工具ナデ 光沢あり(ミガキの可能性あり)	胴・斜・工具ナデ・ミガキ	5YR4/4 に近い赤褐色	10YR4/2 灰黄褐色		良好			
177	119					—	7.4	胴・斜・工具ナデ 光沢あり(ミガキ)	胴・横・工具ナデ・ヘラミガキ	10YR4/3 に近い黄褐色	2.5YR3/1 暗赤褐色		良好			
43	178					K39	IIc	2023.2024	深鉢	11-15	3.3	胴・斜・工具ナデ(ミガキ)	胴・横(一部斜) 工具ナデ(ミガキ)	10YR4/3 に近い黄褐色	10YR3/1 黒褐色	
179	24	13	—	口・横・工具(指)ナデ	唇・横・指ナデ 口・頸・横・指ナデ(指頭押圧)					10YR3/1 黒褐色	7.5YR4/3 褐色		良好			
180	4.2914	15	16	—	口・頸・胴・横・ミガキ					口・頸・胴・横・ミガキ	10YR5/3 に近い黄褐色	7.5YR4/3 褐色		良好		
182	K39		4167	—	—					口・横並行四線 横・工具ナデ 胴・縦・工具ナデ 光沢あり(ミガキの可能性あり)	口・胴・横・工具ナデ	2.5YR3/3 暗赤褐色	7.5YR4/4 褐色		良好	
183	J41	IIc	2851	2328	11	深鉢	—	—	口・横四線 横・工具ナデ 胴・縦・工具ミガキ	口・横・工具ナデ 胴・縦・工具ナデ	5YR3/6 暗赤褐色	7.5YR4/2 灰褐色		良好		
184	—						—	—	口・横並行沈線 横・工具ナデ 胴・縦・工具ミガキ	口・胴・横・工具ミガキ・ナデ	10YR3/1 黒褐色	10YR4/2 灰褐色		良好		
185	—						—	—	口・横並行沈線 横・工具ナデ 胴・縦・工具ミガキ	口・横・指ナデ 胴・斜・指・工具ナデ	7.5YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色		良好		
186	—						—	—	口・横・工具ミガキ 胴・縦・工具ミガキ	口・胴・工具ミガキ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR4/3 褐色		良好		
187	K32	III	2023.2024	3994	11	深鉢	—	—	口・横並行四線 横・工具ナデ 胴・縦・工具ミガキ	口・工具ナデ ミガキ	5YR3/2 暗赤褐色	7.5YR5/4 に近い褐色		良好		
188	—						—	—	口・横並行四線 突帯(付 横刺突点) 横・工具ミガキ 肩・縦・並行四線 突帯(付 横刺突点) 横・工具ミガキ 胴・指ナデ(ミガキ)	口・指ナデ 横・工具ナデ	5YR3/1 黒褐色	5YR3/2 暗赤褐色		良好		
189	—						—	—	口・斜・沈線 逆「ハ」の字沈線文 胴・横・工具ナデ	口・指ナデ 胴・工具ナデ	5YR3/1 黒褐色	2.5Y4/1 黄灰色		良好		
190	J12						12T	—	—	口・横・工具ナデ 工具ハケ	口・指(工具)ナデ	10YR5/3 に近い黄褐色	7.5R6/4 に近い褐色		良好	
191	K39	古5号	SD274	一括	12	深鉢	—	—	口・胴・横・工具ミガキ	口・胴・工具ミガキ	7.5YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色		良好		
192	—						—	—	口・横・工具ミガキ 胴・横・工具ミガキ	口・横・工具ミガキ	2.5YR3/2 暗赤褐色	5YR3/2 暗赤褐色		良好		

第10表 土器観察表 (3)

掲載 番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	器種	類	法量 (cm)		調整・主文様	色調		胎土 番号	焼成	備考					
							口径 底径	器高		外面	内面(全て調整)								
43	縄文時代後晩期	K31	Ⅲ	2929	深鉢	12	—	—	□横並行沈線 横指ミガキ 胴横工具ナデ	□・胴・工具ミガキ	10YR5/4 にふい黄褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好						
				4159		—	—	□横工具ミガキ 胴横工具ミガキ	□・工具ミガキ・指ナデ 胴・工具ミガキ	2.5YR3/1 暗赤灰色	7.5YR3/1 黒褐色	良好							
				14		—	—	□横工具ナデ 胴横工具ナデ	□・胴・工具ミガキ	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	良好	底に凹みあり						
		K31	Ⅲ	2294		13	—	—	—	□横並行沈線 工具ミガキ 胴横工具ミガキ 胴横工具ミガキ	□横並行沈線 工具ミガキ 胴横工具ナデ 胴横工具ミガキ	2.5Y3/1 黒褐色	2.5Y6/3 にふい黄褐色	良好					
				1640,1999,217,2133			38.4	—	—	□並行弧状沈線 横工具ミガキ 胴横工具ミガキナデ	□・胴横工具ミガキ	5YR4/4 にふい赤褐色	5YR4/3 にふい赤褐色	良好					
				一括			—	—	—	□横工具ミガキ 指頭押圧 胴横工具ミガキ	□・胴横工具ミガキ	10YR3/2 黒褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好					
				3540			—	—	—	□横工具ナデ 胴横工具ナデ	□・横工具ナデ 胴横工具ミガキ	10YR3/1 黒褐色	10YR4/1 褐色	良好					
44	縄文時代後晩期	J40	Ⅱc	3777	浅鉢	26	—	—	□横工具ミガキ 胴横工具ミガキ	□・胴・工具ナデ	10YR3/1 黒褐色	7.5YR4/2 灰褐色	良好	胴部外面腐付着					
				2038,2039,226,227,218		22.4	—	—	□斜工具ミガキ 胴横・斜工具ミガキ	□・横工具ミガキ・胴・工具ミガキ	10YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	良好						
				2080,2090,236,2335		—	—	—	□横・斜工具ミガキ 胴横工具ミガキ	□・胴・工具ミガキ	2.5YR3/3 暗赤褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好						
		K30-31	Ⅲ	202		14	29	—	—	□横工具ミガキ 胴横工具ミガキナデ	□・横工具ナデ 胴横・斜工具ナデ 指頭押圧	10YR3/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	良好					
				1876,2020,227,2535			18.4	—	—	□横工具ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ	□・胴横指ナデ 指頭押圧	7.5YR4/3 褐色	7.5YR4/3 褐色	良好	○				
		K39	Ⅱc	203		15	—	—	—	□・胴横工具ナデ	□・横工具ナデ 指頭押圧 胴横工具ナデ	2.5Y4/1 黄褐色	10YR5/3 にふい黄褐色	良好					
				4220,4221,4250			32.4	—	—	□横工具ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ	□・横工具ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横・斜工具ナデ	10YR5/4 にふい黄褐色	10YR5/4 にふい黄褐色	良好					
		K31	Ⅲ	205		15	10.4	4.4 9.3	□横指ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ	□・胴横指ナデ 胴横工具ミガキ 上半横工具ナデ 下半横工具ミガキ	5YR3/3 暗赤褐色	7.5YR3/2 褐色	良好						
				206			—	—	—	□横工具ナデ 頭指頭押圧 横工具ナデ	□・工具ミガキ 頭横工具ナデ	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR4/3 褐色	良好	胴部腐付着				
		K32	207	2899		24.2	—	—	—	□横工具ナデ 胴横工具ミガキ	□・横工具ナデ 胴横工具ミガキ	10YR4/1 褐色	10YR3/1 黒褐色	良好					
		45	縄文時代後晩期	J-K41		Ⅱc	3425	浅鉢	15	—	—	□横並行凹線 横指・工具ナデ 胴横工具ミガキ	□・横工具ミガキ 胴横工具ミガキ	5YR2.5/1 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	良好			
							3052,3017		—	—	—	頭横工具ミガキ 胴横・斜工具ミガキ	頭横工具ミガキ 胴横・斜め工具ミガキ	10YR3/1 黒褐色	5YR3/2 暗赤褐色	良好			
							2725,2726,2735		—	—	—	胴横工具ミガキ 胴上半横工具ミガキ 下半横・斜工具ミガキ	頭・胴横工具ミガキ	10YR3/2 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	良好			
K30	Ⅲ			213	11-14	—	—		—	□指ナデ 頭・胴横・斜工具ミガキ	□・工具ナデ・ミガキ 頭・胴横工具ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好					
				214		—	—		—	胴並行凹線 上半斜工具ミガキ 下半・肩横指ナデ	胴上半横工具ナデ・下半横指ナデ 胴上半横・下半横・斜工具ミガキ	7.5YR5/6 明茶褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好					
K31	Ⅲ			215	11-14	—	8 —		胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ 底立上・斜工具ミガキ	胴・斜工具ナデ	7.5YR5/3 にふい褐色	7.5YR4/3 褐色	良好						
				216		—	8.4 —		底立上・斜・横工具ナデ	底立上・斜・横工具・指ナデ	5YR5/6 明茶褐色	10YR3/1 黒褐色	良好						
K41	Ⅲ			217	11-14	—	9.6 —		底立上・斜・横工具ナデ	底立上・斜・横工具ナデ	7.5YR4/4 褐色	10YR3/2 黒褐色	良好						
				218		—	9.5 —		底立上・斜・横工具ナデ (ミガキの可能性あり)	底立上・斜・横工具ナデ 光沢あり (ミガキの可能性あり)	7.5YR4/4 にふい赤褐色	7.5YR4/3 褐色	良好	内面腐付着					
K32	Ⅲ			219	11-14	—	6.5 —		胴上半横工具ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横・斜工具ミガキ	底立上・斜・横工具・指ナデ 光沢あり (ミガキの可能性あり)	5YR4/4 にふい赤褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好						
				220		—	11 —		胴横・横条痕	胴横・横条痕 縦工具ナデ	7.5YR4/3 褐色	10YR4/3 にふい黄褐色	良好	底部組織痕					
52	縄文時代後晩期			K41	Ⅱc	3318	甕		16	—	—	□刻目突帯文(縦ヘラ刻み) 横工具ナデ	□・横指ナデ	10YR3/2 黒褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好	外面腐付着		
						3540			—	—	唇・刻目突帯文(縦ヘラ刻み) 口三角文 横工具・指ナデ	□・横工具ナデ	10YR3/2 黒褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好				
		2777	—			—		唇・刻目突帯文(縦ヘラ刻み) 口三角文 横工具・指ナデ	□・横指ナデ 胴横・工具ミガキ	5YR4/4 にふい赤褐色	5YR5/6 明茶褐色	良好							
		K40	Ⅱa	224	17	—		—	—	胴・二条刻目突帯文(縦ヘラ刻み) 横工具ナデ	□・斜ナデ 指頭押圧	10YR4/3 にふい黄褐色	7.5R5/3 にふい褐色	良好					
				225		—		—	—	□指頭押圧 胴横工具ナデ	□・胴横工具ナデ 指頭押圧	5YR4/4 にふい赤褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好					
		D8	堅穴建物跡4号	273	19	24		5.8 25.7	□横指(工具)ナデ 胴横工具ナデ	□・胴横工具ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR4/2 灰褐色	良好	外面腐付着					
				274		20.4 7.1 22.9		□横指(工具)ナデ 胴横工具ナデ 脚横指ナデ	□・胴横工具ナデ 底横指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR4/4 褐色	良好							
53	縄文時代後晩期	D8	堅穴建物跡4号	275	鉢	20	34.8	—	—	□工具ナデ 胴横工具ナデ	□・上半 指頭押圧 下半 横工具(指)ナデ 胴横工具(指)ナデ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好					
				276		29	—	—	□横指(工具)ナデ 胴横工具ナデ(突帯下位は横ナデ)	□・上半 指頭押圧 胴ナデ	10YR5/4 にふい黄褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好						
				277		—	—	—	□工具ナデ	□・上半 横工具ナデ 下半 斜工具ナデ 一部指頭押圧	10YR3/1 黒褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好	外面腐付着					
		E9-10	小型丸底壺	278	22	—	—	—	□横指(工具)ナデ	□・横(一部斜)工具ナデ(ミガキ)	10YR3/2 黒褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好	外面腐付着					
				279		28.9 5.2 15.2	□横指(工具)ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ 底立上・斜工具ミガキ	□・上半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 横工具ナデ 胴・上半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 ナデ 横指ナデ	2.5YR4/1 赤灰色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好								
		E10	壺	280	21	—	5.4 —	胴横・斜工具(指)ナデ 底立上・斜・横工具(指)ナデ	胴横・斜工具(指)ナデ 一部指頭押圧	5YR5/6 明茶褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好							
				281		21.07	—	—	胴横・斜工具ナデ 肩・斜工具ナデ	□・上半 指頭押圧 中下半 斜工具(指)ナデ 肩横指頭押圧	2.5YR6/3 にふい黄褐色	10YR6/3 にふい黄褐色	良好						
		E9-10	小型丸底壺	282	23	8	—	14.2	□・頸横ミガキ 肩横ミガキ 胴・斜工具ナデ	□・頸横工具(指)ナデ 肩横工具(指)ナデ 胴・斜工具(指)ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	10YR5/4 にふい黄褐色	良好	褐色の着色					
				283		28	—	—	□横指ナデ 工具ハケメ 胴横指ナデ	□・横工具ナデ 胴ナデ(一部指頭押圧)	10YR3/2 黒褐色	2.5YR4/6 赤褐色	良好	外面腐付着					
		55	縄文時代後晩期	E10	堅穴建物跡5号	284	甕	19	28.5	—	—	□斜横指(工具)ナデ 胴上半横ミガキ 下半横工具ナデ	□・上半 横工具ナデ 下半 横指ナデ(一部指頭押圧) 胴・斜指ナデ 中位 横指ナデ 下位 斜横工具ナデ	5YR4/4 にふい赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色	良好	外面腐付着		
						285		136	鉢	22	21.4	—	—	□ナデ 胴横工具ナデ(一部横) 下半横工具ナデ 肩横工具(指)ナデ	□・上半横指ナデ 胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ(一部横指ナデ)	5YR5/6 明茶褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好	
						286		98128		18-21	—	8.5 —	胴横・工具ナデ	胴横(一部斜) 工具(指)ナデ	5YR5/6 明茶褐色	7.5YR4/4 褐色	良好		
				E9-10	壺	287	21	—	—	—	胴横・斜工具ナデ(ミガキ) 底立上・斜・横指ナデ	胴横・斜工具ナデ(ミガキ)	7.5YR5/4 にふい褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好				
288	58					18-20		—	—	—	胴横・斜(一部下位に横) 工具ナデ ハケメ	胴横・斜工具ナデ(ミガキ) 下位 横指ナデ	10YR5/4 にふい黄褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
E9-10	壺			289	21	—	—	—	胴上半横・斜工具ナデ 下半横工具ナデ(ミガキ)	胴横・横・斜工具(一部指)ナデ	5YR5/6 明茶褐色	5YR5/6 明茶褐色	良好						
				290		34,90,178,199,200	23	—	—	—	胴横・工具ナデ(ミガキ)	胴横・工具ナデ	10YR4/2 灰黄褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好				
61	縄文時代後晩期	E10	堅穴建物跡6号	291	小型丸底壺	24	8.5	—	8.9	□・上半 斜工具(指)ナデ 下半 斜工具ナデ(ミガキ) 胴上半横工具ナデ(ミガキ) 下半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 ナデ 横指ナデ	□・上半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 横工具ナデ 胴・上半 横工具ナデ(ミガキ) 下半 ナデ 横指ナデ	2.5YR5/6 明茶褐色	5YR4/3 にふい赤褐色	良好					
				292		155	—	—	—	胴横・工具ナデ(ミガキ)	胴横・工具ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	5YR5/6 明茶褐色	良好					
				293		6	手ねじ土器	25	6.2	—	4.4	□横指ナデ 胴上半ナデ 下半横指(工具)ナデ	□・指頭押圧(縦指ナデ) 胴横工具(指)ナデ	5YR5/6 明茶褐色	5YR4/4 にふい赤褐色	良好			
		K30	Ⅲ	294	18-20	—	7 —	—	胴下半横工具ナデ 底立上・斜・横指ナデ	胴横工具ナデ 底横指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	5YR5/6 明茶褐色	良好						
				295		1508	—	—	—	□指頭押圧 胴上半横指ナデ 胴横工具・指ナデ	10YR5/4 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色	良好	突帯下腐付着					
		K31	Ⅲ	296	20	—	—	—	胴上半横工具ナデ 下半横工具ナデ	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	10YR6/4 にふい黄褐色	10YR6/4 にふい黄褐色	良好	突帯下腐付着					
				297		1632,1623	—	—	—	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR6/4 にふい褐色	良好	突帯下腐付着				
		K41	Ⅱc	298	18-20	—	—	—	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR6/4 にふい褐色	良好	突帯下腐付着					
				299		3227	—	—	—	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	胴上半横指ナデ 中位横指ナデ 下半横工具ナデ	7.5YR4/3 褐色	7.5YR6/4 にふい褐色	良好	突帯下腐付着				
		62	縄文時代後晩期	K30	古道2号	300	埋土	甕(壺)	18-21	—	—	胴横・斜工具ナデ 光沢あり(ミガキの可能性あり)	胴横・斜工具ナデ	5YR5/6 明茶褐色	7.5YR4/3 褐色	良好			
						301			78	—	9.4 —	胴下半横・斜工具ナデ 胴横工具ナデ	胴下半横工具・指ナデ 胴横・横・斜工具ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
						302			1501	—	7.4 —	胴下半横工具ナデ 指頭押圧	胴下半横工具ナデ 指頭押圧	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
				K30	古道2号	埋土	甕	18-20	303	—	13 —	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好		
304	—								7.4 —	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
K30	古道2号			埋土	甕	18-20	305	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
							306	—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
K30	古道2号			埋土	甕	18-20	307	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
							308	—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
K30	古道2号			埋土	甕	18-20	309	—	12 —	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
							310	—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
63	縄文時代後晩期			K30	古道2号	311	埋土	高坏	23	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好		
						312			—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好		
		313	—			—			—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
		K30	Ⅱc	314	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				315				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
		K30	Ⅱc	316	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				317				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
		K30	Ⅱc	318	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				319				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
		K30	Ⅱc	320	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				321				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
		64	縄文時代後晩期	K30	古道2号	322	埋土	高坏	23	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好		
						323			—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好		
324	—					—			—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
K30	Ⅱc			325	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				326				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
K30	Ⅱc			327	埋土	小型丸底壺	24	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好				
				328				—	—	—	—	胴下半横工具ナデ	胴下半横・斜工具・指ナデ	7.5YR5/4 にふい褐色	7.5YR5/4 にふい褐色	良好			
K30	Ⅱc			329	埋土	小型丸底壺	24												

第11-1表 石器観察表

挿図番号	掲載番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	器種	遺物出土状況石材料	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
13	11	縄文早期	F12	集石 4 号	27	磨石・敲石	砂岩	(6.7)	4.0	4.5	131.5	
20	25			SP15 号	一括		ホルンフェルス A 類	8.5	6.2	4.6	337.0	
24	86			古道 2 号		細石刃核	黒曜石 D 類	3.8	2.8	3.6	53.8	
	87			Ⅵ a	4403		黒曜石 D 類	1.5	1.4	0.3	0.3	
	88			F12	316	打製石鏃	安山岩 A 類	(2.1)	1.5	0.3	0.6	
	89			G14	560		安山岩 A 類	1.9	1.5	0.5	1.0	
	90			K41	4439		黒曜石 A 類	(2.8)	2.1	0.4	1.7	
	91			F13	626		黒曜石 A 類	(2.3)	1.6	0.5	1.2	
	92			F11	450		安山岩 A 類	(1.6)	1.8	0.4	1.0	
	93			F12	319		安山岩 A 類	(3.8)	2.0	0.5	3.0	
	94				1120		チャート	(1.7)	2.2	0.4	0.9	
	95			D8	1078		安山岩 A 類	(2.1)	(1.6)	0.7	1.3	
	96			E10	一括		ホルンフェルス B 類	2.2	1.8	0.4	1.6	
25	97			K29	404	石鏃	黒曜石 D 類	3.1	2.6	0.8	5.0	
	98			K31	3073		玉髄	(1.9)	(1.5)	0.3	0.5	
	99			F13	775	スクレイパー	ホルンフェルス B 類	3.1	1.4	0.5	1.3	
	100			K30	3148		安山岩 A 類	(6.7)	9.6	2.1	151.1	
	101			K31	3162	打製石斧	ホルンフェルス B 類	2.7	(6.4)	0.8	15.1	
	102			K28	261		ホルンフェルス A 類	13.4	6.9	1.2	140.4	
	103			K29	402	磨製石斧	ホルンフェルス A 類	15.7	10.5	1.2	140.4	
	104			E10	1089		ホルンフェルス B 類	(8.8)	4.2	1.6	85.5	
	105			F13	519	礫器	安山岩 B 類	(11.9)	(4.9)	(2.8)	229.7	
	106			K28	851		ホルンフェルス A 類	7.8	9.7	3.5	189.5	
26	107			F-13-14	Ⅵ	磨石・敲石	ホルンフェルス A 類	8.7	14.6	3.7	575.6	
	108			K30	3205		ホルンフェルス C 類	8.2	12.1	3.8	456.0	
	109			J-K26	1272	石鏃	安山岩 B 類	6.3	6.3	5.2	285.0	
	110			K29	702		ホルンフェルス C 類	11.3	11.0	5.2	979.0	
	111				1245	石鏃	ホルンフェルス A 類	13.3	12.2	3.6	865.5	
	112			K27	1258		ホルンフェルス B 類	12.7	5.1	2.8	292.5	
	113				662	石鏃	ホルンフェルス B 類	5.6	4.2	2.5	57.5	
	114			J39	一括		安山岩 B 類	6.1	5.7	2.3	120.0	
	115			K27	649	石皿・台石	ホルンフェルス C 類	14.8	12.9	7.4	1,126.0	
	116			K31	3138		軽石製品	12.2	8.8	5.4	143.2	
31	118			K27	堅穴建物跡 2 号	磨石・敲石	ホルンフェルス B 類	9.4	6.5	4.6	410.0	
	122			K29	堅穴建物跡 3 号		花崗岩	8.9	7.0	5.7	543.5	
	123				59	凹石	砂岩	8.0	(4.5)	1.8	74.8	
	124			K27	土坑 14 号		安山岩 B 類	34.2	27.6	10.0	1,500.0	
	125				1	石皿・台石	砂岩	28.2	26.4	13.6	10,400.0	
	126			K31	土坑 15 号		砂岩	23.1	28.9	11.3	8,300.0	
	131				2	磨石・敲石	安山岩 B 類	8.8	4.3	4.2	180.5	
	133				一括		ホルンフェルス B 類	(12.6)	9.8	1.3	140.4	
	134			K29	SP149 号	磨石・敲石	砂岩	13.8	14.1	4.4	1,200.0	
	134			SP99 号	一括		ホルンフェルス B 類	(2.3)	1.7	0.5	1.8	
37	151			K28	遺物集中 2 号	磨石・敲石	安山岩 B 類	13.6	6.6	1.6	164.7	
	152						砂岩	(5.1)	5.1	3.2	119.9	
	153						砂岩	7.4	5.3	3.4	176.9	
	154						砂岩	12.9	14.4	9.4	2,300.0	
	155						安山岩 B 類	4.8	4.0	2.3	52.8	
	160				遺物集中 3 号	磨石・敲石	黒曜石 A 類	(1.6)	1.3	0.3	0.4	
	166						安山岩 B 類	9.3	8.7	5.7	517.5	
	167			K29	遺物集中 4 号	磨石・敲石	安山岩 A 類	5.7	5.3	4.2	167.9	
	181			K21	遺物集中 5 号		黒曜石 A 類	(2.0)	1.5	0.3	0.5	
	226			K39		打製石鏃	安山岩 A 類	(2.0)	1.6	0.3	0.6	
46	227						珪藻土	(1.4)	1.2	0.3	0.4	
	228			J40	Ⅱ c	打製石鏃	安山岩 A 類	2.0	1.2	0.5	0.7	
	229						安山岩 A 類	(1.5)	(1.2)	0.3	0.3	
	230					石匙	チャート	(1.8)	1.7	0.4	0.8	
	231			D9	Ⅱ a		黒曜石 A 類	2.3	1.3	0.3	0.8	
	232			K32	Ⅲ	スクレイパー	ホルンフェルス B 類	(2.0)	(1.4)	0.3	0.8	
	233			F12	Ⅳ		黒曜石 A 類	(2.7)	1.6	0.3	1.0	
	234			D8	堅穴建物跡 4 号	石匙	ホルンフェルス B 類	(5.7)	4.7	0.5	15.3	
	235			K39	Ⅱ a		ホルンフェルス B 類	4.5	5.4	0.7	13.3	
	236			K40	Ⅱ c	スクレイパー	黒曜石 A 類	2.5	1.8	0.8	3.0	
46	237			K31	Ⅲ		黒曜石 A 類	3.2	7.2	0.7	19.7	
	238					石鏃	安山岩 A 類	2.1	2.9	1.0	4.2	
	239			K39	Ⅱ c		チャート	2.7	1.3	0.3	2.3	
	240			J40		打製石斧	黒曜石 A 類	1.8	1.2	0.2	0.5	
	241			K39	Ⅱ a		凝灰岩	1.5	1.0	0.1	0.4	
	242			I41	攪乱	磨石・敲石	安山岩 B 類	14.1	7.7	1.5	143.9	
	243			K28	一括		砂岩	14.2	6.5	1.6	131.6	
	244			K39	Ⅱ c	打製石斧	砂岩	12.9	6.7	1.9	136.6	
	245			K29	Ⅳ		安山岩 A 類	(11.7)	6.9	1.2	109.0	
	246					磨石・敲石	ホルンフェルス B 類	(10.2)	6.9	2.3	175.2	
47	247			K31	Ⅲ		砂岩	12.3	10.3	1.8	250.4	
	248			K41	3334	磨製石斧	安山岩 B 類	11.1	5.2	1.6	130.1	
	249			K39	Ⅱ c		ホルンフェルス A 類	(8.5)	3.5	1.0	49.6	
	250			K28	古道 2 号	磨石・敲石	ホルンフェルス A 類	(10.1)	6.4	1.5	127.0	
	251			K31	SP301		安山岩 B 類	(14.0)	4.4	2.3	191.2	
	252			K11	Ⅲ	磨石・敲石	砂岩	(4.6)	(3.8)	2.0	45.2	
	253			J41	Ⅱ a		安山岩 B 類	(7.3)	(5.9)	2.7	175.6	
	254			J39	3971	磨石・敲石	砂岩	(7.1)	5.3	1.8	87.5	
	255			K39	Ⅱ c		砂岩	7.5	6.2	2.7	166.5	
	256					磨石・敲石	砂岩	6.3	5.2	2.7	115.5	
48	257			K31	Ⅲ		花崗岩	(3.4)	3.4	2.5	45.5	
	258			K39	Ⅱ c	磨石・敲石	安山岩 B 類	9.8	10.3	5.3	741.0	
	259			K31	Ⅲ		安山岩 B 類	7.0	7.3	3.4	287.0	
	260			K32		石皿・台石	ホルンフェルス B 類	7.5	2.6	2.5	52.5	
	261			K39			ホルンフェルス A 類	8.9	2.9	2.8	101.9	
	262			J40	Ⅱ c	磨石・敲石	凝灰岩	14.8	11.2	7.9	1,512.0	
	263			K39			安山岩 B 類	12.5	15.4	8.7	1,991.0	
	264			D8	Ⅱ a	磨石・敲石	花崗岩	16.1	12.1	6.9	1,872.5	
	265			K30	Ⅲ		砂岩	(9.2)	(8.8)	4.7	464.0	
	266					軽石製品	軽石	6.6	3.7	2.3	11.5	
56	267			K31	SP292		打製石斧	10.3	6.1	0.7	53.1	
	294				土坑 2-1	砥石	砂岩	25.7	16.1	6.0	3,400.0	
	295			E10	堅穴建物跡 5 号							

第11-2表 近世陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	実測番号	種別	器種	部位	法量			釉薬	施釉	産地	時期	備考
										口径	底径	器高					
66	321	近世	K 28	古道 2 号	一括	124	陶磁器	皿	胴～底	—	4.6	—	鉄釉	見込み・畳付けを除き 残存部全面施釉	内野山窯 の可能性	17c 末～ 18c 初頭	

第11-3表 鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	時代	区	層 (遺構)	取上番号	実測番号	種別	部位	計測値				備考
									残存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
53	280	古墳	D8	堅穴建物跡 4 号	25	S020	刀子	茎・土身	8	1.7	0.5	12.7	
66	320	時期不明	K28	古道 5 号	SD274-1	S017			5.9	2.3	0.8	7.3	

第5章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

本遺跡の科学分析は、(株)パレオ・ラボに委託し、令和6年2月・10月に、年代測定、炭素・窒素安定同位体分析、種実・樹種同定を実施した。分析方法など同じ手法、処理をしている場合は、一括して掲載する。なお、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定と同じ試料を用いた炭素・窒素安定同位体比測定はセットで実施した。測定内容別に、文章中は発掘調査時の遺構名(掲載遺構名)で、データ上では発掘調査時の遺構で掲載してある。

第2節 自然科学分析の方法と結果及び考察

1 放射性炭素年代測定 令和6年2月及び10月

(1) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第12・14表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。なお、本稿で5から始まる5桁の数字は測定番号を示し、本来、頭に「PLD-数字」がつくものも「PLD-」を省略してある。

(2) 結果

第13・15表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第67・68図に暦年較正年代マルチプロット図をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。 ^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2

σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(3) 考察

放射性炭素年代測定の結果について、 ^{14}C 年代と 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して整理する。なお、縄文時代の暦年代については、小林(2017)を参照した。

試料1~10のいずれも C_3 植物に由来する炭化物と推定されたため、測定結果は海洋リザーバー効果の影響を受けていないと考えられる。試料13(53738炭化材)については、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。試料13は、最終形成年輪が残っていない部位不明の炭化材であり、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性がある。その場合、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

2 炭素・窒素安定同位体比分析 令和6年2月

(1) 試料と方法

試料の情報は、第12・14表のとおりである。測定を実施するにあたり、試料に超音波洗浄、アセトン洗浄及び酸・アルカリ・酸洗浄を施して試料以外の不純物を除去した。炭素含有量及び窒素含有量の測定には、EA(ガス化前処理装置)であるFlash EA1112(Thermo Fisher Scientific社製)を用いた。スタンダードは、アセトニトリル(キシダ化学製)を使用した。炭素安定同位体比($\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$)及び窒素安定同位体比($\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$)の測定には、質量分析計DELTA V(Thermo Fisher Scientific社製)を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose(ANU)、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉及び分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度35℃である。分離した CO_2 及び N_2 は、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

(2) 結果

第16表に、炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。第69図-1・3・5には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、同-2・4・6には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

試料1 (51346) ~ 4 (51349) の土器付着炭化物4点は、同-1でC₃植物よりも窒素安定同位体比が高い位置にプロットされた。同-2では、試料1 (51346) ~ 3 (51348) の土器付着炭化物2点は土壌 (黒色土) の位置、試料2 (51347) ・4 (51349) の土器付着炭化物2点はC₃植物・草食動物と土壌 (黒色土) が重複する位置にプロットされた。試料5 (53114) ~ 10 (53119) の試料6点は、同-3でC₃植物の位置にプロットされた。同-4では、試料5 (53114) の炭化材、試料6 (53115) ・7 (53116) の炭化種実、試料8 (53117) の炭化鱗茎は、いずれもC/N比の値が図の範囲を超えているためにプロットされていない。これは高温で熱せられたなどの理由により、窒素がほとんど抜けてしまったためと思われる。試料9 (53118) ・10 (53119) の土器付着炭化物2点は、C₃植物・草食動物と土壌 (黒色土) が重複する位置にプロットされた。試料11 (53736) ・12 (53737) は、同-5ではC₃植物の位置にプロットされた。試料13 (53738) は、C₃植物の下位にプロットされた。同-6では、いずれの試料もC/N比の値が図の範囲を超えているためにプロットされていない。これは高温で熱せられたなどの理由により、窒素がほとんど抜けてしまったためと思われる。

(3) 考察

試料1 (51346) ・3 (51348) の土器付着炭化物2点は、第69図-1でC₃植物より窒素安定同位体比が高い位置、同-2で土壌 (黒色土) の位置にプロットされ、土壌の影響を受けている可能性はあるが、いずれも胴部外面に付着した炭化物であり、おおむねC₃植物 (燃料材) に由来する炭化物と推定される。試料2 (51347) ・4 (51349) の土器付着炭化物2点は、同-1でC₃植物よりも窒素安定同位体比が高い位置、同-2でC₃植物・草食動物と土壌 (黒色土) が重複する位置にプロットされ、土壌の影響を受けている可能性はあるものの、試料2 (51347) は口縁部外面、試料4 (51349) は胴部外面に付着した炭化物であるため、おおむねC₃植物 (燃料材) に由来する炭化物と推定される。試料5 (53114) の炭化材、試料6 (53115) ・7 (53116) の炭化種実、試料8 (53117) の炭化鱗茎は、同-3でC₃植物の位置にプロットされた。同-4では、C/N比の値が図の範囲を超えているためにプロットされていないが、いずれもC₃植物に由来する炭化物として問題ない。試料9 (53118) ・10 (53119) の土器付着炭化物2点は、同-3でC₃植物の位置、同-4でC₃植物・草食動物と土壌 (黒色土) が重複する位置にプロットされ、おおむねC₃植物に由来する炭化物と推定される。

試料11 (53736) ・12 (53737) の炭化鱗茎は、同-5でC₃植物の位置にプロットされた。同-6では、C/N比の値が図の範囲を超えているためプロットされていないが、どちらもC₃植物に由来する炭化物として問題ない。試料13 (53738) の炭化材は、同-5でC₃植物の下位にプロットされた。同-6では、C/N比の値が図の範囲を超えているためプロットされていないが、これもC₃植物に由来する炭化材と推定される。

3 炭化種実 令和6年10月

(1) 試料と方法

一つ目の分析試料は、SI272 (堅穴建物跡6号) から、発掘調査中に肉眼で確認、採取された炭化種実の試料6 (53115) ・7 (53116) である。放射性炭素年代測定の結果、試料6と試料7は、縄文時代後期後葉~晩期前葉の暦年代を示した。

二つ目の分析試料は、SS336 (集石11号) から、発掘調査中に肉眼で確認、採取された炭化種実の試料11 (53736) ・12 (53737) である。放射性炭素年代測定の結果、試料11・12は、縄文時代早期中葉~後葉の暦年代を示した。

三つ目の分析試料は、SS336 (集石11号) から、発掘調査中に肉眼で確認、採取された炭化種実の試料14 (54060) ・15 (54061) ・16 (54062) である。放射性炭素年代測定の結果、SS336 (集石11号) の試料14・15・16は、縄文時代早期中葉~後葉の暦年代を示した。

いずれの分析でも、同定・計数は、肉眼及び実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形又は一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。

(2) 結果

一つ目の同定の結果、SI272 (堅穴建物跡6号) の試料6は以下アに示す木本植物のイチイガシ炭化子葉、試料7は以下イに示すコナラ属アカガシ亜属炭化子葉の2分類群が得られた (第17表)。次に、得られた分類群の記載を行い、写真3に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠する。

ア イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 ブナ科

SI272 (堅穴建物跡6号) の試料7 (53116) は半分に分かれた個体で、完形ならば楕円体~長楕円体、側面観は俵形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が1本確認できた。高さ11.9mm、幅8.9mm (写真3 1a・1b)。

イ コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 炭化子葉 ブナ科

SI272 (堅穴建物跡6号) の試料6 (53115) は完形ならば楕円体。上下端はやや平坦。表面は平滑で、やや縦皺があるが、深い溝が認められない個体をアカガシ亜属とした。イチイガシの可能性もある。高さ11.6mm、幅8.7mm (写真3 2a・2b)。

二つ目の同定の結果、SS336（集石11号）の試料11（53736）・12（53737）は、不明炭化鱗茎であった（第17表）。

次に、得られた分類群の記載を行い、写真5を示して同定の根拠とする。

ウ 不明 Unknown 炭化鱗茎

SS336（集石11号）の試料11（53736）・12（53737）は残存状態は悪いが、完形ならば上面観は円形、側面観は狭卵形か。鱗片葉が層状に密に重なっており、ユリ科ノビル又はキジカクシ科ツルボの鱗茎に類似する。実体顕微鏡による観察では、科以上の詳細な同定はできなかった。残存長11.8mm、残存幅8.7mm（写真5 1a・1b）、残存長9.4mm、残存幅8.7mm（写真5 2a・2b）。

三つ目の同定の結果、SS336（集石11号）の試料14（54060）・15（54061）・16（54062）は、不明炭化鱗茎であった（第17表）。

次に、得られた分類群の記載を行い、写真4を示して同定の根拠とする。

エ 不明 Unknown 炭化鱗茎

SS336（集石11号）の試料14（54060）・15（54061）・16（54062）は残存状態は悪いが、完形ならば上面観は円形、側面観は狭卵形か。鱗片葉が層状に密に重なっており、ユリ科ノビル又はキジカクシ科ツルボの鱗茎に類似する。実体顕微鏡による観察では、科以上の詳細な同定はできなかった。残存長10.4mm、残存幅6.8mm（写真4 1a・1b）、残存長13.0mm、残存幅8.3mm（写真4 2a・2b）、残存長11.0mm、残存幅8.8mm（写真4 3a・3b）。

（3）考察

SI272（堅穴建物跡6号）から出土した縄文時代後期後葉～晩期前葉の炭化種実試料6・7を同定した結果、野生植物で食用として利用可能なイチイガシとコナラ属アカガシ亜属が得られた。試料7のイチイガシは、生食可能なドングリ類である。縄文時代早期以降の鹿児島県では最もよく利用されていたとされる（小畑，2011）。産出したのは、食べられる部位である子葉であり、加工時や保管中などに何らかの要因で炭化し、堆積した可能性がある。試料6は、アカガシ亜属までの同定に留めたが、イチイガシの可能性がある。当時の遺跡周辺にイチイガシのカシ林が存在していた可能性が高い。

縄文時代早期中葉～後葉のSS336（集石11号）の試料11・12は、野生植物で食用として利用可能な鱗茎類であった。この不明鱗茎は、調理中などに炭化し、堆積し

た可能性がある。今回は鱗茎類を同定できなかったが、走査型電子顕微鏡による細胞形態の観察のほか、外部形態（鱗片の重なり方や基部の大きさなど）の観察を合わせて行えば、同定できる可能性がある。

縄文時代早期中葉～後葉のSS336（集石11号）の試料14・15・16は、野生植物で食用として利用可能な鱗茎類であった。この不明鱗茎は、調理中などに炭化し、堆積した可能性がある。今回は鱗茎類を同定できなかったが、走査型電子顕微鏡による細胞形態の観察のほか、外部形態（鱗片の重なり方や基部の大きさなど）の観察を合わせて行えば、同定できる可能性がある。

4 樹種同定 令和6年10月

（1）試料と方法

試料は、SS336（集石11号）から出土した炭化材1点：試料13（53738）である。発掘調査所見では、SS336の時期は縄文時代早期後半と考えられている。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柎目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-IT200）にて検鏡及び写真撮影を行なった。

（2）結果

SS336（集石11号）から出土した炭化材の試料13の同定の結果、広葉樹のクスノキ科1点がみられた。同定結果を第18表に示す。以下に、同定された材の特徴を記載し、写真6に走査型電子顕微鏡写真を示す。

ア クスノキ科 Lauraceae 写真6 1a-1c（試料13）

試料13は小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～2列となる。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木又は低木である。

（3）考察

試料13の同定の結果、SS336（集石11号）の炭化材はクスノキ科であった。試料は、燃料材の残渣と考えられる。クスノキ科は比較的堅硬な樹種であり、薪炭材としても普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。遺跡周辺に生育していたクスノキ科の樹木を、伐採利用していたと考えられる。

第12表 測定試料および処理（1）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51346	試料1 遺構：SI67	種類：土器付着物 部位：胴部・外面 状態：dry ガス化重量：6.10mg 炭素含有率：57.70%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51347	試料2 遺構：SI74	種類：土器付着物 部位：口縁部・外面 状態：dry ガス化重量：5.20mg 炭素含有率：60.76%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51348	試料3 遺構：SU136	種類：土器付着物 部位：胴部・外面 状態：dry ガス化重量：4.80mg 炭素含有率：58.53%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

第13表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（1）

測定番号	遺跡データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51346 試料1	試料1 遺構：SI67	-27.78 \pm 0.11	1762 \pm 18	1760 \pm 20	248-258 cal AD (13.41%) 280-299 cal AD (23.28%) 305-330 cal AD (31.58%)	240-263 cal AD (20.50%) 274-348 cal AD (74.86%)
PLD-51347 試料2	試料2 遺構：SI74	-26.55 \pm 0.19	1720 \pm 19	1720 \pm 20	259-279 cal AD (21.28%) 335-380 cal AD (46.99%)	254-287 cal AD (26.93%) 324-406 cal AD (68.52%)
PLD-51348 試料3 遺物143	試料3 遺構：SU136 遺物143	-26.74 \pm 0.16	2998 \pm 21	3000 \pm 20	1274-1204 cal BC (66.33%) 1139-1135 cal BC (1.94%)	1374-1354 cal BC (4.59%) 1298-1188 cal BC (77.91%) 1182-1157 cal BC (6.75%) 1145-1128 cal BC (6.20%)

第14表 測定試料および処理（2）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51349	試料 4 遺構：SU137	種類：土器付着炭化物 部位：胴部・外面 状態：dry ガス化重量：6.10mg 炭素含有率：58.84%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53114	試料 5 遺構：SI272 遺物 16	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53115	試料 6 遺構：SI272 遺物 21	種類：炭化種実（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53116	試料 7 遺構：SI272 遺物 23	種類：炭化種実（イチイガシ子葉） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53117	試料 8 遺構：SS342 遺物 10	種類：炭化物（不明鱗茎） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53118	試料 9 遺構：SU273 遺物 173	種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53119	試料 10 遺構：SU273 遺物 196	種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53736	試料 11 遺構：SS336 遺物 4	種類：炭化鱗茎 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53737	試料 12 遺構：SS336 遺物 6	種類：炭化鱗茎 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53738	試料 13 遺構：SS336 遺物 1	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-54060	試料 14 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 5	種類：炭化鱗茎 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-54061	試料 15 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 7	種類：炭化鱗茎 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-54062	試料 16 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 9	種類：炭化鱗茎 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

第15表 放射性炭素年代測定および暦年較の結果（2）

測定番号	遺跡データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲 1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51349	試料 4 遺構：SU137	-26.64 \pm 0.13	3014 \pm 20	3015 \pm 20	1365-1361 cal BC (2.36%) 1285-1218 cal BC (65.90%)	1381-1343 cal BC (14.17%) 1306-1198 cal BC (79.40%) 1171-1165 cal BC (0.82%) 1141-1133 cal BC (1.06%)
PLD-53114	試料 5 遺構：SI272 遺物 16	-27.65 \pm 0.20	1761 \pm 18	1760 \pm 20	248-259 cal AD (13.24%) 280-298 cal AD (23.09%) 306-331 cal AD (31.94%)	240-264 cal AD (20.44%) 274-1134 cal AD (75.01%)
PLD-53115	試料 6 遺構：SI272 遺物 21	-24.87 \pm 0.20	3019 \pm 19	3020 \pm 20	1366-1360 cal BC (4.23%) 1288-1222 cal BC (64.04%)	1383-1341 cal BC (17.77%) 1309-1201 cal BC (77.68%)
PLD-53116	試料 7 遺構：SI272 遺物 23	-24.06 \pm 0.21	3015 \pm 19	3015 \pm 20	1365-1361 cal BC (2.42%) 1285-1219 cal BC (65.87%)	1381-1343 cal BC (14.48%) 1306-1199 cal BC (79.95%) 1169-1166 cal BC (0.41%) 1139-1134 cal BC (0.62%)
PLD-53117	試料 8 遺構：SS342 遺物 10	-25.67 \pm 0.23	8374 \pm 26	8375 \pm 25	7513-7460 cal BC (48.04%) 7401-7375 cal BC (20.23%)	7528-7448 cal BC (57.62%) 7434-7421 cal BC (2.37%) 7420-7350 cal BC (35.46%)
PLD-53118	試料 9 遺構：SU273 遺物 173	-24.32 \pm 0.18	3025 \pm 19	3025 \pm 20	1371-1356 cal BC (11.49%) 1296-1256 cal BC (38.37%) 1248-1226 cal BC (18.41%)	1384-1340 cal BC (22.82%) 1313-1214 cal BC (72.63%)
PLD-53119	試料 10 遺構：SU273 遺物 196	-24.26 \pm 0.19	3015 \pm 19	3015 \pm 20	1365-1361 cal BC (2.42%) 1285-1219 cal BC (65.85%)	1381-1343 cal BC (14.48%) 1306-1199 cal BC (79.95%) 1169-1166 cal BC (0.41%) 1139-1134 cal BC (0.62%)
PLD-53736	試料 11 遺構：SS336 遺物 4	-26.93 \pm 0.11	8386 \pm 29	8385 \pm 30	7522-7466 cal BC (55.78%) 7396-7379 cal BC (12.49%)	7536-7449 cal BC (66.23%) 7434-7421 cal BC (1.46%) 7418-7351 cal BC (27.76%)
PLD-53737	試料 12 遺構：SS336 遺物 6	-27.76 \pm 0.10	8341 \pm 29	8340 \pm 30	7480-7450 cal BC (21.44%) 7431-7423 cal BC (4.33%) 7418-7356 cal BC (42.50%)	7513-7329 cal BC (95.45%)
PLD-53738	試料 13 遺構：SS336 遺物 1	-27.56 \pm 0.12	8230 \pm 29	8230 \pm 30	7325-7216 cal BC (55.19%) 7205-7180 cal BC (13.08%)	7449-7434 cal BC (1.77%) 7352-7136 cal BC (87.91%) 7107-7080 cal BC (5.77%)
PLD-54060	試料 14 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 5	-25.64 \pm 0.16	8354 \pm 27	8355 \pm 25	7494-7452 cal BC (30.60%) 7413-7362 cal BC (37.67%)	7515-7343 cal BC (95.45%)
PLD-54061	試料 15 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 7	-25.81 \pm 0.16	8414 \pm 27	8415 \pm 25	7531-7481 cal BC (68.27%)	7577-7558 cal BC (5.17%) 7547-7460 cal BC (82.55%) 7403-7371 cal BC (7.72%)
PLD-54062	試料 16 遺構：SS336 層位：埋土 遺物 9	-27.44 \pm 0.18	8344 \pm 26	8345 \pm 25	7482-7450 cal BC (23.49%) 7430-7425 cal BC (2.41%) 7417-7357 cal BC (42.37%)	7509-7336 cal BC (95.45%)

第16表 炭素・窒素安定同位体比および炭素含有量・窒素含有量、C/N比

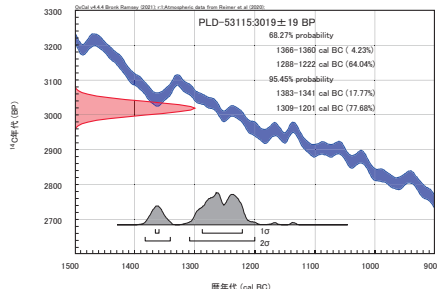
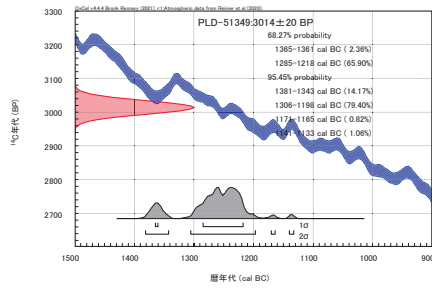
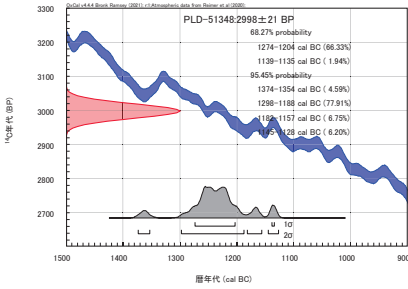
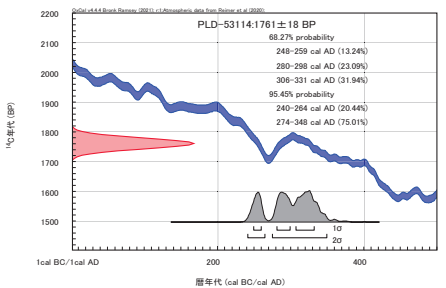
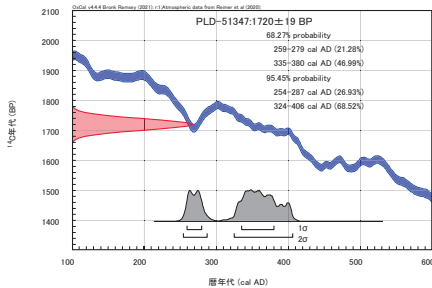
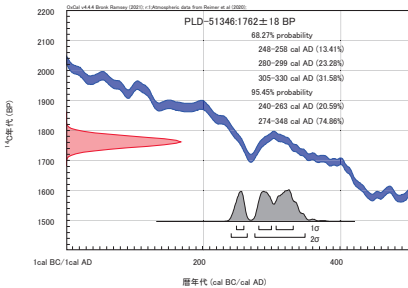
試料番号	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比 (モル比)
1	遺構：SI67 種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・外面 年代測定番号：PLD-51346	-26.7	10.2	58.9	3.21	21.4
2	遺構：SI74 種類：土器付着炭化物 採取部位：口縁部・外面 年代測定番号：PLD-51347	-25.5	10.6	62.0	3.64	19.9
3	遺構：SU136 種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・外面 年代測定番号：PLD-51348	-26.2	8.87	57.6	2.61	25.7
4	遺構：SU137 種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・外面 年代測定番号：PLD-51349	-26.3	9.61	60.8	4.21	16.8
5	遺構：SI272 種類：炭化材 試料の性状：最終年輪以外 部位不明 年代測定番号：PLD-53114	-28.3	-0.129	48.8	0.173	329.0
6	遺構：SI272 種類：炭化種実（コナラ属アカガシ亜属子葉） 年代測定番号：PLD-53115	-25.1	1.05	62.5	0.614	118.7
7	遺構：SI272 種類：炭化種実（イチイガシ子葉） 年代測定番号：PLD-53116	-25.0	0.893	61.6	0.752	95.5
8	遺構：SS336 種類：炭化物（不明鱗茎） 年代測定番号：PLD-53117	-26.0	-2.35	67.9	0.518	152.9
9	遺構：SU273 種類：土器付着炭化物 部位：胴部・内面 年代測定番号：PLD-53118	-24.7	1.07	58.8	3.63	18.9
10	遺構：SU273 種類：土器付着炭化物 部位：胴部・内面 年代測定番号：PLD-53119	-24.7	1.01	54.3	4.90	12.9
11	遺構：SS336 種類：炭化鱗茎 年代測定番号：PLD-53736	-26.8	-3.07	64.6	0.417	180.9
12	遺構：SS336 種類：炭化鱗茎 年代測定番号：PLD-53737	-27.3	-2.86	63.8	0.404	184.3
13	遺構：SS336 種類：炭化材（クスノキ科） 年代測定番号：PLD-53738	-26.6	-4.64	57.8	0.506	133.2

第17表 炭化種実同定結果

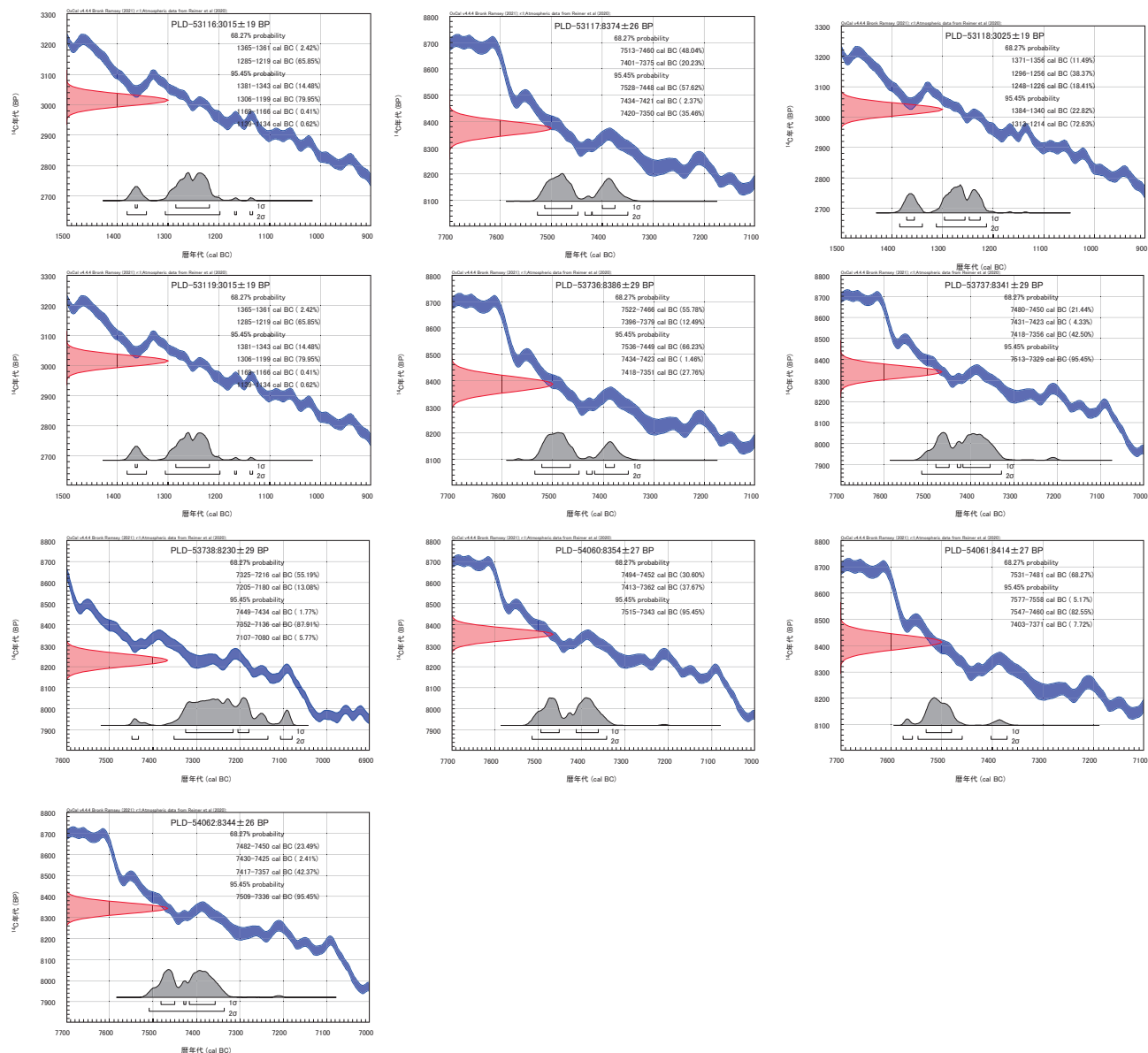
分類群	試料番号	16	7	
	遺構	SI272		
	位置	床直	-	
	遺物番号	21	23	
	年代測定結果	縄文後期後葉～晩期前葉		
イチイガシ	炭化子葉	(1)		
コナラ属アカガシ亜属	炭化子葉	(1)		
分類群	試料番号	11	12	
	遺構	SS336		
	遺物番号	4	6	
	年代測定結果	縄文時代早期中葉～後葉		
	不明	炭化鱗茎	1	(1)
分類群	試料番号	14	15	3
	遺構	SS336		
	遺物番号	5	7	9
	年代測定結果	縄文時代早期中葉～後葉		
	不明	炭化鱗茎	1	1

第18表 炭化材樹種同定結果

試料番号	遺物番号	出土遺構	種類	樹種	時期	年代測定番号
13	1	SS336	炭化材	クスノキ科	縄文時代早期後半	PLD-53738



第67図 暦年較正年代マルチプロット表（1）

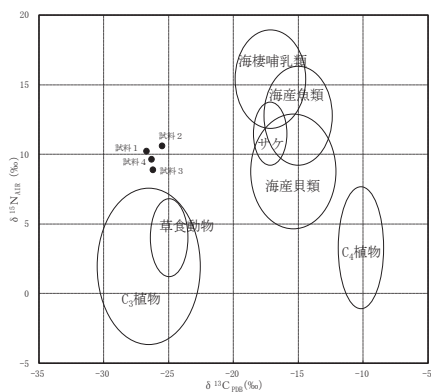


第68図 暦年較正年代マルチプロット表（2）

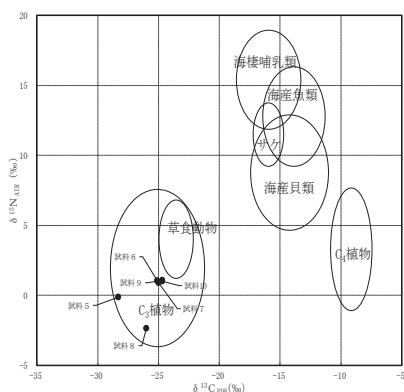
写真2 土器付着物採取位置

- | | | |
|-----------------|-----|----------------|
| 1 SI67 竪穴建物跡 5号 | 試料1 | PLD-51346胴部外面 |
| 2 SI74 竪穴建物跡 4号 | 試料2 | PLD-51347口縁部外面 |
| 3 SU136 遺物集中 2号 | 試料3 | PLD-51348胴部外面 |
| 4 SU137 遺物集中 4号 | 試料4 | PLD-51349胴部外面 |

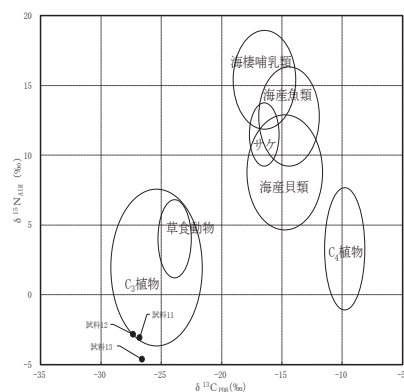




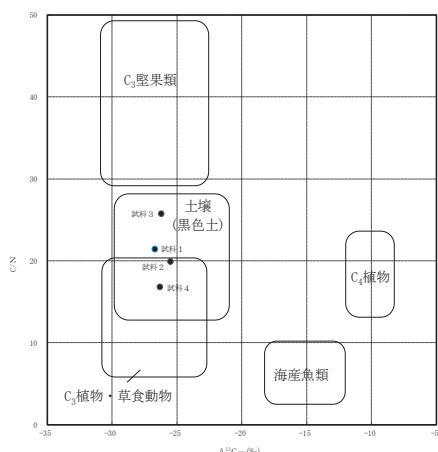
第69図-1 炭素・窒素安定同位体比
(以下, 吉田・西田 (2009) に基づいて作製)



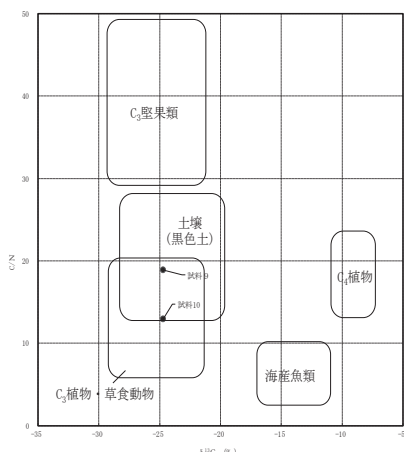
第69図-3 炭素・窒素安定同位体比



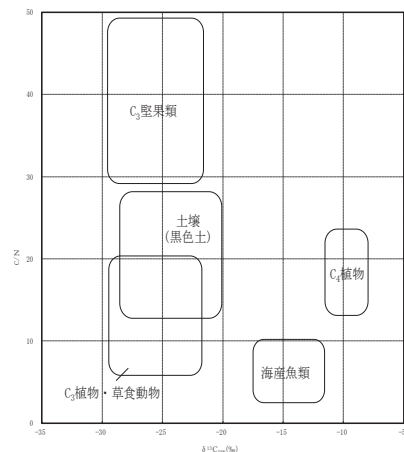
第69図-5 炭素・窒素安定同位体比



第69図-2 炭素安定同位体比とC/N比の関係



第69図-4 炭素安定同位体比とC/N比の関係



第69図-6 炭素安定同位体比とC/N比の関係

第69図 炭素・窒素安定同位体比



写真3 二子塚B遺跡から出土した炭化種実(1)

1. イチイガシ炭化子葉 (SI272, 試料7, PLD-53116), 2. コナラ属アカガシ亜属炭化子葉 (SI272, 試料6, PLD-53115)



写真4 二子塚B遺跡から出土した炭化種実(2)

1. 不明炭化種子 (SS336, 試料14, PLD-54060), 2. 不明炭化種子 (SS336, 試料15, PLD-54061), 3. 不明炭化種子 (SS336, 試料16, PLD-54062)



写真5 二子塚B遺跡から出土した炭化種実(3)

1. 不明炭化種子 (SS336, 試料11, PLD-53736), 2. 不明炭化種子 (SS336, 試料12, PLD-53737)

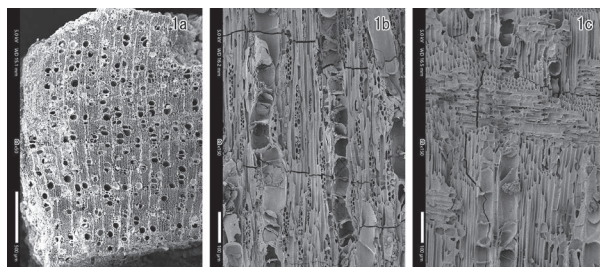


写真6 二子塚B遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クスノキ科 (試料3)
a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第6章 総括

本遺跡の現況は、北側に隣接する二子塚A遺跡から連続して、おおむね平坦な台地上の東側の縁辺を南北に連なる遺跡である。しかし、周辺地形を詳細に見ると、1区と2～4区の間は、西側から張り出す山の傾斜面と東側の浸食谷に挟まれ、やや分断気味であったことがうかがえる。そのことを踏まえた上で、各時代の考古学的状況を総括していくこととする。

1 旧石器時代

古道2号の埋土内から細石刃核（第24図）が1点出土した。他に遺構・遺物等確認されなかったが、細石刃核の出土により、近隣に細石刃の製作跡を示すブロックが存在した可能性が高いと見る。

2 縄文時代早期

まず、検出された遺構をもとに、生活の営みを再現したい。早期は、北側の1・2区と南側の4区に遺構が検出されるが、中間の3区には検出されない。ただ、10mに満たない幅の調査であるため、3区も西側の内陸側には遺構がある可能性がある。1区はほぼ平坦地であるが、1区と2区の間には小さな谷が入る。そのため、1区の南側から緩やかに地形が下り、小さな谷を経て、2区は逆に緩やかに地形が上がり3区に至る。本遺跡の北側に隣接する二子塚A遺跡の南端－本遺跡最北端の1区に隣接－では早期の掘込みのない集石1基が検出され、本遺跡の1・2区の集石に連なる。本遺跡では、竪穴建物跡1軒、集石12基、土坑13基（うち2基は落とし穴）、遺物集中1か所、ピット68基、埋設土器1基が検出された。竪穴建物跡1軒は最北端の1区で検出された。周囲で出土する遺物は7・10類など複数種で、時期を特定できない。1区の集石4号（Ⅴ層検出）と竪穴建物跡1号（Ⅶ層検出）は、同じ平面上に位置する。竪穴建物跡の本来の掘込面を深さ60cmと想定すると、集石4号と同じⅤ層上面で掘り込まれた可能性がある。竪穴建物跡1号の埋土内に礫が含まれないことから、竪穴建物跡1号が埋もれた後に、集石4号及び南隣の集石5号が形成されたと推察する。1・2区は、同じ早期ながら、集石のみⅤ層（早期相当層）で検出され、他の早期のピットや土坑はⅦ層（無遺物層）で検出されている。Ⅴ層～Ⅶ層（早期相当層）が暗褐色土と黒褐色土で判別がつきにくく、Ⅶ層の地山（にぶい黄橙色土）中に、Ⅴ層の暗褐色土を母土とする埋土が検出されて初めて遺構と認識されたためと推察する。なお、1区検出の土坑9号は逆茂木痕らしきピットを伴い、落とし穴の可能性がある。Ⅴ層（早期包含層）が本来の掘込み面と仮定すると深さは70cm程となる。3区では遺物集中が1か所（塞ノ神A式1個体）検出された以外に遺構は検出されない。最南

端の4区は、台地の最南端に位置し、その南側は山崖となる。集石が3基、落とし穴と思われる土坑が1基、埋設土器（10類：塞ノ神B・苦浜式）が1基検出された。周辺には10類の他に、少量ながら7類（押型文・手向山式）、8類（平椀式）、9類（塞ノ神A式）も出土した。集石11号埋土内の種実炭化物からは、早期中葉～後葉の年代結果（ $8374 \pm 25\text{yrBP}$ ）（P.92第15表参照）が出ており、おおむね土器編年と符合的である。台地の東側縁辺に位置し、猪等の獣道のある台地の山崖や水場の得やすい浸食谷を有する本遺跡の地理的特徴は、縄文時代早期の、とりわけ集石や落とし穴が検出される傾向にある典型的地形と言える。検出された10類（塞ノ神B式・苦浜式）の埋設土器は、堅い地山に阻まれ水分滞留し、埋土が鉄分付着でやや赤化し、胎土が大変もろくなっていた。8類土器（平椀式土器）の方形口の口縁の壺型土器（51～54）の出土も特筆される。この時期は、埋設土器や集石を伴う他、安山岩A類（いわゆる西北九州系サヌカイト）の石匙や異形石器などが共伴するなど、遺構・遺物間に特徴的な共伴性を見せる。本遺跡でも、平椀式土器の壺型土器、集石、安山岩A類の石器、中でも90のやや異形石器を彷彿させる打製石鏃の出土など、同様な傾向・関連性が見える。本遺跡の北側に隣接する二子塚A遺跡（池畑耕一2005）でも同様な遺物の出土傾向にあり、池畑は「キャンプ的短期間の生活が繰り返し行われ、その後数千年もの間、空白の期間が生じた」と概括する。本遺跡の最北端の1区では、1軒ではあるが竪穴建物跡が検出され、定着の生活が営まれていたことが確認された。

以下には、本遺跡で12基検出された集石について特記する。上野原遺跡（鹿児島県2000）では、集石の形態から以下のように分類している。

- I 構成礫が集中せずに、掘り込み部も確認できずに検出された集石
- II 構成礫が集中するものの、掘り込みが確認できずに検出された集石
- III 構成礫が集中し、掘り込みが確認できたものの、底石や壁石などの施設は確認できずに検出された集石
- IV 構成礫が集中し、掘り込みが確認できた上に、底石や壁石などの施設を伴い検出された集石

本遺跡の集石に照合すると、Iは集石5号、IIは集石2・3・7・8・9号、IIIは集石1・4・6・10・12号、IVは集石11号である。ただし、集石10・12号は当該遺構の項で詳細に記したが、検出面で検出された礫が、掘り込みの土坑の周縁に環状に設置された様相にも捉えられたことを付記しておく（写真⑦・⑧参照）。管見で

は同様な類例を知らず、同様な事例が他にあれば、意図的な－例えば祭祀的－意味合いをもつ可能性が出てくる。他に特徴的な集石は11号である。その形態や礫の設置の仕方などは、本遺跡の近隣に所在する下堀遺跡（大崎町2005）集石12号（P.25参照）に近似する。「上面から深さ20cm下に掘り込まれている状態－中略－上面から深さ40cmのところで段が形成されている」「集石の厚みも50cm程に及び、掘り込みの床面から10～15cm上部で構成される」点は、同様の特徴である。一方、「焼石は確認されなかった」点は大きく異なる。なお、掘り込みの床面から集石の間に礫が入らない空間がある点は、掘り込みを有する集石に多く見られる。この点に関して面高哲郎氏（鹿児島県考古学会2024）は、「土坑は事前に粗朶等を燃料として空炊きされ、その後も加熱のたびに残った灰の蓄積」と評価する。また、宮崎県椎葉村や西米良村でスミラ^①を調理していた民俗事例を基に、集石遺構で灰焼き調理が行われた可能性を指摘する。集石11号の埋土中から検出された炭化物を科学分析に出した（P.92第18表参照）。その結果、炭化材はクスノキ科で、遺跡周辺が比較的温暖だった可能性を示した。同集石内の種実ハユリ科ノビルまたはキジカクシ科ツルボの鱗莖に類似し、同植物を食材としていた可能性を示した。時期は、いずれも早期中葉から後葉の年代値で、集石周辺で出土した土器の時期とおおむね符合的で、面高氏の指摘とも符合的である。

遺物では、当該期の土器は、1類から10類まで出土した。後葉に比定される8類（平椀式）、9類（塞ノ神A式）、10類（塞ノ神B式・苦浜式）を除き数個体だけの出土にとどまり、長期的・集団的生活の営みは看取されない。しかし、前葉の前平式を先駆けに、加栗山式→吉田式→石坂式→辻タイプ→下剥峯式→押型文→手向山式→平椀式→塞ノ神A式→塞ノ神B式→苦浜式と後葉まで、間隙がありつつも、かなりの型式が出土している。



写真7 集石10号検出状況



写真8 集石12号検出状況

石器では、狩猟具の打製石鏃、工具の石錐、礫器、磨製石斧、調理具の磨石・敲石、石皿・台石などが出土した。

3 縄文時代後・晩期から弥生時代

当該期の遺物は、最北端の1区を除く2～4区に及び、11類から17類まで全面的に出土した。この分類基準は、宮崎大和（宮崎2023）の基準を基にし

たものである。深鉢の口縁部の肥厚の有無と傾きを基準に分類し、11類はA-1類、12類はA-2・3類、13類はB類、14類は深鉢C類におおむね相当する。15類は浅鉢である。本遺跡では肩部が大きく張り出すもののうち、外面の頸部と肩部の境に段をもつものと持たないものが見られた。口縁部と肩部の形態の相関を捉えると、肩部境に段を持つものは深鉢A類、段を持たないものは深鉢B類に含まれる傾向にあると捉える。本遺跡の縄文時代後期は、中岳Ⅱ式を中心に、一部入佐式（古段階）に及ぶものがあると判断される。なお、中岳Ⅱ式と考えられる遺物集中2・4号の土器付着炭化物の科学分析の結果、遺物集中2号内土器は $2,998 \pm 21 \text{yrBP}$ 、4号内土器は $3,015 \pm 20 \text{yrBP}$ の年代値が出た（P.91第13表、P.92第15表参照）。土器編年とおおむね符合的で後期末を示した。

石器は石鏃や石匙、石錐等の他、側面に挟りのある打製石斧等、縄文後・晩期に特徴的な石器も含まれる。打斧と同じ石材のホルンフェルスA類の破片・剥片も多数出土し、当地での製作、使用、刃部再生を示す。一方、打製石斧に共伴する傾向のある横刃形石器は確認されない。後・晩期に普及度の画期があり、後期にはあまり出土せず、晩期に大きく普及する可能性を示す。軽石製品（267）が1点出土するが、器面に貫通しない穴が複数捉えられる。先が尖る串状のもので刺し回転させた行為が復元される。石錐（3点）の錐部の太さと比べて、本軽石製品に捉えられる穴の径はより細く、石錐以外により細い錐部作出が可能な木、竹、貝、骨等の錐状の道具の存在を示唆する。また、刃状のヘラの切り傷も捉えられ、ヘラ状の薄い工具（木、竹、貝、骨製）の存在も看取される。土器に、薄いヘラ状工具による刻みや線刻が施される点も傍証となる。遺構では、竪穴建物跡が2軒、土坑が5基、ピットが43基検出された。石皿・台石を伴う土坑2基が特筆される。石皿・台石を伴う土坑が、同製品の廃棄に伴うものか、祭祀等の特別な意味をもつのか、事例の増加を待ちたい。4区は早期と後・晩期を分けるⅣ層（アカホヤ火山灰層）が厚く堆積するが、特に2区ではⅣ層の堆積が薄い、もしくは確認されない。2区の遺物集中2号を掘り下げた直下に、縄文時代早期の集石8号が検出されるなど、Ⅳ層がほとんど堆積しない。そのことは、台地縁辺の1区から3区が、現況以上に急傾斜で土砂流出が起きていた可能性を示す。

弥生時代の遺物は16類及び17類が相当する。16類は刻目突帯文土器（総点数18点）で、組織痕土器（1点）も当該期に含めた。17類は山ノ口Ⅱ式（1点）である。当該期の遺構は確認されない。いずれの遺物も出土数は少なく、定着的生活の痕跡はうかがえない。刻目突帯文土器は指頭押圧の刻みではなくヘラ状工具によるもので、連弧文（222）や三角形の線刻（223）、縦位の二

重刻目突帯（221・224）等は東九州や宮崎平野の影響を示し、弥生時代前期に比定される。山ノ口Ⅱ式土器（225）は、やや口縁部が幅広であり、Ⅱ式より下る時期の可能性もある。

4 古墳時代

当該期の土器は18類から25類である。18類は中津野式、19類は東原式、20類は辻堂原式に相当すると思われる。当該期の遺物は、最南端の4区を除く1区から3区で出土する。1区から3区で竪穴建物跡3軒、土坑が11基、ピットが122基検出された。竪穴建物跡4号は方形の、5号は円形の平面形で、共に張出し部を有する間仕切りタイプである。なお、北隣の二子塚A遺跡では、当該期の竪穴建物跡が3軒、土坑が1基検出されているが、土器型式を見ると、本遺跡の竪穴建物跡の3軒は、1・3号竪穴建物跡に近い時期の可能性がうかがえる。当該期の遺物の多くは遺構の埋土内に出土し、比して包含層内の遺物は少ない。そのことから、古墳時代以降の包含層（Ⅱ層）は、土砂の自然流出や土地開発等に伴い、削平を受けた可能性がある。池畑は二子塚A遺跡（鹿児島県2005）で、「（甕形土器について）底部になると－中略－2号竪穴住居跡ではその比率は7：1と平底のものが圧倒的に多いが、3号竪穴住居跡や、住居跡以外で出土したものでは1：2と逆の状況を示す。」とし、「時期が新しくなると宮崎平野の影響が強くなる」と述べる。成川式の特徴である脚台付き底部と宮崎平野の影響を見る平底の比率比較を基に、宮崎平野の影響を指摘する。以下に、底部の形態を含め、本遺跡の竪穴建物跡の細かな時期差を考察する。竪穴建物跡3軒の遺物を見ると、竪穴建物跡4号は甕形土器の19類（口縁内面に稜あり：東原式）：20類（口縁部が直行：辻堂原式）が3：6、壺の直口が1、小型丸底壺が1点で、甕は辻堂原式に壺は東原式古手に寄る。甕形土器の底部形態は、脚台付き：平底の比率（点数）は3：3となり、同比率と言える。なお、本遺構には刀子が1点（280）出土した。二子塚A遺跡でも器種不明の鉄製品が包含層から出土した。古墳時代の比較的早い時期に刀子ほか鉄製品を伴うことは特筆される。竪穴建物跡5号は、甕形土器の19類（東原式）：20類（辻堂原式）が3：6となり、辻堂原式が主となる。甕形土器の底部形態比率は、脚台付き：平底の比率（点数）は2：3となり、やや平底が優勢である。口縁部形態は19類：20類が3：3で東原式と辻堂原式が同率である。竪穴建物跡6号は、平底の甕が1点出土するほか、小片ながら口縁部が比較的大きく外反する東原式土器の古手出土する。二子塚A・B遺跡の竪穴建物跡の時期的相関関係は、二子塚A遺跡の1・3号住居跡と本遺跡竪穴建物跡3軒がおおむね近い時期にあると見なされる。なお、炭素年代測定（暦年校正用年代）の結果は、竪穴建物跡4号（SI74）

が3世紀中頃～5世紀初頭（1720±19yrBP）、竪穴建物跡5号（SI67）が3世紀中頃～4世紀中頃の値（1762±18yrBP）を示した（P.91第13表参照）。両竪穴建物跡とも、既知の土器研究の編年及び時期に符合的である。包含層遺物の平底の破片に関しては、層位や土器の特徴の違いなど縄文時代後・晩期と古墳時代の厳密な分別が困難ため、脚台付きと平底の比率を算出しない。他に、池畑（鹿児島県2005 P.64）が「時期が新しくなると宮崎平野の影響が強くなる」とする「まっすぐになるもの、内反するもの」が混在することへの指摘について、やや古手の東原式土器期と見る竪穴建物跡4号の遺物の一部（272・273）に、口縁が真っ直ぐに伸びるものがあり、同じ特徴がうかがえる。本遺跡の竪穴建物跡と埋土内遺物の状況から、二子塚A遺跡以上に、東原式土器の時期から平底が存在する－宮崎平野の影響が見出せる－傾向にあることを指摘しておきたい。池畑は「（二子塚A遺跡では）成川式土器に特徴的な埴形土器・高坏形土器に丹塗りをするものがほとんどないということは、あってもおかしくない時期であるだけに不思議である」と記すが、本遺跡の埴形土器においては－高坏形土器はほぼ出土しない－丹塗りが2点検出された点を追補しておく。他に、甕の胴部に巡らせる突帯の刻みのうち、微細な編目（268・273・299・300）が捉えられるものがある。微細な編目については、隣接の二子塚A遺跡にも、図面上、P.46 119が同様と推察される他、旧始良郡始良町（現始良市）平松原遺跡（鹿児島県教委1990年）P.19・20・58・62・69・72が確認でき、P.69には「布巻棒による刻み」、P.72には「布目による指つまみ突帯」と備考欄に記される。ほかに、本遺跡では甕形土器の平底の底部に、木葉痕が押圧される資料が1点（309）出土する。一般的に6世紀後半（笹貫式）に見られる資料であり、本遺跡は、東原式・辻堂原式土器期の定着的生活を示すが、中津野式のほかに、わずかに笹貫式土器期の生活の痕跡を示唆する。

5 時期不明遺構（古道）

この項で報告されるのは、古道5条である。多くが検出面はⅣ層であるが、最下層の埋土に特段の時期的特徴（火山灰等）を持たないため、下限は特定できない。古道2・3・5号は埋土に桜島のP1（大正噴火噴出物）が含まれ、上限は大正3年（1914年）以降に及ぶのが明確である。古道1～3・5号は硬化面が複数枚重なり、複数回の補修を示す。北隣の二子塚A遺跡では、硬化面のない溝状遺構2条と、硬化面を伴う古道7条（うち、脇道1条を除く6条）が検出されている。溝状遺構1は、深い掘込みをもち、埋土上位にP1（桜島大正噴火噴出物）を伴い、本遺跡の古道2・5号に類似する。池畑は同報告書（鹿児島県2005）で、「古道はほとんどが現在の道路と並行し、硬化面の幅が似ていることから、

現在の道路と同じような役目を果たしていた道跡と思われる。」とする。本遺跡の凹みが浅く硬化面をもつ最北端の古道1号は二子塚A遺跡の南端の古道7に類似し連なる。一方、2・3区の掘込み（凹み）の深い古道2・3・5号は、二子塚A遺跡の古道5につながると推察される。なお、二子塚A遺跡で脇道と想定される1条同様、本遺跡の古道4号も古道2号に直交する脇道と判断する。本遺跡の南側2km先の鹿屋市細山田段遺跡では、時期不明の長さ80mほどの波板状凹凸面を伴う溝状遺構2条が検出された。東和幸（鹿児島県2023）は、「この道跡が日向国と大隅国境である可能性が高く」と指摘す



第70図 二子塚A・B及び細山田段遺跡の溝状遺構（古道）位置図

る。この指摘は、二子塚A・本遺跡の2条の古道（溝状遺構含む）と細山田段遺跡の2条の溝状遺構が連なる古道の可能性を示し、同時に日向国と大隅国の国境を示唆することになる。なお、志布志市有明町下原遺跡（鹿児島県2019）は、桜島の大正噴火の噴出物を埋土とする古道が現道横に並行して検出されたが、本遺跡の古道1～3・5号と現道の新旧の関係性を示唆するものと評価される。

【注釈】 ①ツルボの地方名

【引用・参考文献】

池畑耕一2005『二子塚A遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）P.46・P.61-64
鹿児島県立埋蔵文化財センター2000『上野原遺跡（第10地点）第2分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（27）P.10
大崎町教育委員会2005『下堀遺跡 大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）P.25
面高哲郎2024「集石遺構と灰－縄文時代における灰を活用した調理の可能性を探る－」『鹿児島考古第53号』鹿児島県考古学会 P.51-68
宮崎大和2023「大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相－中岳Ⅱ式土器を中心に－」『縄文の森から』第15号 鹿児島県立埋蔵文化財センター P.19-28
鹿児島県教育委員会1991『平松原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（58）P.17・19・20・58・62
東和幸2023「鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討」『縄文の森から』第16号 鹿児島県立埋蔵文化財センター P.29
鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2019『細山田段遺跡1』（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（25）P.111
鹿児島県立埋蔵文化財センター2019『下原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（198）P.270

第19表 縄文時代早期及び後期～弥生時代の石器・石材別分類表

時代	器種	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石D	珪質頁岩	安山岩A類	安山岩B類	ホルンフェルスA類	ホルンフェルスB類	ホルンフェルスC類	砂岩	花崗岩	凝灰岩	チャート	玉髄	珪藻土	軽石	総計
縄文時代早期	細石刃核								1										1
	打製石鏃	3			1		7									1			12
	石匙															1			1
	石鏃				1					1									2
	スクレイパー						2			1	1								4
	剥片・チップ	12			2	2	14			8					14	1			53
	打製石斧									3									3
	磨製石斧						1	3											4
	礫器							3	6		2	1							12
	打斧・礫器の剥片・碎片							30	14	14	1	1	1	3					64
	磨石・敲石							23	2	4	1	3	2						35
	石皿・台石						7				1	2							10
	軽石製品																	1	1
	総計	15	0	0	4	2	31	59	23	31	6	7	3	3	15	2	0	1	
縄文時代後・晩期 （弥生時代）	打製石鏃	4	1				5	1		1					5		1		18
	石匙									2									2
	石鏃	3					1								1				5
	スクレイパー・横刃形石器含む	3	1				2	2		15					6				29
	剥片・チップ	153	8	11	2	1	47	5		138					62	30	1		458
	打製石斧（欠損含む）								7	70									77
	磨製石斧							1	6	8									15
	礫器																		0
	打斧・礫器の剥片・碎片								1	100									101
	磨石・敲石						1	36	3	2	2	15	7	1		1			68
	石皿・台石・凹石							15				7	1	2					25
	軽石製品																	5	5
	総計	163	10	11	2	1	56	60	17	336	2	22	8	3	74	31	2	5	

写真図版



① 竪穴建物跡 1 号 (縄文早期) 検出状況
③ 土坑 13 号 (縄文早期) 完掘状況
⑤ 集石 1 号 (縄文早期) 完掘状況
⑦ 集石 11 号 (縄文早期) 半截状況

② 竪穴建物跡 1 号 (縄文早期) 完掘状況
④ 集石 1 号 (縄文早期) 検出状況
⑥ 集石 10 号 (縄文早期) 検出状況 (手前: 試掘トレンチ)
⑧ 集石 12 号 (縄文早期) 検出状況



①土坑1号(縄文早期)検出状況

②土坑1号(縄文早期)半裁状況

③土坑1号(縄文早期)断ち割り状況



①埋設土器 1 号(縄文早期)半裁状況
③竪穴建物跡 2 号(縄文後・晩期)完掘状況
⑤竪穴建物跡 3 号(縄文後・晩期)完掘状況
⑦竪穴建物跡 4 号(古墳時代)検出状況

②竪穴建物跡 2 号(縄文後・晩期)検出状況
④竪穴建物跡 3 号(縄文後・晩期)検出状況
⑥土坑 18 号(縄文後・晩期)逆茂木痕完掘状況
⑧竪穴建物跡 4 号(古墳時代)完掘状況



① 竪穴建物跡 5 号(古墳時代)検出状況
 ③ 竪穴建物跡 6 号(古墳時代)完掘状況
 ⑤ 古道 2・3・4 号(時期不明)完掘状況(2 区)
 ⑦ 古道 5 号(時期不明)検出状況(4 区)

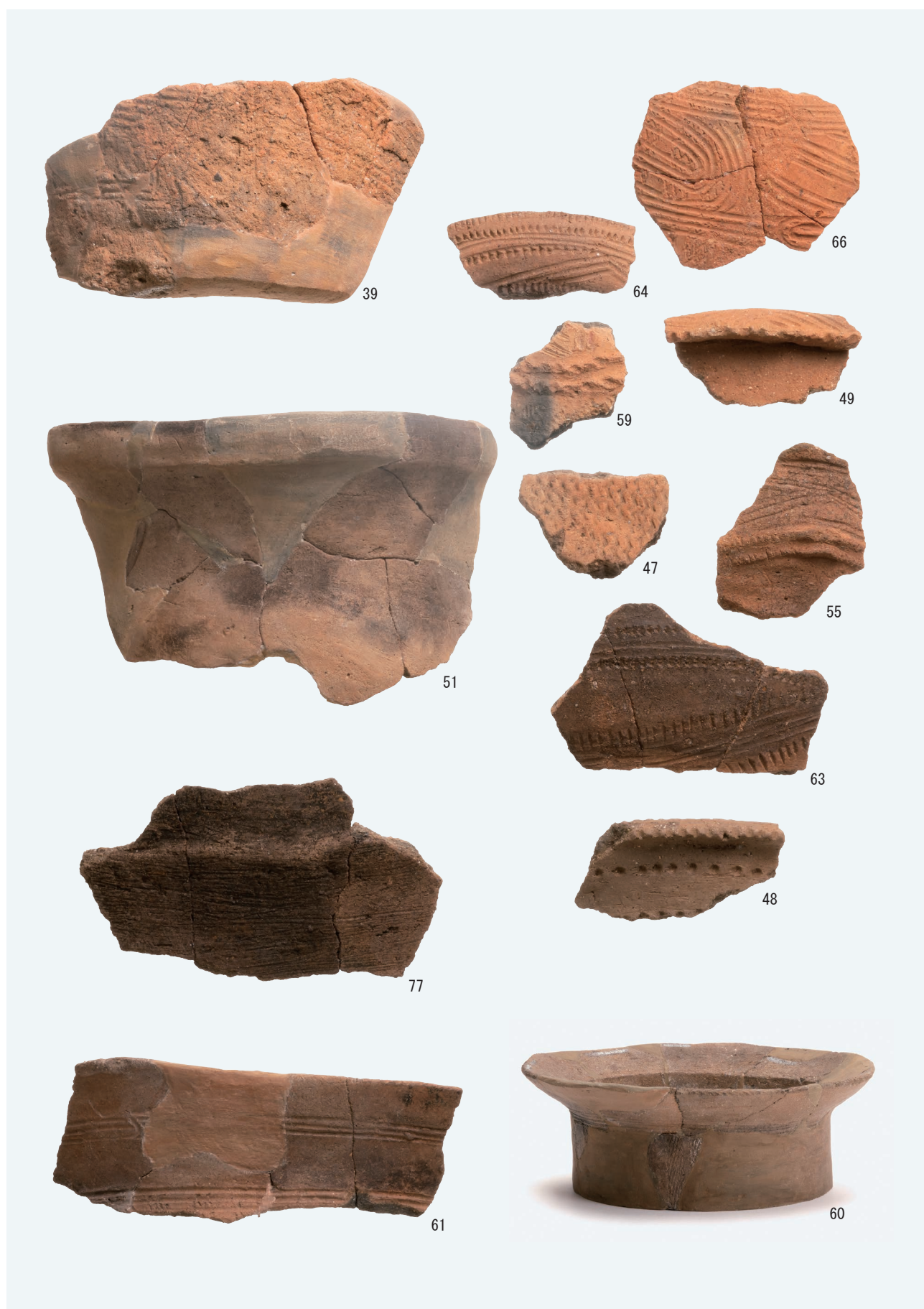
② 竪穴建物跡 5 号(古墳時代)完掘状況
 ④ 古道 1 号(時期不明)完掘状況(1 区)
 ⑥ 古道 2 号(時期不明)完掘状況(3 区)
 ⑧ 古道 5 号(時期不明)完掘状況(4 区)



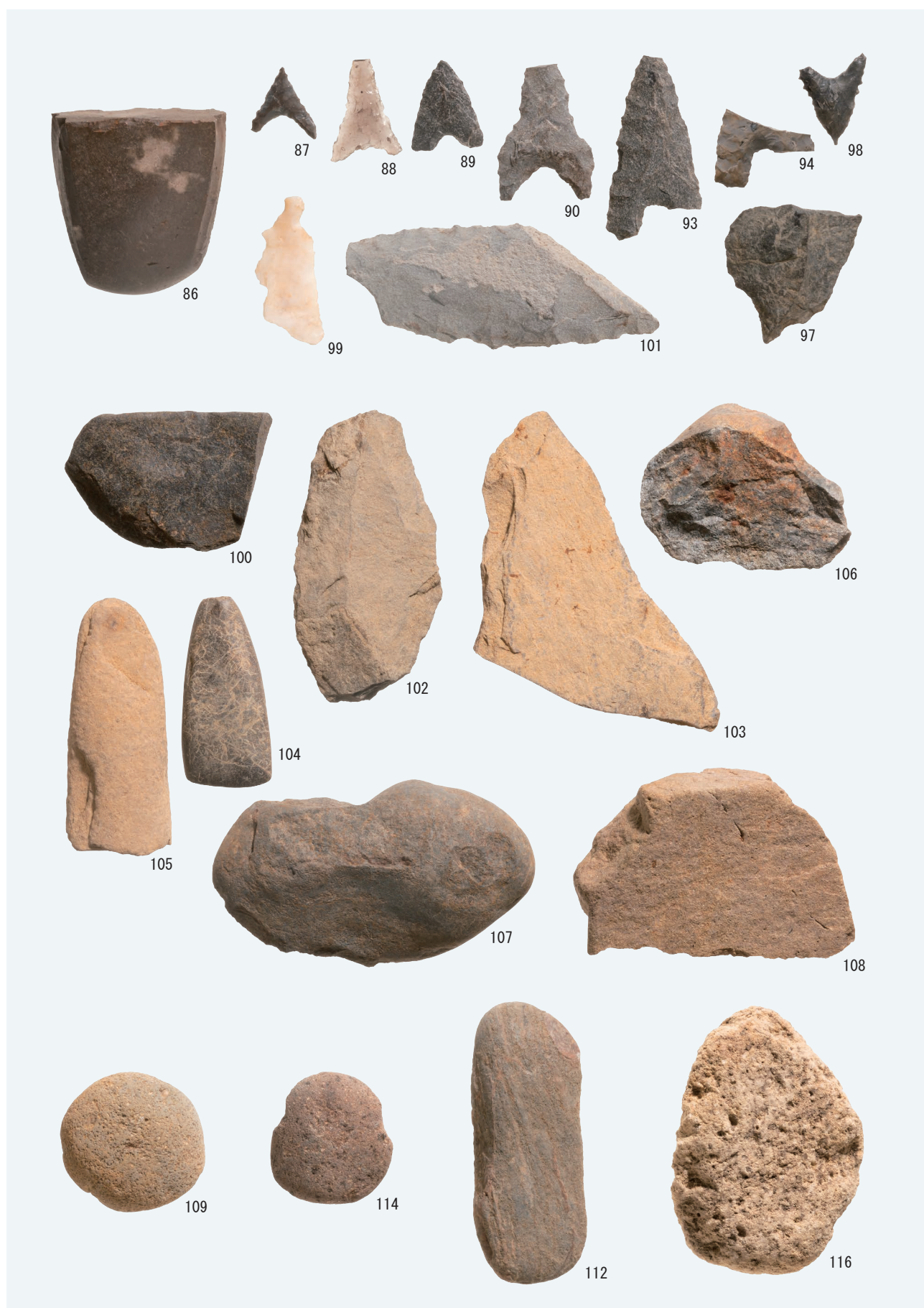
①古道2号(時期不明)埋土状況(3区) ②古道5号(時期不明)埋土状況(4区)

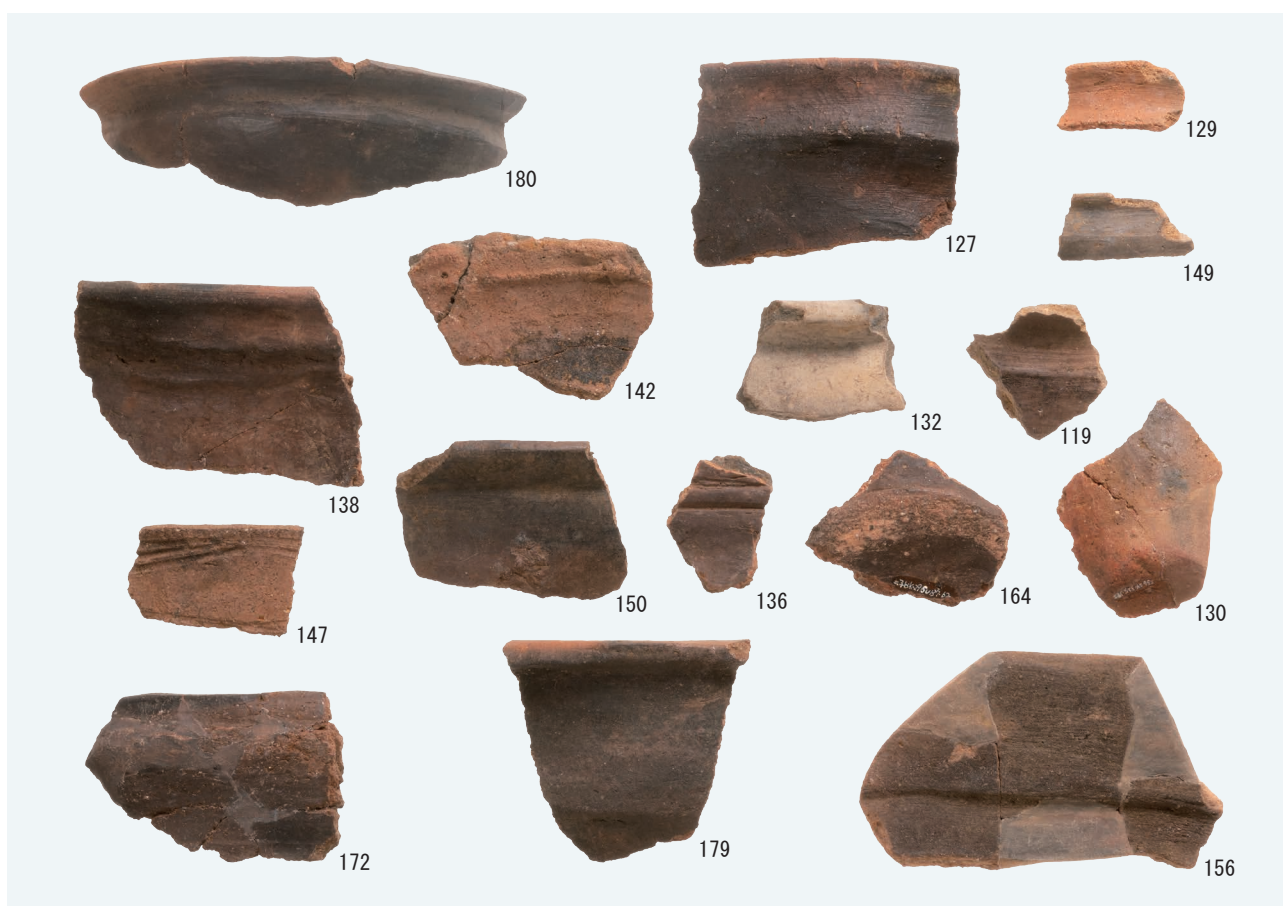




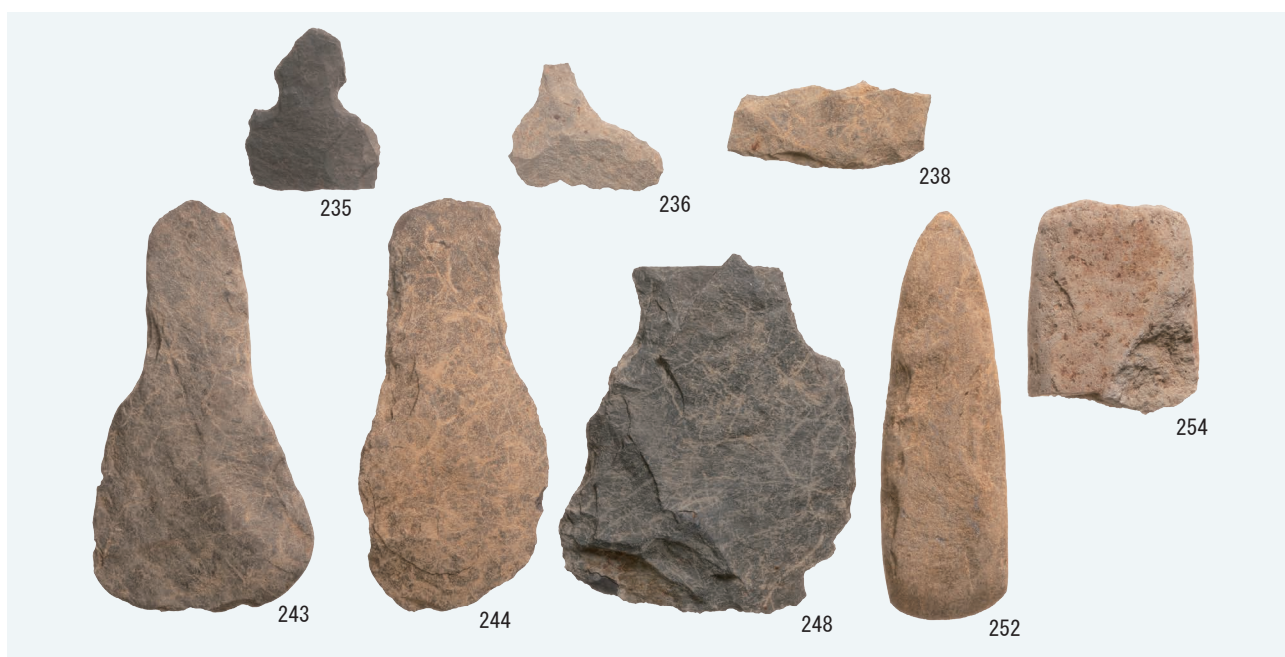


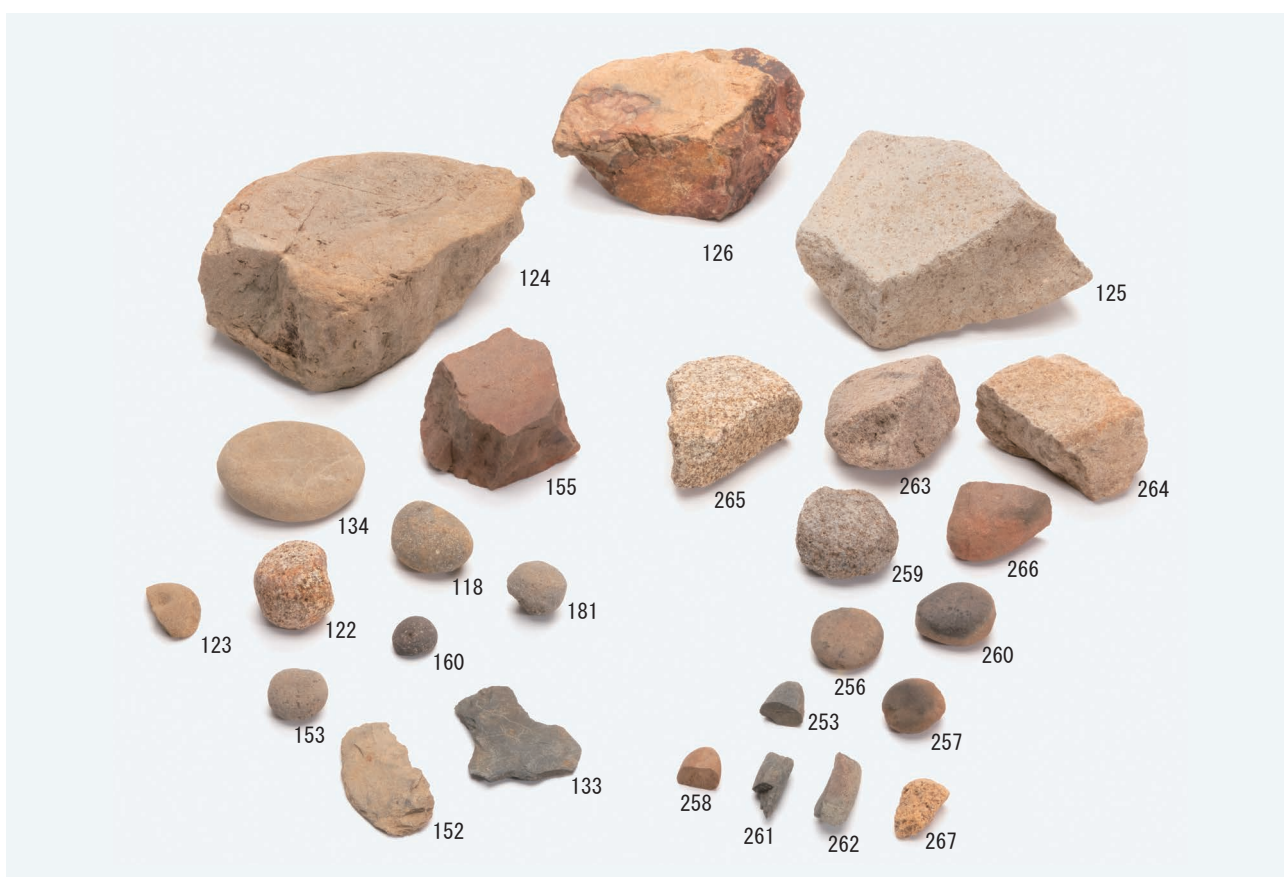
















鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（233）
一般県道黒石串良線（二子塚工区）地方特定道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二子塚 B 遺跡

発行年月 2025年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社イースト朝日

〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7

TEL 099-266-5522 FAX 099-266-5523

